山形県埋蔵文化財センター調査報告書第132集

高擂南遺跡・菖蒲江1遺跡・菖蒲江2遺跡

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

高擂南遺跡・菖蒲江1遺跡・菖蒲江2遺跡

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第132集

平成16年

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

高擂南遺跡・菖蒲江1遺跡・菖蒲江2遺跡

たかだまみなみ　しょうぶえ　しょうぶえ

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第132集

平成16年

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

巻頭写真 1

ＳＴ202竪穴住居跡調査風景

ＳＧ252河川跡遺物出土状況

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、高擂南遺跡、菖蒲江１遺跡、菖蒲江２遺跡の調査成果をまとめたものです。

これら３遺跡は、天童市南端の高擂地区に所在し、立谷川と村山高瀬川によって形成された複合扇状地「立谷川扇状地」の前縁帯に広がる豊かな水田地帯の中にあります。

この度、山形県警察本部事業「山形県総合交通安全センター（仮称）」建設に先立ってこれら３遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、古墳時代前期の集落跡が検出され、焼失家屋など当時の生活を物語る貴重な資料を得ることができました。

近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い、事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。これらの埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、わたしたちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成16年３月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

理事長　　木　村　宰

本書は、「山形県総合交通安全センター（仮称）」建設に係る「高擂南遺跡」、「菖蒲江１遺跡」、「菖蒲江２遺跡」の発掘調査報告書である。

既刊の年報、調査説明資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。

調査は山形県警察本部の委託により財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

出土遺物、調査記録類は、報告書作成終了後、山形県教育委員会に移管する。

調 査 要 項

遺 跡 名	①高擂南（たかだまみなみ）遺跡 ②菖蒲江（しょうぶえ）１遺跡 ③菖蒲江２遺跡
遺跡番号	①県遺跡番号249 ②平成10年度登録 ③平成10年度登録
所 在 地	①山形県天童市大字高擂字菖蒲江 ②山形県天童市大字高擂字高田、菖蒲江 ③山形県天童市大字高擂字菖蒲江
調査主体	財団法人山形県埋蔵文化財センター 理 事 長　木村 宰
受託期間	平成13年４月１日～平成14年３月31日
現地調査	平成13年５月８日～平成13年７月６日
調査担当者	調査第二課長　尾形 典典（調査主任） 主任調査研究員　伊藤 邦弘 調 査 員　長瀬えみ子

遺 跡 名	高擂南遺跡（第２次）
遺跡番号	県遺跡番号249
所 在 地	山形県天童市大字高擂字菖蒲江
調査主体	財団法人山形県埋蔵文化財センター 理 事 長　木村 宰
受託期間	平成14年４月１日～平成15年３月31日
現地調査	平成14年５月８日～平成14年10月11日
調査担当者	調査第二課長　尾形 典典（調査主任） 主任調査研究員　伊藤 邦弘 調 査 員　長瀬えみ子

遺 跡 名	高擂南遺跡 菖蒲江１遺跡 菖蒲江２遺跡
調査主体	財団法人山形県埋蔵文化財センター 理 事 長　木村 宰
受託期間	平成15年４月１日～平成16年３月31日（報告書作成）
調査担当者	調査第二課長　尾形 典典（調査主任） 主任調査研究員　伊藤 邦弘 調 査 員　長瀬えみ子

調査指導	山形県教育庁社会教育課文化財保護室
調査協力	山形県警察本部警務部会計課 山形県教育委員会村山教育事務所 天童市教育委員会

凡　　例

1　本書の作成は、尾形與典と長瀬えみ子が行った。執筆は、Ⅲ－１とⅢ－４～７を長瀬えみ子が、その他を尾形與典が担当した。付編として樹種及び種子同定報告を巻末に付した。

2　遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第Ⅹ系（測地成果2000）に拠り、高さは海抜高で表す。また、方位は座標北を表す。

3　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

ＳＴ…竪穴住居　　ＳＫ…土坑　　ＳＤ…溝跡

ＳＸ…性格不明遺構　　ＳＧ…河川跡

ＥＫ…遺構内土杭　　ＥＰ…遺構内ピット　　ＲＷ…登録木器

ｐ…土器　　ｗ…木質（含炭化物）　　ｓ…礫

4　本文中の遺物番号は、図版・観察表・写真図版ともに共通である。

5　遺構・遺物図版の縮尺、網点等の用法は各図に示した。

6　遺物観察表中、（　）内の数値は、図上復元による推定値、または残存値を示している。

7　基本層序および遺構覆土の色調記載については、1997年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版基準土色帖」に拠った。

8　発掘調査および本書を作成するにあたり、下記の方々からご協力、ご助言をいただいた。（順不同、敬称略）

阿子島功、小沢洋、川崎利夫、田嶋明人、長澤一雄、宮本長二郎

9　委託業務は下記のとおりである。

遺構写真実測業務	株式会社シン技術コンサル
木製品保存処理業務	株式会社吉田生物研究所
自然科学分析業務（樹種等同定）	株式会社吉田生物研究所

目　次

Ⅰ　調査の経緯
　1　発掘に至る経緯……1
　2　調査の方法と経過……1
Ⅱ　遺跡の立地と環境
　1　地理的環境……3
　2　歴史的環境……4
　3　基本層序……5
Ⅲ　高擶南遺跡
　1　第１次調査の概要……9
　2　第２次調査の概要……38
　3　竪穴住居跡の方向と規模 123
　4　出土木製品の分類 ……125
　5　出土土師器の分類 ……129
　6　管玉の製作工程 ……145
　7　調整技法凡例 ……146
　8　調査のまとめ ……147
Ⅳ　菖蒲江１遺跡
　1　遺構と遺物 ……169
　2　調査のまとめ ……171
Ⅴ　菖蒲江２遺跡
　1　調査の概要 ……175
　2　遺構と遺物 ……176
　3　調査のまとめ ……190
付編
　「高擶南遺跡出土木製品の樹種調査結果」
　「高擶南遺跡出土炭化材の樹種調査結果」
　「高擶南遺跡出土植物遺体の同定調査」
報告書抄録……巻末

表

表1　土師器組成表（1）……142
表2　土師器組成表（2）……143
表3　竪穴住居跡観察表……149
表4　土坑観察表……150
表5　溝跡観察表……150
表6　木製品観察表……151
表7　土師器観察表（1）……152
表8　土師器観察表（2）……153
表9　土師器観察表（3）……154
表10　土師器観察表（4）……155
表11　土師器観察表（5）……156
表12　土師器観察表（6）……157
表13　土師器観察表（7）……158
表14　土師器観察表（8）……159
表15　土師器観察表（9）……160
表16　土師器観察表（10）……161
表17　土師器観察表（11）……162
表18　土師器観察表（12）……163
表19　土師器観察表（13）……164
表20　土師器観察表（14）……165
表21　土製品計測表……166
表22　管玉及び同未成品計測表……166
表23　石製品計測表……166
表24　弥生土器観察表（1）……167
表25　弥生土器観察表（2）……168
表26　菖蒲江1遺跡出土土師器観察表……174
表27　菖蒲江2遺跡出土縄文土器観察表（1）……188
表28　菖蒲江2遺跡出土縄文土器観察表（2）……189
表29　菖蒲江2遺跡出土土師器観察表……190
表30　菖蒲江2遺跡出土石製品観察表……190

図　版

第1図　調査区概要図……2
第2図　遺跡位置図……3
第3図　地形区分図……4
第4図　基本層序……5
第5図　高擶南遺跡遺構配置図……7
第6図　ＳＴ1竪穴住居跡及び同出土遺物……10
第7図　ＳＴ2～5竪穴住居跡……11
第8図　ＳＴ2～5竪穴住居跡完掘図……12
第9図　ＳＴ2～5竪穴住居跡出土遺物……13
第10図　ＳＴ6竪穴住居跡及び同出土遺物……14
第11図　ＳＴ7竪穴住居跡及び同出土遺物……15
第12図　ＳＴ7竪穴住居跡出土遺物……16
第13図　ＳＴ8竪穴住居跡及び同出土遺物……17
第14図　ＳＴ8竪穴住居跡出土遺物……18
第15図　ＳＴ9竪穴住居跡及び同出土遺物……19
第16図　ＳＴ10竪穴住居跡及び同出土遺物……20
第17図　ＳＴ11竪穴住居跡……21
第18図　ＳＴ12竪穴住居跡及び同出土遺物……22
第19図　ＳＴ12竪穴住居跡出土遺物……23
第20図　ＳＴ14竪穴住居跡及び同出土遺物……24
第21図　ＳＴ15竪穴住居跡及び同出土遺物……25
第22図　ＳＫ24土坑及び同出土遺物……26
第23図　ＳＫ26・27土坑及び同出土遺物……27
第24図　ＳＫ28土坑及び同出土遺物……28
第25図　ＳＫ31土坑……28
第26図　ＳＫ31土坑出土遺物（1）……29
第27図　ＳＫ31土坑出土遺物（2）……30
第28図　ＳＫ31土坑出土遺物（3）……31
第29図　ＳＫ32土坑……32
第30図　ＳＫ32土坑出土遺物……33
第31図　ＳＫ33土坑……34
第32図　ＳＧ114河川跡……35
第33図　ＳＧ114河川跡出土遺物（1）……36
第34図　ＳＧ114河川跡出土遺物（2）……37
第35図　畝状遺構……37
第36図　ＳＴ201竪穴住居跡……38
第37図　ＳＴ201竪穴住居跡出土遺物……39
第38図　ＳＴ202竪穴住居跡（1）……40
第39図　ＳＴ202竪穴住居跡（2）……41
第40図　ＳＴ202竪穴住居跡出土遺物（1）……42
第41図　ＳＴ202竪穴住居跡出土遺物（2）……43
第42図　ＳＴ202竪穴住居跡出土遺物（3）……44
第43図　ＳＴ202竪穴住居跡出土遺物（4）……45
第44図　ＳＴ202竪穴住居跡出土遺物（5）……46

第 45 図　ＳＴ202竪穴住居跡出土遺物（６）……47
第 46 図　ＳＴ204竪穴住居跡……48
第 47 図　ＳＴ204竪穴住居跡出土遺物……49
第 48 図　ＳＴ205竪穴住居跡……50
第 49 図　ＳＴ205竪穴住居跡出土遺物（１）……51
第 50 図　ＳＴ205竪穴住居跡出土遺物（２）……52
第 51 図　ＳＴ205竪穴住居跡出土遺物（３）……53
第 52 図　ＳＴ205竪穴住居跡出土遺物（４）……54
第 53 図　ＳＴ206竪穴住居跡……55
第 54 図　ＳＴ206竪穴住居跡出土遺物……56
第 55 図　ＳＴ208竪穴住居跡……57
第 56 図　ＳＴ208竪穴住居跡出土遺物……58
第 57 図　ＳＴ209竪穴住居跡……59
第 58 図　ＳＴ209竪穴住居跡出土遺物……60
第 59 図　ＳＴ210竪穴住居跡……61
第 60 図　ＳＴ210竪穴住居跡出土遺物……62
第 61 図　ＳＴ211竪穴住居跡（１）……63
第 62 図　ＳＴ211竪穴住居跡（２）……64
第 63 図　ＳＴ211竪穴住居跡出土遺物（１）……65
第 64 図　ＳＴ211竪穴住居跡出土遺物（２）……66
第 65 図　ＳＴ211竪穴住居跡出土遺物（３）……67
第 66 図　ＳＴ211竪穴住居跡出土遺物（４）……68
第 67 図　ＳＴ212竪穴住居跡……69
第 68 図　ＳＴ212竪穴住居跡出土遺物（１）……70
第 69 図　ＳＴ212竪穴住居跡出土遺物（２）……71
第 70 図　ＳＴ213竪穴住居跡……71
第 71 図　ＳＫ253・255・258土坑……72
第 72 図　ＳＫ253・258土坑出土遺物……73
第 73 図　ＳＫ278土坑……74
第 74 図　ＳＫ278土坑出土遺物……75
第 75 図　ＳＫ304・318・337土坑及び同出土遺物……76
第 76 図　ＳＫ340土坑及び同出土遺物……77
第 77 図　ＳＫ348土坑及び同出土遺物……78
第 78 図　ＳＤ260溝跡（南東部）……79
第 79 図　ＳＤ260溝跡（北西部）……80
第 80 図　ＳＤ260溝跡出土遺物（１）……81
第 81 図　ＳＤ260溝跡出土遺物（２）……82
第 82 図　ＳＤ260溝跡出土遺物（３）……83
第 83 図　ＳＤ260溝跡出土遺物（４）……84
第 84 図　ＳＤ261溝跡……85
第 85 図　ＳＤ261溝跡出土遺物……86
第 86 図　ＳＤ262溝跡……87
第 87 図　ＳＤ262溝跡出土遺物（１）……88
第 88 図　ＳＤ262溝跡出土遺物（２）……89
第 89 図　ＳＤ262溝跡出土遺物（３）……90
第 90 図　ＳＤ262溝跡出土遺物（４）……91
第 91 図　ＳＤ319溝跡……92
第 92 図　ＳＤ344溝跡及び同出土遺物……93
第 93 図　ＳＸ273性格不明遺構……94
第 94 図　ＳＸ273性格不明遺構出土遺物……95
第 95 図　ＳＧ252河川跡（１）……96
第 96 図　ＳＧ252河川跡（２）……97
第 97 図　ＳＧ252川跡出土遺物（１）……98
第 98 図　ＳＧ252川跡出土遺物（２）……99
第 99 図　ＳＧ252川跡出土遺物（３）……100
第 100 図　ＳＧ252川跡出土遺物（４）……101
第 101 図　ＳＧ252川跡出土遺物（５）……102
第 102 図　ＳＧ252川跡出土遺物（６）……103
第 103 図　ＳＧ252川跡出土遺物（７）……104
第 104 図　ＳＧ252川跡出土遺物（８）……105
第 105 図　ＳＧ252川跡出土遺物（９）……106
第 106 図　ＳＧ252川跡出土遺物（10）……107
第 107 図　ＳＧ252川跡出土遺物（11）……108
第 108 図　ＳＧ252川跡出土遺物（12）……109
第 109 図　ＳＧ252川跡出土遺物（13）……110
第 110 図　ＳＧ252川跡出土遺物（14）……111
第 111 図　包含層出土遺物（１）……112
第 112 図　包含層出土遺物（２）……113
第 113 図　包含層出土遺物（３）……114
第 114 図　包含層出土遺物（４）……115
第 115 図　包含層出土遺物（５）……116
第 116 図　包含層出土遺物（６）……117
第 117 図　包含層出土遺物（７）……118
第 118 図　間層出土遺物（１）……119
第 119 図　間層出土遺物（２）……120
第 120 図　間層出土遺物（３）……121
第 121 図　間層出土遺物（４）……122
第 122 図　竪穴住居跡の軸長比……123
第 123 図　竪穴住居跡の主軸方向と規模……123
第 124 図　土師器分類図（１）……135
第 125 図　土師器分類図（２）……136
第 126 図　土師器分類図（３）……137

第127図　土師器分類図（4）……138
第128図　土師器分類図（5）……139
第129図　土師器分類図（6）……140
第130図　土師器分類図（7）……141
第131図　管玉製作工程図……144
第132図　土師器調整痕凡例……145
第133図　菖蒲江1遺跡遺構配置図……169
第134図　基本層序……169
第135図　ＳＴ３竪穴住居跡……170
第136図　ＳＴ３竪穴住居跡出土遺物……171
第137図　包含層出土遺物（1）……172
第138図　包含層出土遺物（2）……173
第139図　菖蒲江2遺跡調査区全図……175
第140図　基本層序……176
第141図　ＳＤ１溝跡……176
第142図　泥炭層中の遺物分布……177
第143図　泥炭層出土遺物（1）……178
第144図　泥炭層出土遺物（2）……179
第145図　泥炭層出土遺物（3）……180
第146図　泥炭層出土遺物（4）……181
第147図　泥炭層出土遺物（5）……182
第148図　泥炭層出土遺物（6）……183
第149図　泥炭層出土遺物（7）……184
第150図　泥炭層出土遺物（8）……185
第151図　泥炭層出土遺物（9）……186
第152図　泥炭層出土遺物（10）……187

写真図版

巻頭1　高攝南遺跡ＳＴ202竪穴住居跡調査風景
巻頭2　高攝南遺跡ＳＧ252河川跡遺物出土状況
図版1　調査前風景他
図版2　ＳＴ１竪穴住居跡他
図版3　ＳＴ８竪穴住居跡完掘状況他
図版4　ＳＫ31土坑遺物出土状況他
図版5　高攝南遺跡第２次調査跡入式他
図版6　ＳＴ202竪穴住居跡遺物出土状況他
図版7　ＳＴ202竪穴住居跡完掘状況他
図版8　ＳＴ208竪穴住居跡完掘状況他
図版9　ＳＴ212竪穴住居跡完掘状況他
図版10　ＳＫ318土坑他
図版11　ＳＤ261溝跡他
図版12　ＳＧ252河川跡調査状況他
図版13　ＳＧ252河川跡遺物出土状況他
図版14　菖蒲江１遺跡ＳＴ３竪穴住居跡他
図版15　菖蒲江２遺跡調査状況他
図版16　高攝南遺跡出土遺物（1）
図版17　高攝南遺跡出土遺物（2）
図版18　高攝南遺跡出土遺物（3）
図版19　高攝南遺跡出土遺物（4）
図版20　土器加飾部拡大他
図版21　調整技法凡例他
図版22　高攝南遺跡出土遺物（5）
図版23　高攝南遺跡出土遺物（6）
図版24　高攝南遺跡出土遺物（7）
図版25　高攝南遺跡出土遺物（8）
図版26　高攝南遺跡出土遺物（9）
図版27　高攝南遺跡出土遺物（10）
図版28　高攝南遺跡出土遺物（11）
図版29　高攝南遺跡出土遺物（12）
図版30　高攝南遺跡出土遺物（13）
図版31　高攝南遺跡出土遺物（14）
図版32　高攝南遺跡出土遺物（15）
図版33　高攝南遺跡出土遺物（16）
図版34　高攝南遺跡出土遺物（17）
図版35　高攝南遺跡出土遺物（18）
図版36　高攝南遺跡出土遺物（19）
図版37　高攝南遺跡出土遺物（20）
図版38　高攝南遺跡出土遺物（21）
図版39　高攝南遺跡出土遺物（22）
図版40　高攝南遺跡出土遺物（23）
図版41　高攝南遺跡出土遺物（24）
図版42　高攝南遺跡出土遺物（25）
図版43　菖蒲江１遺跡出土遺物
図版44　菖蒲江２遺跡出土遺物（1）
図版45　菖蒲江２遺跡出土遺物（2）
図版46　菖蒲江２遺跡出土遺物（3）

Ⅰ　調査の経緯

1　発掘に至る経緯

高擂南遺跡は、昭和53年刊行の「山形県遺跡地図」に掲載されている周知の遺跡であるが、菖蒲江１遺跡と菖蒲江２遺跡は、山形県教育委員会により、平成10年度に登録された遺跡である。この度、山形県警察本部によって山形県総合交通安全センター（仮称）の整備事業が計画され、これに伴って、工事予定地内に所在するこれらの遺跡の範囲や性格を調べるための試掘調査が、山形県教育委員会によって平成10年８月と同年10月に行われ、菖蒲江１遺跡と菖蒲江２遺跡でそれぞれ６本、高擂南遺跡で19本の試掘溝が設定された。その結果、高擂南遺跡は古墳時代（前期）の集落跡、菖蒲江１遺跡は縄文時代、古墳時代（前期）、平安時代、中世と時期が複合する集落跡、菖蒲江２遺跡は縄文時代（後期）の包蔵地及び古墳時代の集落跡であると考えられた。

このような調査結果をもとに、関係機関による協議が行われた結果、緊急発掘調査により記録保存を図ることになり、記録保存部分については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが県から委託を受けて発掘調査を実施することになったものである。

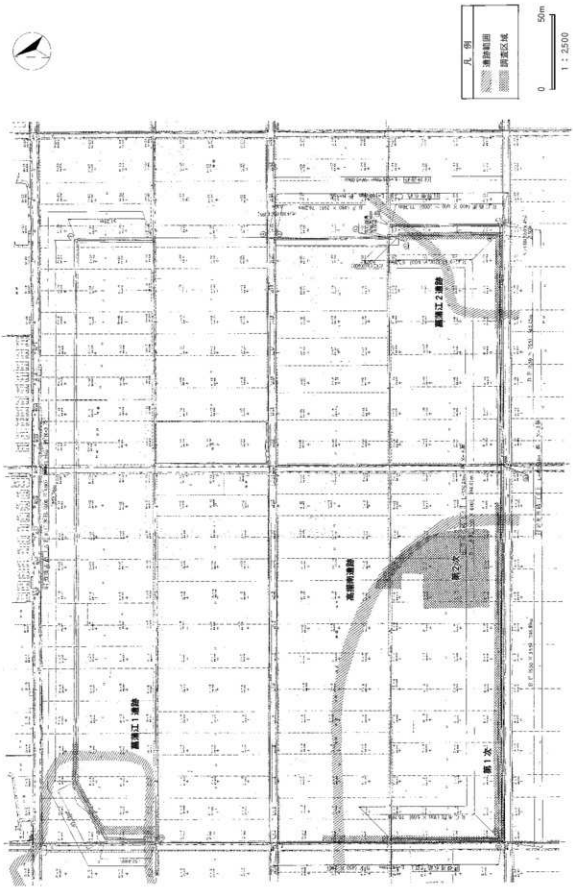
2　調査の方法と経過

調査は、平成13年度と平成14年度に行った。平成13年度の発掘調査は、山形県総合交通安全センター（仮称）予定地外周に付け替えを行う農業用水路の掘削範囲と、同じく予定地外周に巡らす擁壁設置部分に係るもので、菖蒲江１遺跡445㎡、菖蒲江２遺跡596㎡、そして高擂南遺跡1,489㎡の計2,530㎡を対象とした。また、平成14年度の発掘調査は、建設予定の本館部分及びロータリー部分に係る、高擂南遺跡3,000㎡を対象とした。

高擂南遺跡については、両年にわたって調査を行ったため、平成13年度を第１次調査、平成14年度を第２次調査とした。

第１次調査は、平成13年５月８日、関係者出席のもと鍬入れ式を執り行い、調査対象地域の南東部に位置する菖蒲江２遺跡から調査を開始した。調査予定地区内に２ｍ×２ｍの試掘孔を約10ｍ間隔に設定し、人力で遺物包含層まで掘り下げを行い、その結果をもとに耕作土及び無遺物層を重機により除去して遺構確認を行った。重機による表土除去は、遺構確認作業に先行し、順次高擂南遺跡、菖蒲江１遺跡へと移行した。７月６日（金）には、現地において関係者による調査成果の説明会を実施し、同日、調査を終了して機材等を撤収した。

第２次調査は平成14年５月８日に開始した。第１次調査と同様、関係者出席のもと鍬入れ式を執り行い、調査を開始した。調査の方法は第１次調査と同様、試掘孔を設定し、その結果をもとに重機を導入し、その後遺構検出を行った。10月１日（火）には一般市民を対象にした調査説明会を開催し、台風21号の近づきつつある雨天にもかかわらず、約150名の参加を得た。10月10日、遺構写真実測のための空撮を行い、10月11日をもって調査を終了した。



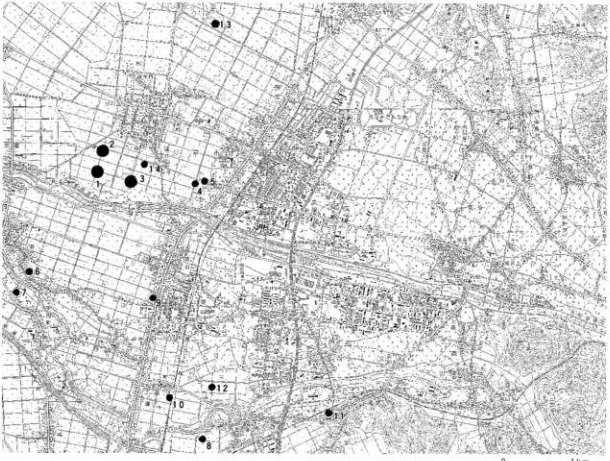
第1図　調査区概要図

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　地理的環境

高擂南遺跡と菖蒲江２遺跡は天童市大字高擂字菖蒲江に、菖蒲江１遺跡は天童市大字高擂の字高田、字菖蒲江に跨って所在する。当地域は、奥羽山脈の面白山（1,264m）付近に源を発して西流し、最上川の支流である須川に注ぐ、長さ20km、流域面積76㎢の立谷川と、立谷川の南を西流して馬見ヶ崎川に注ぐ村山高瀬川の二河川により形成された半径約８kmの複合扇状地である「立谷川扇状地」の前縁帯に位置している。遺跡付近の標高は東から西に緩く傾斜しており、標高は菖蒲江２遺跡で約100m、高擂遺跡で約99m、菖蒲江１遺跡で約98mを測る。

立谷川扇状地は、扇頂部の山寺付近で標高約220m、扇端部の旧羽州街道（旧国道13号線であり、現在は主要地方道山形天童線）沿いで約110mとなっており、その勾配は約15／1,000と急勾配のため、浸食による土砂の運搬量が大きく、古来から氾濫を繰り返してきた。



第２図　遺跡位置図（１：50,000）

立谷川の氾濫は江戸時代の記録によると1666（寛文８）年から1851（嘉永４）年までの186年間で17回を数え、最近では昭和25年の豪雨による水害が記憶に新しい。調査でも、高擂南遺跡と菖蒲江１遺跡では遺構検出面のさらに下層に、洪水による河川堆積物と思われる灰色細砂が観察され、菖蒲江２遺跡では洪水の際の鉄砲水が運んだと思われる砂の堆積が見られた。

2　歴史的環境

立谷川扇状地の扇端部には自然湧水が多く分布しており、中でも清池八幡神社の泉は水量が豊富な井戸で、灌漑用水に使われてきた。

扇状地では河川が伏流するため、自然湧水地が多い扇端部付近に、遺跡が集中して立地することが多いが、縄文後～晩期頃からは、扇端部からその先の前縁帯が集落の占地として捉えられるようになり、特に弥生時代から古墳時代にあっては、水位が高く灌漑の必要のない前縁帯が水稲農耕の適地として認識されるようになってきたものと思われる。

古墳時代に属する遺跡を地図上にプロットしてみると、立谷川扇状地の扇端部から前縁帯にかけて遺跡が多く分布していることがわかる。扇端部付近には火矢塚１・２号墳や衛守塚２号墳などの古墳があり、前縁帯には、塚野目集落、高擂集落、漆山集落、そして七浦集落の周辺に遺跡の分布が見られる。

時期は異なるが、塚野目集落周辺には矢口遺跡、塚野目Ａ遺跡がある。塚野目Ａ遺跡からは弥生後期の「天王山式」と呼ばれる、頸部に刺突文を持つ壺などが出土している。高擂集落周辺には縄文後～晩期に属する砂子田遺跡や高擂東遺跡、礼井戸遺跡等がある。

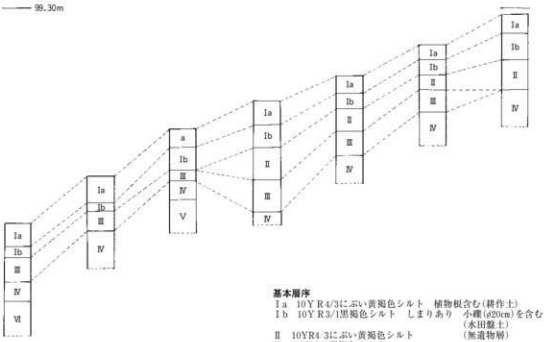
「土地条件図　山形」「土地条件調査報告書（山形地区）」
（昭和60年３月、建設省国土地理院）から抜粋

第３図　地形区分図

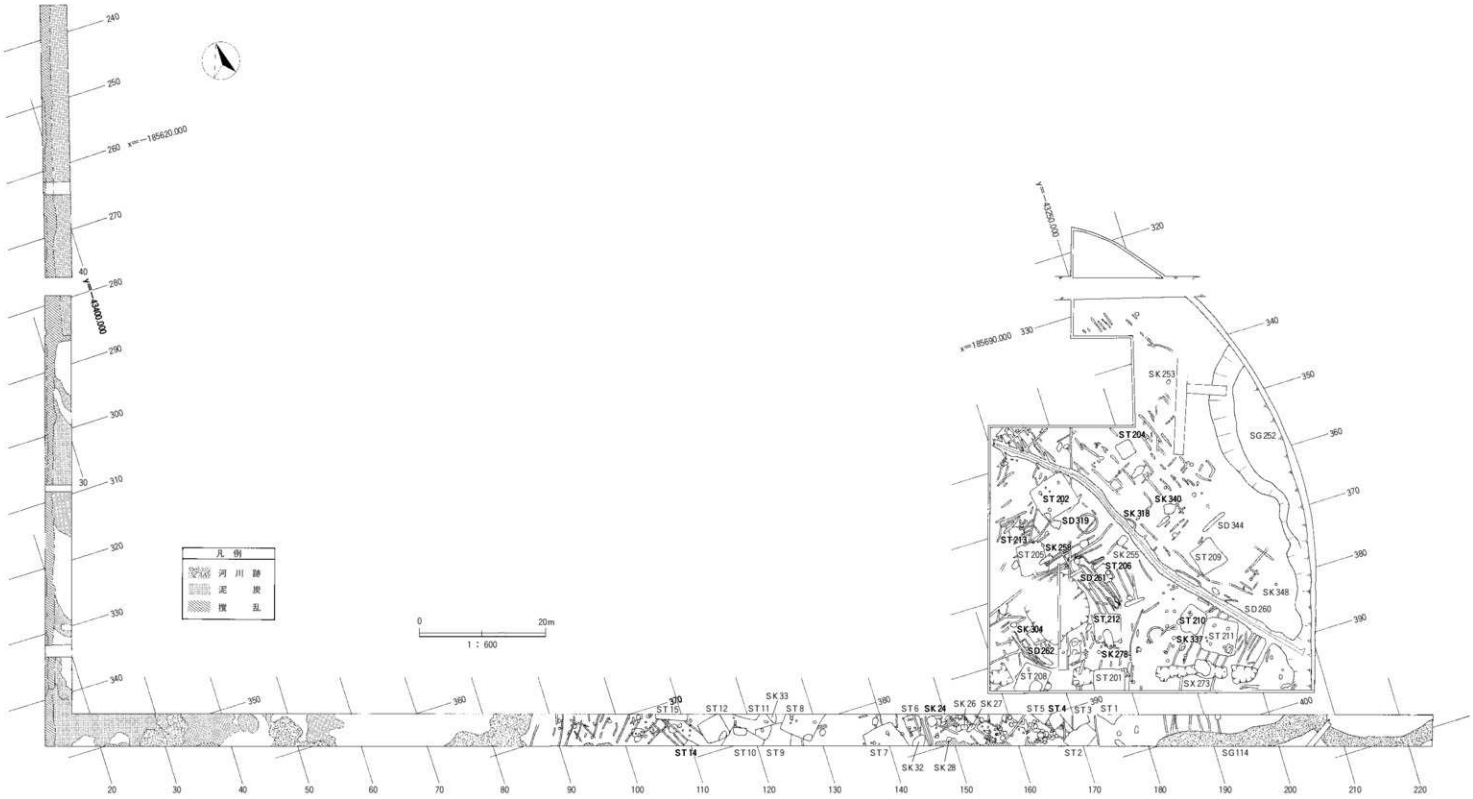
3　基本層序

基本層序は、各遺跡で若干の違いを見せるものの、扇状地前縁帯という立地の共通性、しかも近隣の遺跡であることなどから、ほぼ同様の層序で構成されている。高描南遺跡の第１次調査で観察した、東西約250mにわたる土層断面は、この地域の層序を概観することのできる資料と思われるので、これを当該地域の基本層序として述べる。にぶい黄褐色シルトのＩａ層は水田の耕作土であり、水田の基盤であるＩｂ層は黒褐色を呈するシルトである。Ⅱ層は無遺物層であり、にぶい黄褐色を呈するシルトで構成される。Ⅲ層は黒褐色シルトに灰黄褐色シルトが斑状に入る。炭粒を多く含み、層中に遺物を包含する。Ⅳ層は灰黄褐色シルトで褐灰色シルトを斑状に含む。地山である。Ⅴ層は褐灰色粗砂で、河川の氾濫に由来するものと思われる。Ⅵ層はいわゆる泥炭であるが、分布は全面的ではなく、観察し得た西側地区では浅いところに見られる。あるいは東では深いところに分布するのかもしれない。調査に係っては以上の層序を確認し得たが、菖蒲江１遺跡ではさらに下に河川の氾濫に由来すると思われる灰色細砂などが見られる。

一体に扇状地前縁帯では、堆積した泥炭が乾燥し、バクテリアなどによって土壌化するという。このようにして形成された微高地が、古墳時代前期の頃には、集落として使用されていたもののようである。



第４図　基本層序



第５図　高擶南遺跡遺構配置図

Ⅲ　高擂南遺跡

1　第１次調査の概要

第１次調査は、山形県総合交通安全センター（仮称）建設予定地の南辺と西辺に、幅５ｍ、長さ約330ｍの調査区を設定した。このうち、遺構が密集するのは南辺中央東寄りの区域で、その遺構分布域は、調査区外北部と南部に広がることが考えられる。遺構のとぎれた西側は低湿地となり、河川の運んだ堆積物である礫層や砂層、葦・草などの堆積する泥炭層が地山を形成する。

遺跡は、旧河川の氾濫によって形成された自然堤防上の微高地にあたる、安定した地盤に営まれていたことがうかがえる。

第１次調査で検出された遺構は竪穴住居跡13棟、土坑７基、河川跡２条、畝状遺構などで、時期的には古墳時代前期のものである。

以下に各遺構の概要を述べる。

記述に当たって、遺構の所在位置は北西隅グリッド～南西隅グリッドと表示した。各隅の表示はＸ軸（西→東）・Ｙ軸（北→南）という意味である。

1．竪穴住居跡

竪穴住居跡はすべて古墳時代前期のものである。平面形は方形または長方形を呈する。調査区が狭いため、大方が調査区の外に位置し、全容が認められたものは少ない。７棟は焼失家屋である。出土遺物からは、はっきりとした時期差がうかがえず、比較的短期間の住居であったものと考えられる。

ＳＴ１竪穴住居跡（第６図）

170・390～175・390グリッドで検出された。住居の半分以上が調査区外に位置する。平面形は隅が丸みをもつ方形を呈すると考えられる。確認できた竪穴住居跡の規模は、東西3.4ｍ、南北2.4ｍ、検出面から床面までの深さは約30㎝である。主軸方向はＮ－40°－Ｗを示す。

覆土は自然堆積である。床面には炭・炭化材が遺存していることから、焼失家屋と考えられる。柱穴や貯蔵穴などは検出できなかった。

床面出土遺物には、壺（２・４）、甕脚台部（３）がある。このほか、細片のため図化できなかったが鉢がある。Ｓ字状の口縁部破片（１）は包含層出土のものであるが、（３）と胎土が極めて似ていることから同一個体の可能性があるものとして扱った。

ＳＴ２竪穴住居跡（第７・８図）

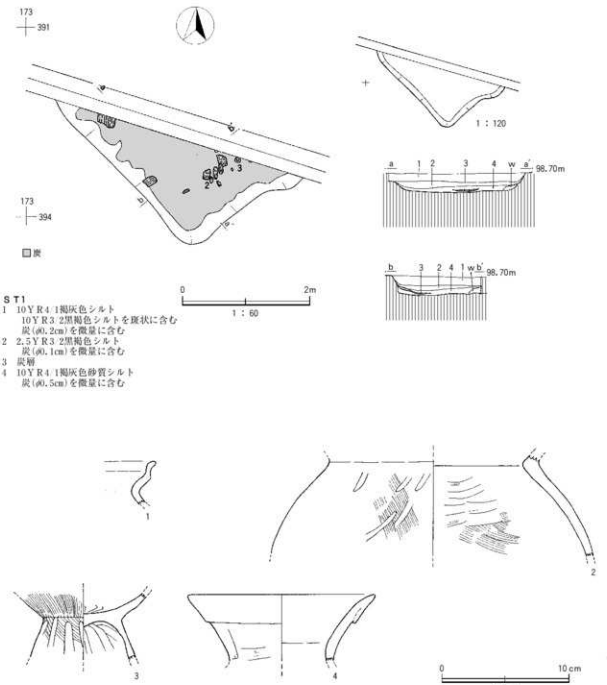
165・395～170・390グリッドで検出された。住居の南隅が調査区外に掛かる。北側にＳＴ３竪穴住居跡があり、この住居により北側の一部が切られている。平面形は隅が丸みをもつ長方形を呈する。確認できた竪穴住居跡の規模は、東西4.7ｍ、南北3.2ｍ、検出面から床面までの深さは約10㎝である。主軸方向はＮ－59°－Ｅを示す。

覆土は自然堆積である。床面には炭・炭化材が遺存していることから、焼失家屋と考えられる。床面の中央より東寄りに、焼土に覆われた被熱した面が２ヵ所みられ、地床炉と考えられる。ＳＴ２（旧）→ＳＴ３（新）が確認された。柱穴や貯蔵穴などは認められなかった。

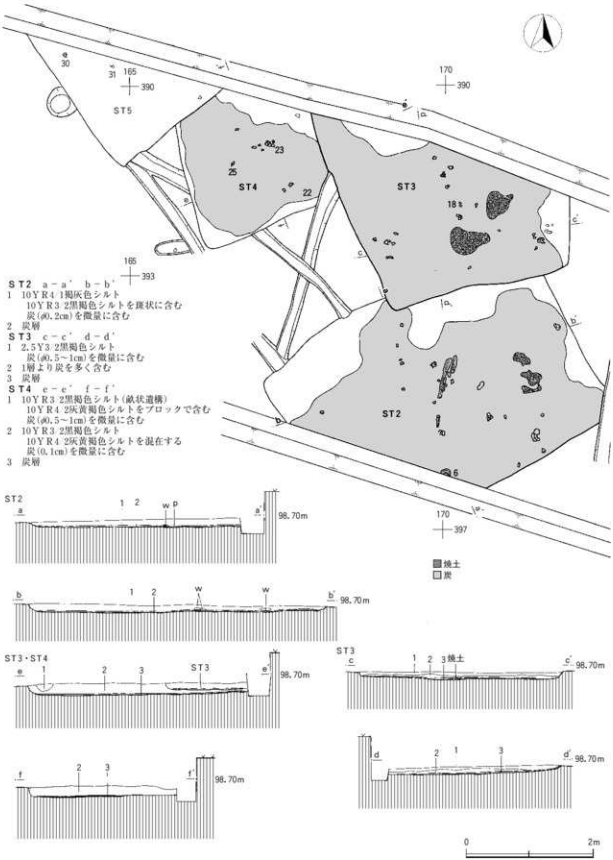
床面出土遺物には壺・甕（６・７）がある。覆土中からの出土遺物は甕（８）、壺（９）蓋（５）がある。

ＳＴ３竪穴住居跡（第７・８図）

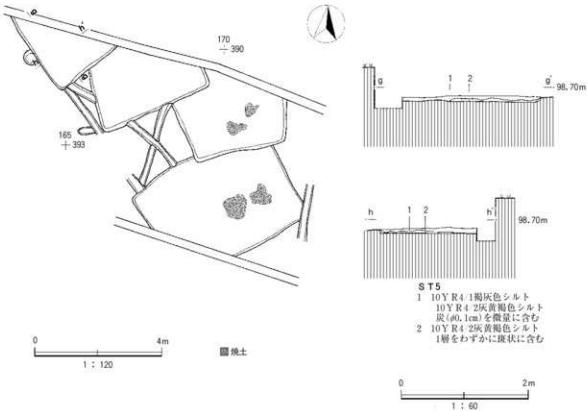
175・390～170・390グリッドで検出された。住居の北隅が調査区外に掛かる。西側にＳＴ４



第６図　ＳＴ１竪穴住居跡及び同出土遺物



第７図　ＳＴ２～５竪穴住居跡



第８図　ＳＴ２～５竪穴住居跡完掘図

竪穴住居跡があり、この住居により西側の一部が切られている。平面形は隅が丸みをもつ方形を呈すると考えられる。確認できた竪穴住居跡の規模は、東西2.9m、南北3.6m、検出面から床面までの深さは約13cmである。主軸方向はＮ－12°－Ｗを示す。

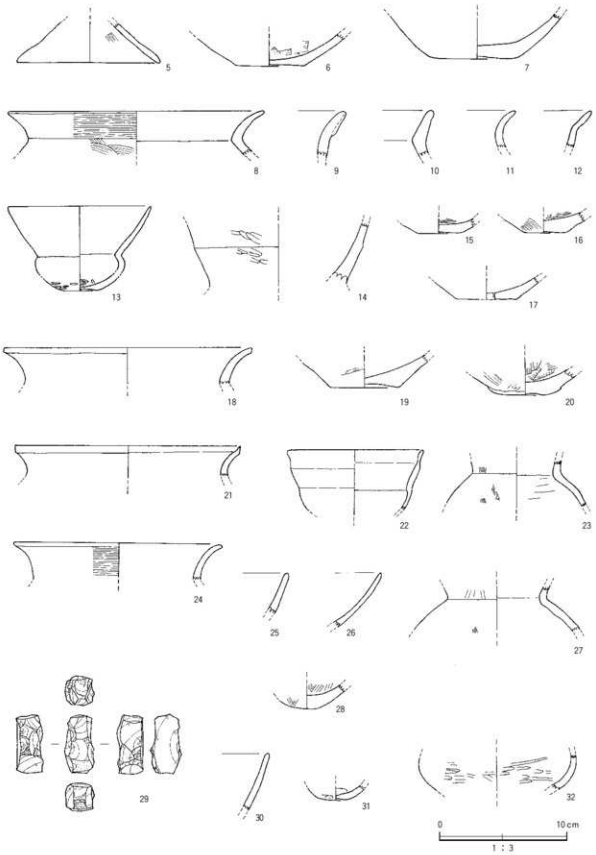
覆土は自然堆積である。床面には炭・炭化材が遺存していることから、焼失家屋と考えられる。床面の中央より東寄りに焼土と被熱した面が２ヵ所みられ、地床炉と考えられる。ＳＴ２・ＳＴ４（旧）→ＳＴ５（新）が確認された。柱穴や貯蔵穴などは検出できなかった。

床面出土遺物には、甕（18）、鉢（13）がある。覆土中からの出土遺物には壺（14）甕（10・11・21）、甕・壺（15～17・19・20）、鉢（12）がある。

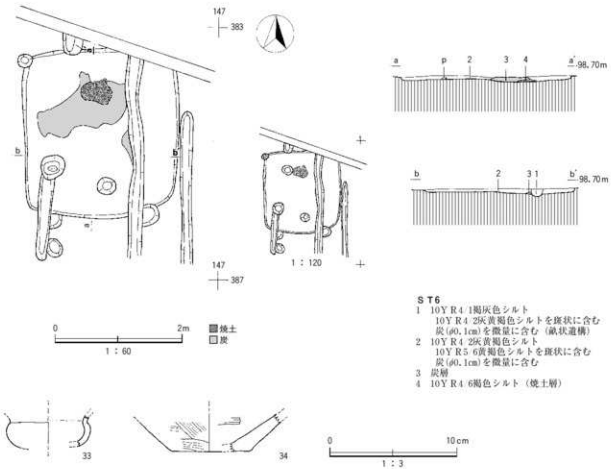
ＳＴ４竪穴住居跡（第７・８図）

165・385～165・390グリッドで検出された。住居の北隅が調査区外に位置する。西側にＳＴ５竪穴住居跡があり、この住居により西側の一部が切られている。平面形は隅が丸みをもつ方形を呈すると考えられる。確認できた竪穴住居跡の規模は、東西1.8m、南北2.2m、検出面から床面までの深さは約15cmである。主軸方向はＮ－13°－Ｗを示す。覆土は自然堆積である。床面には炭が遺存していることから、焼失家屋と考えられる。ＳＴ４（旧）→ＳＴ３・ＳＴ５（新）が確認された。柱穴や貯蔵穴、炉などは検出できなかった。

床面出土遺物には壺（23）鉢（22・25）高坏（26）などがある。覆土中からの出土遺物には甕（24）、甕・壺（28）、壺（27）、管玉の未成品がある。



第９図　ＳＴ２～５竪穴住居跡出土遺物



第10図　ＳＴ６竪穴住居跡及び同出土遺物

ＳＴ５竪穴住居跡（第７・８図）

160・385～165・385グリッドで検出された。住居の北隅が調査区外に位置する。東側にＳＴ４竪穴住居跡があり、この住居により、東側の一部が切られている。平面形は隅が丸みをもつ方形を呈すると考えられる。確認できた竪穴住居跡の規模は、東西2.3m、南北2.9m、検出面から床面までの深さは約10cmである。主軸方向はＮ－32°－Ｗを示す。

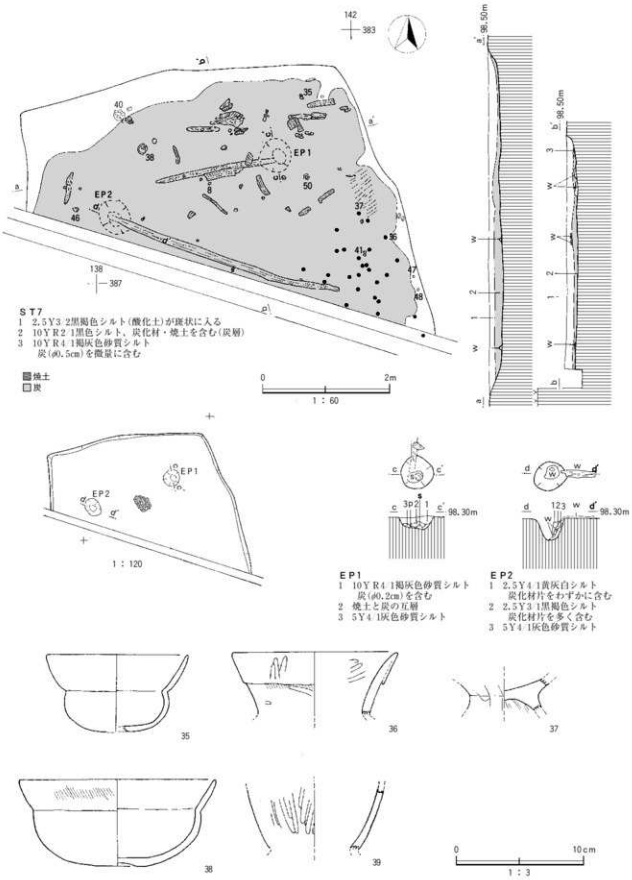
覆土は約10cmであるため、堆積状況は不明である。ＳＴ４（旧）→ＳＴ５（新）が確認された。柱穴や貯蔵穴、炉などは検出できなかった。

出土遺物には、壺（32）、鉢（31）、高坏（30）のほか、細片のため図化できなかった甕がある。

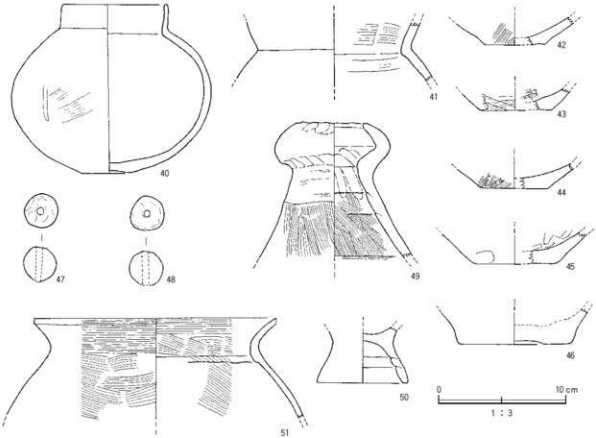
ＳＴ６竪穴住居跡（第10図）

140・385～145・385グリッドで検出された。住居の北隅が調査区外に係る。平面形は隅が丸みをもつ方形を呈する。確認できた竪穴住居跡の規模は、東西2.4m、南北2.6m、検出面から床面までの深さは約10cmである。主軸方向はＮ－２°－Ｗを示す。

覆土は約10cm程であるため、堆積状況は不明である。床面の中央より北寄りに炭が覆っている部分があり、炭を取り除くと被熱して硬化した面がみられた。床面一面を覆って遺存する炭とは様相が異なり、炉の使用に伴うものと考えられる。床面には３個のピットが存在するが、



第11図　ＳＴ７竪穴住居跡及び同出土遺物



第12図　ＳＴ７竪穴住居跡出土遺物

いずれも主柱穴を構成するものではない。貯蔵穴は認められなかった。

床面出土遺物には、甕（34）、鉢（33）がある。

ＳＴ７竪穴住居跡（第11図）

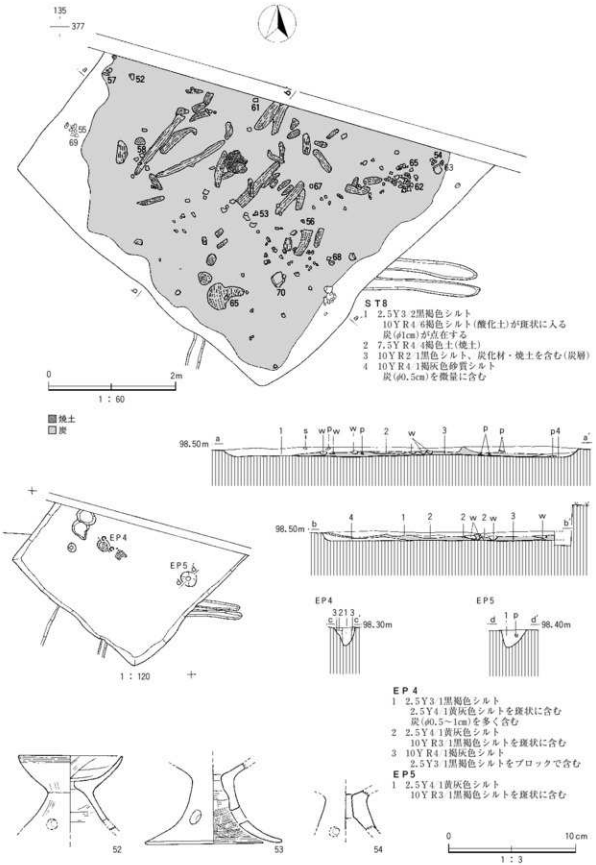
135・380～140・385グリッドで検出された。住居の南半が調査区外に位置する。平面形隅丸方形を呈すると考えられる。確認できた竪穴住居跡の規模は、東西5.0m、南北5.1m、検出面から床面までの深さは、約23cmを測る。主軸方向はＮ－12°－Ｗを示す。覆土は自然堆積である。床面には炭・炭化材が遺存していることから、焼失家屋と考えられる。

床面の中央より北寄りに焼土と被熱した面が１ヵ所みられ、地床炉と考えられる。柱は２本検出され主柱と考えられる。それらは、炭化した柱材の基部が柱穴内に遺存したまま、上部が横倒しの状態で床面から検出され、焼け落ちた様相を呈している。柱材は丸太材を使用している。東壁際床面には、住居中心部に向かい放射状に葦状の炭化物が検出されており、屋根材の可能性が考えられる。貯蔵穴は認められなかった。

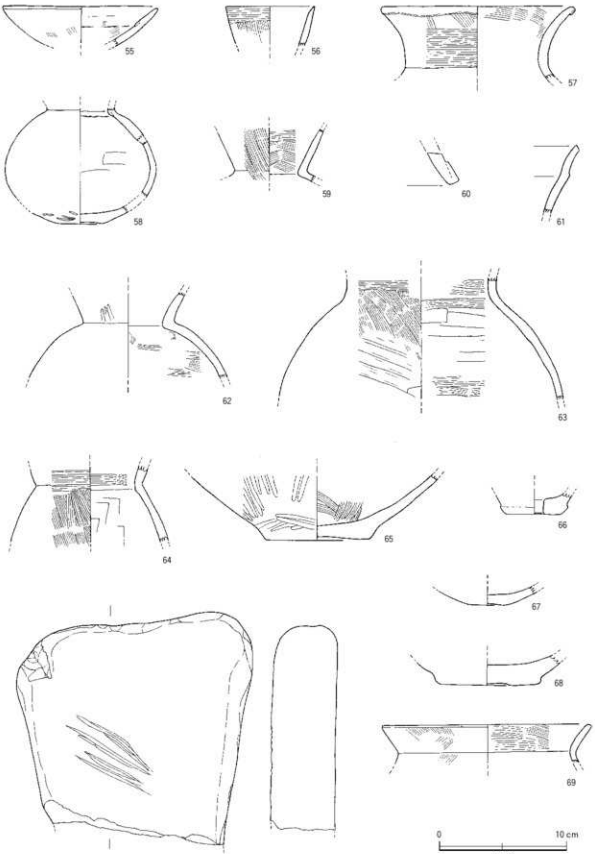
床面出土遺物には、甕（51）、壺（36・37・39・40・41）、甕・壺（42・46）、鉢（35・38）、台付き鉢（50）、異形器台（49）、土玉（47・48）などがある。２個の土玉は並んで出土している。覆土中からの出土遺物には甕・壺（43・44・45）がある。

ＳＴ８竪穴住居跡（第13図）

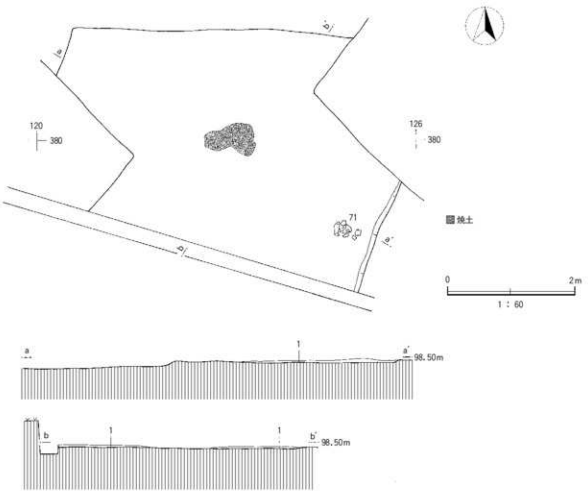
125・375～125・380グリッドで検出された。住居の北半が調査区外に位置する。平面形は隅



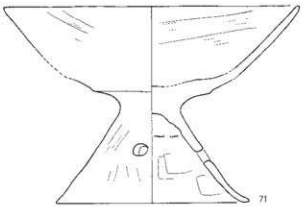
第13図　ＳＴ８竪穴住居跡及び同出土遺物

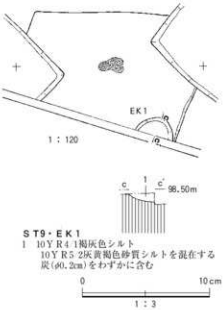


第14図　ＳＴ８竪穴住居跡出土遺物



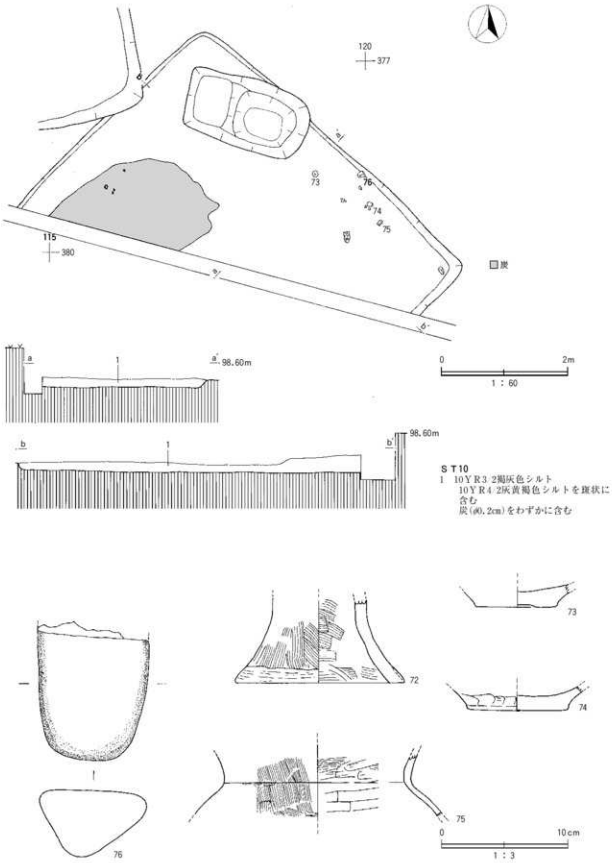
ＳＴ9
1　10ＹＲ4/1褐灰色シルト
　10ＹＲ5/2灰黄褐色砂質シルトを斑状に含む
　炭(φ0.5cm)をわずかに含む



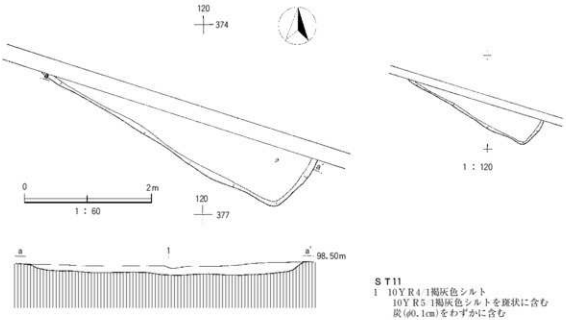


ＳＴ9・ＥＫ1
1　10ＹＲ4/1褐灰色シルト
　10ＹＲ5/2灰黄褐色砂質シルトを混在する
　炭(φ0.2cm)をわずかに含む

第15図　ＳＴ９竪穴住居跡及び同出土遺物



第16図　ＳＴ10竪穴住居跡及び同出土遺物



第17図　ＳＴ11竪穴住居跡

丸方形を呈すると考えられる。確認できた竪穴住居跡の規模は、東西5.4m、南北5.1m、検出面から床面までの深さは約16cmである。主軸方向はＮ－42°－Ｅを示す。

覆土は自然堆積である。床面には炭・焼土・炭化材が遺存していることから、焼失家屋と考えられる。床面の中央に焼土と被熱した面が１ヶ所みられ、地床炉と考えられる。床面には数個のピットが認められる。

床面出土遺物には、甕（68・69）、壺（58・57・61・62・63・64・65・67）、鉢（56）、器台（52・53・54）、高坏（55）のほか、管玉製作で研磨に使用された砥石（70）が床面から出土している。本遺構は北半が調査区外に位置するため、他の管玉製作に関連する遺物や遺構の有無は明らかでない。覆土中からの出土遺物には壺（59）、異形器台脚部（60）、有孔鉢（66）がある。

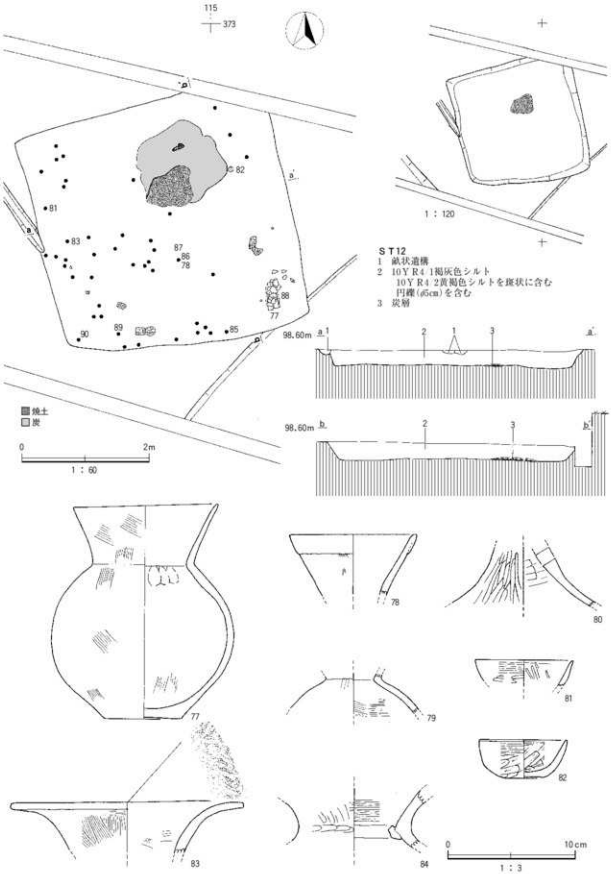
ＳＴ９竪穴住居跡（第15図）

120・375～120・380グリッドで検出された。住居の南隅が調査区外に位置する。ＳＴ８竪穴住居跡によって北東隅を、ＳＴ10竪穴住居跡によって北東隅を切られる。壁の立ち上がりは西側の壁の一部分を残すだけで、ほとんど床面での検出である。平面形は隅が丸みをもつ方形を呈する。確認できた竪穴住居跡の規模は、東西3.3m、南北3.1m、検出面からの深さは西側残存部で約３cmである。主軸方向はＮ－13°－Ｅを示す。床面の中央に被熱して硬化した面がみられ、地床炉と考えられる。

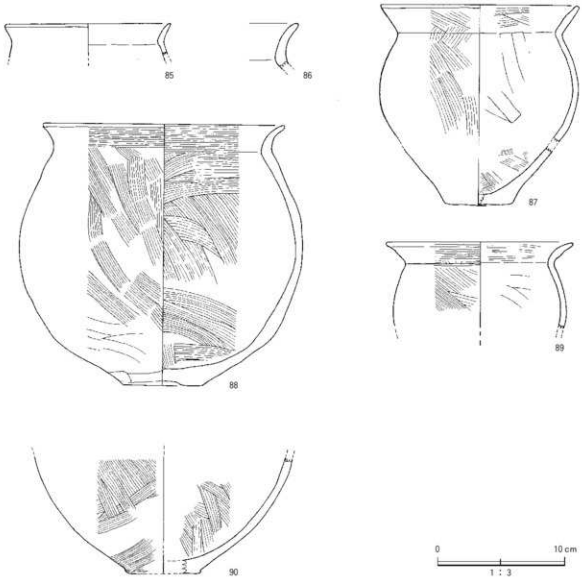
ＥＫ１は貯蔵穴と考えられるが遺物の出土は認められなかった。柱穴は認められない。床面出土遺物には高坏がある。

ＳＴ10竪穴住居跡（第16図）

115・375～120・380グリッドで検出された。住居の南半が調査区外に位置する。東側にあるＳＴ９竪穴住居を切り、西側のＳＴ12竪穴住居跡によって西側の一部を切られる。ＳＫ31土坑



第18図　ＳＴ12竪穴住居跡及び同出土遺物



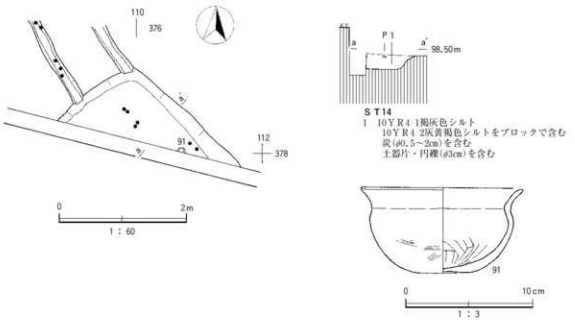
第19図　ＳＴ12竪穴住居跡出土遺物

と重複しているが、ＳＴ10竪穴住居跡が床面での検出であり、覆土が失われているために、相互の新旧関係は確認できなかった。平面形は隅が丸みをもつ方形を呈する。確認できた竪穴住居跡の規模は、東西5.6m、南北1.4mである。主軸方向はＮ－47°－Ｅを示す。床面の中央より西寄りに炭が覆っている範囲がみられた。炉跡は調査範囲からは検出できなかった。柱穴や貯蔵穴などは認められなかった。

出土遺物には甕（75）、甕・壺（73・74）、異形器台（72）、砥石（76）がある。

ＳＴ11竪穴住居跡（第17図）

115・370～120・375グリッドで検出された。住居の床面のみの検出である。ほとんどの部分が調査区外に位置する。平面形は方形を呈すると考えられる。確認できた竪穴住居跡の規模は東西4.3m、南北1.1m、検出面からの深さは約18cmである。主軸方向はＮ－47°－Ｅを示す。覆土は１層である。炉・柱穴・貯蔵穴は調査した範囲では認められなかった。



第20図　ＳＴ14竪穴住居跡及び同出土遺物

出土遺物には甕・壺・鉢があるが、いずれも細片のため図化はできなかった。

ＳＴ12竪穴住居跡（第18図）

110・375～115・375グリッドで検出された。東側にあるＳＴ10竪穴住居跡を切る。平面形は隅が丸みをもつ方形を呈する。確認できた竪穴住居跡の規模は、東西3.9m、南北3.6m、検出面から床面までの深さは約30cmである。主軸方向はＮ－14°－Ｗを示す。

基本層序のＶ層の粗砂層まで掘り込み、床面としている。壁の立ち上がりは外傾し、床面は平坦である。覆土は自然堆積である。床面には炭・炭化材が遺存していることから、焼失家屋と考えられる。他の焼失家屋に較べ床面を覆い尽くすような炭の遺存は認められない。床面の中央より北寄りに、焼土と被熱した面が１ヵ所みられ、地床炉と考えられる。柱穴は認められなかった。

出土遺物には甕（86・87・88・89・90）、壺（77・78・79・83・84）、鉢（81・82・85）、器台（80）がある。77・78が出土した南東隅部分は浅い凹みとなっており、貯蔵穴の可能性が考えられる。

ＳＴ14竪穴住居跡（第20図）

105・375～110・375グリッドで検出された。住居の北隅部分のみの検出であり、ほとんどの部分が調査区外に位置する。平面形は隅が丸みをもつ方形を呈すると考えられる。確認できた竪穴住居跡の規模は、東西2.3m、南北1.5m、検出面からの床面までの深さは約25cmである。主軸方向はＮ－44°－Ｗを示す。覆土は自然堆積である。炉・柱穴・貯蔵穴は認められない。

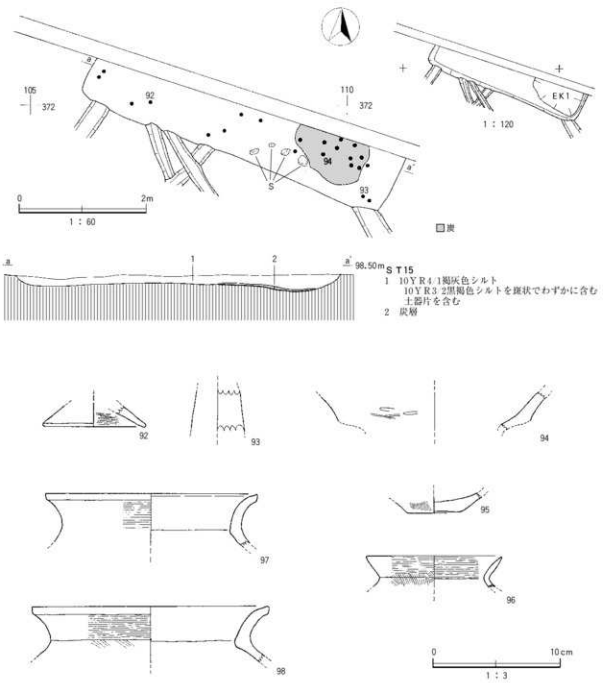
床面出土遺物には鉢（91）がある。他に甕・壺・高坏があるが、いずれも細片のため図化はできなかった。

ＳＴ15竪穴住居跡（第21図）

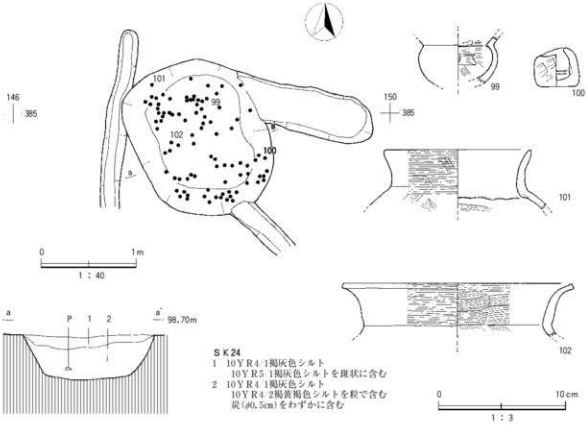
100・360～110・370グリッドで検出された。住居の北部分のほとんどが調査区外となる。平

面形は隅が丸みをもつ方形を呈すると考えられる。確認できた竪穴住居跡の規模は東西5．1m、南北1.0m、検出面から床面までの深さは約25cmである。主軸方向はN－28°－Wを示す。覆土は自然堆積である。ＥＫ１は貯蔵穴と考えられ、底面は炭に覆われていたが、遺物の出土はみられない。炉・柱穴は認められなかった。

出土遺物には甕（96・97・98）、壺（94）、甕・壺（95）、高坏（92・93）などがある。他に甕・壺・高坏があるが、いずれも細片のため図化はできなかった。



第21図　ＳＴ15竪穴住居跡及び同出土遺物



第22図　ＳＫ24土坑及び同出土遺物

2．土　坑

ＳＫ24土坑（第22図）

146・384～148・385グリッドで検出された。平面形態は不整円形で、長軸178cm、短軸158cm、検出面からの深さは45cmを測る。断面形態は壁が直立気味に立ち上がる箱形を呈する。一部分攪乱に壊されている。主軸はＮ－60°－Ｅを示す。覆土中に土器の細片が多く含まれる。図化できた遺物は甕（102）、壺（101）、鉢（99）、小型土器（100）である。

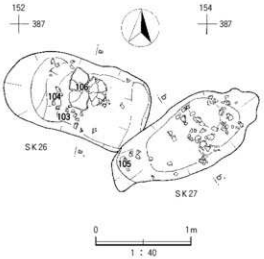
ＳＫ26土坑（第23図）

151・387～152・388グリッドで検出された。ＳＫ27に切られている。主軸はＮ－65°－Ｗを示す。平面形態は楕円形で、長軸155cm、短軸83cm、検出面からの深さは14cmを測る。断面形態は皿形で西壁にテラス面をもち東側の一段低くなった底面に土器が遺存している。南北の壁は急に立ち上がる。覆土は２層で、第１層は灰黄褐色シルト（地山土）をブロックで含む黒褐色シルトで、わずかに炭化物を含む。第２層は地山土の混入は少なく、底面には不燃炭化物が堆積する。

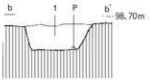
遺物は底面から甕（103）、壺（104）が出土している。壺（106）は土圧でつぶれたような状態で出土している。

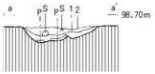
ＳＫ27土坑（第23図）

153・388～154・388グリッドで検出された。平面形態は不整楕円形で、長軸180cm、短軸75cm、検出面からの深さ27cmを測る。断面形態は深い皿形で、東・西壁は急に、南・北壁は緩や

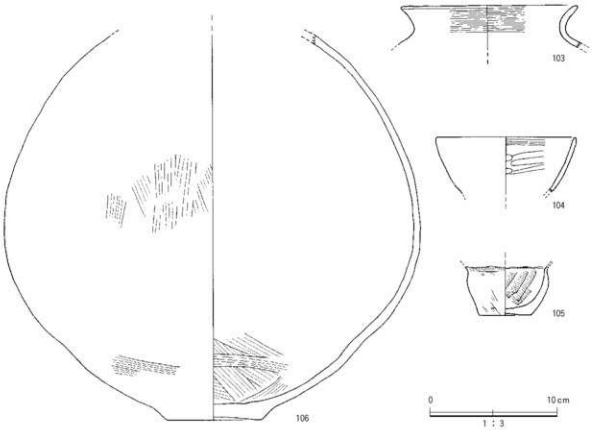


ＳＫ27
1　10ＹＲ４/1褐灰色シルト
　10ＹＲ４/2灰黄褐色シルトを粒で含む
　炭(φ0.5～1cm)をわずかに含む
　土層に土器片を多く含む

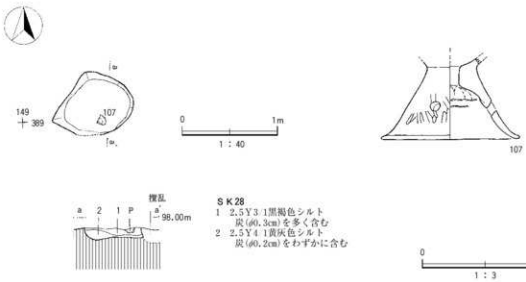




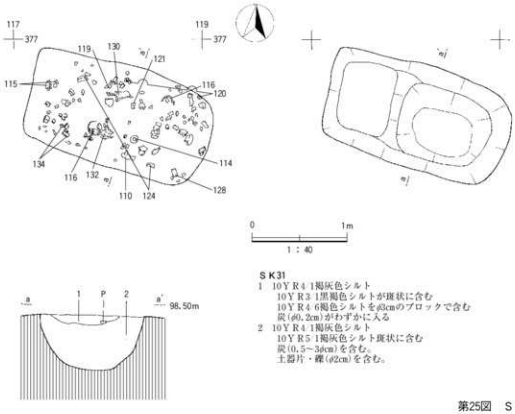
ＳＫ26
1　10ＹＲ３/1黒褐色シルト
　10ＹＲ４/2灰黄褐色シルトをブロックで含む
　炭(φ1cm)をわずかに含む。礫(φ4～6cm)を含む
2　10ＹＲ２/1黒色土(炭)
　10ＹＲ４/2灰黄褐色シルトを斑状にわずかに含む
　器片を含む層



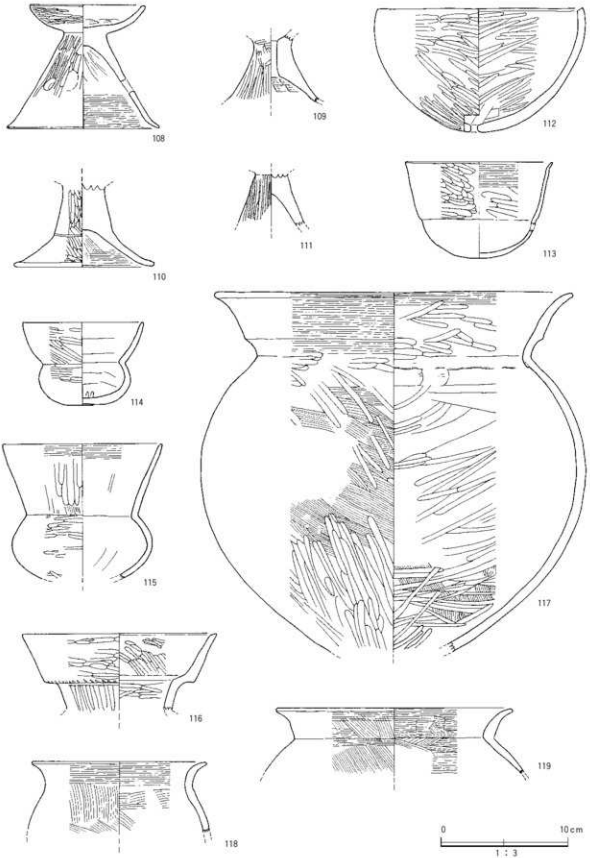
第23図　ＳＫ26・27土坑及び同出土遺物



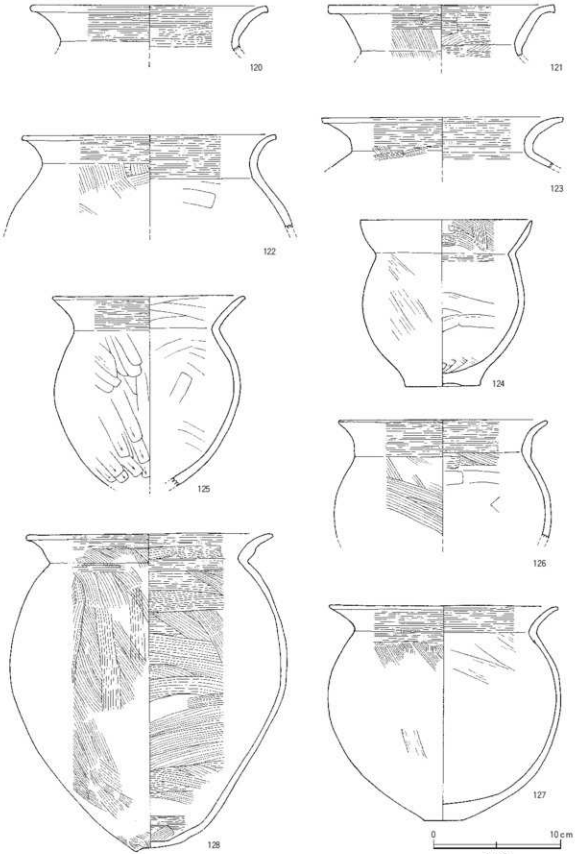
第24図　ＳＫ28土坑及び同出土遺物



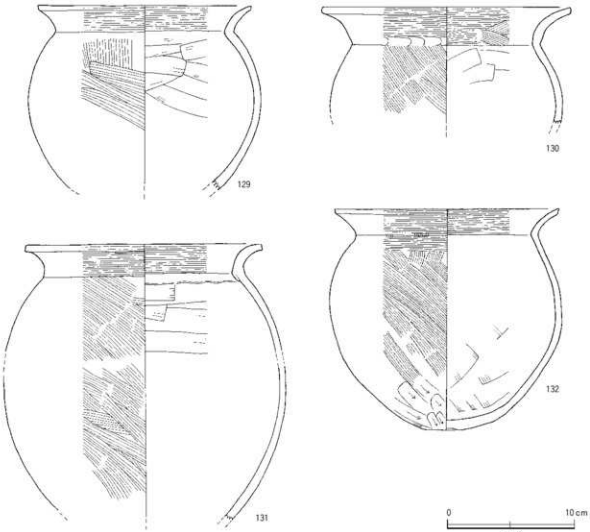
第25図　ＳＫ31土坑



第26図　ＳＫ31土坑出土遺物（１）



第27図　ＳＫ31土坑出土遺物（２）



第28図　ＳＫ31土坑出土遺物（３）

かに立ち上がる。主軸はＮ－65°－Ｅを示す。覆土は褐灰色シルトの単一層で、炭化物をわずかに含む。ＳＫ26と切り合っており、本土坑が新しい。

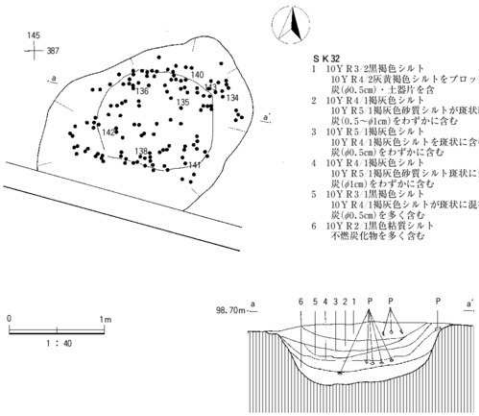
出土遺物は覆土上層に多くの土師器片が集中して出土している。下層には遺物は伴わない。図化できたものには鉢（105）がある。

ＳＫ28土坑（第24図）

149・388～150・389グリッドで検出された。平面形態は不整円形と推定される。攪乱で一部を壊されている。長軸90cm、短軸68cm、検出面からの深さ12cmを測る。断面形態は浅い皿状を呈する。主軸はＮ－75°－Ｅを示す。覆土は２層で、第１層は黒褐色シルト、第２層は黄灰色シルトでわずかに炭化物を含む。遺物は器台（107）が出土している。

ＳＫ31土坑（第25図）

117・377～119・378グリッドで検出された。平面形態は隅円方形で、長軸198cm、短軸110cm、検出面からの深さ60cmを測る。断面形態は壁が直立に立ち上がり、西側には一段のテラス面をもつ。主軸はＮ－87°－Ｅを示す。



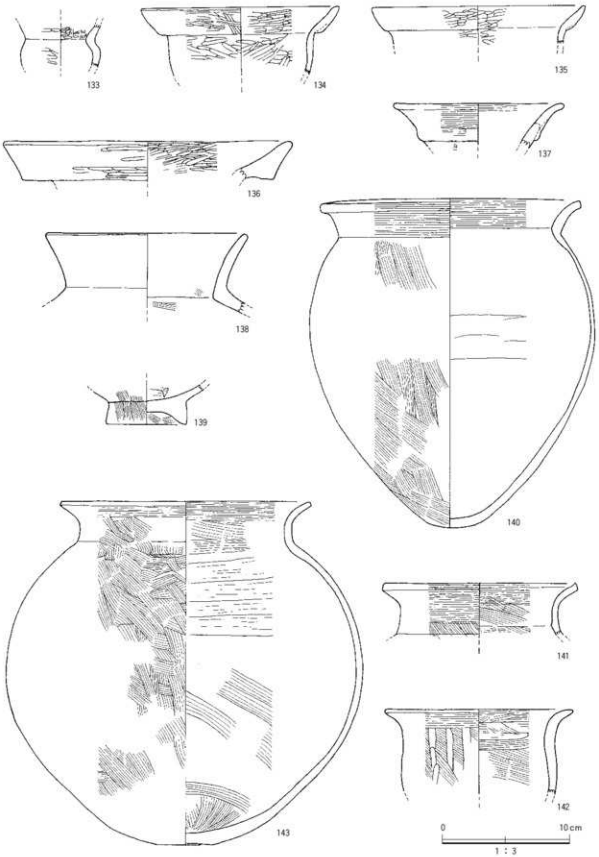
第29図　ＳＫ32土坑

覆土中には多くの土器が重なり合っていたために、２層以下の分層の図化はしていない。第１層は褐灰色シルトと黒褐色シルトの混合土で、わずかに炭化物を含み、第２層は褐灰色シルトに炭化物を多く含む。完形土器や半完形品が重なり合い、一括して投棄された様相を呈している。ＳＴ７竪穴住居跡出土の鉢（38）の破片が、当土坑の破片と接合していることから、少なくともＳＴ７のゴミ捨て穴として使われていたことが考えられる。

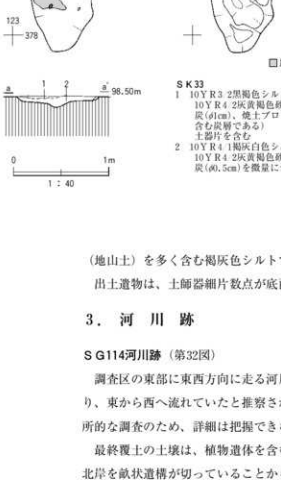
当土坑はＳＴ10と切り合っているが、ＳＴ10が床面のみの検出であり覆土が失われていたために、相互の断面観察による新旧関係は確認できなかった。出土遺物は、甕（117～132）、壺（115～116）、鉢（112～114）、高坏（110）、器台（108・109・111）などが出土している。

ＳＫ32土坑（第29図）

145・387～147・387グリッドで検出された。遺構は調査区外に延びる。平面形態は不整楕円形で、長軸175cm、短軸185cm、検出面からの深さ64cmを測る。断面形態は、壁が急に立ち上がる椀形を呈する。主軸はＮ－38°－Ｅを示す。覆土は６層で、第１層から第５層までは黒褐色シルトと褐灰色シルトの互層で、炭化物を含む。第６層は黒色シルトで不燃炭化物を多く含む。全体に緩慢な自然堆積状況を示し、下層にいくにつれてシルト質が細かくなり粘性を帯びている。各層に均一に多数の土器片が含まれていることから、一定期間の使用がうかがえる。遺物は甕（140～143）、壺（136～138）、鉢（133～135・139）が出土している。



第30図　ＳＫ32土坑出土遺物



第31図　ＳＫ33土坑

ＳＫ33土坑（第31図）

123・377～123・778グリッドで検出された。遺構は調査区外に延びる。平面形態は楕円形と推定され、長軸175cm、短軸117cm、検出面からの深さ18cmを測る。底面は中心部が溝状に深いが、壁際は平坦となり緩く立ち上がる。主軸はＮ－12°－Ｅを示す。

覆土は２層で、上層は焼土ブロックを多く含む炭層、下層は灰黄褐色シルト（地山土）を多く含む褐灰色シルトで、炭化物をわずかに含んでいる。

出土遺物は、土師器細片数点が底面より出土しているが、図化にはいたらなかった。

３．河　川　跡

ＳＧ114河川跡（第32図）

調査区の東部に東西方向に走る河川跡が認められた。検出された河川の幅は3.0～3.5mを測り、東から西へ流れていたと推察される。２つの流路が重なっているようにも思われるが、局所的な調査のため、詳細は把握できなかった。

最終覆土の土壌は、植物遺体を含む黒色土や粗砂が自然堆積の状況を呈している。河川跡の北岸を畝状遺構が切っていることから集落が営まれていた時期には、河川は埋没していたと考えられ、その機能はすでに失われていたことが考えられる。

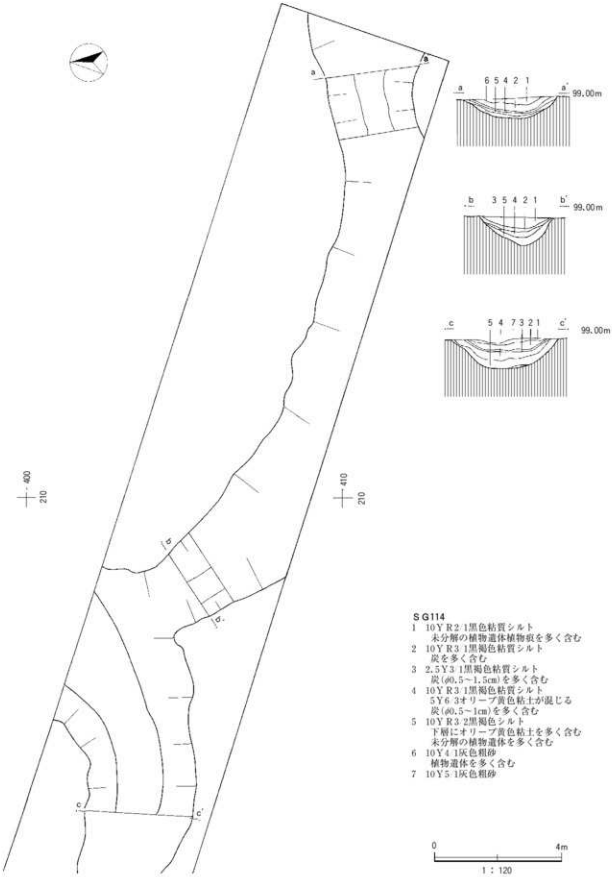
出土遺物には、甕(152～156)、壺(149～151)、鉢(147～148)、高坏(145～146)、器台(144)などが見られる。

４．畝状遺構（第35図）

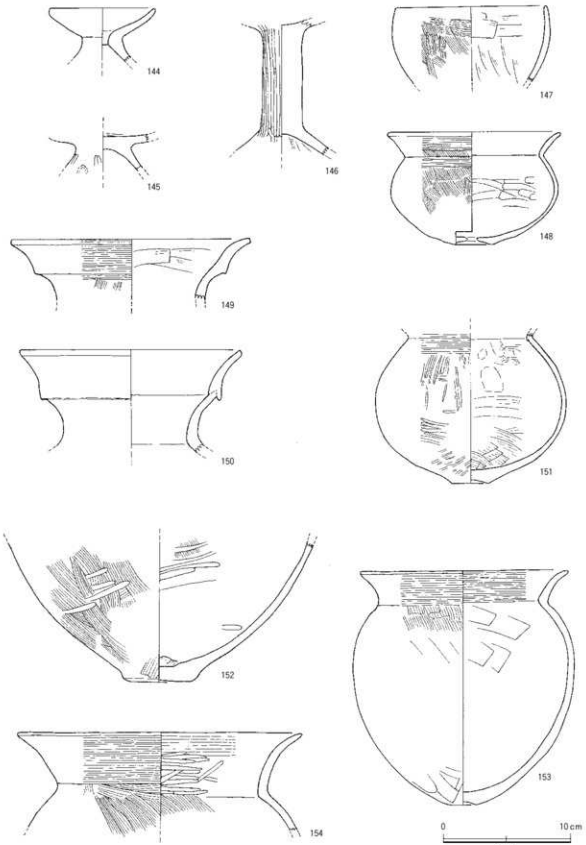
検出面には、遺構のほかに耕作に関係すると考えられる溝状の攪乱がある。重複する全ての遺構を切っている。いずれも畝立溝と考えられる平行する浅い溝で、調査区ほぼ全面にわたって確認された。溝の間隔は１ｍ～1.5m、溝幅は大多数が0.2～0.3m程度である。検出面からの深さは0.1m～0.2mと一定しない。

溝の軸方向の偏差は幾時期かの時期差を示し、住居の建て替えとともに、畑地の占地が移動したことが考えられる。溝底面には鍬もしくは鋤と考えられる耕作痕跡が認められる。

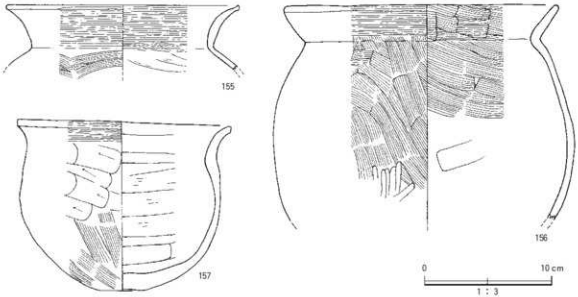
出土遺物は古式土師器が数点出土しているが、細片となっているものが多く、出土状況にもまとまりがないことから、耕起に伴って巻き上げられたものと考えられる。



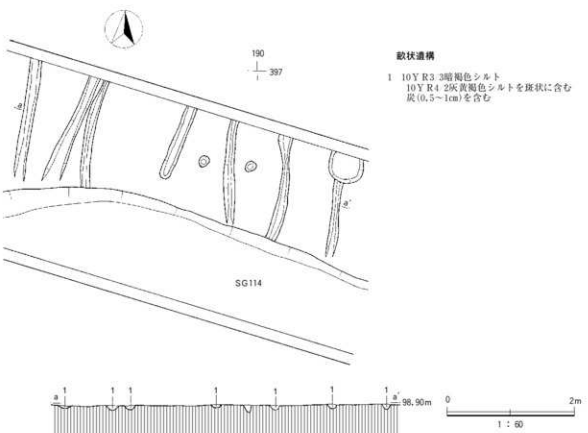
第32図　ＳＧ114河川跡



第33図　ＳＧ114河川跡出土遺物（１）



第34図　ＳＧ114河川跡出土遺物（２）



畝状遺構

1　10YR3/3暗褐色シルト
　　10YR4/2灰黄褐色シルトを斑状に含む
　　炭(0.5～1cm)を含む

第35図　畝状遺構

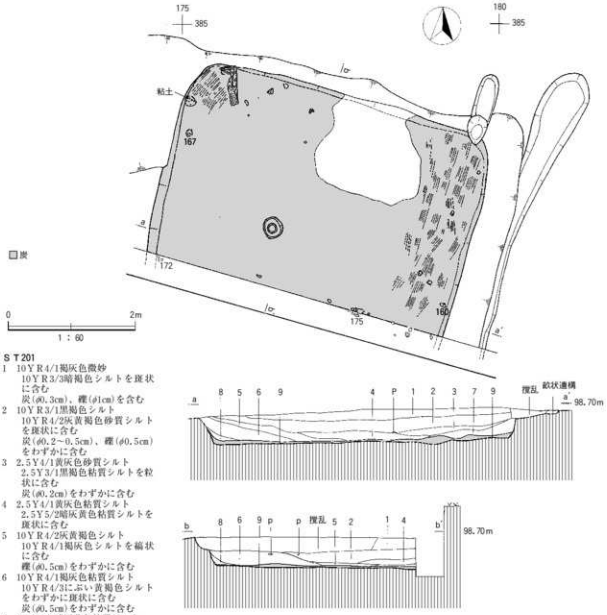
2　第２次調査の概要

調査で10棟の竪穴住居跡、９基の土坑、５条の溝跡の他、性格不明遺構や河川跡などを検出した。以下にその概要を述べる。

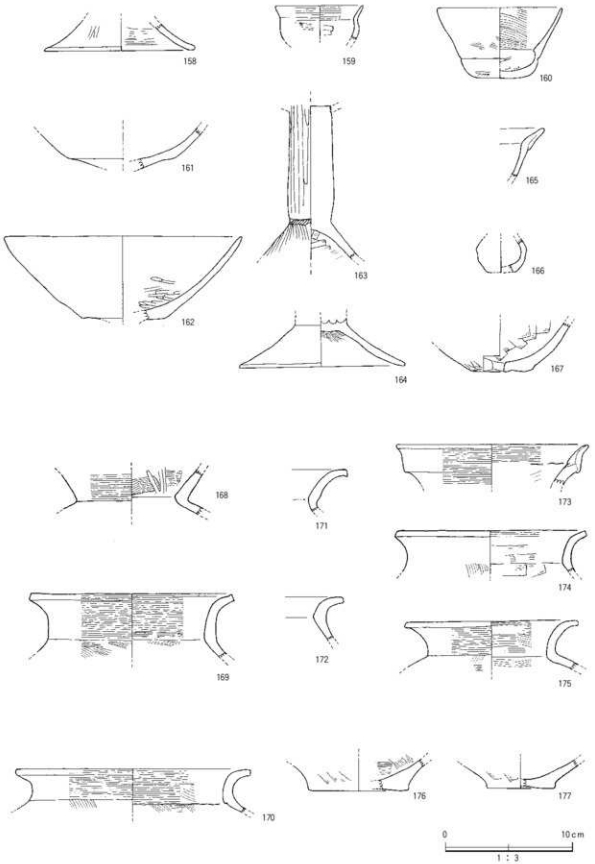
1．竪穴住居跡

ＳＴ201竪穴住居跡（第36図）

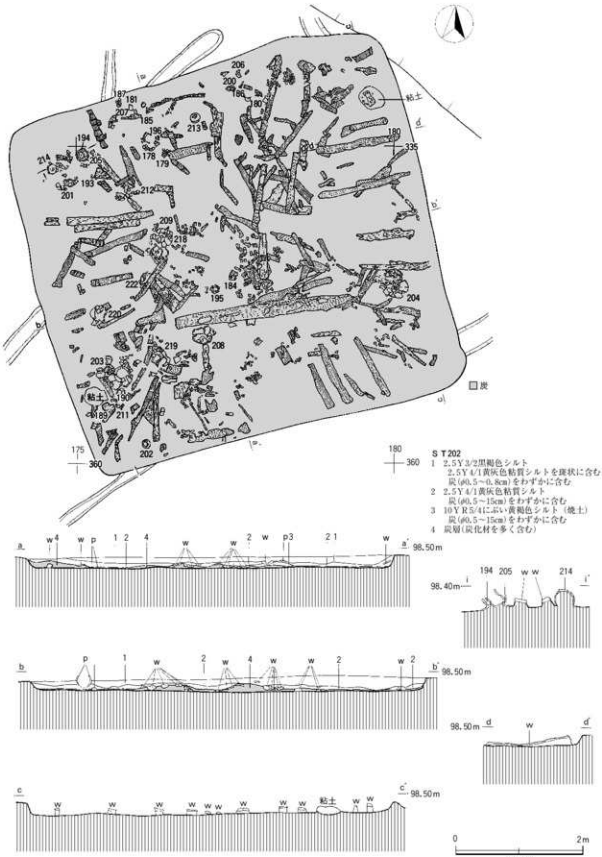
174・385～180・390区に所在する。上部が耕作土の土取りにより撹乱を受けていたが、撹乱



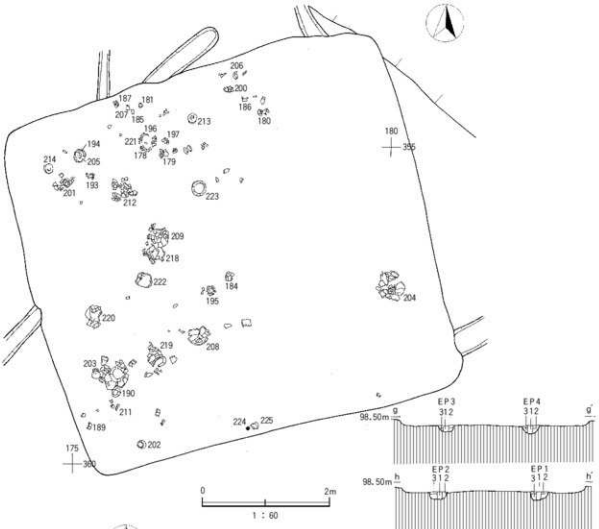
第36図　ＳＴ201竪穴住居跡

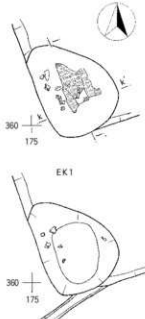


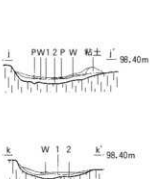
第37図　ＳＴ201竪穴住居跡出土遺物

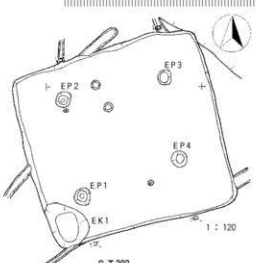


第38図　ＳＴ202竪穴住居跡（1）





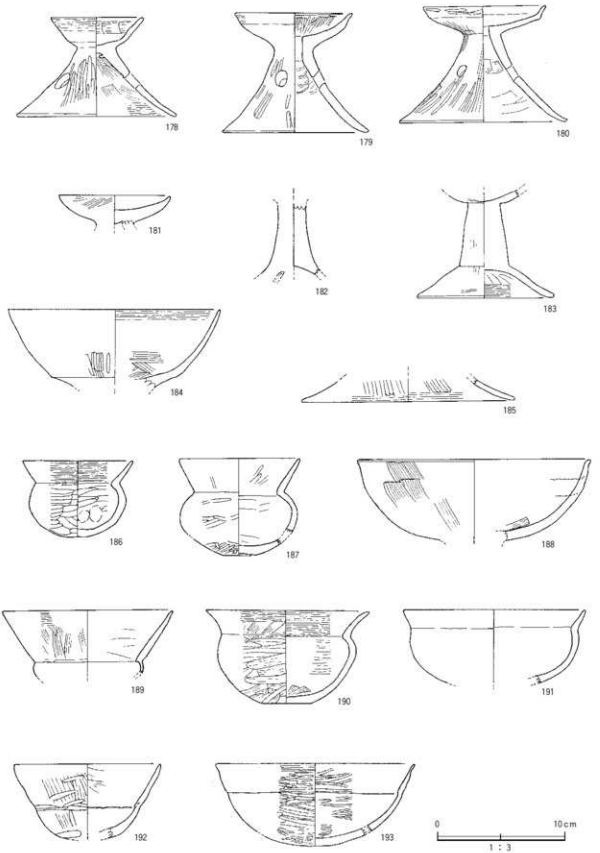




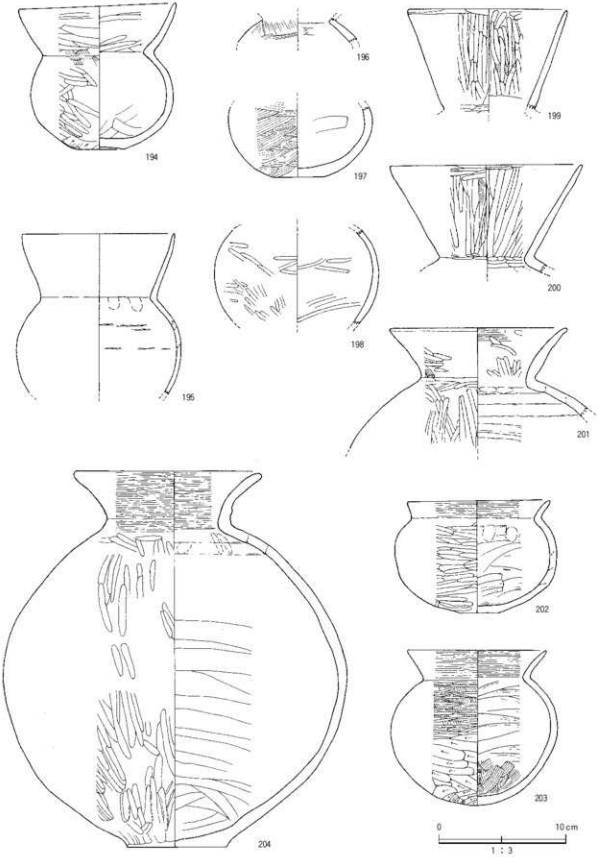
ＳＴ202
ＥＫ1
1　10ＹＲ4/1褐灰色粘質シルト
　　10ＹＲ3/1黒褐色粘質シルトを斑状に含む
　　炭粒(φ0.5cm)を含む
2　2.5Ｙ7/1灰白色粘土
3　2.5Ｙ3/1黒褐色粘質シルト
　　2.5Ｙ4/2暗灰黄色砂質シルトを斑状に含む
　　炭(φ0.5～1cm)を含む

ＳＴ202
ＥＰ1～ＥＰ4
1　2.5Ｙ3/1黒褐色粘質シルト
　　2.5Ｙ4/1黄灰色砂質シルトを粒で含む
　　炭化材ブロックを含む
2　2.5Ｙ4/1黄灰色粘質シルト
　　5Ｙ3/1オリーブ黒粘質シルト
3　5Ｙ3/1オリーブ黒粘質シルト
　　5Ｙ4/1灰色微砂を含む

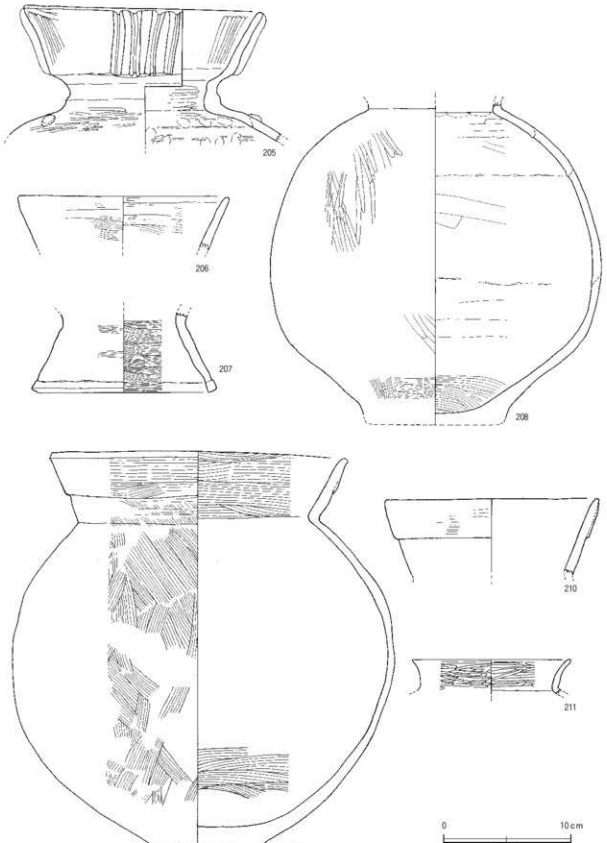
第39図　ＳＴ202竪穴住居跡（２）



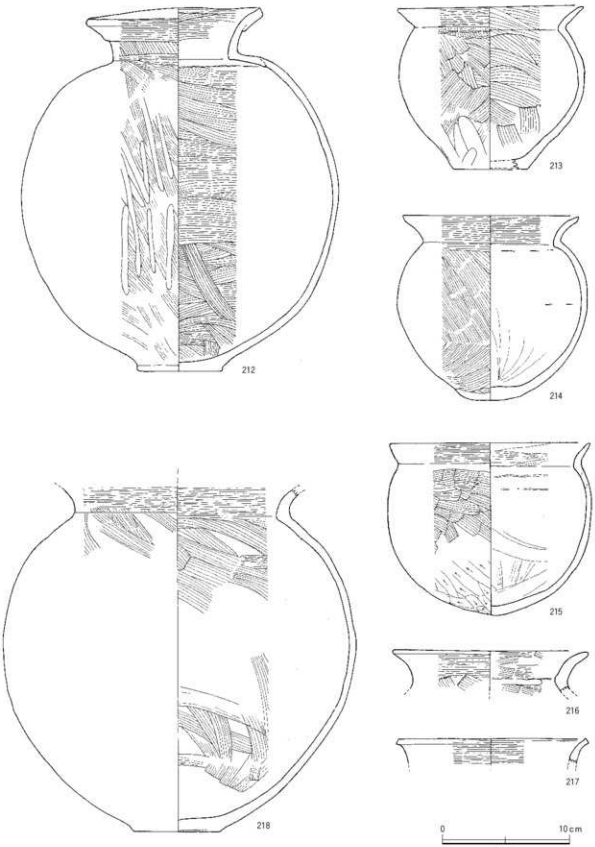
第40図　ＳＴ202竪穴住居跡出土遺物（１）



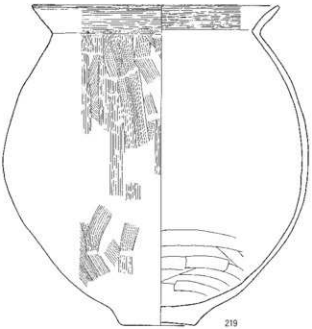
第41図　ＳＴ202竪穴住居跡出土遺物（２）

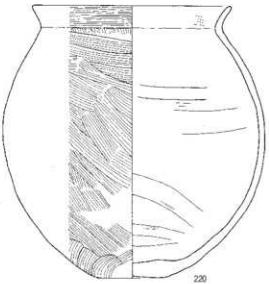


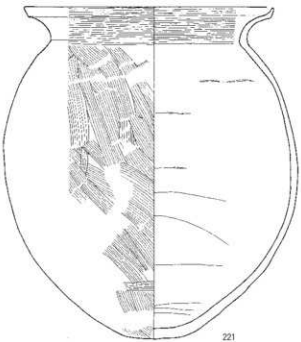
第42図　ＳＴ202竪穴住居跡出土遺物（３）

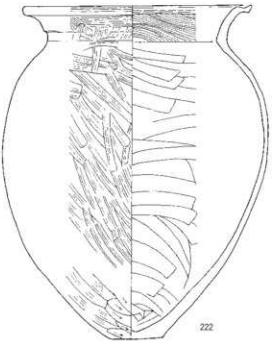


第43図　ＳＴ202竪穴住居跡出土遺物（４）



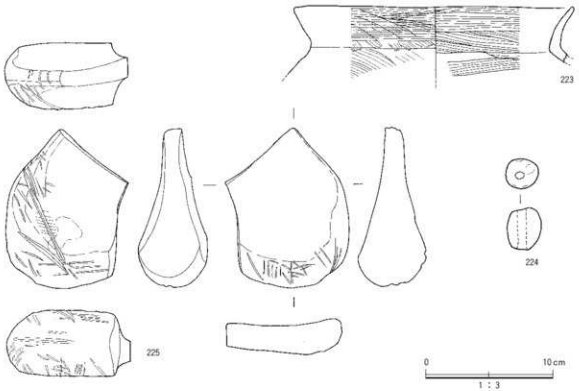






0　10cm
1：3

第44図　ＳＴ202竪穴住居跡出土遺物（５）



第45図　ＳＴ202竪穴住居跡出土遺物（６）

土を除去すると下から竪穴住居跡のプランが現れてきたものである。平面形は隅丸の方形を呈し、南部が調査区外のため中途までの検出であるが、北辺長から考えて、隠れているのは１ｍ前後ではないかと思われる。規模は南北長が不明であるが検出長で約４ｍ、東西軸は約５ｍを測る。未調査部分も合わせて８坪前後と推定される。主軸方向はＮ－16°30′－Ｅを示す。

覆土は床面の炭化物層を含めて９層である。第１層は撹乱された土である。壁は比較的急傾斜で立ち上がり、検出面からの深さは約45cmを測る。周溝、柱穴は見られない。床面には広範囲に炭が分布し、焼失家屋と考えられる。

出土遺物は、器台、高坏、壺、甕などの他、小型土器（166）や有孔鉢（167）などがある。

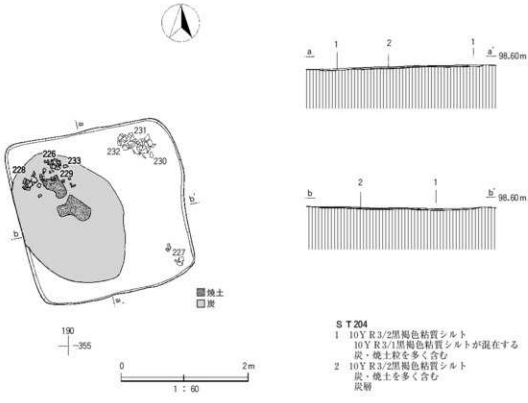
ＳＴ202竪穴住居跡（第38，39図）

174・353～181・360区に所在する。ＳＤ260溝跡の埋没後に構築されたものである。平面形はあまり歪みのない隅丸方形を呈する。規模は南北軸が5.75ｍ、東西軸は6.2ｍを測る。検出し得た中で最も大きな竪穴住居跡で、約11坪と群を抜いている。主軸方向はＮ－13°30′－Ｗを示す。覆土は炭層を含めて３層である。

炭が床全面を覆っており、梁や垂木といった建築部材の炭化した部分が遺っていた。梁は、遺存長で2.9ｍ、幅約20cmを測る。両端近くの２ヵ所にほぞ孔が認められる。垂木は放射状に遺存し、小屋組の落下によって割れた甕などが散乱している。

これら炭化部材の樹種同定を行ったところ、梁材はカバノキ科ハンノキ属、垂木材はモクセイ科トネリコ属であるとの結果を得た（付編参照）。

床面北東隅部と南西隅部に一塊の粘土が遺存していたが、用途は不明である。壁は比較的急



第46図　ＳＴ204竪穴住居跡

傾斜で立ち上がり、検出面からの深さは約25cmを測る。垂木の遺存状況から推察するに、住居の掘り込み面は、遺構検出面から５～10cmほど上であったのではないかと考えられる。四隅に柱穴をもち、これらを半截したところ、いずれの柱穴にも直径20cmほどの柱のアタリが認められた。

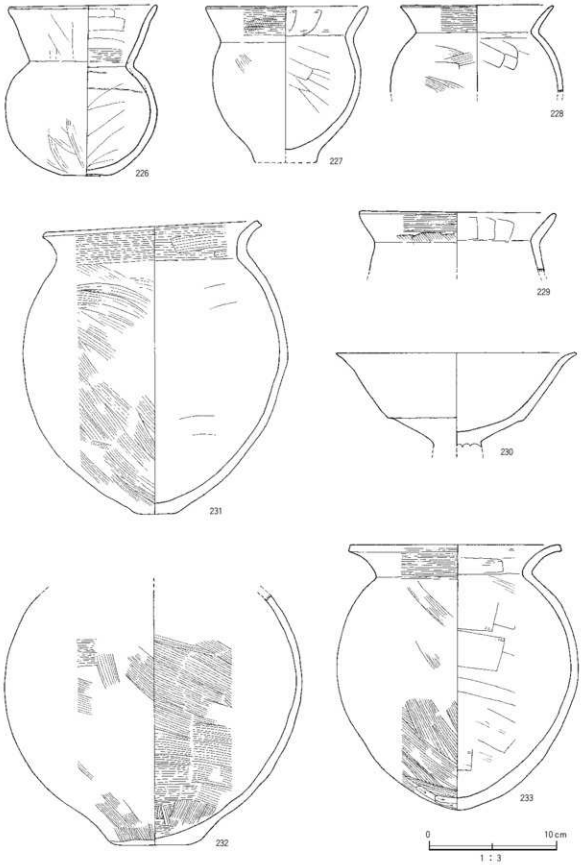
南西隅に貯蔵穴をもつ。壁面に密着する南北に長い楕形の平面形を持ち、深さは約15cmほどの丸底を呈する。長軸約160cm、短軸約120cmを測る。数点の土器の破片のほか、蓋と思われる炭化した板状の木質が認められた。

出土遺物は多く、１軒の家の生活状況がほぼ把握可能な状況である。口縁部に棒状浮文をもつ壺（205）を肩部の辺りで丁寧に割って整形し、器台として用いていた様子も見られた。その中には壺（174）が入れ子になって据えられていた。南辺ほぼ中央部は、遺物の遺存があまり見られないことから、出入り口であったのではないかと考えられる。またこの部分から土玉が出土しており、壁の立ち上がり際に在ったことから、たまたまそこに遺されたと考えるより、住人の何らかの精神的働きを想定しても良いのではないかと考えられる。

ＳＴ204竪穴住居跡（第46図）

189・351～192・354区に位置する。平面形はほとんど歪みのない隅丸方形であるが、北東部がやや膨らみをもつ。規模は南北軸が2.5m、東西軸は2.6mを測る。検出し得た竪穴住居跡でも小さな部類に入り、約２坪である。主軸方向はＮ－12°30′－Ｗを示す。

覆土は２層である。壁は緩く立ち上がり、非常に浅い住居で、検出面からの深さは３cmほど



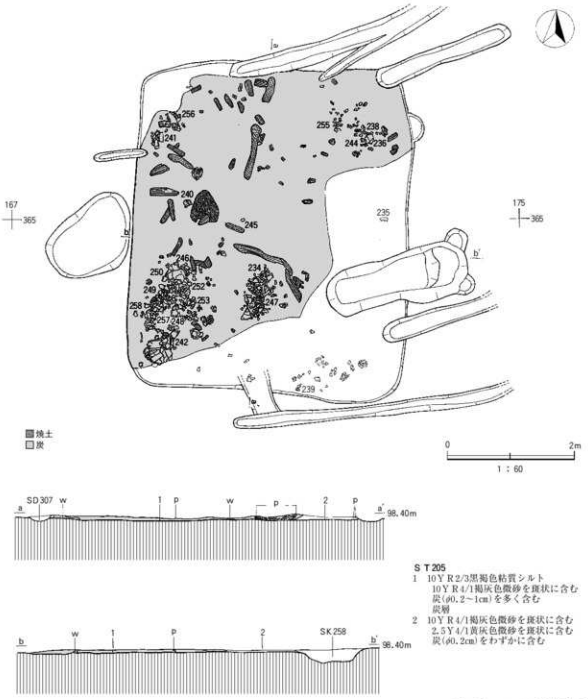
第47図　ＳＴ204竪穴住居跡出土遺物

である。床面西半部に炭が分布し、焼失家屋と考えられる。炭を除去したところ、床面に地床炉と思われる被熱痕跡が認められた。周溝、柱穴は認められない。

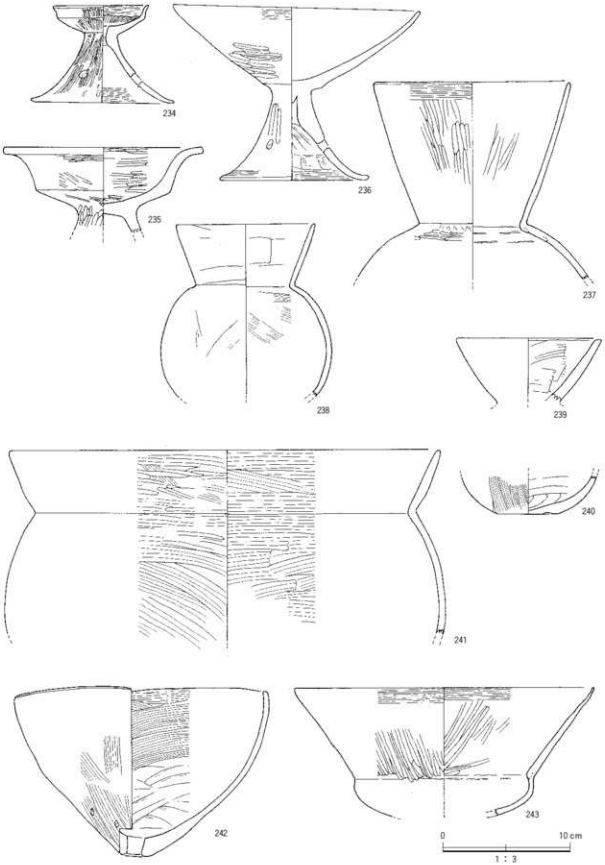
出土遺物は有稜高坏、頸部の締まりが緩い直口壺、甕などである。

ＳＴ205竪穴住居跡（第48図）

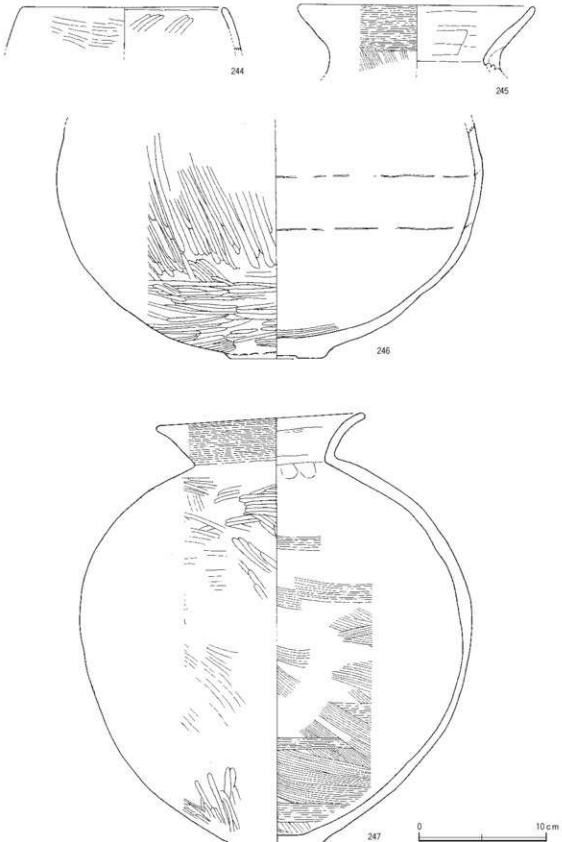
169・362～173・368区に位置する。平面形は南北に長い隅丸方形であるが、北東部で僅かに摘み出されたような形状を呈する。規模は南北軸が5.15m、東西軸は4.4mを測る。検出し得た住居の中では標準的な大きさで、約７坪ある。主軸方向はＮ－３°30′－Ｅを示す。



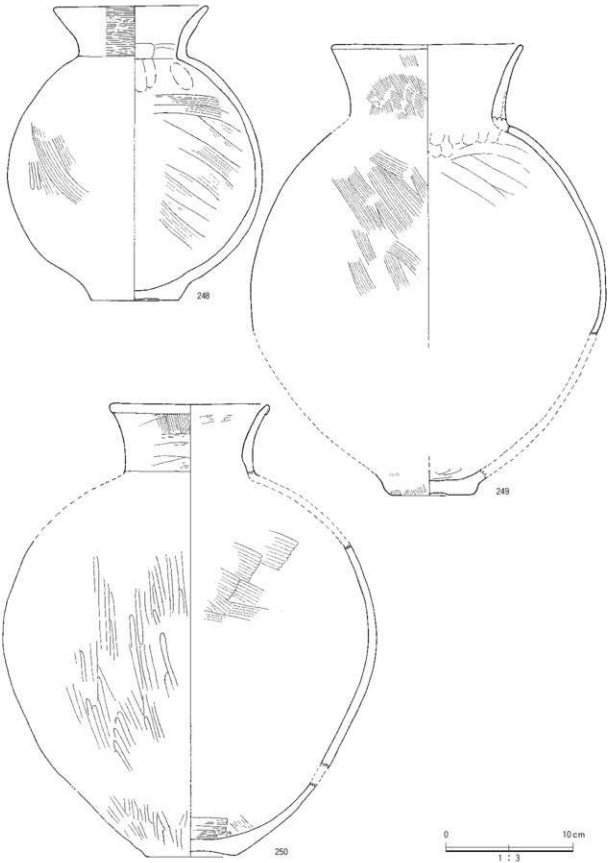
第48図　ＳＴ205竪穴住居跡



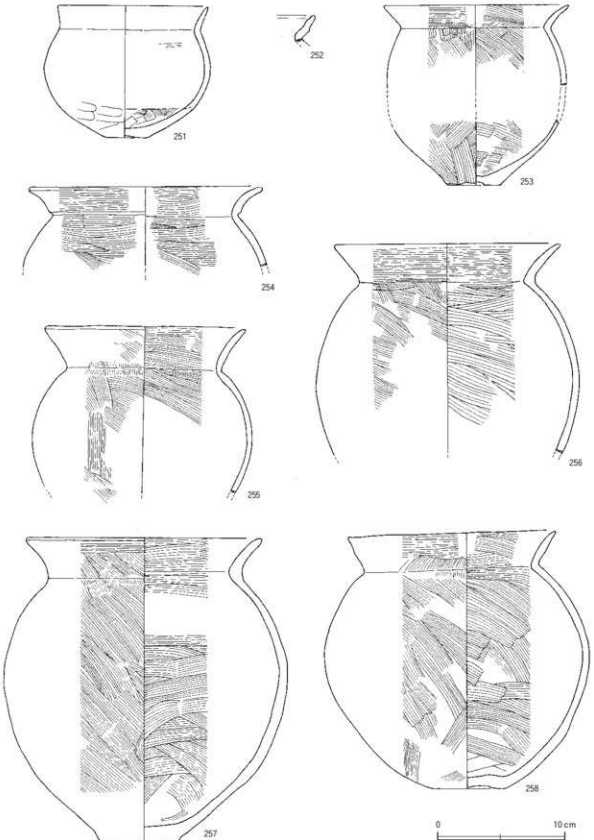
第49図　ＳＴ205竪穴住居跡出土遺物（１）



第50図　ＳＴ205竪穴住居跡出土遺物（２）



第51図　ＳＴ205竪穴住居跡出土遺物（３）

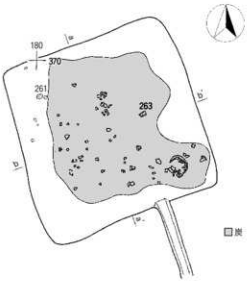


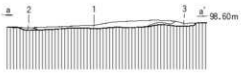
第52図　ＳＴ205竪穴住居跡出土遺物（４）

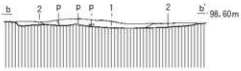
覆土は２層である。壁は緩く立ち上がり、検出面からの深さは約５cmを測る。対角線の北西部にかけて炭と炭化材が遺存し、焼失家屋と考えられる。床面中央北西寄りに地床炉と思われる被熱痕跡が認められる。周溝、柱穴は認められない。出土遺物は割合豊富で、器台、高坏、鉢、有孔鉢、壺、甕等が認められる。

ＳＴ206竪穴住居跡（第53図）

170・370～183・373区に位置する。ＳＤ261溝跡の埋没後に構築されたものである。平面形はあまり歪みのない方形であるが、南西隅部を僅かに摘み出したような形状を呈する。規模は

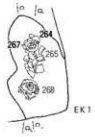


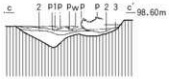


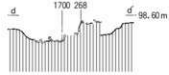


ＳＴ206
1　10ＹＲ5/2灰黄褐色シルト
　　10ＹＲ5/2灰黄褐色砂質シルトを粒・ブロックで含む
　　炭(φ0.2～1cm)を多く含む
2　10ＹＲ5/1褐灰色砂質シルト
3　2.5Ｙ4/1黄灰色砂質シルト
　　10ＹＲ4/2灰黄褐色シルトを粒で含む

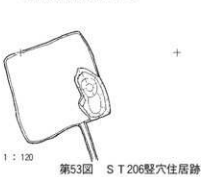
0　　2m
1：60





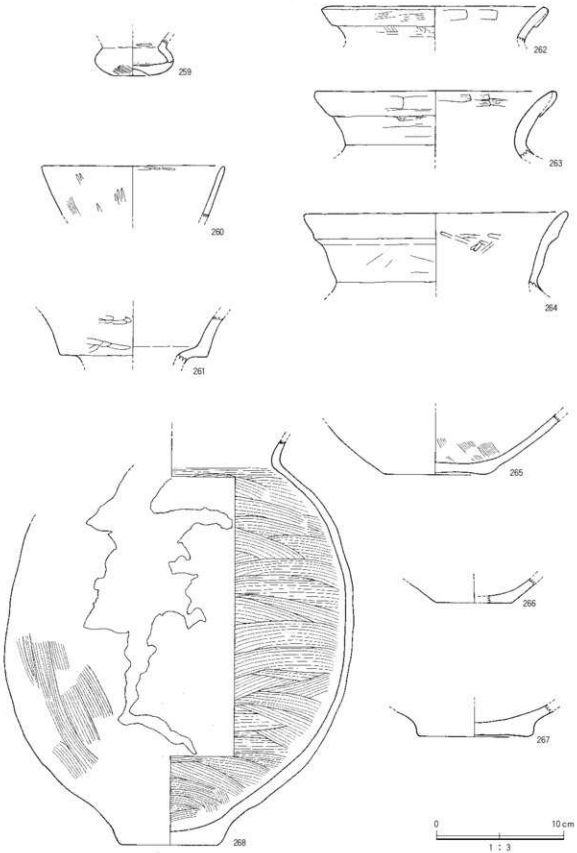


ＳＴ206
ＥＫ1
1　2.5Ｙ3/2黒褐色粘質シルト
　　10ＹＲ4/1褐灰色粘質シルトを斑状に含む
　　下面に炭、炭化材、土器片を含む
2　10ＹＲ4/1褐灰色砂質シルト
　　10ＹＲ5/1褐灰色粗砂を含む
3　5Ｙ4/1灰色砂質シルト
　　5Ｙ5/1灰色粗砂が混在する

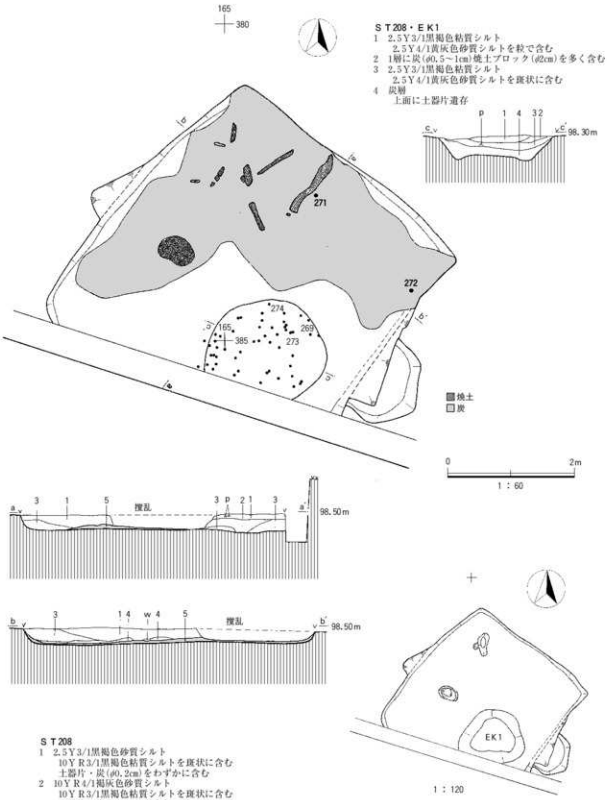


1：120

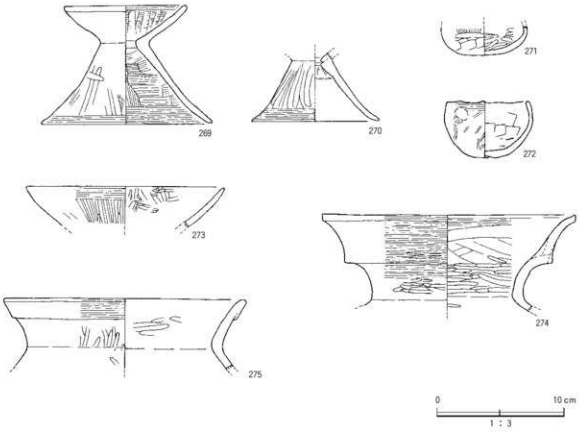
第53図　ＳＴ206竪穴住居跡



第54図　ＳＴ206竪穴住居跡出土遺物



第55図　ＳＴ208竪穴住居跡



第56図　ＳＴ208竪穴住居跡出土遺物

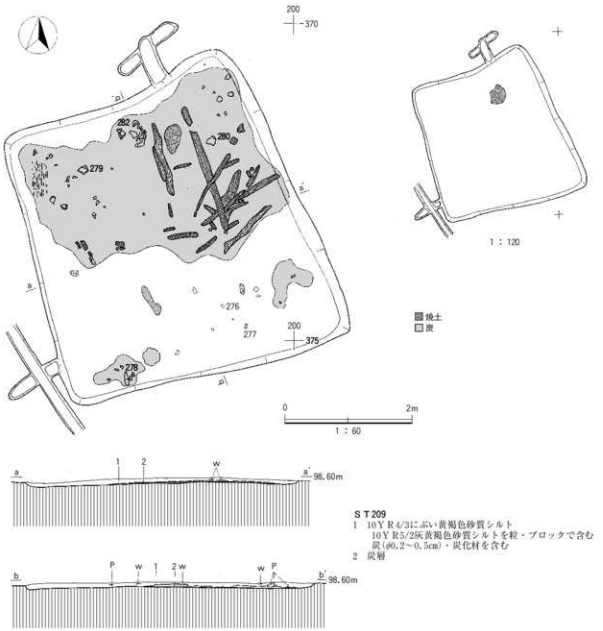
南北軸が2.85m、東西軸は2.75mを測る。規模の小さいグループに属し、約2.5坪である。主軸方向はＮ－12°30′－Ｗを示す。覆土は３層である。壁は緩く立ち上がり、検出面からの深さは約５cmを測る。床面中央部に炭と土器片が分布し、焼失家屋と考えられる。

南東隅部に貯蔵穴をもつ。長軸1.6m、短軸１mほどの不正形を呈し、底部は北側に二段に深くなっている。貯蔵穴内には甕などの土器が遺存していたが、その内の１個体は、体部が床面から突出した状態で検出されており、貯蔵穴には、蓋はなかったものと考えられる。その突出した甕（268）は、土圧によって変形し、接合しても割れ目は残ったままだった。

出土遺物は小形丸底土器や壺、甕などがある。

ＳＴ208竪穴住居跡（第55図）

162・381～169・386区に位置する。ＳＴ201と同様土取りのために撹乱を受けていたが、撹乱土を除去すると竪穴住居跡のプランが現れた。南辺部が調査区の外に位置しているが、南西隅が検出できたので規模が判明した。平面形は、遺存部から南辺がやや開く台形状を呈する方形と考えられる。規模は南北軸が4.8m、東西軸は4.5mを測る。標準的な大きさで、約6.5坪ある。主軸方向はＮ－39°－Ｅで、覆土は５層である。壁は角度をもって立ち上がり、検出面からの深さは約25cmを測る。北半部に炭と炭化した部材が遺存し、焼失家屋と考えられる。中央西寄りに地床炉と考えられる被熱痕跡が認められる。被熱痕跡には棒状の物体を差し込んだと思われるような孔が２つ開いており、通常の炉とは異なる機能を持っていたのではないかと

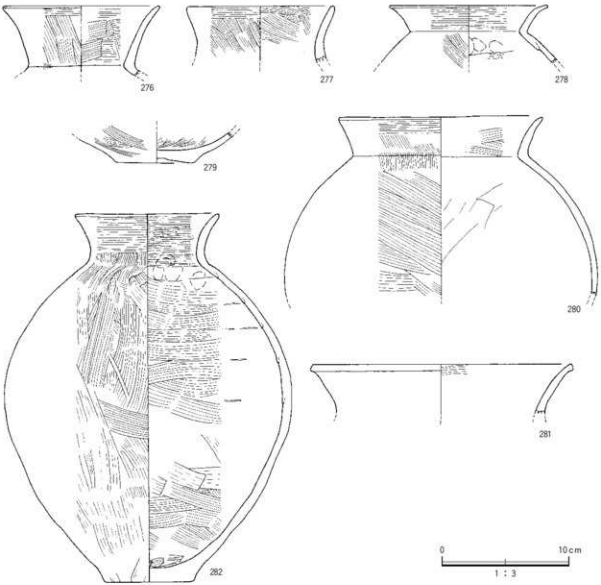


第57図　ＳＴ209竪穴住居跡

考えられる。南東隅部に直径２m弱の屋内土坑が認められた。覆土は黒褐色の粘質シルトで、土器片が含まれる。前述の通常とは異なる炉や屋内土坑などを考え合わせると、あるいは工房のような施設を考えても良いのではないだろうか。出土遺物は器台や高坏、壺、小型土器などである。

ＳＴ209竪穴住居跡（第57図）

195・370～201・376区に位置する。平面形は南辺がやや開く台形状を呈し、北東隅部が少し摘み出されたような形状を呈する。規模は南北軸が4.55m、東西軸は4.4mを測る。平均的な大きさで約６坪ある。主軸方向はＮ－18°20′－Ｗを示す。覆土は２層である。壁は緩く立ち上がり、検出面からの深さは10cmを測る。南西隅部を除き、炭や炭化部材が遺存し、焼失家屋



第58図　ＳＴ209竪穴住居跡出土遺物

と考えられる。床面には、北東隅部寄りに地床炉と考えられる被熱痕跡が認められる。出土遺物は壺、甕などである。

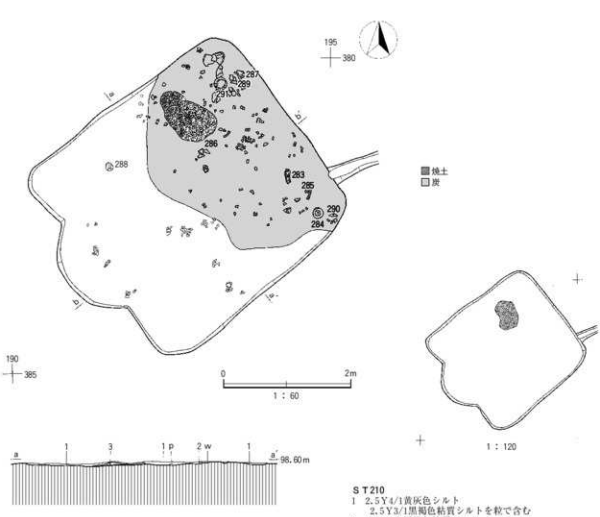
ＳＴ210竪穴住居跡（第59図）

190・380～195・385区に位置する。平面形は隅丸方形であるが、西辺中央部が丸く張り出している。規模は南北軸が3.7m、東西軸は3.9mを測る。小さなグループに属し約4.5坪ある。主軸方向はＮ－36°30′－Ｗを示す。覆土は２層である。壁は緩く立ち上がり、検出面からの深さは５cmを測る。周溝、柱穴は認められない。

床面東半部を炭が覆い、土器片が遺存する。焼失家屋と考えられる。床面北辺近くに地床炉と思われる被熱痕跡が認められる。出土遺物は鉢、壺などである。

ＳＴ211竪穴住居跡（第61,62図）

193・383～200・390区に位置する。プラン確認時は全面を灰黄褐色シルトで覆われており、

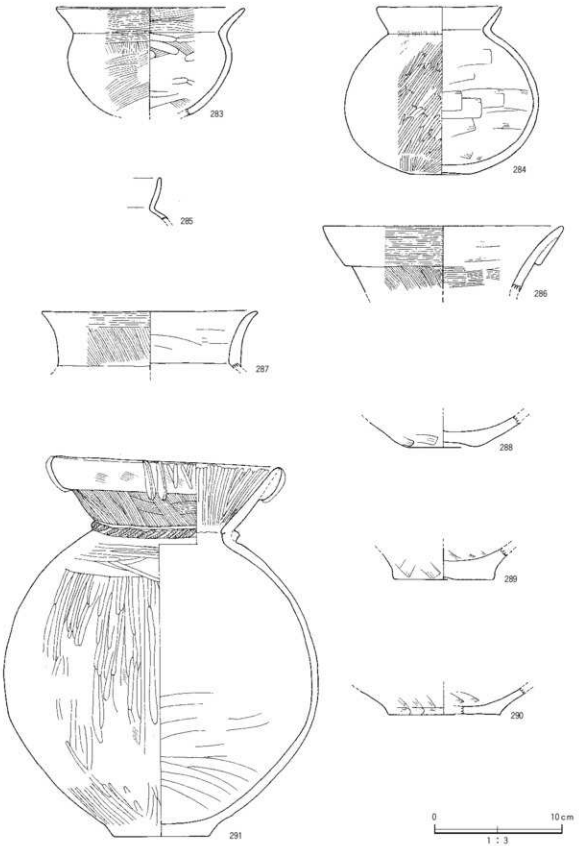


第59図　ＳＴ210竪穴住居跡

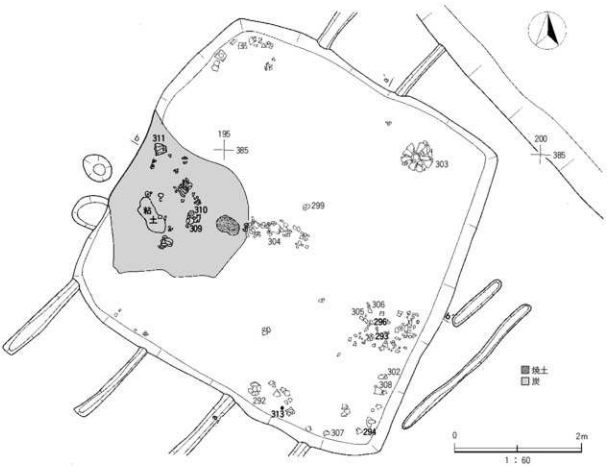
それを取り除いて住居跡を検出した。平面形は南辺がやや開く台形状を呈する。規模は南北軸が5.5m、東西軸は5.35mを測る。ＳＴ202に次いで大きい竪穴住居跡で、約９坪ある。主軸方向はＮ－26°30′－Ｅを示す。覆土は炭層を含めて３層である。

西辺中央部の床面に炭が遺存している。床面中央やや西寄りに地床炉と思われる被熱痕跡が認められる。壁はやや開き気味に立ち上がり、検出面からの深さは最も深いところで25cmを測る。壁面から１mほど内側に４本の主柱穴が認められた。直径は約55cm、深さは25～35cmで、堀方の底に柱のアタリが認められた。

南東隅に南北1.3m、東西1.1mほどの方形の貯蔵穴があり、上層に蓋と思われる炭化した板材が認められた。出土遺物は各隅部や地床炉の周囲に遺っていた。装飾器台をはじめ、高坏、鉢、壺、甕などのほか、管玉の原材料と考えられる荒割りされた波璃質流紋岩が出土している。



第60図　ＳＴ210竪穴住居跡出土遺物

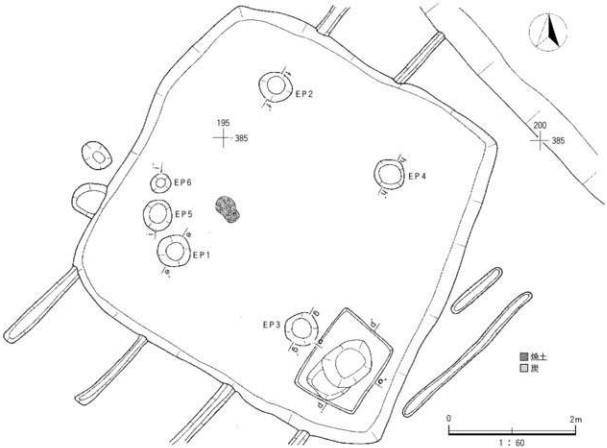


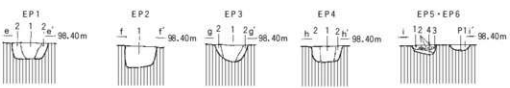
第61図　ＳＴ211竪穴住居跡（１）

ＳＴ212竪穴住居跡（第67図）

177・377～182・382区に位置する。平面形はほぼ歪みのない方形を呈する。南西隅と南東隅に、壁面からはみ出して設けられた柱穴が付属する。規模は南北軸が4.5m、東西軸は4.2mを測る。平均的な大きさで、約5.5坪ある。主軸方向はＮ－14°30′－Ｅを示す。

覆土は１層である。壁は緩く立ち上がり、検出面からの深さは10cm内外である。主柱穴は認められない。床面に炭が遺り、焼失家屋と考えられる。中央北側と北東隅部に被熱痕跡が認められる。このうち、中央北壁寄りの被熱痕跡は、通常の地床炉ではなく、棒状の物体を差し込んだような孔が認められ、南に張り出した柱穴と合わせて、前述ＳＴ208のような工房的な機能を持った施設と考えられる。





EP1
1　2.5Y3/1黒褐色砂質シルト
　2.5Y4/1黄灰色微砂
　炭(φ0.1cm)をわずかに含む
2　2.5Y4/1黄灰色シルト
　2.5Y5/1黄灰色微砂をブロックで含む

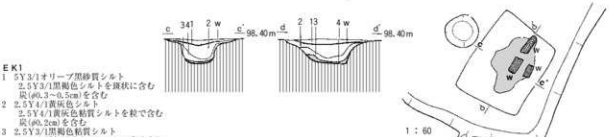
EP2
1　2.5Y3/1オリーブ黒砂質シルト
　炭(φ0.1cm)をわずかに含む

EP3
1　2.5Y3/1黒褐色砂質シルト
　炭(φ0.3cm)をわずかに含む
2　2.5Y3/1黒褐色砂質シルト
　2.5Y4/1黄灰色砂質シルトを斑状に含む

EP4
1　2.5Y3/1黒褐色砂質シルト
　炭(φ0.1cm)を含む
2　2.5Y3/1黒褐色砂質シルト
　2.5Y4/1黄灰色砂質シルトを粒で含む

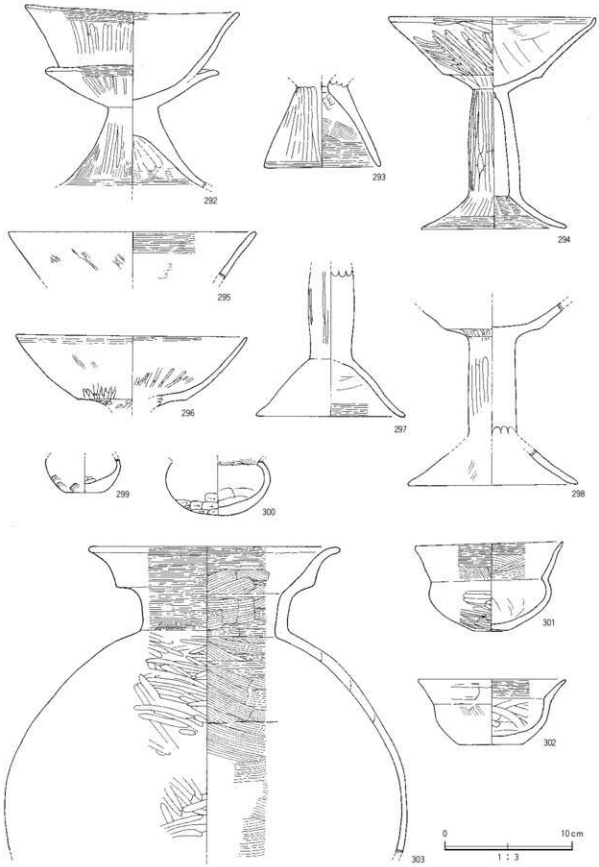
EP5
1　5Y3/1オリーブ黒砂質シルト
　7.5Y4/1灰色砂質シルトを粒で含む
2　炭
3　7.5Y6/1灰色粘土
4　7.5Y3/1オリーブ黒砂質シルト

EP6
1　7.5Y3/1オリーブ黒砂質シルト
　炭(φ0.5～1cm)を含む土器片を含む

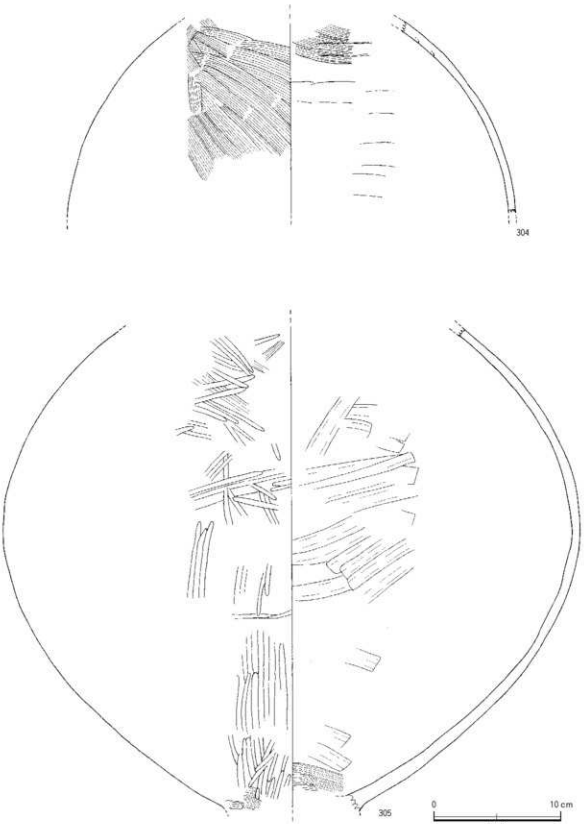


EK1
1　5Y3/1オリーブ黒砂質シルト
　2.5Y3/1黒褐色シルトを斑状に含む
　炭(φ0.3～0.5cm)を含む
2　2.5Y4/1黄灰色シルト
　2.5Y4/1黄灰色粘質シルトを粒で含む
　炭(φ0.2cm)を含む
3　2.5Y3/1黒褐色粘質シルト
　5Y4/1灰色細砂をブロックで多く含む
4　5Y3/1オリーブ黒砂質シルト
　(炭を多く含む)

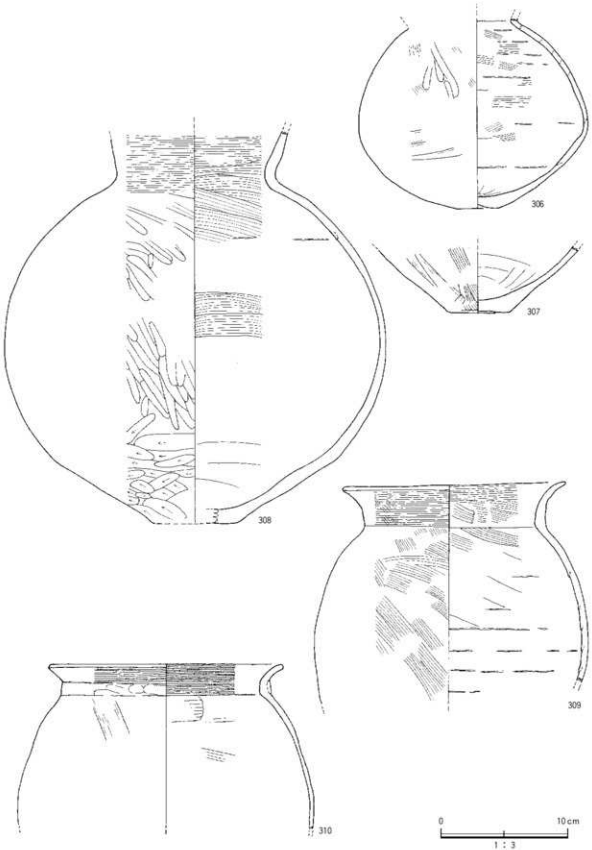
第62図　ＳＴ211竪穴住居跡（２）



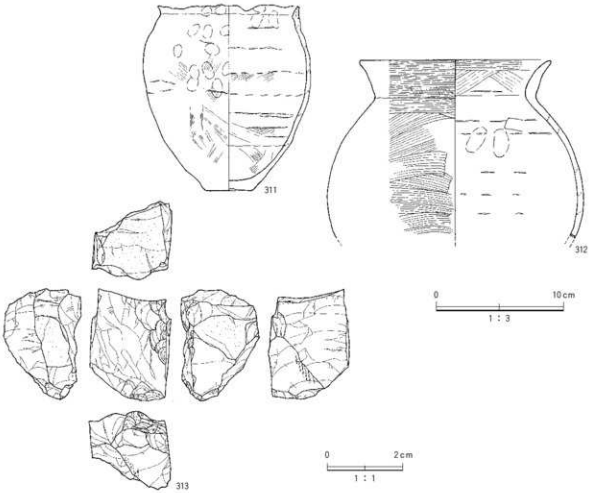
第63図　ＳＴ211竪穴住居跡出土遺物（１）



第64図　ＳＴ211竪穴住居跡出土遺物（２）



第65図　ＳＴ211竪穴住居跡出土遺物（３）



第66図　ＳＴ211竪穴住居跡出土遺物（４）

出土遺物は器台や壺、甕のほか、管玉と土製の紡錘車が出土している。

ＳＴ213竪穴住居跡（第70図）

179・359～181・362区に位置する。平面形は北西隅が摘み出されたような方形を呈する。規模は南北軸が1.9m、東西軸は2.3mを測る。この度の調査範囲では最も小さなもので、1.5坪ほどである。主軸方向はＮ－６°－Ｅを示す。覆土は浅い１層である。

プラン検出時にグライ化した遺構面を削ったため、覆土の中央部が僅かに盛り上がった状態になってしまった。立ち上がりは失われており、床面は遺構検出面とほぼ同じレベルである。

柱穴は認められない。床面中央部に炭が遺り、焼失家屋と考えられる。床面中央やや北寄りに被熱痕跡が認められ、地床炉と考えられる。

２．土　　坑

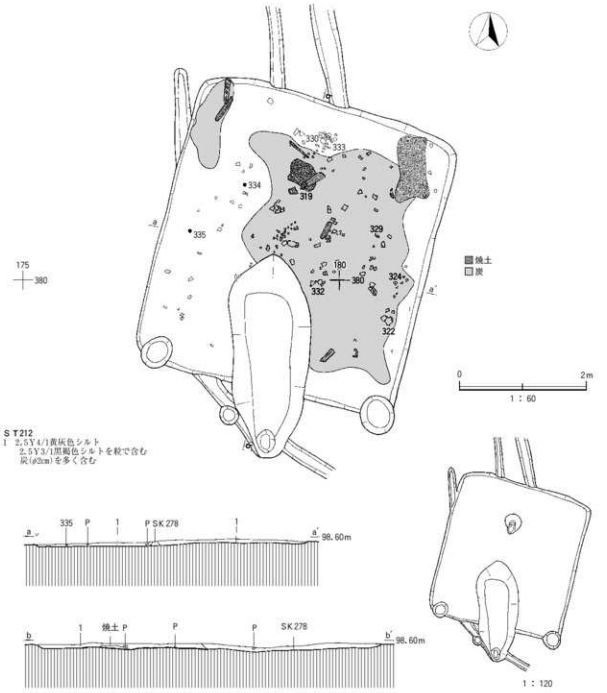
ＳＫ253土坑（第71図）

200・344～201・345区に所在する。平面形は円形を呈する。長軸1.1m、短軸１mを測る。底部は丸く、壁面との境界が明瞭でない。遺構検出面からの深さは約35cmで、覆土は１層であ

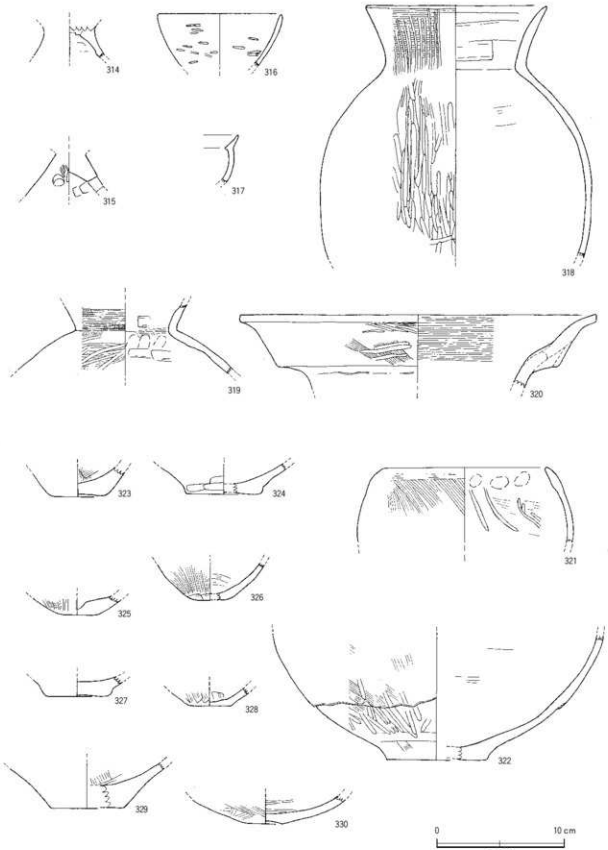
る。覆土中から直口壺の体部（336）が出土している。

ＳＫ255土坑（第71図）

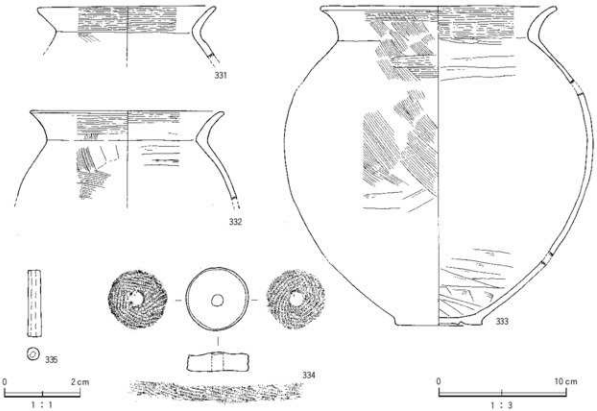
185・366～187・368区に所在する。平面形は南北に長い楕円形を呈する。長軸約２ｍ、短軸1.3ｍを測る。底面は浅い皿状を呈し、遺構検出面からの深さは約10cmを測る。覆土は４層で、最下層の炭層には土器片が含まれる。



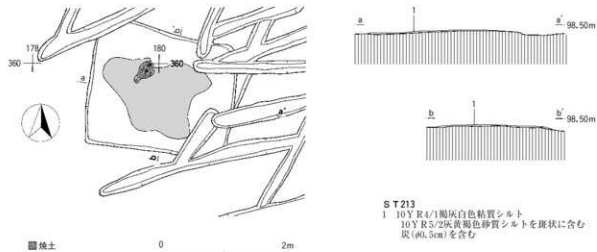
第67図　ＳＴ212竪穴住居跡



第68図　ＳＴ212竪穴住居跡出土遺物（１）



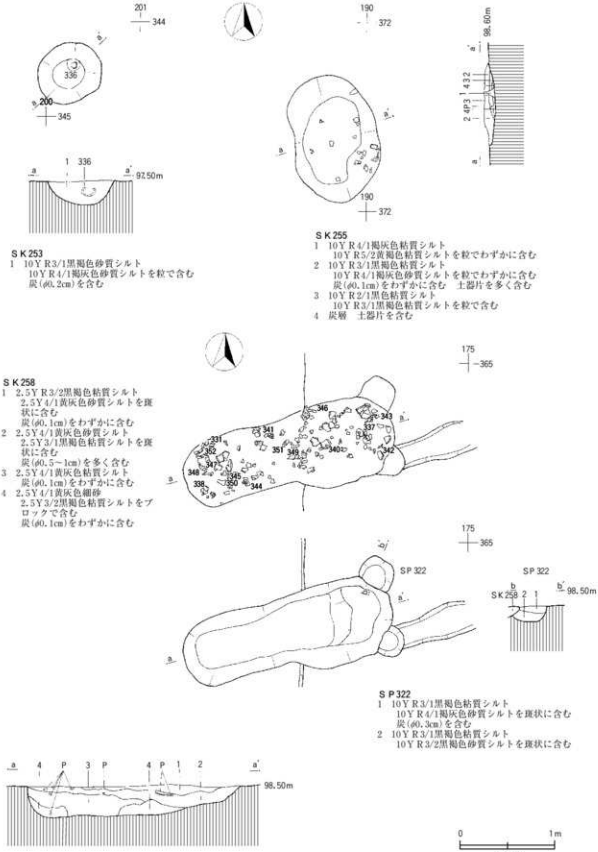
第69図　ＳＴ212竪穴住居跡出土遺物（２）



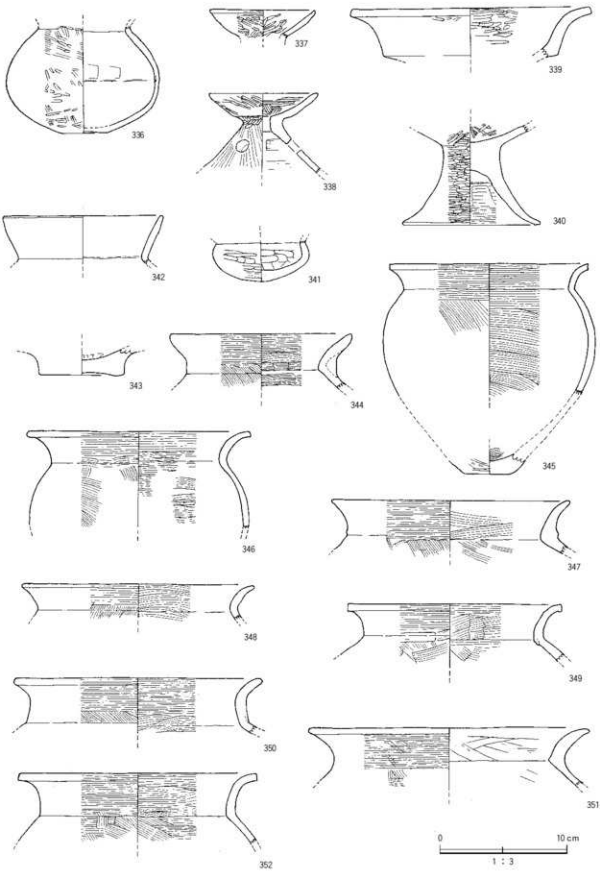
第70図　ＳＴ213竪穴住居跡

ＳＫ258土坑（第71図）

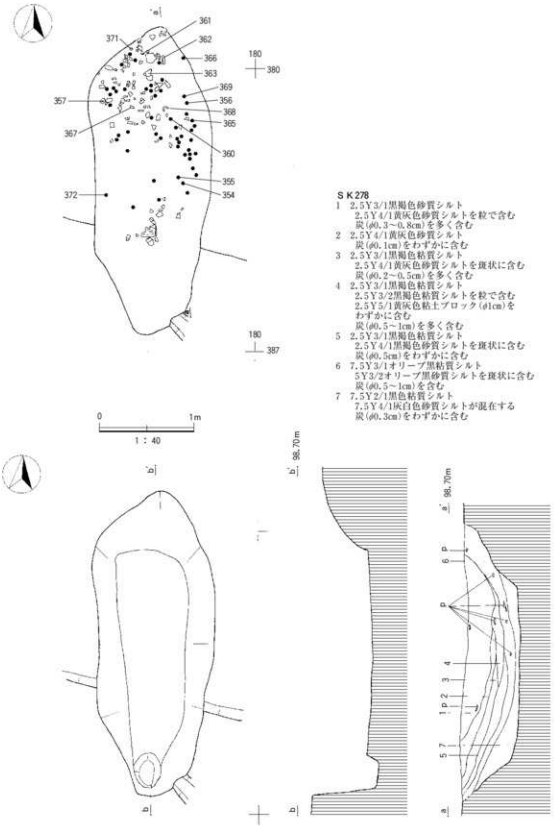
172・365～175・367区に所在する。ＳＴ205竪穴住居跡の埋没後に構築されたものである。東側でＳＰ322などのピットを切っている。平面形は、ほぼ東西に長い長円形を呈する。長軸3.4m、短軸１～1.3mを測る。底面は東寄りで段を形成し、西に深くなる。底面形状は緩い丸底を呈する。遺構検出面からの深さは浅いところで約20cm、深いところで約50cmを測る。覆土



第71図　ＳＫ253・255・258土坑



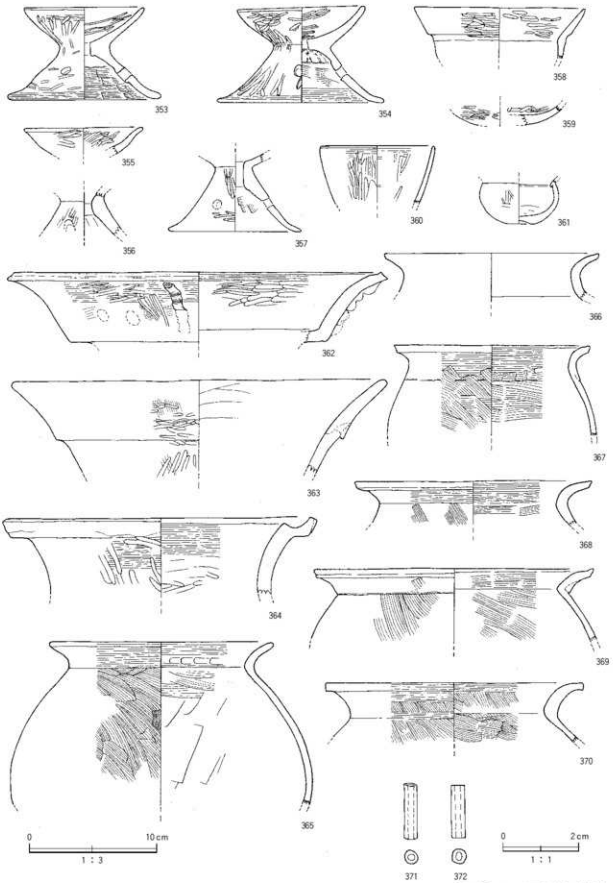
第72図　ＳＫ253・258土坑出土遺物



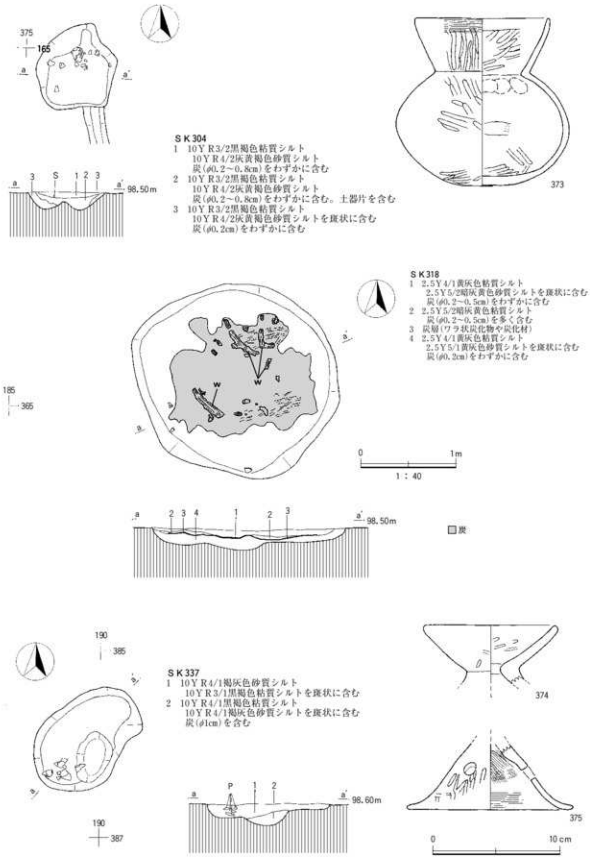
ＳＫ278

1　2.5Y3/1黒褐色砂質シルト
　　2.5Y4/1黄灰色砂質シルトを粒で含む
　　炭(φ0.3～0.8cm)を多く含む
2　2.5Y4/1黄灰色砂質シルト
　　炭(φ0.1cm)をわずかに含む
3　2.5Y3/1黒褐色粘質シルト
　　2.5Y4/1黄灰色砂質シルトを斑状に含む
　　炭(φ0.2～0.5cm)を多く含む
4　2.5Y3/1黒褐色粘質シルト
　　2.5Y3/2黒褐色粘質シルトを粒で含む
　　2.5Y5/1黄灰色粘土ブロック(φ1cm)を
　　わずかに含む
　　炭(φ0.5～1cm)を多く含む
5　2.5Y3/1黒褐色粘質シルト
　　2.5Y4/1黒褐色砂質シルトを斑状に含む
　　炭(φ0.5cm)をわずかに含む
6　7.5Y3/1オリーブ黒粘質シルト
　　5Y3/2オリーブ黒砂質シルトを斑状に含む
　　炭(φ0.5～1cm)を含む
7　7.5Y2/1黒色粘質シルト
　　7.5Y4/1灰白色砂質シルトが混在する
　　炭(φ0.3cm)をわずかに含む

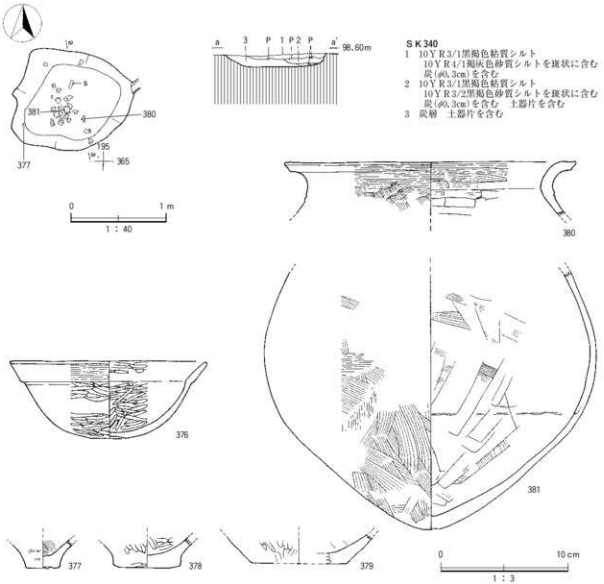
第73図　ＳＫ278土坑



第74図　ＳＫ278土坑出土遺物



第75図　S K 304・318・337土坑及び同出土遺物



第76図　ＳＫ340土坑及び同出土遺物

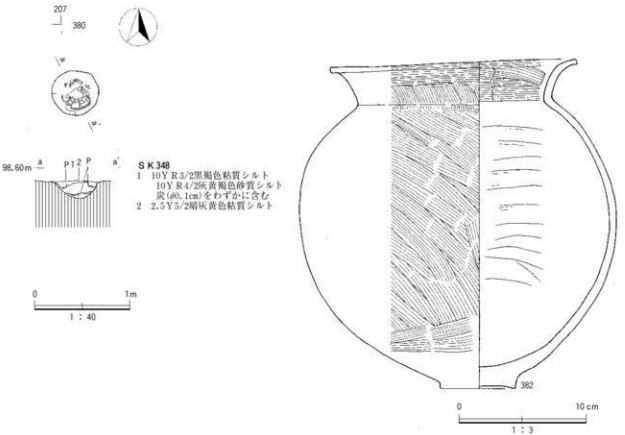
は４層で、覆土中に土器片を多く含む。出土遺物は器台、高坏、鉢、壺、甕などがある。

ＳＫ278土坑（第73図）

178・379～180・383区に所在する。ＳＴ212竪穴住居跡の埋没後に構築されたものである。平面形は南北に長い楕円状を呈する。長軸4.9m、短軸1.8mを測る。底面は平坦であるが、南端の壁面に接して、南北55cm、東西44cmのピットがある。このピットの機能は不明である。遺構検出面からの深さは約80cmを測る。覆土は７層で、覆土中に土器片を多く含む。出土遺物は器台、鉢、壺甕などのほか、管玉が２点出土している。

ＳＫ304土坑（第75図）

164・374～166・375区に所在する。平面形は円形と方形を融合させたような不整形を呈し、僅かに南北が長い。長軸1.3m、短軸1.2mを測る。底面は凹凸があり、丸底を２つ連ねたような形状を呈する。遺構検出面からの深さは約30cmを測る。覆土は３層で、覆土中から壺(373)



第77図　ＳＫ348土坑及び同出土遺物

が出土している。

ＳＫ318土坑（第75図）

186・363～189・366区に所在する。ＳＤ260溝跡の埋没後に構築されたものである。平面形は幾分南北に長い円形を呈する。長軸3.3m、短軸3.1mを測る。底面は平坦であるが幾分起伏が認められる。遺構検出面からの深さは最深部で約30cmを測る。覆土は炭化物層を含めて４層である。中央部に炭層があり、炭化部材やワラ状炭化物が遺っていた。

出土遺物は破片のみで、図化し得たものはない。

ＳＫ337土坑（第75図）

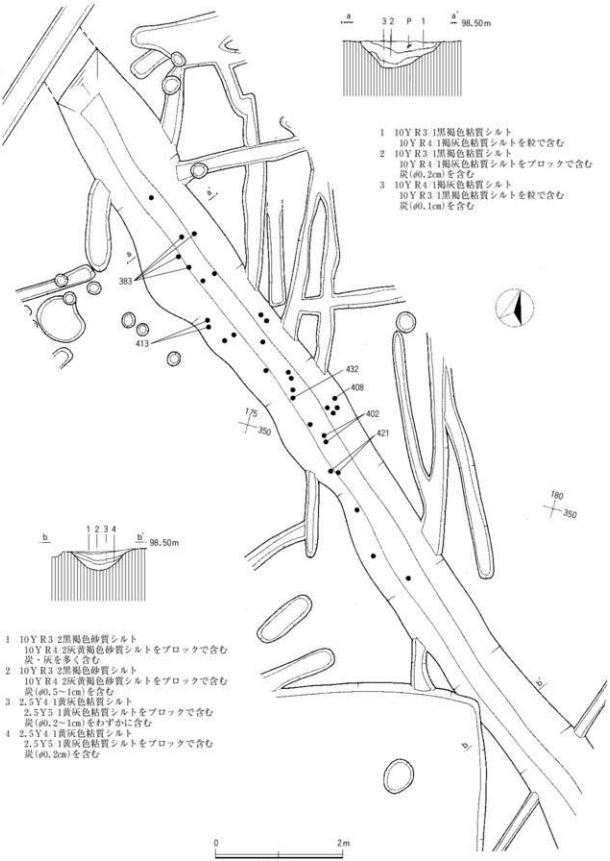
189・385～190・387区に所在する。平面形は北東から南西方向に長い楕円形を呈する。長軸２m、短軸1.3mを測る。底面は南西に深くほぼ平坦であるが、南側壁に接して長軸80cm、短軸50cmほどの窪みが認められる。遺構検出面からの深さは約20cmを測るが、窪みの底部までの深さは35cmほどある。覆土は２層で、覆土中から器台が出土している。

ＳＫ340土坑（第76図）

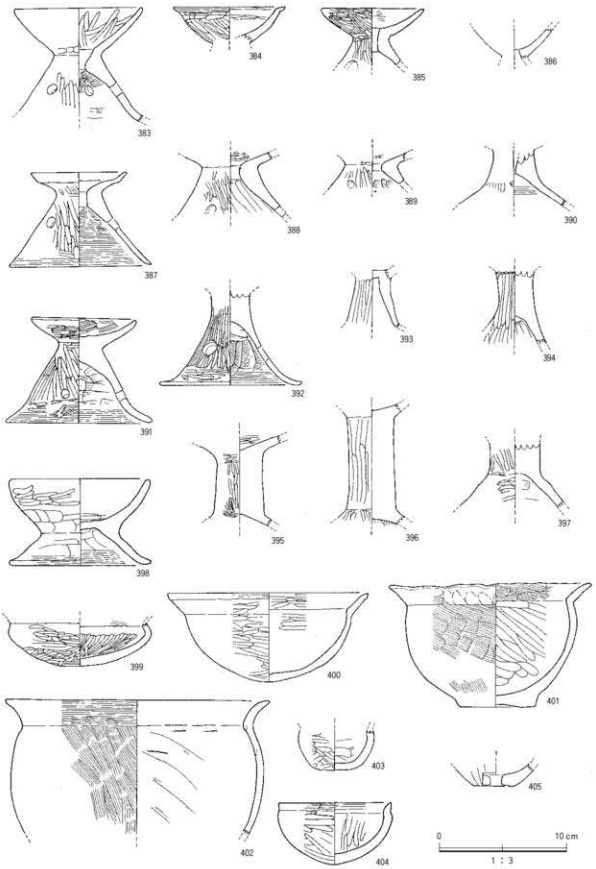
193・363～196・365区に所在する。平面形は、方形と円形を融合させたような不整形を呈する。東西軸、南北軸がともに1.7mを測る。底面は平坦で緩く立ち上がる。遺構検出面からの深さは約20cmを測る。覆土は３層で、覆土中に土器片を含む。出土遺物は鉢、甕、壺の底部などがある。

ＳＤ260（東端）
1　7.5ＹＲ3/1黒褐色砂質シルト
　10ＹＲ3/2黒褐色粘質シルトを斑状にわずかに含む
　10ＹＲ4/1褐灰色粘質シルトを粒で含む
2　10ＹＲ4/1褐灰色粘質シルト
　10ＹＲ3/2黒褐色粘質シルト粒をわずかに含む
3　10ＹＲ3/1黒褐色粘質シルト
　N3.0暗灰色粘質シルトを斑状に含む
4　5Ｙ3/1オリーブ黒粘質シルト
　7.5Ｙ2/2オリーブ黒粘質シルトをブロックで含む
5　5Ｙ3/1オリーブ黒粘質シルト
　炭（φ0.2cm）を含む

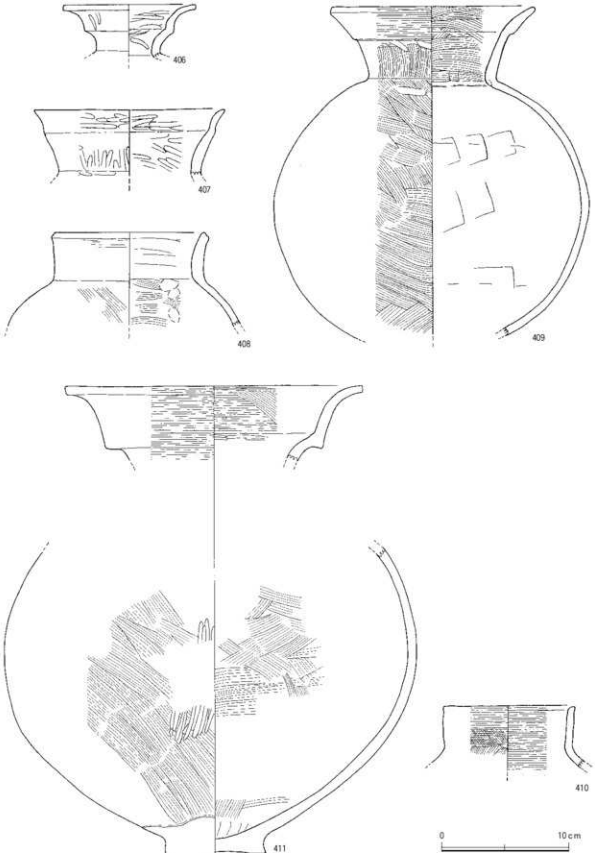
第78図　ＳＤ260溝跡（南東部）



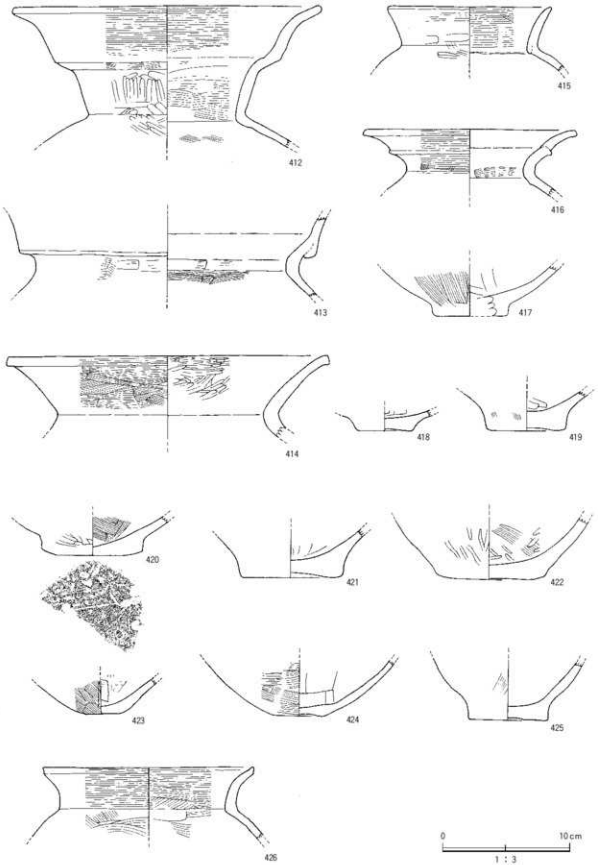
第79図　ＳＤ260溝跡（北西部）



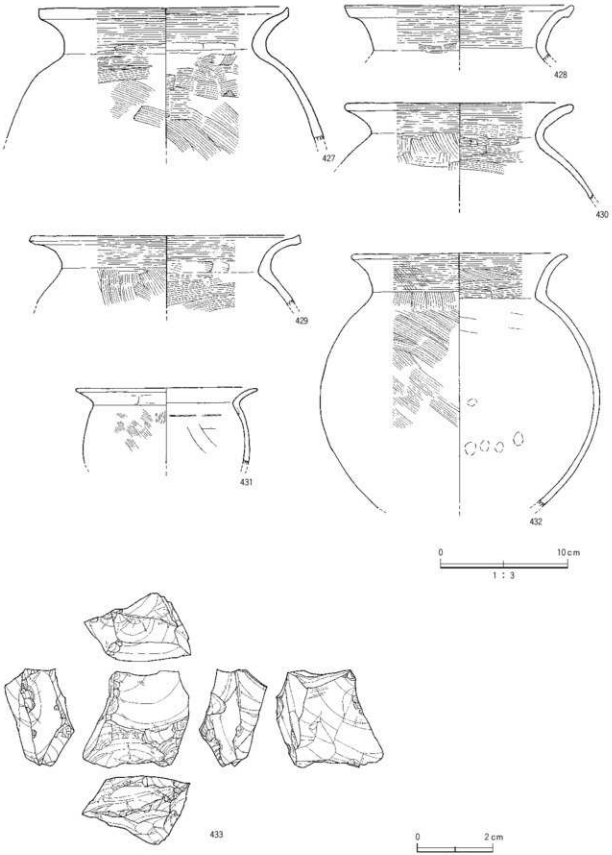
第80図　ＳＤ260溝跡出土遺物（１）



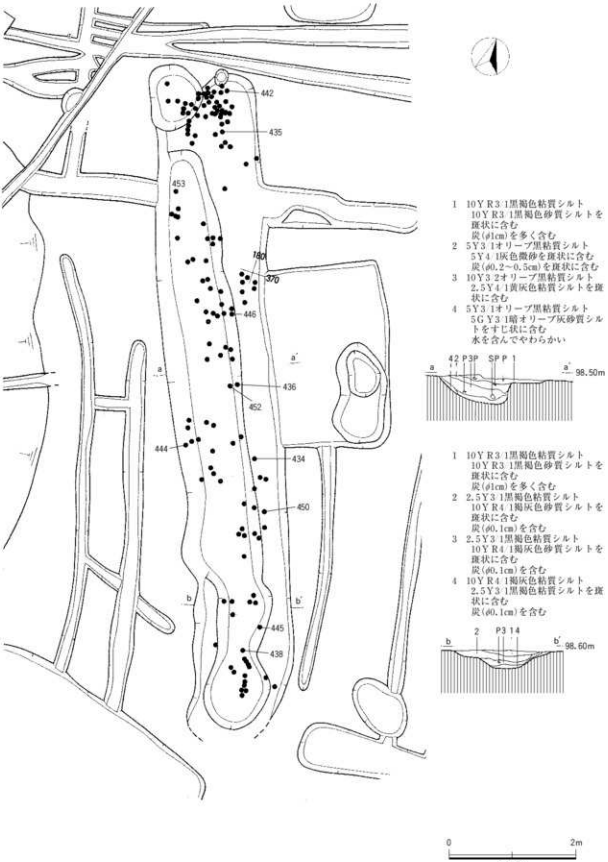
第81図　ＳＤ260溝跡出土遺物（２）



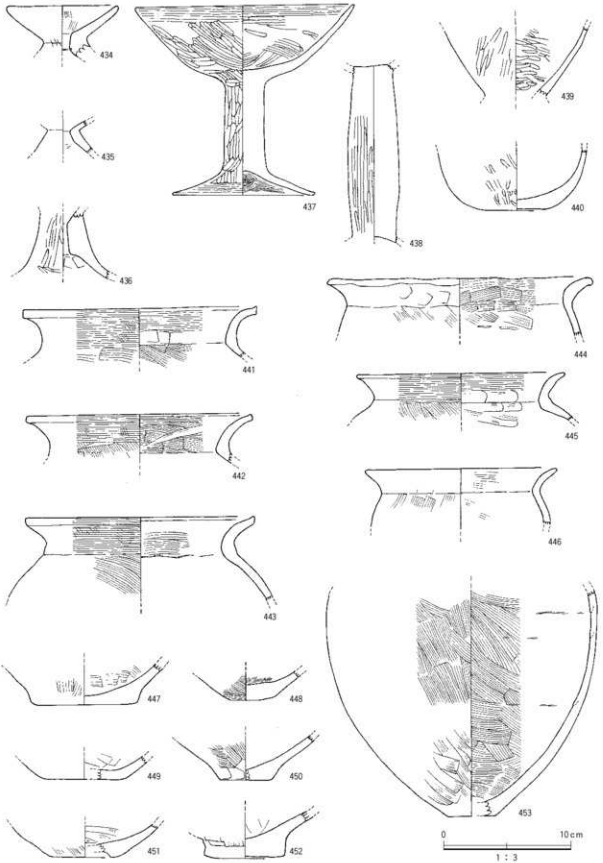
第82図　ＳＤ260溝跡出土遺物（３）



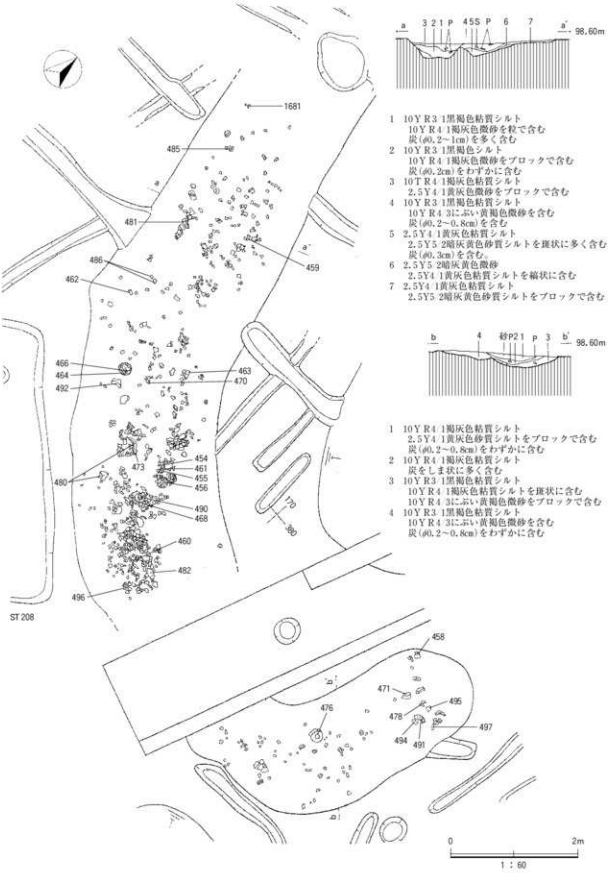
第83図　ＳＤ260溝跡出土遺物（４）



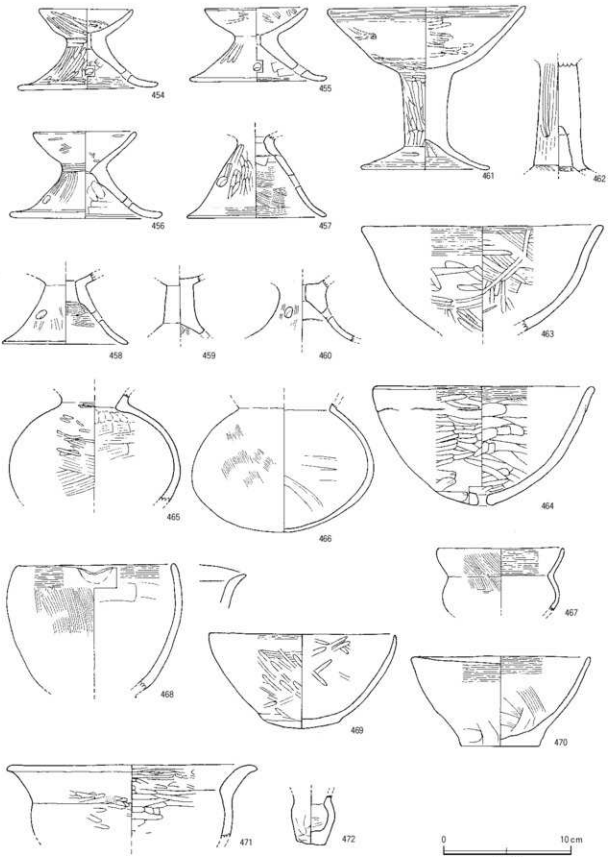
第84図　ＳＤ261溝跡



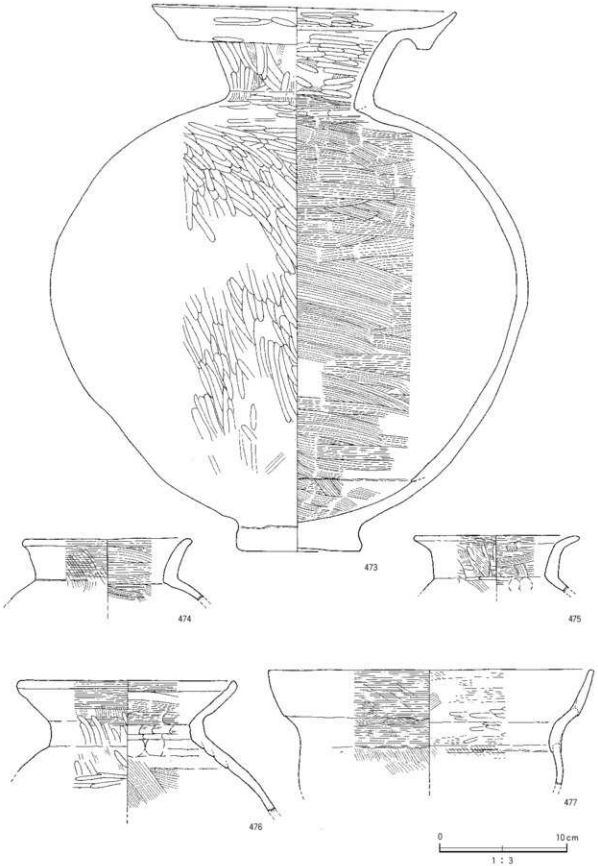
第85図　ＳＤ261溝跡出土遺物



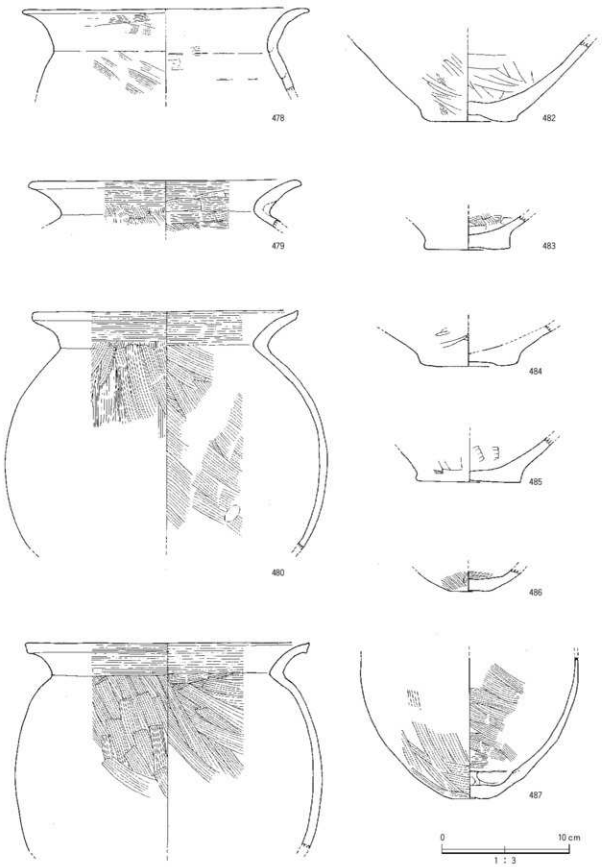
第86図　ＳＤ262溝跡



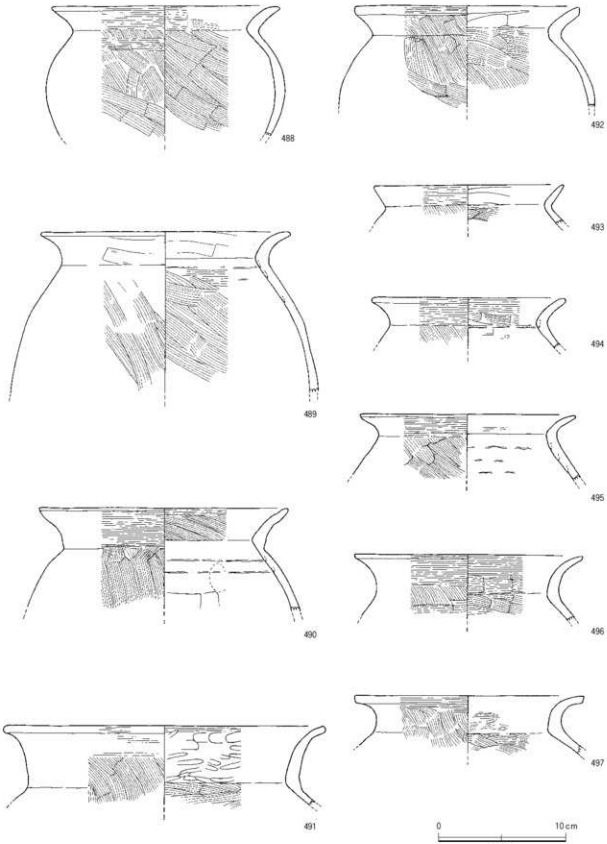
第87図　ＳＤ262溝跡出土遺物（１）



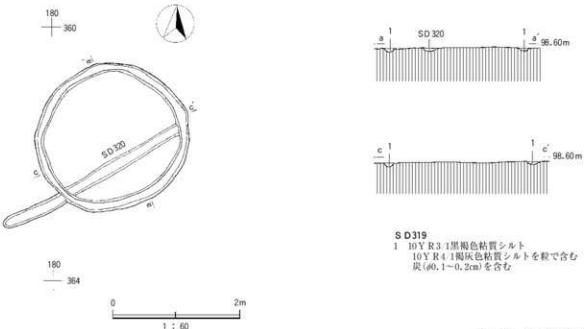
第88図　ＳＤ262溝跡出土遺物（２）



第89図　ＳＤ262溝跡出土遺物（３）



第90図　ＳＤ262溝跡出土遺物（４）



第91図　ＳＤ319溝跡

ＳＫ348土坑（第77図）

207・380～208・381区に所在する。平面形は直径70cmほどの円形を呈する。底面形状は丸底を呈する。遺構検出面からの深さは約30cmを測る。土坑内からは、横倒しになったまま土圧で潰れた甕（382）が出土している。覆土は２層で、甕の上の覆土が１層、甕の下の覆土が２層である。

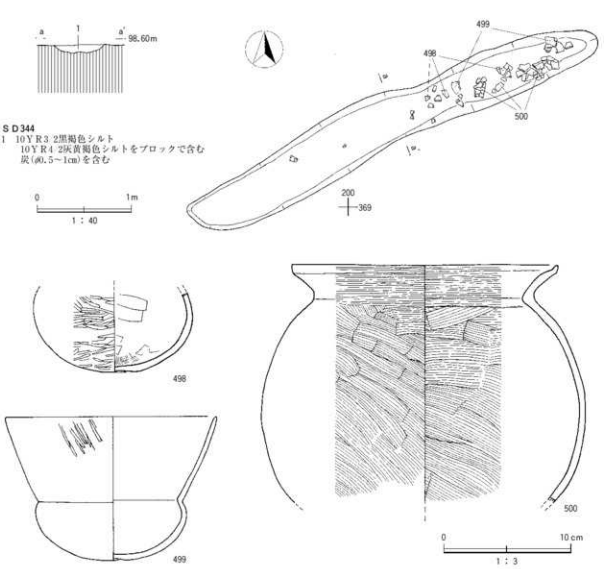
３．溝　　跡

ＳＤ260溝跡（第78,79図）

調査区の北西隅、170・345区から調査区の南東、209・393区にかけて緩く蛇行しながらのびる溝跡である。南東部で河川跡に取り付いている。この河川は、ＳＧ252河川跡とは時期の異なる、第１次調査で検出されたＳＧ114河川跡と思われる。河川跡との接合部分の上端は、浸食を受けたのか扇状に開いている。幅は、北東部では約１ｍであるが、河川との接続部近くになると２ｍほどに広がる。深さは約40cmで丸底状の断面形を呈する。底面の勾配差がほとんどなく、流路方向は特定できないが、調査区全体の標高が東に高く西に低いという環境を考え合わせると、河川から水を取り入れた施設との可能性も考えられる。この推定に立てば、調査区の北西方向に水田域の存在が推定されるのではなかろうか。この溝跡の埋没後、ＳＴ202竪穴住居跡が構築されている。出土遺物は、器台、高坏、鉢、壺、甕等の土器類の他、管玉の材料となる荒割りされた玻璃質流紋岩なども見られる。なお、第78図と第79図の「・」印は遺物の出土地点を示している。

ＳＤ261溝跡（第84図）

調査区南西隅近くに、直径９ｍほどの不整形を呈する沼沢と思われる湿地跡が所在するが、



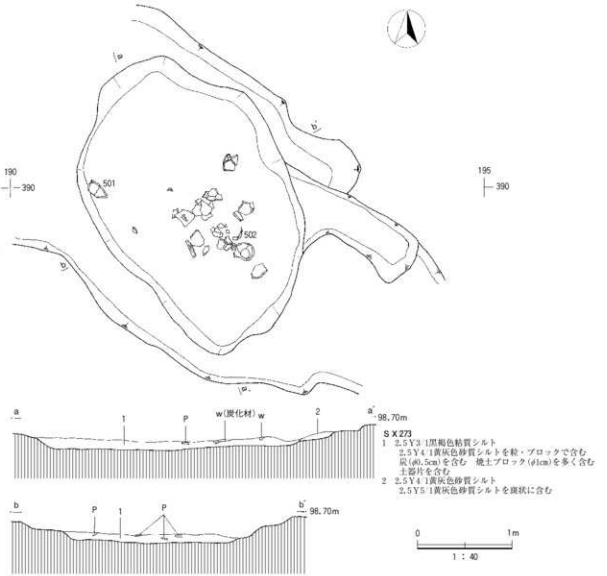
第92図　ＳＤ344溝跡及び同出土遺物

ＳＤ261溝跡と後述するＳＤ262溝跡は、この湿地を取り巻くように配置されている。

ＳＤ261溝跡は、湿地と２～３ｍの間隔を取り、177・367～183・378区に所在する溝跡である。概ね直線的に延びるが、南端で湿地に沿うように西側に緩く曲がる。深さ10cm、幅1.７m、長さ11ｍと浅い溝跡であるが、中にもう一つの溝を持ち、底面は２段になっている。これが当初からの形状なのか、あるいは時期差を有するのかは調査時点では確認できなかったが、西側の立ち上がりを共有するように２つの溝が位置していることから、時期差があったとしても、この溝が機能している時間内でのことと考えられる。子溝は幅1.2m、長さ9.3m、親溝底面からの深さ30cmを測る。なお、この溝跡の埋没後にＳＴ206竪穴住居跡が構築されている。出土遺物は、器台、高坏、壺、甕などがある。

ＳＤ262溝跡（第86図）

先述のＳＤ261と湿地を挟んで対をなすように所在する。ＳＤ261溝跡と同様湿地の端から約２ｍの間隔を取り、西側を取り巻くように所在する。この溝跡もＳＤ261と同様、深さ10cmと全体に浅いが、底面に土坑のような窪みを有し、底面形状が複雑な溝跡である。北端部で畝状



第93図　ＳＸ273性格不明遺構

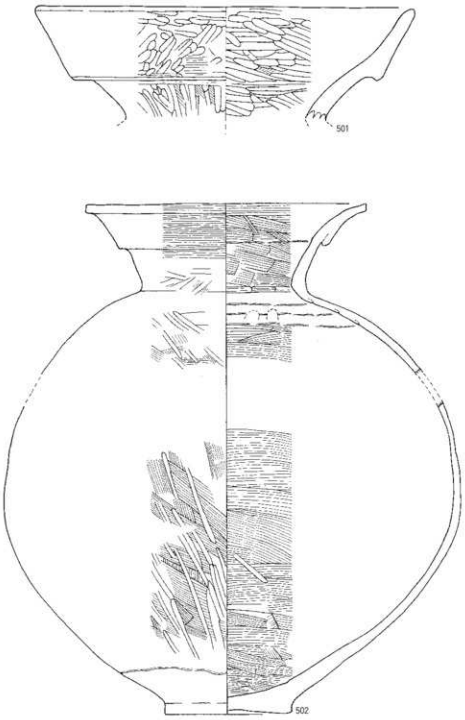
遺構が重複しているため、溝の始点が不明である。溝の東側に、当該溝が埋没した後に設けられた子溝がある。重複かとも思われたが、平面形に不自然さはなく、ＳＤ262溝跡が認識されている時期、即ち埋没直後に再度設けられたものと考えられる。幅0.8～1.1m、長さ約14m、深さは約20cmを測り、窪みは親溝の底面から５～15cmを測る。

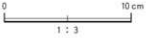
ＳＤ319溝跡（第91図）

179・360～183・364区に所在する。浅い円形に巡る溝である。溝の幅は15～25cm、深さは遺構確認面から約７cmを測る。規模は内径で約２m、外径で約2.5mを測る。桶ワラで覆いを巡らした簡易な倉庫との見方もあるが、性格は不明である。

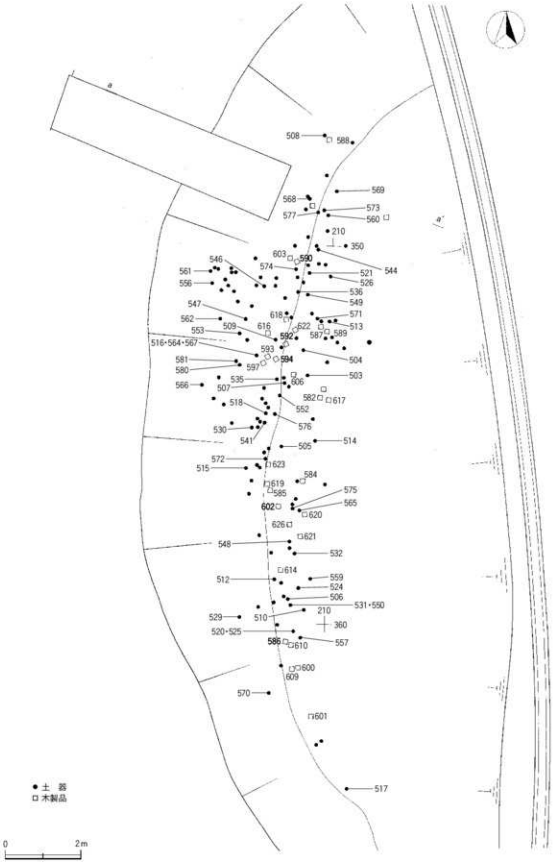
ＳＤ344溝跡（第92図）

198・367～203・369区に所在する。ＳＤ252河川跡の川岸に向かう緩斜面に位置し、川の方に向いている。長さ約７m、幅80～90cm、断面形は浅く平坦な丸底を呈し、深さは約15cmを測

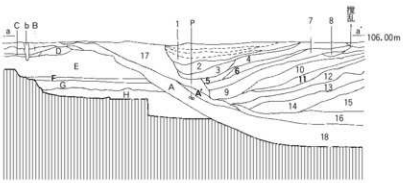




第94図　ＳＸ273性格不明遺構出土遺物



第95図　ＳＧ252河川跡（１）



第96図　ＳＧ252河川跡（２）

る。溝の東側に若干遺物が遺存し、鉢、壺、甕などが出土している。

4．性格不明遺構

ＳＸ273性格不明遺構（第93図）

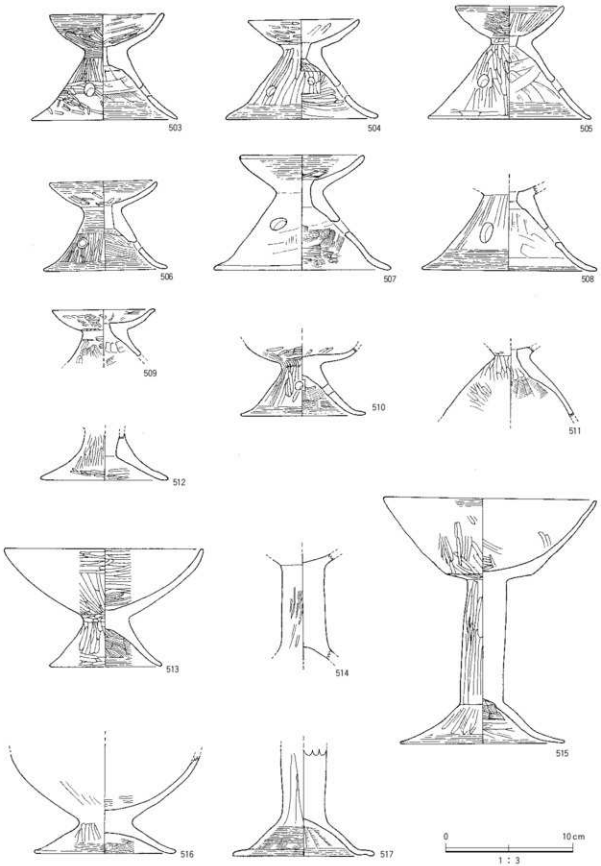
190・388～193・392区に所在する。土取りによって攪乱された土を取り除いて検出したものである。長軸4.9m、短軸3.2mの不整形を呈し、検出面からの深さは約20cmを測る。炭や焼土を含み、用途、性格ともに不明である。出土遺物には大形の甕がある。

5．河　川　跡

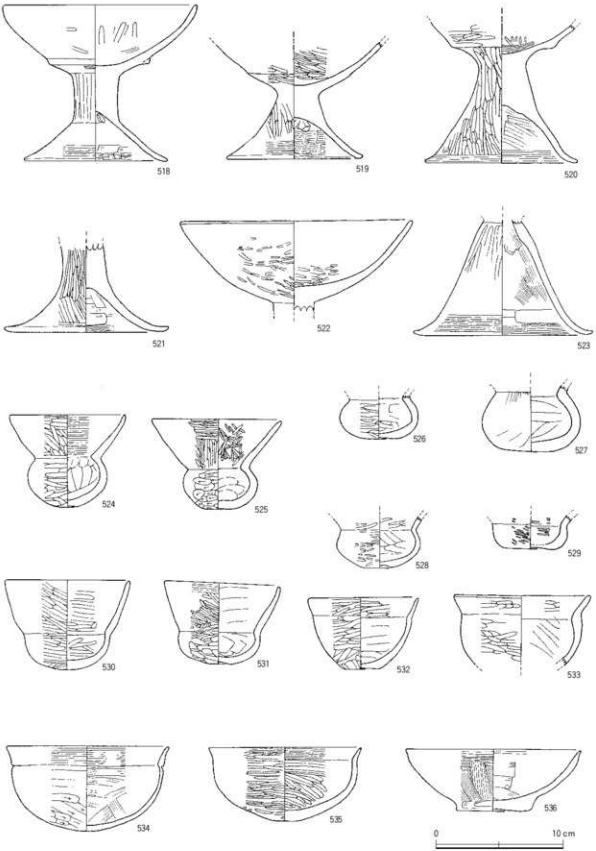
ＳＧ252河川跡（第95,96図）

調査区東端に位置する。当初一つのものと考えられていたが、ＳＧ252河川跡は西に膨らんだ部分のみで、260・370区辺りから南側については、時期の異なる別の河川と考えるに至った。南側の河川については、第１次調査で検出したＳＧ114と同一のものと推量される。

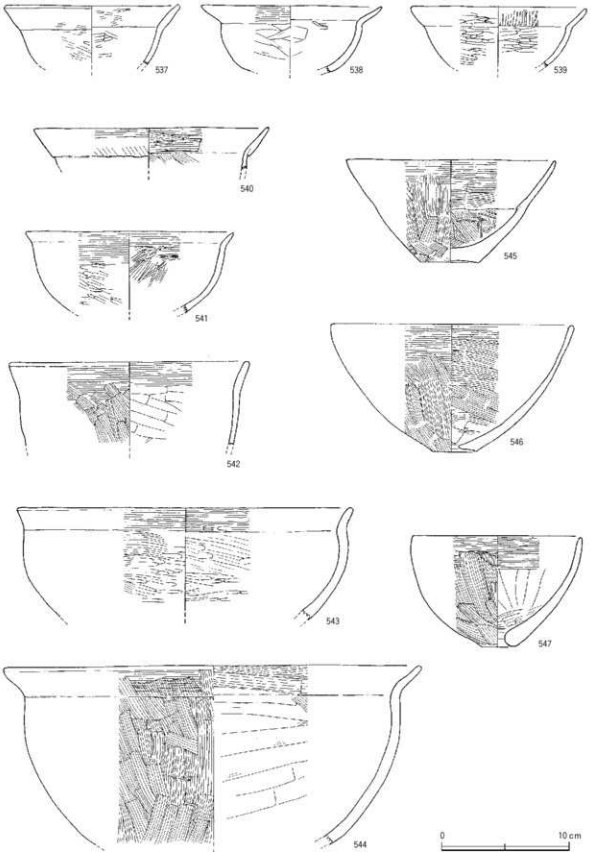
ＳＧ252河川跡は、西に膨らみ、淵を形成している。対岸は調査区外となり、川幅は確認していない。川底と考えられる砂利層まで約2.7mの深さを持つ。川底は、僅かだが南から北に低くなっており、この部分では北流していたものと考えられる。淵を形成している部分の川底には流木などが溜まっており、川の斜面から川底にかけては、投棄された土器片や木製品が出土している。出土土器の中で１点だけ、完形で猶且つ正位で遺存するという特異な出土状況を



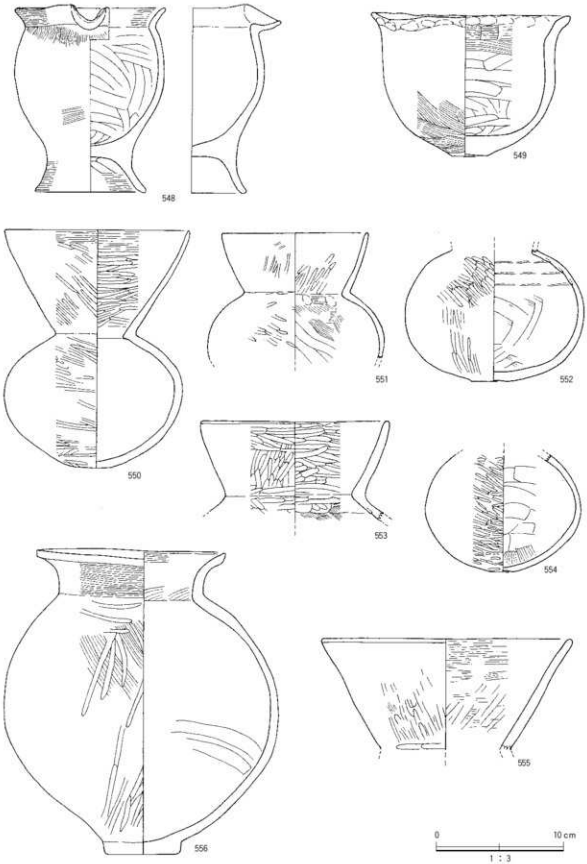
第97図　ＳＧ252川跡出土遺物（１）



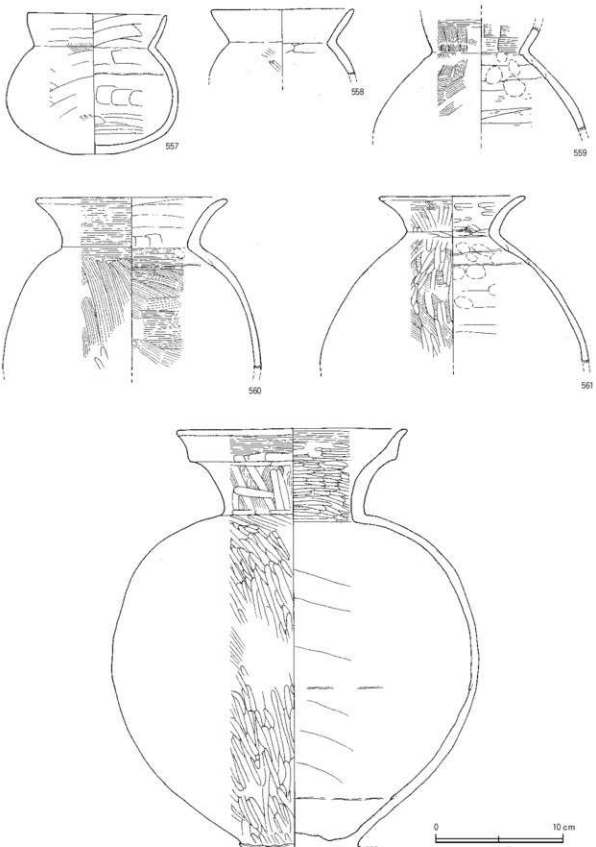
第98図　ＳＧ252川跡出土遺物（２）



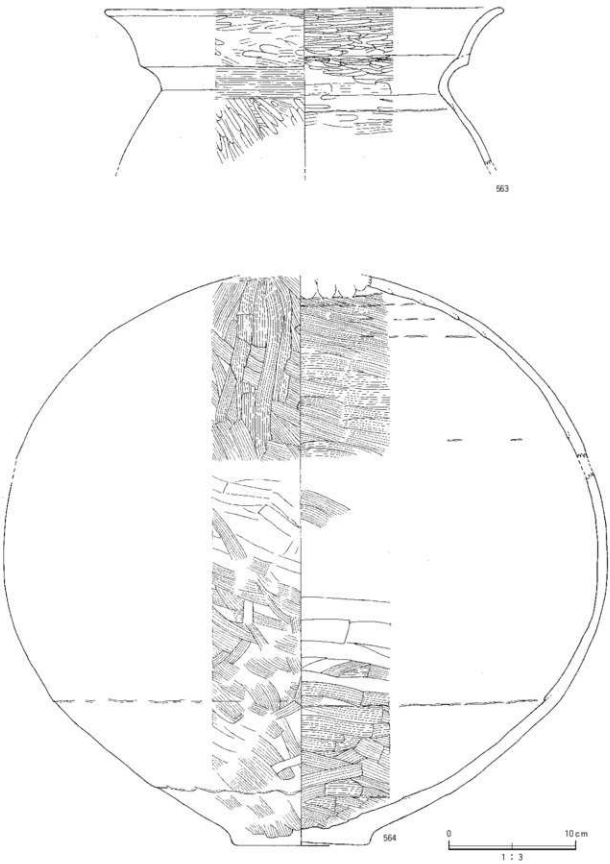
第99図　ＳＧ252川跡出土遺物（３）



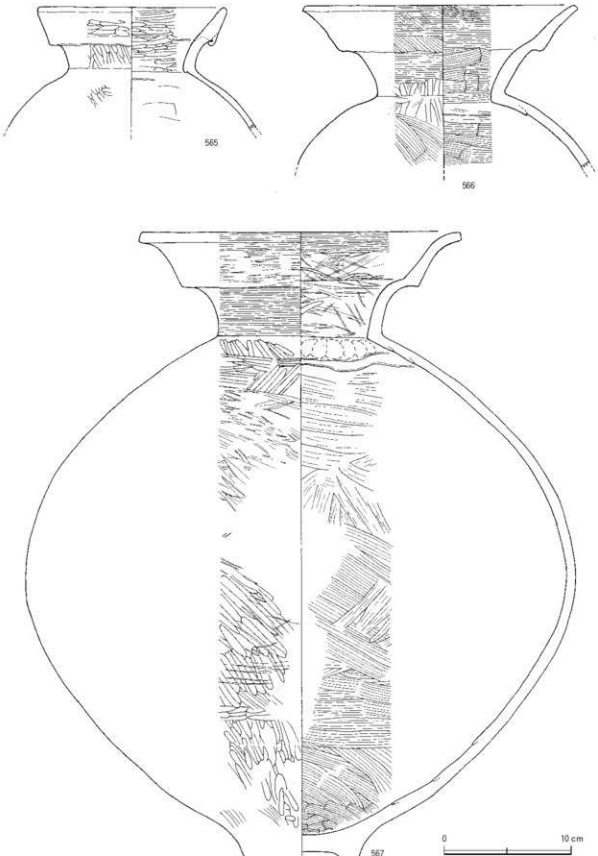
第100図　ＳＧ252川跡出土遺物（４）



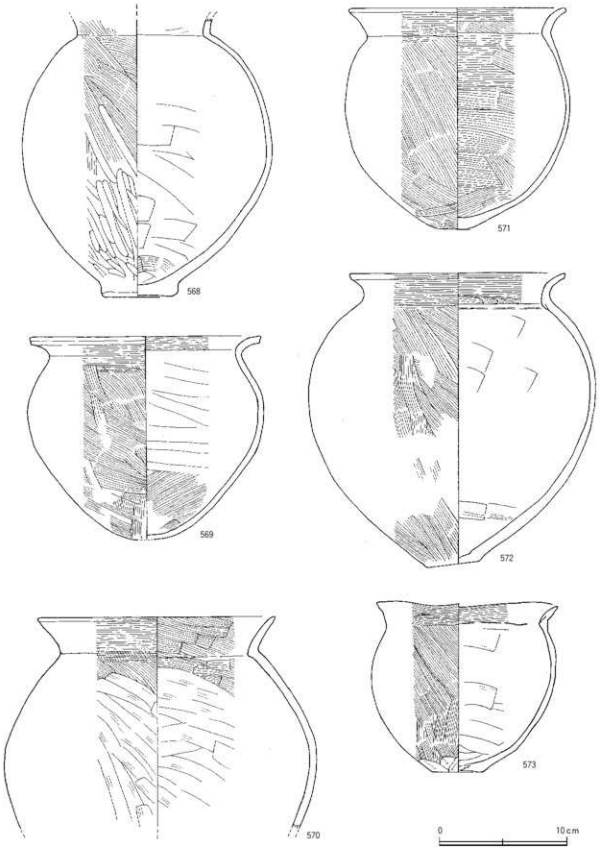
第101図　ＳＧ252川跡出土遺物（５）



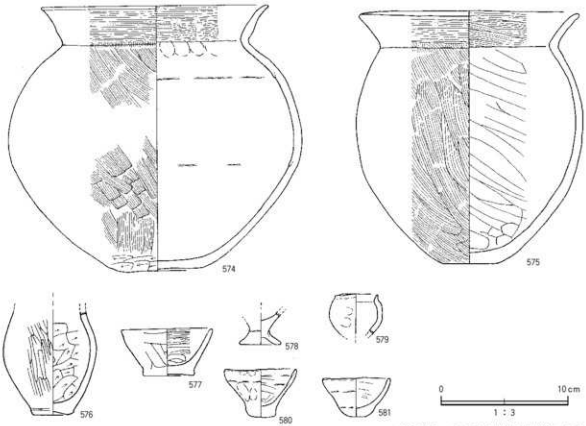
第102図　ＳＧ252川跡出土遺物（６）



第103図　ＳＧ252川跡出土遺物（７）



第104図　ＳＧ252川跡出土遺物（８）



第105図　ＳＧ252川跡出土遺物（９）

示す甕形土器の中には、土とともに植物遺体が遺存しており、同定の結果、クルミ、クワ、ウリ、イネなどが検出された（付編「植物遺体の同定調査」参照）。

出土遺物には、器台、高坏、鉢、壺、甕などの土師器、小型土器、木製品、植物遺体などがある。出土した木製品については、第４節に別途まとめている。また植物遺体については、付編を参照されたい。

土層断面からは、川が埋没した後、洪水による鉄砲水が、数度にわたって埋積土を抉り、砂を充填していった状況が観察できた。

６．遺構外の遺物

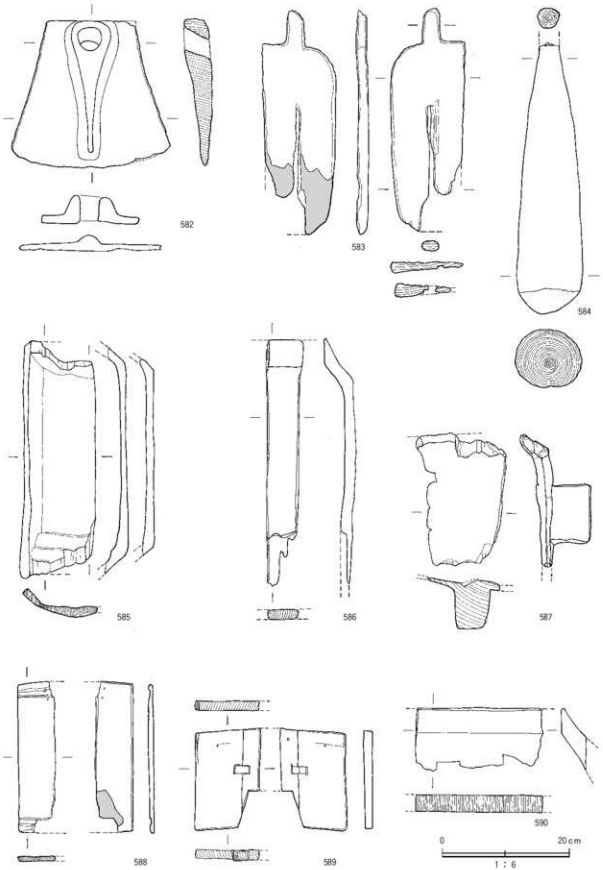
遺構外の遺物には、遺構確認面の上を覆う遺物包含層から出土したものと、遺構確認面直下に部分的にレンズ状に入る間層から出土したものなどがある。前者は、当該遺跡の生活痕跡と時期を同じくするものであり、後者は当該遺跡の生活痕跡が形成される以前のものである。

包含層の遺物（第111～117図）

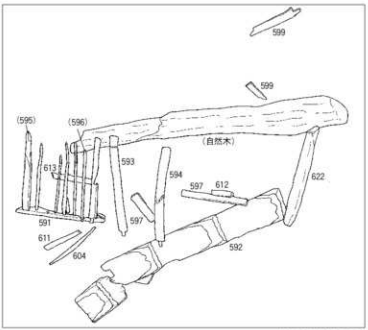
遺物包含層が遺構確認面の上を覆っており、包含層の遺物を取り上げてから遺構検出を行った。出土状況から、遺構に帰属し得るものか否か、判断に迷うものが多く、そのため、遺構から切り離して包含層の遺物として一括した。

間層出土の遺物（第118～121図）

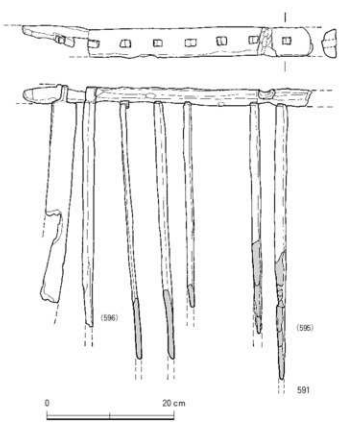
本遺跡は、低湿地に位置していることもあって、土壌がグライ化している。そのため、遺構

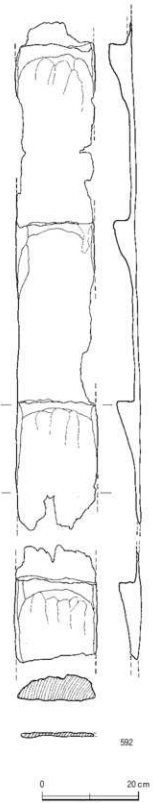


第106図　ＳＧ252川跡出土遺物（10）

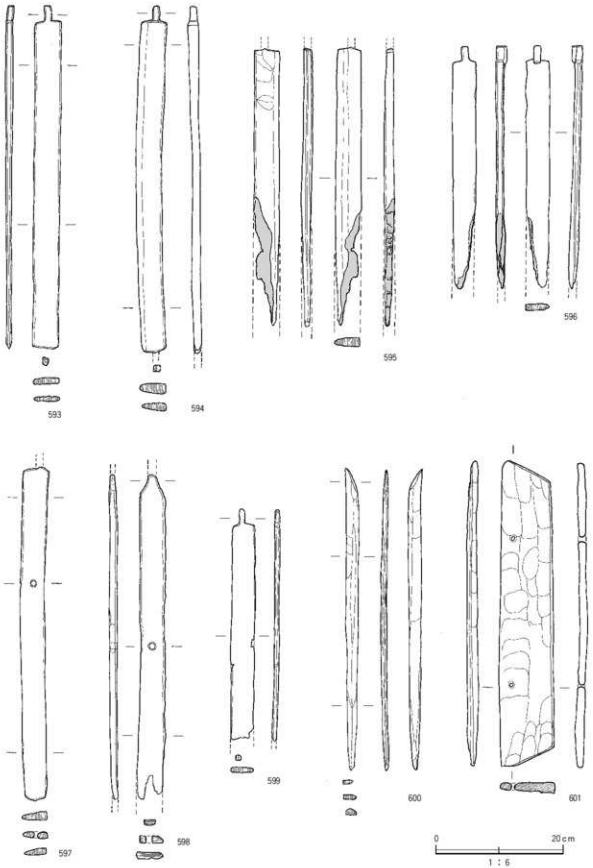


木製品出土状況概念図

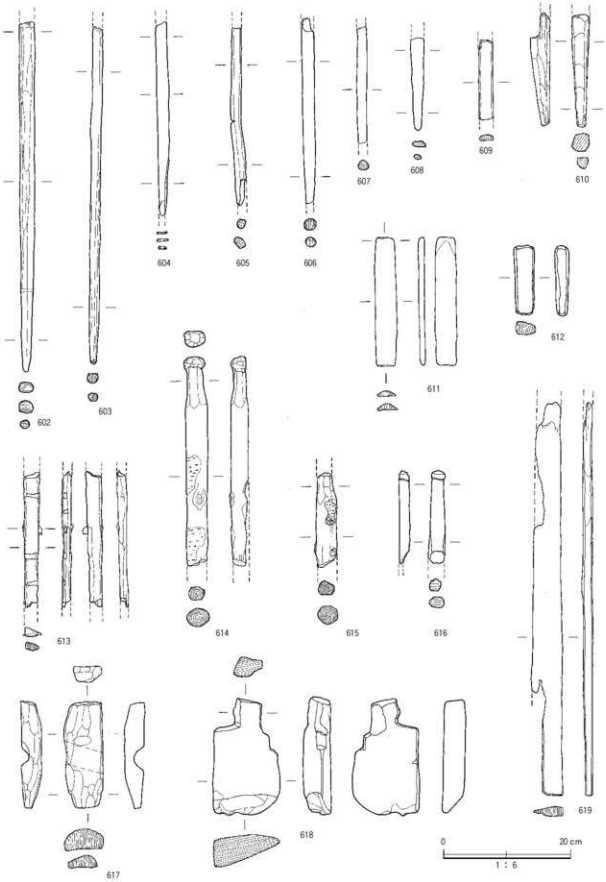




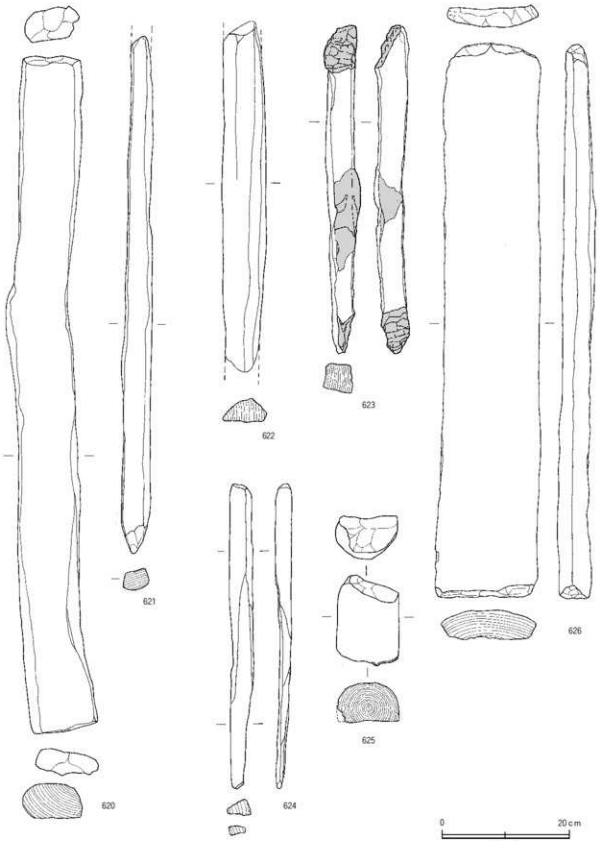
第107図　ＳＧ252川跡出土遺物（11）



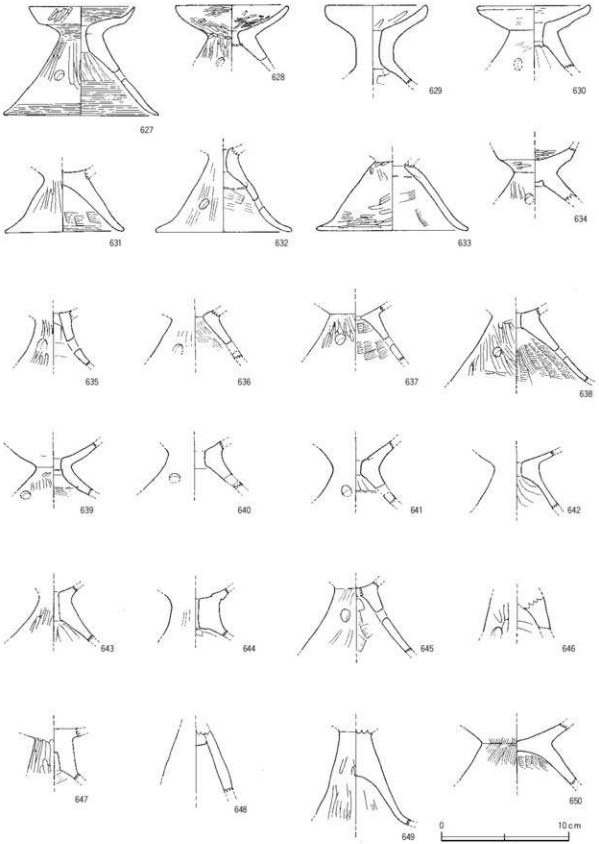
第108図　ＳＧ252川跡出土遺物（12）



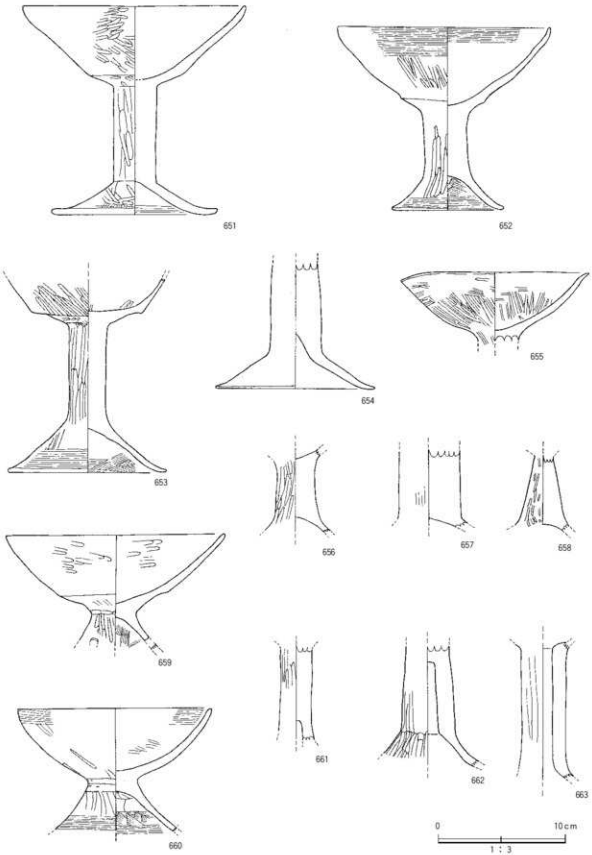
第109図　ＳＧ252川跡出土遺物（13）



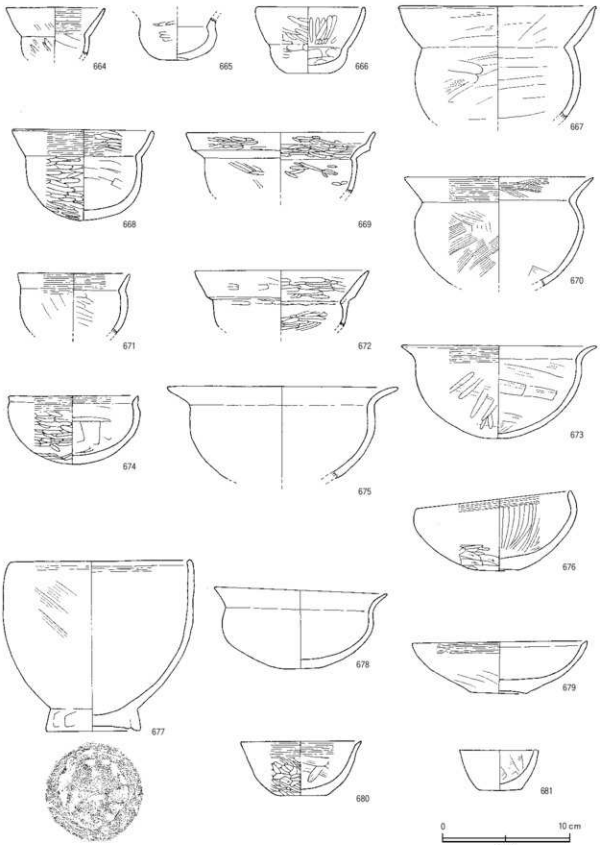
第110図　ＳＧ252川跡出土遺物（14）



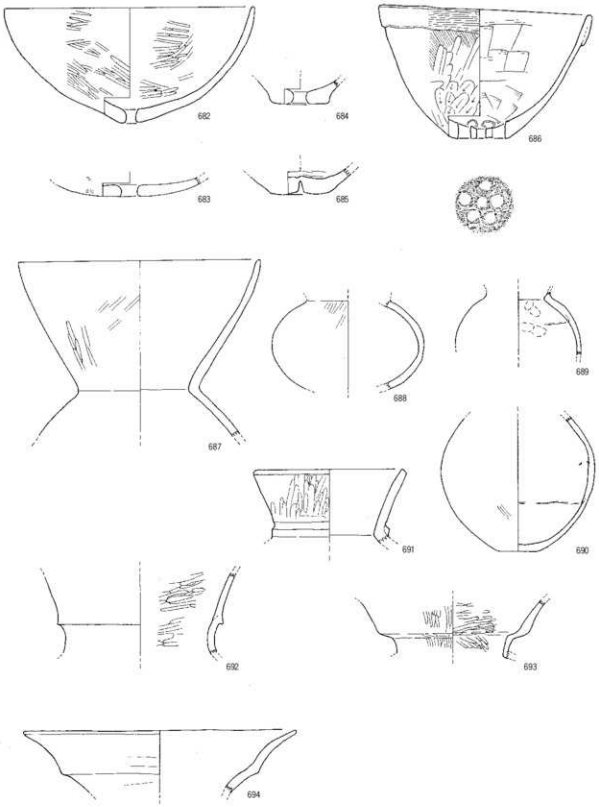
第111図　包含層出土遺物（1）



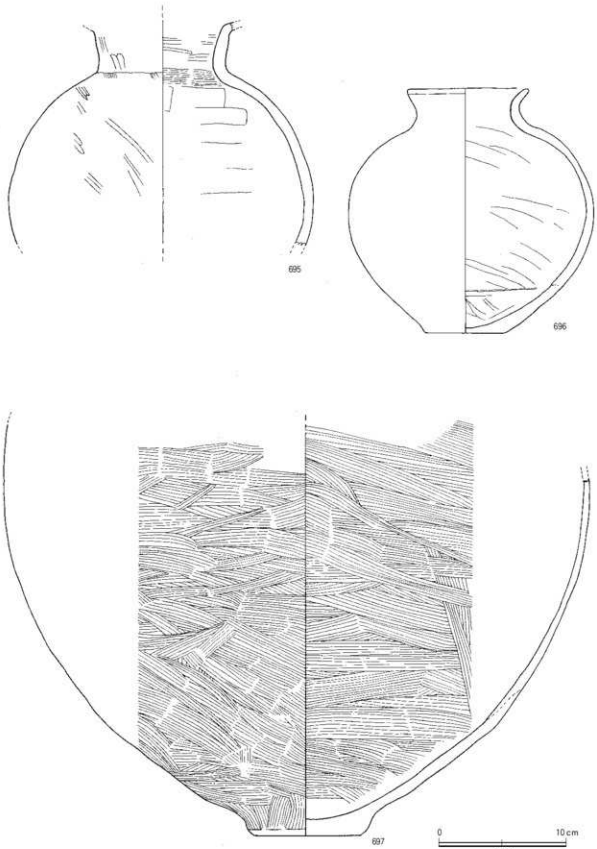
第112図　包含層出土遺物（2）



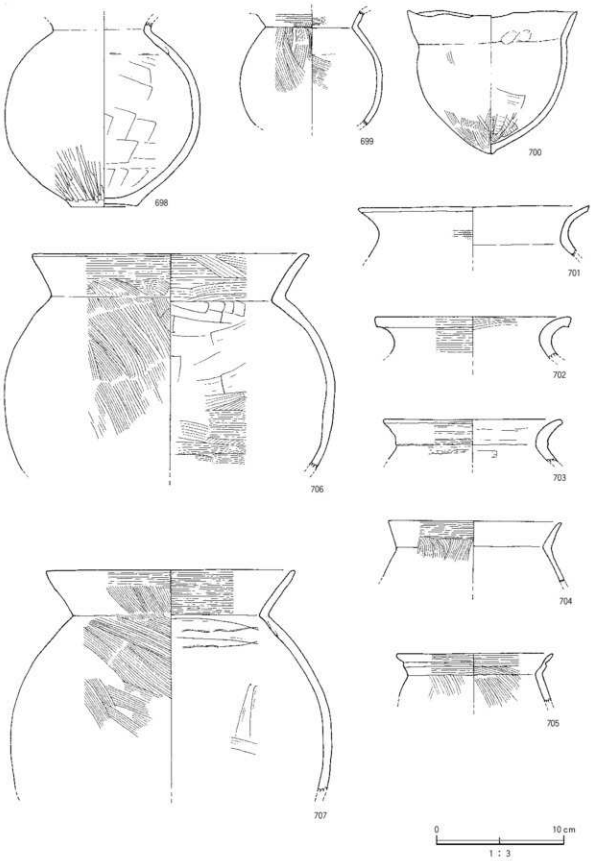
第113図　包含層出土遺物（3）



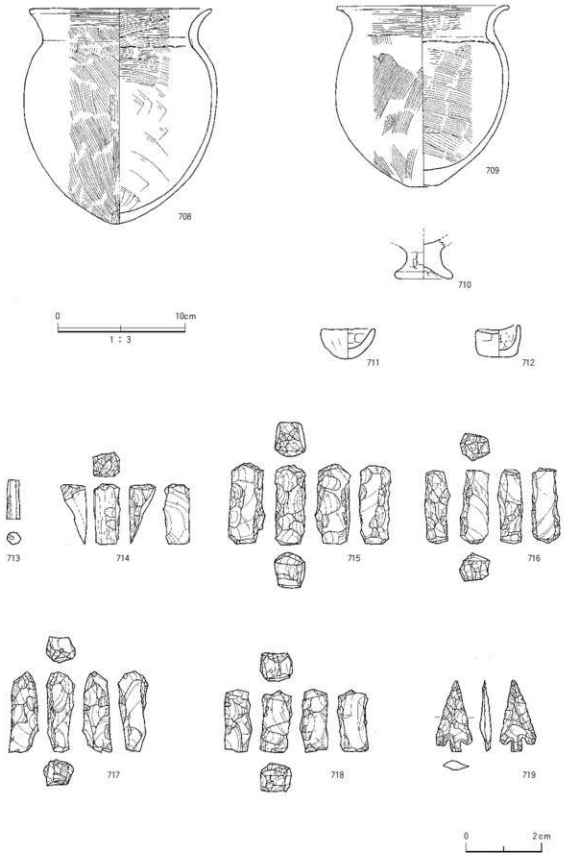
第114図　包含層出土遺物（4）



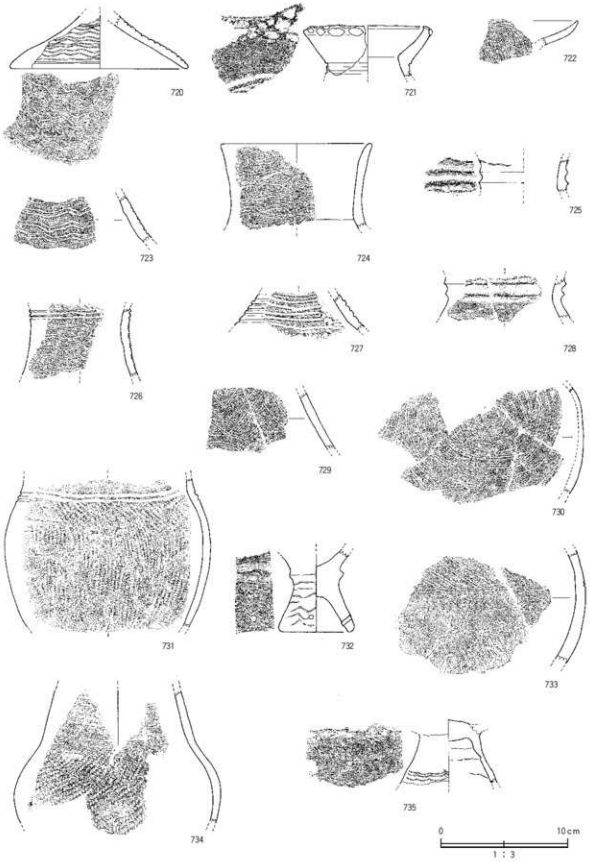
第115図　包含層出土遺物（5）



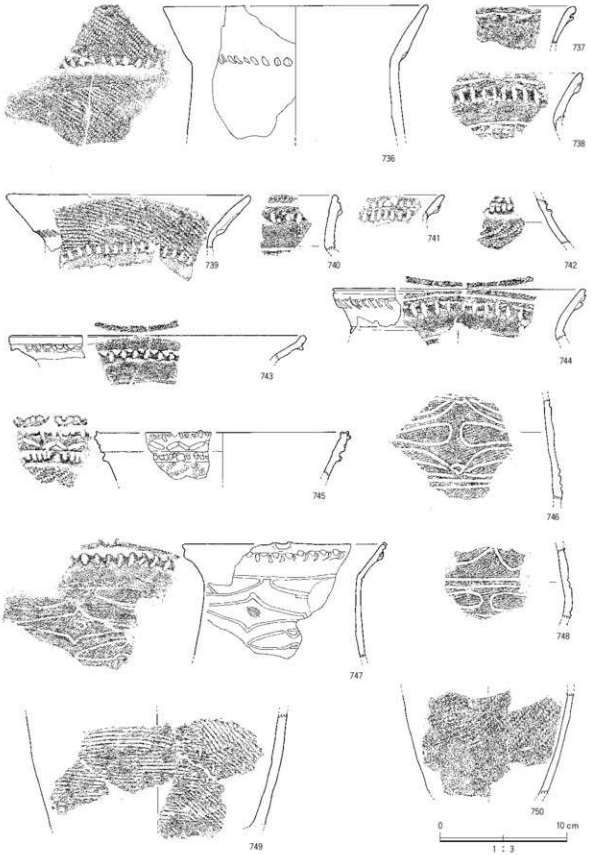
第116図　包含層出土遺物（6）



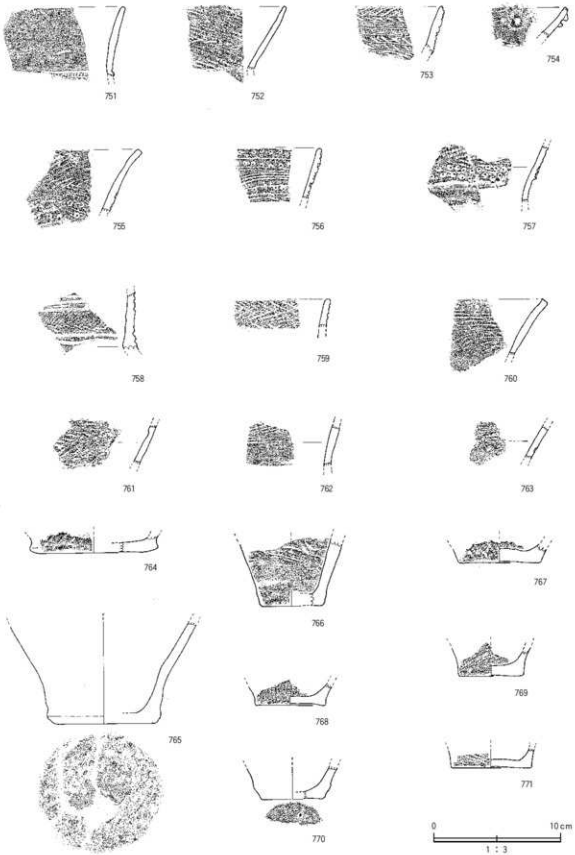
第117図　包含層出土遺物（7）



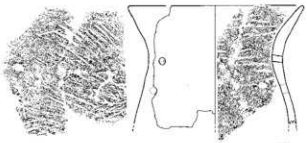
第118図　間層出土遺物（1）



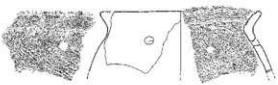
第119図　間層出土遺物（2）



第120図　間層出土遺物（3）

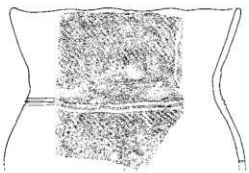

772

773

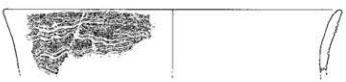

774

775

776

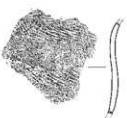

777

778


779

781

780


782

0　10cm
1：3

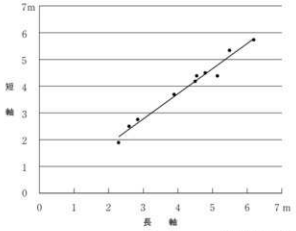
第121図　間層出土遺物（4）

確認作業時にはどうしても面を下げ気味にする傾向がある。その作業中、ＳＤ260とＳＧ252に挟まれた、190・360～206・390区付近で、遺構確認面直下に部分的にレンズ状の間層が認められ、そこから時期の異なる土器片が出土している。観察の結果、前時代の地表に廃棄されたものと考えられ、その後土壌の堆積が進んで、それらが覆われた後、当該遺跡での生活痕跡が刻み込まれたものであろう。この前時代の部分的廃棄痕跡を「溜まり」と表現する。

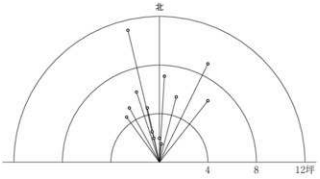
溜まりからの出土遺物は、この度の調査に伴う生活痕跡と直接結びつくものではないが、参考のためその主なものを収録した。ほぼ桜井式から天王山式、あるいはそれに後続する時期のものと捉えられる。

3　竪穴住居跡の方向と規模

竪穴住居跡の主軸方向については、長軸、短軸が不明なものもあるため、南北軸を主軸とした。また座北は、当該地域では真北より０°18′24″西に偏しているが、ここでは座北をもって北とした。南北軸は座北を基準に、東西辺が遺っている場合は両辺の方向の平均値を、片辺



第122図　竪穴住居跡の軸長比



第123図　竪穴住居跡の主軸方向と規模

のみの遺存の場合は残存辺の方向を主軸方向とした。規模については、両辺が判るものについてはその平均値を、片辺が不明の場合は残存長を軸長とした。

住居跡の面積は、各軸長を乗じて算出した。この方法で面積を算出すると誤差を多分に含むことになるが、概観するのが目的であるのでこの方法を採り、さらに数値を丸めるために坪数に換算した。坪数については、①１尺を30.303㎝として算出した3.30578㎡、②１尺を30.3㎝として算出した3.305124㎡、③坪数の概数値である3.3㎡の３通りで計算してみたが、0.5坪を基準値として丸めたとき、いずれも同じ値を示したので、１坪＝3.3㎡という概数を計算基礎とした。

第１次調査と第２次調査で25棟の竪穴住居跡を検出したが、そのうち、規模の判明したもの13棟を対象に主軸方向や平面規格、面積などについてみると次のようになる。

主軸方向は、概ね４つのグループに分けることができる。Ａ；20度以上西に偏するもの（2，210）、Ｂ；20度未満西に偏するもの（6，12，202，204，206，209）、Ｃ；20度未満東に偏するもの（205，212，213）、Ｄ；20度以上東に偏するもの（208，211）である。

長軸の方向は、東西に長軸を持つもの（2，12，202，204，210，213）と、南北に長軸を持つもの（6，205，206，208，209，211，212）とに二分される。

面積は、４坪未満の小型住居（6，204，206，213）、４坪以上８坪未満の中型住居（2，12，205，208，209，210，212）、８坪以上の大型住居（202，211）とに分類することが可能である。

平面規格は、短軸を100として長軸の割合が105までのものを正方形、111以上のものを長方形と仮に呼んだ場合、正方形は７棟（6，12，204，206，209，210，211）、長方形は３棟（2，205，213）となる。また、これら13棟を、長軸をＸ、短軸をＹとしてプロット（第122図）すると、全体が$y = 0.94x - 0.0361$で直線回帰し、回帰直線の標準誤差は0.208となる。これから、長軸と短軸の比率は基本的に同様と考えることができ、住居同士の重複がほとんど見られないことなども併せて、さほど隔たらない時期にこれらの住居が造られたであろうことが想定される。

これまで竪穴住居跡の特徴を４つの面から見てきたが、主軸の方向で大まかに括ってみると205と213がほぼ同方向でありながら位置が近すぎる嫌いはあるが、他は無理なく同時存在しうる位置関係にある。また長軸方向で見ると、東西棟で20度以上東に偏するものはなく、南北棟で20度以上西に偏するものはない。そして213以外の東西棟は西に偏するということが判る。

この２つを組み合わせると、東西棟で３グループ、南北棟で３グループの、計６グループに分けることができる。即ち、①東西棟で主軸が東に偏するもの（213）、②東西棟で20度未満西に偏するもの（12，202，204）、③東西棟で20度以上西に偏するもの（2，210）、④南北棟で20度未満東に偏するもの（205，212）、⑤南北棟で20度以上東に偏するもの（208，211）、⑥南北棟で20度未満西に偏するもの（6，206，209）である。

このように、長軸の向きと主軸の方向で仲間分けしたとき、それぞれのグループでは、各住居は適度な間隔を持ち、同時存在しても不自然ではない配置を示す。さらにＳＤ260溝跡や沼沢を取り巻くように位置するＳＤ261・262溝跡などとの先後関係によって、概ね住居の移り変わりを把握しうると思われるが、ここでは詳細に立ち入らずグループ分けにとどめておく。

4　出土木製品の分類

1　出土木製品の概略

木製品はそのすべてが自然河川ＳＧ252からの出土品である。ＳＧ252は調査区の東端で検出され、流路の西側斜面にあたる部分が調査範囲となっている。調査範囲内において、確認できた最下層は18層に達している。木製品が出土した「18」層は基本層序のⅢ層が河岸部の斜面に沿って底面まで入り込んでいるものである。基本層序Ⅲ層は遺構の掘り込み面であることから、河川「18」層も当該時期であると考えることができる。

出土状況を観察すると木製品と共に土器類が斜面に貼り付くように出土しており、特に甕などの完形遺物は底面から斜面への立ち上がり部分に集中して出土している。木製品は河川跡底部付近に集中しており、付近からは大きな自然木が横転した状態で出土している。現地調査においては、人為的な加工の痕跡のない木片、自然木、流木の取り上げは行っていない。祭祀的要素を持つものに刀形の木製品の出土があるが、出土状況からは具体的な祭祀行為の復元は不可能であり、出土状況に特別の意味は見出せなかった。その他の出土木製品も部分的に欠損したり焼けたりしているものがほとんどであり、おそらく、集落の東端に位置する河川には、使えなくなった生活用具の投棄の場としての役割があったと考えられる。

2　木製品の分類

高橋南遺跡出土の木製品について『木器集成図録　近畿原始篇』(奈良国立文化財研究所1993)(以下『木器集成図録』と略記する）に従って機能分類を行い、用途不明のものについては形態分類を行った。下記の６項目に分類整理した。

1. 農具（耕起具、収穫具）
2. 紡織具（織機）
3. 容器（例物）
4. 祭祀具（武器形）
5. 建築部材（梯子）
6. 用途不明品（棒状具・板状具・その他）

- 1. 農具
  - （1）耕起具
    - ①直柄横鍬
    - ②一木平鋤
  - （2）収穫具
    - ①竪杵
- 2. 紡織具
  - （1）織機
    - ①経（布）巻具
- 3. 容器
  - （1）刳物
    - ①槽
    - ②台付盤
- 4. 祭祀具
  - （1）武器形
    - ①刀形
- 5. 建築部材
  - （1）梯子
- 6. 用途不明品
  - （1）棒状具
    - ①先尖棒
    - ②有頭棒
    - ③抉り入れ棒
    - ④その他
  - （2）板状具
    - ①有孔板
    - ②柄付板材
    - ③その他
  - （3）その他

1. 農具

（1）耕起具

①直柄横鍬

582は身部の平面形は横の長さが縦の長さよりわずかに大きく、刃縁に向かって広がる台形を呈する。柄孔は上端近くに穿たれ、断面形は円形である。身部後面の柄穴周囲は段をなして流線型に隆起する。木取りは横木取りの柾目板である。着柄角度は65°である。着柄角度からは打ち鍬としての機能が考えられるが、地面に対して木目が平行に入る場合、耕起具として刃先を土に打ち込んだり、柄の基部を持ち上げて土塊を引き起こす作業としては破損しやすい。比較的やわらかい土の耕起や土の表面を引き寄せるための作業などの引き鍬としての用いられ方などが考えられよう。用材はクヌギ節である。

身の形態は『木器集成図録』で「横鍬Ⅱ式」に分類され、柄穴周囲の隆起部分は「A 4 型」に細分されるものである。

②一木平鋤

583は身と柄を一木から作り出す一木平鋤である。柄と身がほぼ一直線をなす形態と考えられる。肩の平面形は左右の肩が丸形と角形を呈し、左右対称にはならない。刃部の断面形は、身の前面・後面の区別が不明瞭で平坦な板状のものである。身は中心部をスリット状に欠損しており、先端が焼けている。柄部の基部の断面形は幅広の隅丸方形である。

樹種はスギで軽軟の材質であるため、農具にするには無理があり、掘削以外の用途も考えられよう。

『木器集成図録』で「Ⅰ式」とされるものである。

（2）収穫具

①竪杵

584は片方の握部・搗部のみ残存している。搗部端で径が最大となり、搗部より握部にかけて漸次細くなる。搗部と握部の境は不明瞭である。搗部端が半球状に加工される。『木器集成図録』で「C類」とされるものである。

2. 紡織具

（1）織機

①経（布）巻具

616は端部を一面から削り出して瘤を作り出した棒状のもの。経（布）巻具の一部分と考えられる。瘤部分は原始機の各部材を引っ張るための紐かけとみられ、経糸あるいは織りあがった布は、身の中央部を一段深く掘り下げた部分に巻かれたものと思われる。他端は欠損している。

3. 容器

（1）刳物

①槽

585は側面の立ち上がりは緩やかで底面と側面の境は不明瞭である。破片資料であり全体の形状はうかがえない。586は側面の立ち上がりは緩やかで底面と側面の境は不明瞭である。破片資料であり全体の形状はうかがえない。590は側面部分のみの遺存である。厚手で大型品であったと考えられる。

②台付盤

587は平面形が長方形を呈する盤状の台付容器と考えられる。盤と台とを一木で作り出した刳物である。盤の上面はほぼ平坦で側面から見た場合、両端に向けて緩やかに反りあがる。台は盤側面よりやや内側から作り出す。長軸方向に造り出され、２列に平行するものと考えられる。

4. 祭祀具

（1）武器形

①刀形

600は刀身部のみで抜身の状態である。鋒部より刃部を若干薄く削りだし、刃先部分を両端から削り出している。

5. 建築部材

（1）梯子

592は一木梯子である。足掛部は４段残存し、側面からみて上部を直角に、下部をなだらかに削って作り出している。端部の形態等は不明である。現場での取り上げ時に破損したため、実測図では欠落部分が生じてしまった。

6. 用途不明品

加工は施されているが、用途同定できないものを一括した。

（1）棒状具

①先尖棒

棒状具の一端が尖ったもののうち、辺材利用で丁寧な仕事で作られたもの、及び芯持ちの丸

木状の細棒利用のものでも削り出しによる整形が加えられた作りのものである。

603・602・610は細棒の先端部を多面に丁寧に削り出し尖らせているものである。他端が欠損している。621は割材を加工している。先端は4方向から削り出し尖らせている。杭としての使用も考えられる。623は割材を加工している。両端が焼けているため端部の加工は明らかでない。603・602・610は細棒の先端部を多面に丁寧に削り出し尖らせているものである。他端が欠損している。

②有頭棒

棒状具の一端に頭部を作り出しているものである。

614は棒状具の端部を全面より抉り込み頭部を形作る。胴部は自然木のままで樹皮が残る。他端は折損している。615は棒状具の端部を多面に削っている。胴部は自然木のままで樹皮が残る。両端は欠損している。

③抉り入れ棒

610は細棒の先端部を多面に丁寧に削り出し尖らせているものである。抉りを入れて段を作り出している。他端が欠損している。

④その他

棒状具で①、②以外のものを一括する。

角材（620・623）分割材（622・624）丸材（625）がある。613は両端が欠損している棒状のものである。側面に樹皮が差し込まれている。柾目板を使用し、片面は、緩やかな凹みをもつ。両端に切断痕がみられるもの（620・625）がある。

（2）板状具

①有孔板

調整加工された板材に孔をもつものである。

601は両面平坦に加工され左側縁よりに2ヵ所の孔を穿つ。

②枘付板材

調整加工された板材に孔をもつものである。

598は両端を欠損する。中央に孔を穿つ。先端部に出枘を持つと考えられる。

③その他

板状具で①、②以外のものを一括する。588は組み合わせ部材である。抉りを入れた部分に別材を当てて木釘でまとめたと考えられる。木釘の痕跡が2ヵ所残る。589は板材を樹皮で綴じ合わせている。木釘が2ヵ所穿たれている。611は丁寧な調整である。626は両端に切断痕がみられるものである。

（3）その他

591は枠組み木製品である。方形枠型田下駄とも考えられるが足板が出土していないこと、田下駄としては幅が広いことから枠組み木製品とする。枠木には、横木を挿入するための方形孔をほぼ等間隔に穿ち、端部には紐かけと考えられる刳りこみを入れている。横木は枠木孔に挿入するための方形出枘を端部に削り出し、枠木枘穴横木を挿入したうえで楔を打ち込んで枠木と横木の固定をより強固なものにしている。横木の片側は両面を削り角を作り出している。

枠木、横木の他端は焼けて欠損している。枠木はカツラ、横木はスギ、と部位によって用材

の選択を行っている。617は上下を切断し、側面を面取りして丸みをつけている。中心に斜めに溝が掘られ、棒状具が組み込まれる形状である。618は上下は切断痕がみられる。一方の側面は刃先のように薄く作り出されるが他方は平坦である。上方は柄か柄のように削り出されている。

5　出土土師器の分類

今回の調査で出土した土器は、ポリコンテナにして200箱近くに及んでおり、そのほとんどがいわゆる「古式土師器」として認識できる土器である。おもに竪穴住居跡・溝跡・土坑・自然河川・包含層からの出土である。自然流路から出土した遺物は土器類が斜面に貼り付くように出土しており、特に甕などの完形遺物は底面から斜面への立ち上がり部分に集中して出土しており、廃棄されたものと考えられる。また、包含層の土器は遺構内の土器と接合するものが多く、包含層中からの遺構の掘り込みが推測された。今回の調査は限られた範囲に留まるため、分類にあたっては、未調査部を含む本遺跡の概要を類推するために、自然流路、包含層出土、土坑の土器までを含んで行った。また、破片資料も出来るだけ図化を行った。個々の遺構出土の分類のために土器分類組成表を付した。

鉢形土器（第124・125図）

口縁部断面形態、体部形態から分類した。法量は口径で大形品（20～30cm前後）中形品（13～19cm前後）小形品（12cm前後）がある。出土点数の内訳は中形品、小形品が多く、大形品はごくわずかである。調整は大形品には内外面にハケメが多用されるが、中形品、小形品にはミガキを入念に施すものが多い。

鉢A類　大形の鉢

A１類　口縁部が有段のもの

A２類　口縁部が内彎するもの。内彎する長い口縁をもつもの（A２a）、短い口縁をもつもの（A２b）がある。

鉢B類　有孔鉢。　底部に孔を穿ったもので、甑としての機能も考えられる。単孔（B１）、多孔(B２)がある。B２は新しい要素がみられる。包含層から１点のみの出土である。

鉢C類　無頸の鉢。底部の形状で細分する。

平底（C１）、丸底状（C２）、のものがある。底部が欠損しているものでC類としたものには、有孔鉢が含まれているかもしれない。

鉢D類　脚台をもつ鉢。

単純口縁で片口をもつもの（D１）と無頸のもの、無頸で片口をもつもの（D２）がある。

鉢E類　口縁部が有段で、浅い体部を有するもの。

鉢F類　口縁部が有稜で、浅い体部を有するもの。

口縁径が器高より大きいもの（F１）、ほぼ等しいもの（F２）がある。

鉢G類　単純口縁で浅い体部をもつもの。

G１類　口縁部が外反するもの（G１a）、と外傾するもの（G１b）がある。

Ｇ２類　口縁部が内彎し、底部が上げ底のもの（Ｇ２ａ）と、口縁部が外反し底部が平底のもの（Ｇ２ｂ）である。Ｇ１類に比べ、体部が扁平である。

鉢Ｈ類　椀状の浅い体部を有するもの。胎土が精製され軟質であることでも鉢Ｃ類と分けられる。鉢形土器の中でも新しい様相を持つ。

鉢Ｉ類　単純口縁でやや深い体部をもつもの。

Ｉ１類　口縁部が外反するもの。

Ｉ２類　口縁部が短く外反し、底部が平底のもの。

Ｉ３類　口縁部が外反し、底部は上げ底のもの。

Ｉ４類　口縁部が内彎し、底部が平底のもの。

Ｉ５類　凹み底に焼成後穿孔されたもの。

鉢Ｊ類　小型で平底の鉢を一括する。

鉢Ｋ類　丸みをもつ体部と、体部から大きく屈曲して開く口縁部をもつもの。

Ｋ１類　口縁部が内彎するもの。

Ｋ２類　口縁部が外傾するもの。

鉢Ｌ類　いわゆる小型丸底土器と称されるもの。口縁部と体部の相関関係と口縁部の形状から細分する。Ｌ１～Ｌ５は定型化した「小型丸底鉢」として、器台との対応関係が明瞭なものである。小型精製３器種の小型丸底鉢がこれにあたる。

Ｌ１類　口縁部高が体部高の２分の１以下であるもの。口縁部は内彎する。

Ｌ２類　口縁部高が体部高のほぼ２分の１であるもの。口縁部は外傾する。

Ｌ３類　口縁部高が体部高とほぼ等しいもの。口縁部は内彎する。

Ｌ４類　口縁部高が体部高を凌駕するもの。口縁部は内彎する。

Ｌ５類　口縁部高が体部高と等しいか、凌駕するもの。ほぼ球形の体部をもち、頚部が強くくびれ、屈曲部内面に明瞭な稜線をもつ。

鉢Ｍ類　平底の鉢で容量の小さなもの。

口縁部の形態には、小さく外反する口縁をもつもの（Ｍ１）、体部がやや内彎して外上方にのびるもの（Ｍ２）、内彎するもの（Ｍ３）がある。

器台形土器（第125図）

受部・脚部の形態、受部から脚部への貫通孔の有無により分類した。脚部円窓の数については観察表に呈示した。調整は高坏とほぼ同じく、坏部内外面がタテやヨコ方向のミガキ、ヘラナデ、脚部外面はタテ方向のミガキである。

器台Ａ類　鉢と器台を結合したような形態をもついわゆる「結合器台」である。北陸地方に系譜がたどれる。非日常的な祭祀に伴う土器と考えられている。

調整は受部・脚部外面はタテ方向のミガキ、脚部外面には前段階のハケメ調整が残る。脚部内面は指でナデ調整をしている。脚部裾部は欠失している。

器台Ｂ類　「八」の字状に開く脚部をもつもの。受部に対して脚部高の割合が高いもの。受部の形状で細分する。

Ｂ１類　内彎する小さな受部をもつもの。受部から脚部への貫通孔をもつもの（Ｂ１ａ）と

もたないもの（Ｂ１ｂ）がみられる。調整は受部外面はヨコ方向のミガキ、脚部外面はタテ方向のミガキである。

Ｂ２類　内彎して口縁端部が外折するもの。

Ｂ３類　口縁部と底部との境に、稜をもつもの。受部外面は不定方向のミガキ、脚部外面はタテ方向のミガキである。赤彩の施されているものもある。

貫通孔をもつもの（Ｂ３ａ）と、もたないもの（Ｂ３ｂ）がみられる。

Ｂ４類　浅い皿形で受け口状のもの。受部から脚部への貫通孔をもつ。調整は受部内外面・脚部外面にタテ方向のミガキが施されている。なかには、暗文風に、入念にミガキの施されているものもある。

Ｂ５類　内彎しながら外方に伸びる受部をもつもの。全体に器壁の厚いことに特徴がある。受部から脚部への貫通孔をもつ。不定方向のミガキで調整され、１次調整のハケメが残るものも見受けられる。

Ｂ６類　内彎しながら外方に伸びる受部をもち、「Ｘ字形」を呈するもの。

器台Ｃ類　無頸の鉢に台が付いたようなもので、厚手のものである。

器台Ｄ類　脚部がやや内彎して開くもの。

器台Ｅ類　Ｂ類に較べ脚裾部の広がりの小さいもの。

器台Ｆ類　脚部上部が筒状にすぼまり、下部は外反して開くもの。

器台Ｇ類　脚部が台形状に開くもの。厚手で小型の精製器種とは様相が異なる。

器台Ｈ類　異形器台。炉形器台とも称されるものである。厚手で受部端部は丸みをもち、受部から脚部への貫通孔をもつものである。関東地方に類例が多くみられる。

高坏形土器（第126図）

脚部の形態差でＡ～Ｆ類に大別する。坏部・脚部の形状や坏部と脚部の相関関係でさらに細分する。調整は坏部内外面がタテやヨコ方向のミガキ、ヘラナデ、脚部外面はタテ方向のミガキである。

高坏Ａ類　「八」の字状に開く脚部をもつもの。畿内系ないし東海系土器の影響が考えられる。坏部の形態でさらに細別する。

Ａ１類　内彎しながら大きく開く椀形の坏部をもつ。県内では下横遺跡に類例がみられる。河川跡から１点のみの出土である。

Ａ２類　坏部底面が平らなもの。口縁部形状は不明である。

Ａ３類　口縁と底部の境が稜をなして屈曲し、内彎しながら外上方に開く坏部をもつ。脚部中位に円窓を４個穿つ。

Ａ４類　口縁部が屈曲して立ち上がり外反するもの。口縁端部は面をつくる。

高坏Ｂ類　脚部上半が柱状で、下半が「八」の字状に開くもの。

Ｂ１類　脚部上半が柱状中空を呈し、脚部下半が外反しながら開くもの。口縁と底部の境が稜をなして屈曲し内彎しながら外傾してのびる坏部をもつ。円窓を３個穿つ。

Ｂ２類　脚部上半が柱状中実を呈し、脚部下半が外反しながら開くもの。坏部の底面が平坦で、口縁と底部の境が稜をなして屈曲する。

高坏Ｃ類　脚上部が柱状中空で、脚下部が屈曲して外反しながら開くもの。坏部は口縁と底部の境が稜をなして屈曲し大きく外傾し、口縁端部は内折する。坏部高が脚部高のほぼ２分の１である。

高坏Ｄ類　脚部柱状部の上半が中実で、下半が中空のもの。脚下部は、屈曲して外反しながら「ハ」の字状に開くとおもわれる。坏部の形状は不明である。

高坏Ｅ類　脚上部が柱状中実のもの。坏部と脚部の高さの比により細分する。Ｅ１～Ｅ３にかけて、坏部高の脚部高に対する割合が大きくなる。

Ｅ１類　坏部高：脚部高がほぼ１：２であるもの。脚部下部は屈曲して内彎しながら外方にのびる。坏部は口縁と底部の境が稜をなして屈曲する。

Ｅ２類　坏部高：脚部高がほぼ１：１～２であるもの。坏部高が脚部高の２分の１以上のものである。脚下部は屈曲して外反しながら「ハ」の字状に開く。坏部は大きく外傾し口縁と底部の境が稜をなして屈曲する。脚部外面にハケメの痕跡を残す。

Ｅ３類　坏部高と脚部高がほぼ等しいもの。脚下部が屈曲して外反しながら「ハ」の字状に開く。

口縁と底部の境が稜をなして屈曲し、坏部が大きく外傾するもの（Ｅ３ａ）と、明瞭に段をもち、内彎しながら外上方に開く坏部をもつもの（Ｅ３ｂ）がある。

高坏Ｆ類　脚部が中膨らみの円錐状で、脚裾部の開きが大きいもの。高坏形土器の中でも新しい様相を持つ。ＳＧ252から１点のみの出土である。

壺形土器（第126・127・128図）

口縁部の形態により分類する。壺は口縁部の形態の違いで二重口縁壺と単純口縁壺に大きく分けられる。ここでは二重口縁壺に含まれる有段口縁壺（壺Ａ）と折り返し口縁壺（壺Ｂ）、単純口縁壺（壺Ｃ）に大別する。さらに口縁部や体部の形態差で細分をした。法量の扱いは甕形土器と同じである。調整は、口縁部内外面がヨコナデ、ミガキ、体部外面はハケ目の後、ミガキ、内面はヘラナデ、ハケ目を施しているものが多い。

壺Ａ類　有段口縁のもの。

Ａ１類　有段口縁を加飾したもの。東海系のパレス壺の影響が考えられる。

棒状浮文と円形浮文で装飾したもの（Ａ１ａ）と、口縁下端部に刻目のみられるもの（Ａ１ｂ）がある。

Ａ２類　有段口縁を加飾しないもの。

口縁内面の段が明瞭に作り出されたもの（Ａ２ａ）と、内面の段が簡略化し、痕跡的になってきたもの（Ａ２ｂ）、内面に段が見られないもの（Ａ２ｃ）がある。

壺Ｂ類　折り返し口縁のもの。

Ｂ１類　折り返し口縁を加飾したもの。棒状浮文で装飾し、頸部に刻目をもつ突帯を巡らせている。

Ｂ２類　折り返し口縁を加飾していないもの。

一般的な壺形のもの（Ｂ２ａ）と、広口壺の系譜を引くと考えられるもの（Ｂ２ｂ）がある。

壺C類　単純口縁のもの。

C１類　口縁部が外反し口縁端部を丸くおさめるもの。

体部が丸みをもつもの（C１a）と、体部がやや長胴のもの（C１b）がある。

C２類　口縁部が外反し口縁端部に面をもつもの。

頚部で屈曲し、外反するもの（C２a）、口縁内面に木口による刺突をしたもの（C２b）、口頚部が直立し、口縁部にかけて外反するもの（C２c）がある。

C３類　口縁部が外傾し、頚部に突帯が巡るもの。

C４類　口縁部が直立するもの。

C５類　口縁部が内彎するもの。

頚部で屈曲し、内彎するもの（C５a）と、頚部が直立し、口縁にかけて内彎するもの（C５b）がある。

壺D類　直口の壺である。

D１類　長頚の口縁部をもつもの。頚部で屈曲し、わずかに内彎しながら大きく開く。

D２類　短頚の口縁部をもつもの。

頚部のしまりが比較的強いもの（D２a）としまりの弱いもの（D２b）がある。D１類とは、器高に占める口縁部の高さの割合が低く、頚部のしまりも弱いものであることで識別される。

壺E類　小形の壺で口縁部が短いもの。

口縁部が外反するもの（E１）と、口縁部が内彎するもの（E２）、口縁部が直立するもの（E３）がある。

壺F類　小形品より小さく、ミニチュア土器といわれるものである。

甕形土器（第129・130図）

分類は、おもに口縁部断面形態によりA～Fに大別し、体部形態からさらに細別した。

法量は器高により、大形品（40cm前後）中形品（25cm前後）小形品（15cm前後）がある。出土点数の内訳は中形品、小形品の順に多く、大形品はごくわずかである。調整は口縁部内外面がヨコナデ、体部外面はハケ目、内面はヘラナデ、ハケ目が施されているものが多い。

甕A類　口縁部が有段で大きく外反するもの。北陸地方に通有にみられる壺形土器の口縁に類似するが、頚部のしまりの弱いこと、外面に煤の付着の顕著なことから甕に分類した。

体部は倒卵形で最大径を中程より上にもつ。外面の口縁部はヨコナデ、体部はハケメのあとヨコナデで調整する。

甕B類　口縁部が単純口縁で大きく外反するもの。

甕C類　口縁部が「く」の字状もしくは「コ」の字状を呈するもの。北陸北東部の「千種型甕」、「能登甕」などとよばれるものに近似する。

口縁部の微細な形状、体部形態により細分する。

C１類　口縁部が外反して口縁端部を上方につまみ上げて面を作り出すもの。

体部が倒卵形で最大径を中程より上にもつもの（C１a）、体部がやや長く、最大径を中程にもつもの（C１b）、体部が丸みをもつもの（C１c）などがある。

Ｃ２類　口縁部が外反して口縁端部に面を作り出すが、上方につまみ上げられないもの。
体部が倒卵形で、最大径を中程より上にもつもの（Ｃ２ａ）、体部がやや長く最大径を中にもつもの（Ｃ２ｂ）、体部が球形に近い丸みをもつもの（Ｃ２ｃ）がある。

Ｃ３類　口縁部が外反して、口縁端部が丸くおさまるもの。
体部の最大径を中程よりやや上にもつもの（Ｃ３ａ）、体部がやや長く、最大径を中程にもつもの（Ｃ３ｂ）、体部が丸みをもつもの（Ｃ３ｃ）がある。

Ｃ４類　口縁部が外傾して、口縁端部が丸くおさまるもの。
体部の最大径を、中程よりやや上にもつもの（Ｃ４ａ）、体部がやや長く、最大径を中程にもつもの（Ｃ４ｂ）、体部が丸みをもつもの（Ｃ４ｃ）がある。

甕Ｄ類　口縁部の断面がいわゆる「Ｓ字状」をなすもの。東海地方の系譜に連なるものと考えられるが、東海地方のものと比較するとかなり変形している。

甕Ｅ類　脚台をもつもの。甕Ｄ類の台部と考えられる。
台部外面はハケメのあとナデ消している。内面は砂混じりの土を補充し、なでつけている。

甕Ｆ類　Ａ～Ｄの概念より外れるもの。

Ｆ１類　口縁径が器高とほぼ同じか、超えるもの。体部最大径を中程より上にもつ。
口縁部が外反するもの（Ｆ１ａ）と、内彎するもの（Ｆ１ｂ）がある。

Ｆ２類　口縁径が器高とほぼ同じか、超えるもの。体部が丸みをもつもの。

Ｆ３類　口縁径が器高を超えるもの。体部の膨らみが少ないもの。

Ｆ４類　口縁径が器高を超えるもの。体部が底部にかけてすぼまり、尖底のもの。

Ｆ５類　手捏ねで全体に稚拙な作りのもの。輪積み痕が顕著に残る。

小型土器（第126図）
手捏成形によるもので、壺形、高坏形、鉢形などの形態がある。

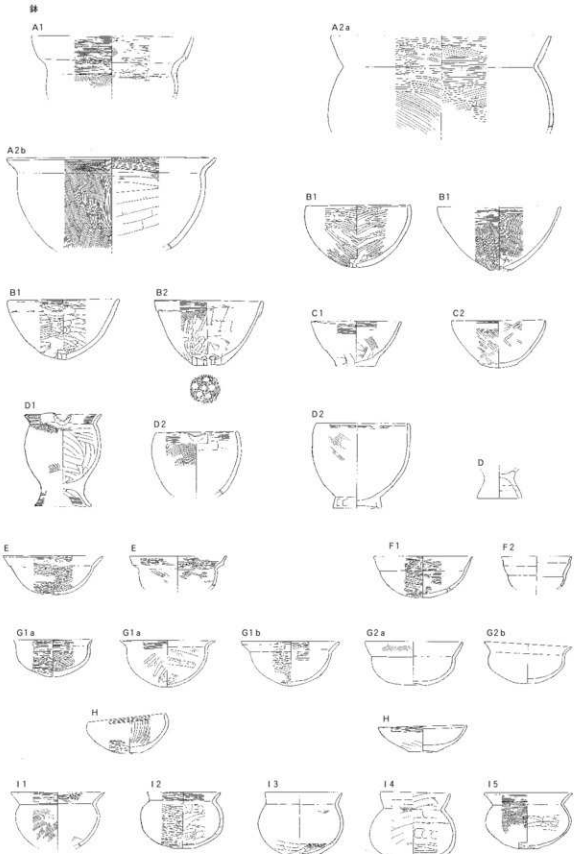
蓋（第126図）
主に鉢や壺の蓋に用いられたものである。
わずかに内彎する体部をもつ。頂部の形態は不明である。一点のみの出土である。

高擶南遺跡からは、古墳時代前期のものと考えられる住居跡が25棟検出されている。出土遺物も古墳時代前期に比定されるものである。包含層・河川跡出土を含めて分類を行ったために土器の様相に時間的な幅をもつ結果となった。ここでは、竪穴住居出土の土器群を「新潟シンポジウム編年」(1993) に対比し、概ね２期に分けて述べることにする。

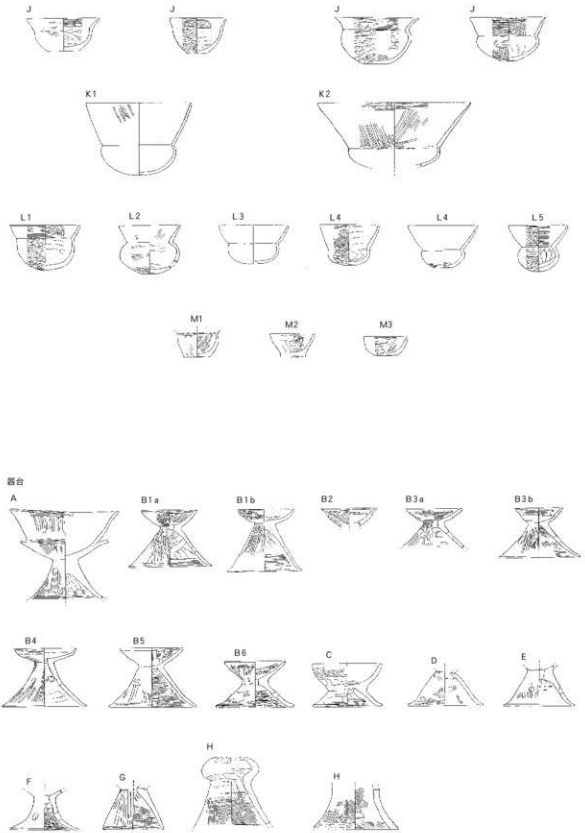
１期　ＳＴ９・ＳＴ205・ＳＴ209・ＳＴ212出土の土器が相当する。

壺はＣ１ａ、Ｃ１ｂ、Ｄ１、Ｄ２ｂ類、甕はＢ３ａ、Ｃ３ａ、Ｃ４ｃ、Ｃ５ｂ類が認められる。Ｃ類は北陸北東部（能登）に系譜がもとめられる、所謂「く」の字口縁甕で、口縁端部を丸くおさめるものである。

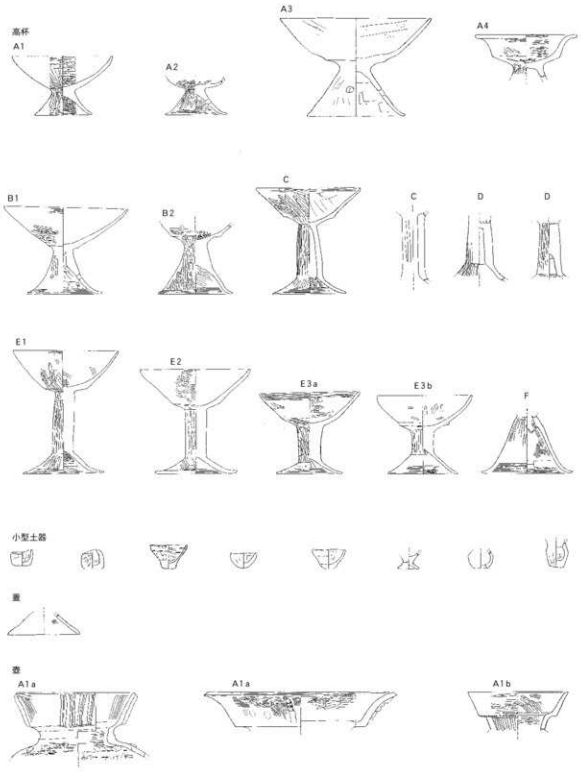
器台はＢ４類がある。鉢はＡ２ａ、Ｂ１、Ｋ２類で大形のものである。高坏はＡ１・Ａ３、



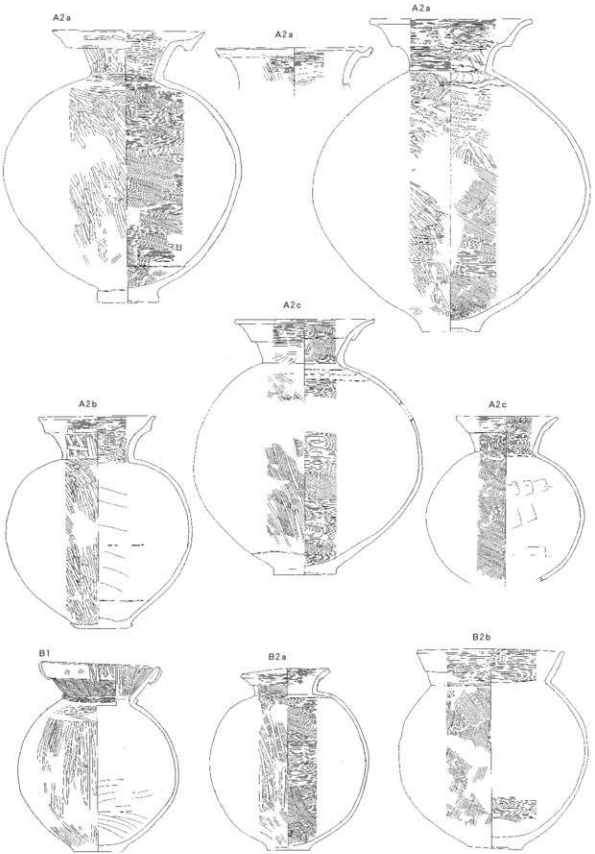
第124図　土師器分類図（1）



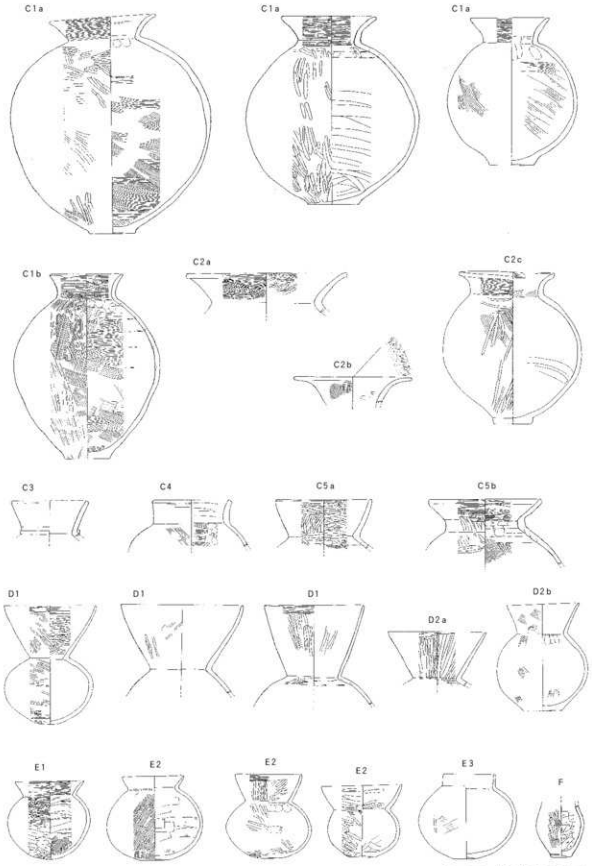
第125図　土師器分類図（2）



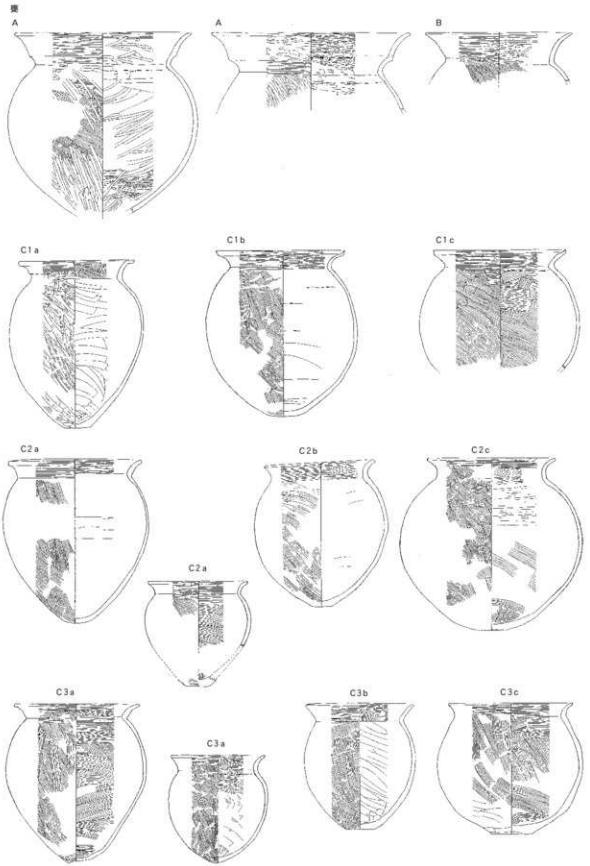
第126図　土師器分類図（3）



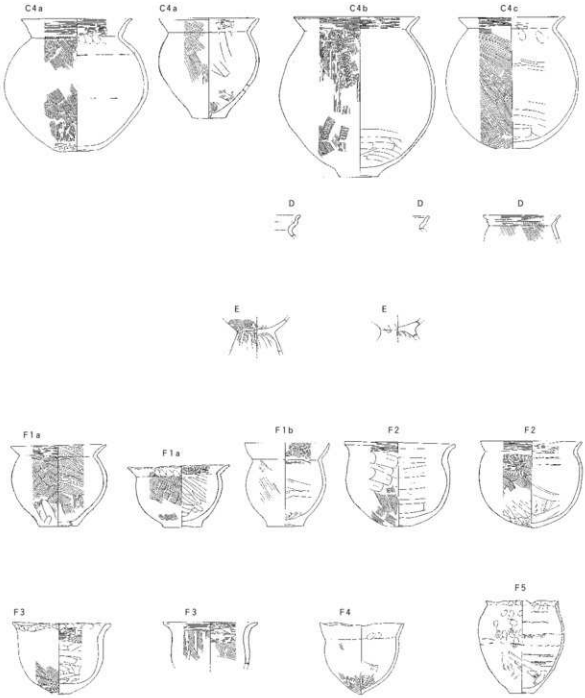
第127図　土師器分類図（4）



第128図　土師器分類図（5）



第129図　土師器分類図（6）



第130図　土師器分類図（７）

表1　土師器組成表（1）

	甕																									
	A	B	C1	C1a	C1b	C1c	C2	C2a	C2b	C2c	C3	C3a	C3b	C3c	C4	C4a	C4b	C4c	D	E	F1a	F1b	F2	F3	F4	F5
ST 1																				○						
ST 2											○															
ST 3			○				○																			
ST 4																										
ST 5																										
ST 6																										
ST 7							○													○						
ST 8															○											
ST 9																										
ST10																										
ST12								○			○		○	○												
ST14																										
ST15							○																			
ST201							○																			
ST202				○	○		○			○	○					○	○	○			○		○			
ST204									○						○	○										
ST205											○	○					○	○	○							
ST206																										
ST208																										
ST209							○									○										
ST210																										
ST211												○	○													○
ST212							○					○			○											
SK24							○																			
SK26																										
SK27																										
SK28																										
SK31	○						○	○	○	○	○	○	○	○								○				
SK32			○					○		○														○		
SK33																										
SK258							○	○			○															
SK278			○				○				○	○	○													
SK304																										
SK318																										
SK337																										
SK340			○																							
SK348										○																
SD260			○				○						○	○							○					
SD261			○								○															
SD262		○				○	○	○			○	○	○		○											
SD344						○																				
SX273																										
SG114		○					○					○					○						○			
SG252	○							○				○	○	○		○	○							○		
包含層							○		○		○	○			○		○		○	○					○	

	壺																							
	A1a	A1b	A2a	A2b	A2c	B1	B2a	B2b	C1a	C1b	C2a	C2b	C2c	C3	C4	C5a	C5b	D1	D2a	D2b	E1	E2	E3	F
ST 1							○																	
ST 2							○																	
ST 3																								
ST 4																								
ST 5																								
ST 6																								
ST 7							○																○	
ST 8				○			○												○					
ST 9																								
ST10																								
ST12							○			○		○						○		○				
ST14																								
ST15				○																				
ST201					○																			
ST202	○						○	○	○										○	○	○	○		
ST204																				○				
ST205									○	○							○	○		○				
ST206					○		○												○					
ST208				○			○			○														
ST209										○														
ST210						○	○															○		
ST211				○																				
ST212			○	○																				
SK24																								
SK26																								
SK27																								
SK28																								
SK31		○																	○					
SK32					○					○														
SK33																								
SK258																	○							
SK278	○		○		○																			
SK304																						○		
SK318																								
SK337																								
SK340																								
SK348																								
SD260			○	○	○					○	○				○									
SD261																			○					
SD262			○							○			○				○							
SD344																								
SX273				○	○																			
SG114				○																				
SG252			○	○						○	○		○			○		○				○		○
包含層				○	○				○					○				○						

	高坏								
	A1	A2	A3	A4	B1	B2	C	D	E
ST 1									
ST 2									
ST 3									
ST 4									
ST 5									
ST 6									
ST 7									
ST 8									
ST 9			○						
ST10									
ST12									
ST14									
ST15									
ST201									○
ST202									
ST204									○
ST205				○	○				
ST206									
ST208									
ST209									
ST210									
ST211							○		○
ST212									
SK24									
SK26									
SK27									
SK28									
SK31						○			
SK32									
SK33									
SK258						○			
SK278									
SK304									
SK318									
SK337									
SK340									
SK348									
SD260									
SD261									
SD262								○	
SD344									
SX273									
SG114									
SG252	○	○				○			○
包含層	○		○				○	○	○

表２　土師器組成表（２）

	高坏					器台																鉢																																						小型土器	蓋
	E1	E2	E3a	E3b	F	A	B	B1a	B1b	B2	B3a	B3b	B4	B5	B6	C	D	E	F	G	H	A1	A2a	A2b	B1	B2	C	C1	C2	D	D1	D2	E	F1	F2	G1a	G1b	G2a	G2b	H	I1	I2	I3	I4	I5	J	K	K1	K2	L	L1	L2	L3	L4	L5	M1	M2	M3		
ST 1																																																												
ST 2																																																												○
ST 3																																○																					○						
ST 4																																		○																									
ST 5																																																	○										
ST 6																																																											
ST 7																				○									○								○		○													○							
ST 8						○	○											○		○				○															○																				
ST 9																																																											
ST10																				○																			○																				
ST12						○																																																			○		
ST14																																						○																					
ST15																																																											
ST201																								○								○																					○					○	
ST202			○						○			○	○													○							○				○	○			○					○			○		○	○		○						
ST204																																																											
ST205												○										○		○		○															○						○											
ST206																																																	○										
ST208													○				○																																○								○		
ST209																																																											
ST210																																								○																			
ST211						○													○																										○				○										
ST212							○																			○																								○									
SK24																																																	○					○					○	
SK26																																																											
SK27																																																							○				
SK28																	○																																									
SK31							○		○															○										○																		○							
SK32																																○																	○										
SK33																																																											
SK258								○			○																																																
SK278							○			○					○			○														○																											
SK304																																																											
SK318																																																											
SK337														○			○																																										
SK340																																○																											
SK348																																																											
SD260							○	○	○	○			○			○								○	○		○										○										○								○					
SD261	○	○					○	○																																																			
SD262			○				○	○									○	○				○		○	○			○	○			○																			○									
SD344																																																○												
SX273																																																											
SG114								○																		○																		○															
SG252	○			○	○		○	○						○			○							○	○		○		○		○		○			○	○							○						○	○			○	○		○		○	
包含層	○	○	○				○	○					○				○	○							○	○						○	○			○			○	○	○										○							○	○	

Ａ４類で、脚部が円錐台状のものである。これらは、東海地方の元屋敷土器に系譜がもとめられるもので、東日本に定着をみている。Ａ３類はＳＴ９床面からの１点のみの出土である。

古墳時代前期において、高坏の坏部は椀形から扁平化し、脚部は内彎から内反、柱状化の変遷が認められている。

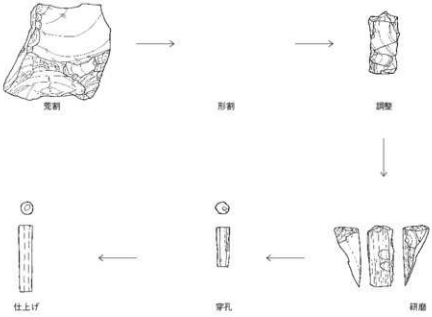
２期　ＳＴ７・ＳＴ15・ＳＴ201・ＳＴ202・ＳＴ210・ＳＴ211出土の土器が相当する。

壺は、Ａ１ａ、Ａ２ａ、Ａ２ｂ、Ｂ１、Ｂ２ａ、Ｂ２ｂ、Ｃ１ａ類が認められる。Ａ１ａ類は有段口縁を棒状浮文や円形浮文で加飾したもので、東海系の系譜がうかがえるものである。Ｂ２ｂ類は広口壺の系譜を引くと考えられるもので、関東地方にその系譜がうかがえるものである。有段口縁で頸部に隆帯を巡らす壺Ｂ１類は漆町編年では７～８期、辻編年ではⅡ期に確認例が多いとされ、浮文で加飾したものは漆町編年では７～８期、辻編年ではⅡ－１～Ⅲ－２期に比定されている。

甕はＢ２ａ、Ｃ１ａ、Ｃ１ｂ、Ｃ２ｃ、Ｃ４ｂ、Ｃ４ｃ、Ｄ２ａ、Ｄ２ｂ、Ｅ１、Ｆ１ａ、Ｆ２類とバラエティーに富んでいる。Ｃ類は、北陸北東部に系譜がもとめられる所謂「く」の字口縁甕で、Ｃ１ａ、Ｃ１ｂ、Ｃ２ｃは口縁端部に面をもつ。

器台は、Ａ、Ｂ３ｂ、Ｂ４、Ｈ１類が認められ、Ａ類は装飾器台で北陸地方に系譜がたどれるものである。Ｈ１類は、関東地方に特に多く分布する異形器台であり、炉形器台とも呼称されているものである。Ｂ３ｂ、Ｂ４類は浅い坏部をもつ所謂畿内系の小型器台である。

鉢はＥ２、Ｆ１、Ｇ２ａ、Ｇ２ｂ、Ｊ、Ｌ１、Ｌ３、Ｌ４類が認められる。Ｌ類は小型精製



第131図　管玉製作工程図

土器の小型丸底土器である。

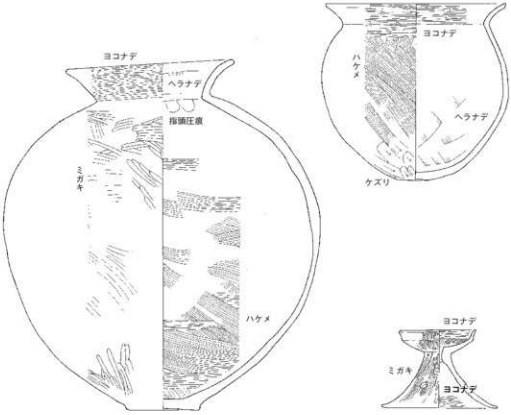
高坏はC、E１、E２、E３類が認められる。C類は脚部が棒状中空・E類は棒状中実化したものであるが、ＳＴ211竪穴住居跡からは両者が共伴して出土している。ＳＴ202竪穴住居跡からは、精製品を中心として、多様な器種の土器が出土している。

これらを「新潟シンポジウム編年」に対比するならば、１期は同編年の７期段階を中心とした時期に位置づけられる。ＳＴ９竪穴住居跡は、脚部が円錐台状の高坏Ａ３類の出土がみられることから、この中でも古い様相をもつものである。２期は同編年の８～９期段階を中心とした時期と考えられる。１期・２期は４世紀初頭から中葉に位置づけられるものである。

6　管玉の製作工程

今回の調査では、住居跡内の床面及び堆積土中、包含層などから管玉完成品３点、製作途中の未成品７点、剥片２点、製作段階に生じた細片が出土した。製作に伴う用具は、砥石１点が認められた。

古墳時代の管玉製作工程については、寺村光晴氏によれば、荒割→形割→調整（押圧剥離）→研磨→穿孔→仕上げの６工程が認識されている。当遺跡の出土遺物には、母岩（石核）から



第132図　土師器調整痕凡例

剥片を作り出す荒割工程段階のもの（313・433）、荒割したものから角柱状の素材を作り出す形割工程段階を経て、角柱状の側面に押圧剥離の細かな調整を加え四角柱に作り出された調整段階のもの（29・715・716・717・718）がみられる。さらに研磨して多角柱を作り出す過程において欠けたものが（714）である。

研磨は、長軸に対して平行に施され、側面が多角柱状に作り出された素材に穿孔される。（713）は穿孔が斜めに施され、その後の仕上げの全面研磨において側面に孔が貫通してしまったものである。多角柱状の外面を全面研磨して仕上げた完成品として（335・371・372）がみられる。これらは上下両端から穿孔され、中央付近で貫通している。砥石（70）は研磨行程の段階に使用したものである。

作り出された管玉は、細形管玉の範疇に入るものであり、材質は玻璃質流紋岩や泥岩を使用している。

古墳時代前期後半以降～中期にかけて、全国的に北陸産の緑色凝灰岩や流紋岩が流通する。グリーン・タフを形成する新第三紀の諸累層は、山形盆地をとりまく丘陵および山地地域にも厚く形成されており、石材の採取は可能と考えられる。管玉の製作技法からは、出土土器と同様に北陸地方及び新潟県の日本海沿岸から攻玉の技術の導入がなされたことが考えられ、古墳時代前期における当地方との交流が窺えるものである。

これらの未成品、剥片、製作段階に生じた細片などの出土から、本遺跡は管玉の生産遺跡であることが考えられる。今回の調査範囲からは、生産遺跡としての工房跡は確認されなかったが、さらに南西に延びる遺跡範囲に、種々の要素が存在する可能性が指摘できよう。消費地の検討は今後の課題である。

7　調整技法凡例

土器の記述や観察表に表した調整の技法に関連して、本報告で使用した用語の概念を凡例として次に述べる。（第132図，写真図版21）

ケズリ　いわゆる従来の「ヘラケズリ」であり、ヘラ状の工具によって粘土を削り取ったもので、実測図には削平幅とその方向を矢印で表現した。器面の粘土を削り取ることによって、器厚を調節することを目的とする。器種を問わずみられるが、体部下半に多く施される。

ハケメ　板片を工具ととして用いていると考えられる。甕・壺・鉢の体部にみられ、余分な粘土の移動を行うことにより、器厚の均一化、器壁の平滑化などを図っているものと考えられる。また、条痕による表面積の増大などの効果も得られると推量される。

甕や鉢の底部内面、高坏・器台の脚部内面などには、明らかに器面の粘土のカキとりを目的として調整をおこなっているものも見られる。

工具幅は認められるが、条痕が明瞭でないものも見られる。これは、工具の角度や力の入れ方など、作業の状況によって生じ得るものとも推量される。

このように、同じ板状工具を用いて様々な機能を果たしていることが観察されるが、ここでは、条痕が観察されるものを一括してハケメとして表記する。

ヘラナデ　板片を工具としていると考えられ、工具幅の内側に細かい擦痕を伴うことが多い。内面調整に多用されることが多く、ハケメに比べて、より平滑化に力点を置いているものと推

量される。甕・壺・鉢の内面、高坏・器台の脚部内面などに最終的な器面調整として用いられる。実測図には、工具幅とその軌跡のみを表現した。

ヨコナデ　微細な平行線が認められるもので、指・布・皮などを工具としたと考えられる。すべての器種にみられ、口縁部や高坏・器台の脚部下半に施される。最終的に器面をなでて仕上げる手法。

ナデ　ナデ調整とされるもので、指頭あるいは布・皮などを用いたと考えられるが、具体的な道具は推定しがたい。器面の凹凸はほとんど見られないため、実測図には表現しない。

ミガキ　いわゆる「ヘラミガキ」で、ヘラ状工具で器面の粘土を押しつけて緻密にし、光沢仕上げをする方法である。一般に数ミリから１㎝内外の幅を持つものが多いが、細線を暗文風に施したものもある。すべての器種にみられるが、とくに壺外面や精製土器には多用される。

指頭圧痕　いわゆる「指オサエ」で、調整というよりはむしろ成型作業上の一行為である。押捺により、粘土紐接合面を密着させて器壁を締め、平滑にする。甕・壺・鉢などの内面に多く用いられる。いわゆる手捏土器などの成形手法でもある。また、丸底の鉢の底部内面には、指頭でナデつけた圧痕が放射状に施されるものもある。ここでは、指オサエやナデつけなどを、指頭圧痕として一括した。

8　調査のまとめ

高擂南遺跡の発掘調査は、山形県警察本部による山形県総合交通安全センター（仮称）の建設事業に伴って、２次にわたって実施されたものである。調査の成果について以下にまとめてみたい。

1.　高擂南遺跡は、立谷川を挟んで山形市に隣接する天童市の南端部に所在し、立谷川と村山高瀬川によって形成された複合扇状地である立谷川扇状地の前縁帯に立地する遺跡であることがわかった。
2.　高擂南遺跡の１次調査と２次調査で検出された遺構は、竪穴住居跡、土坑、溝跡、畝状遺構、河川跡などがあり、時期的には、いずれも古墳時代前期に属するものであることがわかった。
3.　第１次調査では、14棟の竪穴住居跡、７基の土坑のほか、畝状遺構、河川跡などが検出され、土師器や土玉などの土製品、砥石や管玉などの石製品が出土した。
4.　第２次調査では、11棟の竪穴住居跡、９基の土坑、５条の溝跡のほか、畝状遺構、性格不明遺構、河川跡などが検出され、土師器や土玉、紡錘車などの土製品、農具や紡織具などの木製品、砥石や管玉などの石製品が出土した。また、遺構検出面の下から弥生時代後期の土器が出土し、生活の痕跡が認められないことから、当該集落が営まれる以前に、何らかの状況で投棄されたものであることがわかった。
5.　第１次調査の成果から、遺構は遺跡の東半部に集中し、西半部は、泥炭が露頭する低湿地であることがわかった。また第２次調査の成果から、集落は河川跡によって東を画されているであろうことが推察できた。総じて当該集落は、立谷川の自然堤防上の微高地に立地し、河川によって東を画され、集落の中心部は第２次調査区の西に求められるであろう

ことが推量される。

6．　第１次、第２次の調査を通して、管玉に関わる遺物が多く出土し、製作途中の未成品や管玉を研磨したと考えられる砥石などもあることから、工房跡こそ検出できなかったが、玉作を行っていた集落であることが考えられる。また織具の部品や紡錘車の出土、鍬などの農具、祭祀に用いたと考えられる刀形木製品、それに管玉関係遺物などから、米作りを主体にしながらも、玉作や紡織を行っていた当該集落のくらしのようすが推察される。

7．　出土した土師器には、北陸地方の特徴を残すものや東海・関東地方の特徴を残すものがみられるほか、かなり地域色の濃いものもみられる。北陸地方や関東地方の特徴を残すことについては、当該遺跡の土器群が、この地に到るまでに辿った道程を示唆しているのではないかと考えられる。

北陸系の文化と関東系の文化が出遇うことについては、『古事記』の「四道将軍」派遣に係る「相津」説話が、実に示唆に富んでいると思われる。『古事記』には「……またこの御世に、大毘古（おおびこ）の命を高志（こし）の道に遣わし、その子健沼河別（たけぬなかわわけ）の命を東の方十二道に遣して、そのまつろはぬ人どもを言向（ことむ）け和（やわ）さしめたまひ、……かれ大毘古の命は、命（めい）のまにまに、高志の國に罷（まか）り行でましき。ここに東の方より遣わしし健沼河別、その父大毘古と共に、相津（あいづ）に往き遇（あ）ひき。かれ其地（そこ）を相津といふ。……」と見える。

『日本書紀』には、「相津」に係る話はないが、四道将軍の派遣については、崇神天皇10年９月のこととしており、大毘古は大彦、健沼河別は武渟川別と表記されている。

少し乱暴な言い方をすれば、北陸方面と関東方面の土器が途中の地域色を吸収しながら、北上して会津（相津）で出遇い、檜原峠や大峠、白布峠など吾妻連峰の鞍部を経て、内陸路により当該地に到るルートが想起されるのではないだろうか。これについては、向後の資料の増加によって解明される時期を俟ちたい。

引用・参考文献

石川県立埋蔵文化財センター　1986 『漆町遺跡１』
財団法人愛知県埋蔵文化財センター　1990 『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書集第10集
日本考古学協会新潟大会実行委員会　1993　新潟大会シンポジウム２『東日本における古墳出現過程の再検討』
奈良国立文化財研究所　1993 『木器集成図録　近畿原始篇』
寺村光晴　2002「玉作とその流通」『ものづくりの考古学－原始・古代の人々の知恵と工夫－』大田区立郷土博物館編・東京美術

表３　竪穴住居跡観察表

遺構番号	位置	平面形	主軸方向	規模(m)	深さ(cm)	長辺方向	ピット貯蔵穴	炉	柱穴	出土遺物(主なもの)	備考
ＳＴ１	173・392～177・394	方形	Ｎ－41－Ｗ	(3.6)×(2.1)	32	不明	不明	不明	不明	土師器(壺２、甕１)	焼失家屋
ＳＴ２	167・393～173・397	長方形	Ｎ－29－Ｗ	3.4×4.7	12	東西	不明	地床炉	なし	土師器(壺１、壺１、甕３)	焼失家屋
ＳＴ３	168・391～172・393	方形	Ｎ－５－Ｗ	(3.3)×3.4	16	南北	不明	地床炉	なし	土師器(鉢２、壺１、甕９)	焼失家屋
ＳＴ４	165・390～168・392	方形	Ｎ－13－Ｗ	(2.4)×(2.2)	20	不明	不明	不明	なし	土師器（高坏１、鉢２、壺２、甕２）管玉１	焼失家屋
ＳＴ５	163・389～166・391	方形	Ｎ－34.5－Ｗ	(2.4)×(2.1)	12	不明	不明	不明	なし	土師器（高坏１、鉢１、壺１）	
ＳＴ６	143・384～145・386	正方形	Ｎ－１－Ｗ	2.5×2.4	12	南北	ピット３	地床炉	なし	土師器(鉢１、甕１)	
ＳＴ７	136・384～143・388	方形	Ｎ－13－Ｗ	(4.5)×5.2	24	不明	不明	地床炉	（２）	土師器（器台１、鉢２、壺４、甕９）土玉２	焼失家屋
ＳＴ８	124・378～132・382	方形	Ｎ－41.5－Ｅ	(5.1)×5.4	20	不明	不明	地床炉	なし	土師器（器台４、高坏１、鉢２、甕２）砥石１	焼失家屋
ＳＴ９	120・379～126・382	方形	Ｎ－21－Ｅ	(4.3)×6.1	8	不明	不明	地床炉	なし	土師器（高坏１）	
ＳＴ10	115・377～121・381	方形	Ｎ－44－Ｅ	(4.2)×5.7	28	不明	不明	不明	なし	土師器（器台１、甕３）砥石１	
ＳＴ11	118・375～122・377	方形	Ｎ－38－Ｅ	(1.2)×(4.4)	20	不明	不明	不明	不明	なし	
ＳＴ12	112・374～117・379	正方形	Ｎ－12.5－Ｗ	3.8×４	32	東西	不明	地床炉	なし	土師器（器台１、鉢３、壺５、甕５）	焼失家屋
ＳＴ14	109・377～111・378	方形	Ｎ－49－Ｗ	(2.4)×(1.5)	28	不明	不明	不明	不明	土師器（鉢１）	
ＳＴ15	106・371～111・374	方形	Ｎ－26.5－Ｗ	（１）×5.2	28	不明	貯蔵穴１	不明	不明	土師器（高坏２、壺１、甕４）	
ＳＴ201	174・384～180・390	方形	Ｎ－16.5－Ｅ	(3.9)×５	25	不明	なし	地床炉	なし	土師器（器台１、高坏４、鉢３、壺２、甕５、小型土器１）	焼失家屋
ＳＴ202	174・353～181・360	方形	Ｎ－13.5－Ｗ	5.75×6.2	22	東西	貯蔵穴１ピット３	なし	４	土師器（器台６、高坏３、鉢７、壺19、甕11）土玉１、砥石１	焼失家屋
ＳＴ204	189・351～192・354	正方形	Ｎ－12.5－Ｗ	2.5×2.6	2	東西	なし	地床炉	なし	土師器（高坏１、壺１、甕６）	焼失家屋
ＳＴ205	169・362～173・368	長方形	Ｎ－3.5－Ｅ	5.15×4.4	3	南北	なし	地床炉	なし	土師器（器台２、高坏１、鉢５、壺10、甕７）	焼失家屋
ＳＴ206	170・370～183・373	正方形	Ｎ－12.5－Ｗ	2.85×2.75	6	南北	貯蔵穴１	なし	なし	土師器(鉢１、壺６)	焼失家屋
ＳＴ208	162・381～169・386	擬正方形	Ｎ－39－Ｅ	4.8×4.5	25	南北	土坑１ピット２	地床炉	なし	土師器（器台３、鉢１、壺２、小型土器１）	焼失家屋
ＳＴ209	195・370～201・376	正方形	Ｎ－18.25－Ｗ	4.55×4.4	8	南北	なし	地床炉	なし	土師器(壺４、甕２)	焼失家屋
ＳＴ210	190・380～195・385	正方形	Ｎ－36.5－Ｗ	3.7×3.9	4	東西	なし	地床炉	なし	土師器(鉢１、壺４)	焼失家屋
ＳＴ211	193・383～200・390	正方形	Ｎ－26.5－Ｅ	5.5×5.35	25	南北	貯蔵穴１ピット２	地床炉	４	土師器（器台２、高坏５、鉢４、壺６、甕４）管玉原石１	
ＳＴ212	177・377～182・382	擬正方形	Ｎ－14.5－Ｅ	4.5×4.2	7	南北	ピット２	地床炉	なし	土師器（器台２、鉢３、壺４、甕３）土製紡錘車１、管玉１	焼失家屋
ＳＴ213	169・359～171・362	長方形	Ｎ－６－Ｅ	1.9×2.3	0	東西	なし	地床炉	なし	なし	焼失家屋

表４　土坑観察表

遺構番号	位置	平面形	規模（cm）		深さ（cm）	出土遺物（主なもの）	備考
			長軸	短軸			
ＳＫ24	146・384～148・385	不整形	178	158	45	土師器（鉢２、小型土器１、壺１、甕１）	
ＳＫ26	151・387～152・388	楕円形	155	83	14	土師器（壺１、甕１）	
ＳＫ27	153・388～154・388	不整形	180	75	27	土師器（鉢１、甕１）	ＳＫ26を切る
ＳＫ28	149・388～150・389	不整形	90	68	12	土師器（器台１）	
ＳＫ31	117・377～119・378	隅丸方形	198	110	60	土師器(器台３、高坏１、鉢３、壺３、甕15)	
ＳＫ32	145・387～147・387	不整形	175	185	64	土師器（鉢４、壺３、甕４）	
ＳＫ33	123・377～123・778	楕円形	175	117	18	土師器細片	
ＳＫ253	199・344～201・344	不整形	70	61	26	土師器（壺１）	
ＳＫ255	189・370～190・371	不整形	136	93	12	土師器細片	ＳＤ260を切る
ＳＫ258	172・366～174・365	不整形	228	89	34	土師器(器台２、高坏１、鉢２、壺２、甕９)	
ＳＫ278	178・379～179・381	不整形	328	137	62	土師器（器台６、鉢２、壺４、甕６） 石製品（管玉２）	
ＳＫ304	165・373～165・374	不整形	90	88	18	土師器（壺１）	
ＳＫ318	186・363～188・365	不整形	231	204	22	土師器細片	ＳＤ260を切る
ＳＫ337	189・384～190・386	不整形	130	90	23	土師器（器台２）	
ＳＫ340	193・363～195・362	方形	126	108	14	土師器（鉢１、壺３、甕２）	
ＳＫ348	207・381	円形	52	48	19	土師器（甕１）	

表５　溝跡観察表

遺構番号	位置	長さ（m）	幅(cm)		深さ（cm）	出土遺物（主なもの）	備考
			最長幅	最短幅			
ＳＤ260	170・345～208・392	63	210	90	43.5	土師器(器台11、高坏５、鉢６、壺15、甕14) 石製品（剥片１）	ＳＴ202に切られる
ＳＤ261	178・366～182・376	10.4	160	60	45	土師器（器台２、高坏３、壺４、甕11）	
ＳＤ262	164・375～169・383	8.8	95	45	22.5	土師器(器台６、高坏３、鉢８、壺８、甕19)	
ＳＤ319	179・361～182・363	9.3	25	15	6	なし	円形周溝 長さは外径を表す
ＳＤ344	198・368～202・367	4.5	70	50	8	土師器（鉢１、壺１、甕１）	

表6　木製品観察表

図版	写真図版	器種名		法量(mm)			木取り等	樹種	RWNo.	備考
				全長	幅	厚さ				
582	16	農具	鍬起具	直柄横鍬	231	250	44	柾目	ブナ科コナラ属 コナラ亜属クヌギ節	2045
583	16	農具	鍬起具	一木平鍬か	(352)	(115)	20	板目	スギ科スギ属スギ	2163	スリット状の部分は欠損部
584	16	農具	収穫具	竪杵	(426)	104	(32)	芯持ち割り出し	ブナ科コナラ属 コナラ亜属コナラ節	2159	端部欠損
585	16	容器	刳物	櫃	(373)	(120)	(52)	割材割り出し	スギ科スギ属スギ	1979
586	16	容器	刳物	櫃	(380)	(58)	25	割材割り出し	スギ科スギ属スギ	2094	木釘痕
587	16	容器	刳物	台付盤	(199)	99	38	割材割り出し	トチノキ科トチノキ属 トチノキ	2151
588	16	用途不明品	板状具	その他	243	(61)	8	柾目	ヒノキ科アスナロ属	2160	木釘痕
589	16	用途不明品	板状具	その他	(165)	(107)	14	柾目	スギ科スギ属スギ	2162	樺皮とじ・くさび付き・木釘痕
590	16	容器	刳物	櫃	(199)	99	38	割材割り出し	スギ科スギ属スギ	2127
591	17	用途不明品	枠組木製品		(453)	(462)	(46)	骨木　割材割り出し 横木　柾目	鍛冶　カツラ科カツラ属カツラ 横桟　スギ科スギ属スギ	2070
592	17	建築部材	梯子		(1,353)	171	49	割材割り出し	ヤナギ科ヤナギ属	2071
593	17	用途不明品	枠組木製品か		(530)	415	12	柾目	スギ科スギ属スギ	2070	竹付
594	17	用途不明品	枠組木製品		542	42	16	柾目	スギ科スギ属スギ	2070	竹付　端部欠損
595		用途不明品	枠組木製品		436	40	16	柾目	スギ科スギ属スギ	2070	591に含む
596		用途不明品	枠組木製品		380	37	16	柾目	スギ科スギ属スギ	2070	591に含む
597	17	用途不明品	枠組木製品か		(528)	42	11	柾目	スギ科スギ属スギ	2070	穿孔1　両端欠損
598	17	用途不明品	板状具	有孔板	(51)	42	11	板目	ヒノキ科アスナロ属	2017	穿孔1　両端欠損　端部粋
599	17	用途不明品	枠組木製品か		(372)	38	7	柾目	スギ科スギ属スギ	2070	竹付　端部欠損
600	18	祭祀具	形代	刀形	(487)	21	10	柾目	ヒノキ科アスナロ属	2156
601	18	用途不明品	板状具	有孔板	477	86	14	割材割り出し	スギ科スギ属スギ	2095	穿孔2
602	18	用途不明品	棒状具	先尖棒	(550)	(18)	(23)	割材割り出し	スギ科スギ属スギ	2038	端部欠損
603	18	用途不明品	棒状具	先尖棒	(530)	15	12	割材割り出し	スギ科スギ属スギ	2019	端部欠損
604	18	用途不明品	板状具	先尖棒	(206)	19	4	板目	スギ科スギ属スギ	2087	片面浅く緩やかな丸みに割る
605	18	用途不明品	棒状具	先尖棒	(149)	20	11	割材割り出し	スギ科スギ属スギ	
606	18	用途不明品	棒状具	先尖棒	291	20	20	割材割り出し	スギ科スギ属スギ	2089	両端欠損
607	18	用途不明品	棒状具		(183)	16	9	割材割り出し	スギ科スギ属スギ	2307	両端欠損
608	18	用途不明品	棒状具	先尖棒	(286)	18	18	割材割り出し	スギ科スギ属スギ	
609	18	用途不明品	棒状具	その他	(126)	13	19	柾目	スギ科スギ属スギ	2090	両端欠損
610	18	用途不明品	棒状具	先尖棒	(150)	33	27	割材割り出し	モクセイ科トネリコ属	2093	先端強面多段削り尖らせる
611	18	用途不明品	板状具	その他	202	34	9	柾目	スギ科スギ属スギ	2072
612	18	用途不明品	棒状具	その他	110	33	20	柾目	スギ科スギ属スギ	2070
613	18	用途不明品	棒状具	その他	215	25	15	柾目	スギ科スギ属スギ	2308	両端欠損　樺皮とじ
614	18	用途不明品	棒状具	有頭棒	(330)	36	28	丸太材	カバノキ科ハンノキ属	2016	頭皮残る
615		用途不明品	棒状具		(151)	32	29	丸太材	カバノキ科ハンノキ属	2025	両端欠損　先端多面に削り出し　頭皮残る
616	18	結束具	織機	経(布)巻具	(248)	26	17	割材割り出し	ヒノキ科クロベ属クロベ	2167	端部欠損
617	18	用途不明品	その他		170	61	(33)	割材割り出し	ブナ科コナラ属 コナラ亜属コナラ節	2157	ソケットか
618	18	用途不明品	その他		(187)	(108)	45	割材割り出し	クロウメモドキ科 ケンポナシ科ケンポナシ	2152	片側強面を刃状に削り出している
619	18	用途不明品	板状具	その他	(616)	49	16	割材割り出し	スギ科スギ属スギ	1978	両端欠損
620	19	用途不明品	棒状具	その他	1,065	105	65	割材割り出し	ニレ科ニレ属	2154	建築部材か
621	19	用途不明品	棒状具	先尖棒	(810)	45	38	割材割り出し	モクセイ科トネリコ属	2142	端部強面に削り出し尖らせる　強端欠損
622	19	用途不明品	棒状具	その他	(556)	69	39	割材割り出し	クルミ科クルミ属オニグルミ	2086	両端欠損
623	19	用途不明品	棒状具	先尖棒	(515)	47	48	割材割り出し	クワ科クワ属	1977	両端焼け痕
624	19	用途不明品	棒状具	その他	(479)	37	23	割材割り出し	スギ科スギ属スギ		端部尖らせる
625	19	用途不明品	棒状具	その他	(138)	100	63	芯持ち割り出し	カバノキ科ハンノキ属	2309	両端切断痕
626	19	用途不明品	板状具	その他	872	162	54	割材割り出し	ニレ科ケヤキ属ケヤキ	2155	建築部材か

表７　土師器観察表（１）

図版	写真図版	出土地点	登録番号	器種	計測値(cm) 口径	底径	器高	胎土	焼成	色調	調整技法 口縁部(可能・受部)外面	体部(脚部)外面	口縁部(可能・受部)内面	体部(脚部)内面	分類	備考
6	1	39	弦金須	椀	—	—	(35)	細	普	赤褐色					D	S字口縁 内外面摩滅
	2		ＳＴ１	壺	—	—	(74)	粗	堅	暗褐色		ハケメ→ミガキ		ハケメ・ヘラナデ		
	3	39	ＳＴ１	215	椀	—	—	(52)	細	普	赤褐色	ハケメ			Ｅ	台付椀
	4		ＳＴ１	壺	(147)	—	(53)	粗	普	暗褐色	ヘラナデ				Ｂａ	内外面摩滅
9	5		ＳＴ２	蓋	114	—	(31)	粗	堅	褐色		ナデ	ハケメ			内外面赤彩
	6		ＳＴ２	216	椀	—	55	(24)	細	普	褐色			ヘラナデ	Ｂ２ａ	内外面摩滅
	7		ＳＴ２	椀	—	65	(33)	粗	普	赤褐色						内外面摩滅
	8		ＳＴ２	椀	198	—	(33)	粗	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ				
	9		ＳＴ２	壺	—	—	(37)	細	普	褐色	ヘラナデ					
	10		ＳＴ３	椀	—	—	(36)	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ		ハケメ→ヨコナデ			内外面摩滅
	11		ＳＴ３	椀	—	—	(26)	細	普	褐色	ヨコナデ		ハケメ→ヨコナデ			
	12		ＳＴ３	鉢	—	—	(26)	細	普	白褐色	ヘラナデ		ヘラナデ	ハケメ	Ｅ	
	13		ＳＴ３	鉢	(111)	(24)	(66)	細	普	白褐色		ミガキ		ミガキ	Ｌ５	内外面赤彩
	14		ＳＴ３	壺	—	—	(49)	粗	普	白褐色	ミガキ					
	15		ＳＴ３	椀	—	(36)	(12)	粗	普	褐色						
	16		ＳＴ３	椀	—	(34)	(16)	粗	普	暗褐色		ハケメ				
	17		ＳＴ３	椀	—	(48)	(17)	細	普	赤褐色						外面摩滅 内面炭化物付着
	18		ＳＴ３	椀	(186)	—	(28)	細	普	褐色					Ｃ１	内外面摩滅
	19		ＳＴ３	椀	—	(55)	(24)	細	普	褐色		ヘラナデ				
	20		ＳＴ３	椀	—	(40)	(15)	粗	普	褐色		ハケメ				
	21		ＳＴ３	椀	(176)	—	(25)	粗	普	褐色	ヨコナデ		ハケメ→ヨコナデ			
	22		ＳＴ４	鉢	(111)	—	(41)	細	普	褐色	ヨコナデ・ミガキ		ヨコナデ・ミガキ		Ｆ２	
	23		ＳＴ４	壺	—	—	(37)	細	普	褐色		ハケメ		ヘラナデ		外面摩滅
	24		ＳＴ４	椀	(164)	—	(26)	細	普	褐色	ヨコナデ					
	25		ＳＴ４	鉢	—	—	(32)	細	普	褐色						
	26		ＳＴ４	高坏	—	—	(42)	細	普	褐色	ミガキ					
	27		ＳＴ４	壺	—	—	(35)	細	普	褐色		ハケメ・ミガキ				内外面摩滅
	28		ＳＴ４	椀	—	30	(19)	粗	普	赤褐色		ハケメ				
	30		ＳＴ５	高坏	—	—	(45)	細	普	赤褐色	ミガキ					内外面摩滅
	31		ＳＴ５	鉢	—	(14)	(11)	細	普	褐色		ヘラナデ		ヘラナデ	Ｌ	
	32		ＳＴ５	壺	—	—	(26)	細	普	白褐色		ミガキ		ミガキ		
10	33		ＳＴ６	鉢	—	—	(23)	細	普	暗褐色					Ｌ	内外面摩滅
	34		ＳＴ６	椀	—	—	(64)	(30)	粗	普	暗褐色		ハケメ			
11	35	24	ＳＴ７	25	鉢	(113)	(20)	60	粗	普	褐色	ナデ		ナデ		Ｌ３
	36		ＳＴ７	壺	(129)	—	(49)	細	普	褐色	ハケメ→ミガキ		ミガキ		Ｂ２ａ	
	37		ＳＴ７	3	椀	—	—	(24)	粗	普	赤褐色		ヘラナデ	ナデ	Ｅ３	台付椀脚部
	38	23	ＳＴ７	16	鉢	(156)	31	68	粗	普	褐色	ハケメ→ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	Ｇ２ａ	ＳＫ31出土土器と接合
	39		ＳＴ７	壺	—	—	(46)	細	普	白褐色	ミガキ					内面摩滅
12	40	34	ＳＴ７	22	壺	83	40	134	粗	脆弱	褐色		ハケメ→ミガキ			Ｅ３	内外面摩滅 口縁外面に赤彩残る
	41		ＳＴ７	2	壺	—	—	(52)	細	堅	褐色			ハケメ	ヘラナデ		外面摩滅
	42		ＳＴ７	8	椀	—	(56)	(20)	細	堅	暗褐色		ハケメ			
	43		ＳＴ７	椀	—	(56)	(16)	細	普	褐色		ヘラナデ				
	44		ＳＴ７	椀	—	(48)	(22)	粗	普	暗褐色		ハケメ				
	45		ＳＴ７	椀	—	(64)	(24)	細	普	赤褐色		ヘラナデ				外面摩滅
	46		ＳＴ７	13	椀	—	88	(26)	粗	普	白褐色					輪台技法 内面調整　外面摩滅
	49	26	ＳＴ７	21	器台	92	—	(105)	細	堅	褐色				Ｈ１	異形器台
	50	39	ＳＴ７	24	鉢	—	70	(44)	細	普	褐色		ナデ	ナデ		台付鉢脚部

表８　土師器観察表（２）

図版	写真図版	出土地点	登録番号	器種	計測値(cm) 口径	底径	器高	胎土	焼成	色調	調整技法 口縁部(可能・受部)外面	体部(脚部)外面	口縁部(可能・受部)内面	体部(脚部)内面	分類	備考
12	51		ＳＴ７	椀	(192)	—	(76)	粗	堅	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ		
13	52		ＳＴ８	59	器台	(62)	—	(56)	細	普	白褐色	ヨコナデ		ヘラナデ	ヘラナデ	Ｂ１ａ	円窓（２）[1] 調整粗い
	53	26	ＳＴ８		器台	—	(110)	(63)	粗	普	褐色					Ｆ	円窓（３）[2] 外面摩滅
	54		ＳＴ８	29	器台	—	—	(32)	細	普	赤褐色					Ｂ	円窓（１）[3] 内外面摩滅
14	55		ＳＴ８	57	高坏	(124)	—	(30)	細	普	白褐色		ハケメ	ヘラナデ			外面摩滅　内面輪積痕
	56		ＳＴ８	56	鉢	(70)	—	(30)	細	普	白褐色	ハケメ→ヨコナデ					内面摩滅
	57		ＳＴ８	58	壺	(148)	—	(55)	細	普	白褐色	ハケメ→ヨコナデ		ハケメ			内面摩滅
	58		ＳＴ８	54	壺	—	—	(91)	細	普	褐色		ミガキ		ヘラナデ		赤彩 (口縁内外面、体部外面)
	59		ＳＴ８	—	壺	—	—	(41)	細	普	褐色	ハケメ		ハケメ		Ｄ２ａ	
	60		ＳＴ８	—	器台	—	—	(27)	細	普	褐色		ハケメ		ハケメ	Ｈ	異形器台脚部か 円窓（１）[4]
	61		ＳＴ８	62	壺	—	—	(32)	粗	堅	褐色	ミガキ		ヨコナデ		Ａ２ｂ	内外面赤彩
	62		ＳＴ８	27	壺	—	—	(65)	粗	普	褐色	ハケメ→ミガキ			ハケメ		外面摩滅
	63		ＳＴ８	—	壺	—	—	(94)	粗	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ・ヘラナデ	ハケメ	ハケメ・ヘラナデ		
	64		ＳＴ８	30	壺	—	—	(61)	細	普	白褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ヘラナデ		
	65		ＳＴ８	27	壺	—	83	(51)	粗	堅	褐褐色		ミガキ		ハケメ		
	66		ＳＴ８		鉢	—	(42)	(16)	細	堅	褐褐色					Ｂ１	有孔鉢
	67		ＳＴ８		壺	—	30	(15)	粗	普	赤褐色						
	68		ＳＴ８		甕	—	(82)	(23)	細	普	褐色						輪台技法
	69		ＳＴ８	57	甕	(166)	—	(30)	粗	普	褐褐色	ハケメ		ハケメ			
15	71	27	ＳＴ９	92	高坏	235	153	(154)	粗	堅	褐色	ヘラナデ	ハケメ→ヘラナデ	ヘラナデ	ヨコナデ・ハケメ	Ａ３	円窓４　内外面赤彩
16	72	26	ＳＴ10		器台	—	(135)	(67)	細	普	褐色	ハケメ				Ｈ	異形器台脚部か
	73		ＳＴ10	213	甕	—	66	(18)	粗	普	白褐色						輪台技法
	74		ＳＴ10	232	甕	—	80	(19)	粗	堅	褐褐色		ヘラナデ				底部外面剥圧痕
	75		ＳＴ10	211	甕	—	—	(54)	細	堅	褐色	ハケメ	ハケメ	ハケメ→ヘラナデ	ヘラナデ		
18	77	34	ＳＴ12	179	壺	115	61	169	粗	脆弱	褐色	ハケメ	ハケメ	ハケメ		Ｄ２ｂ	
	78		ＳＴ12	79	壺	(101)	—	(47)	粗	普	褐色	ハケメ				Ｂ２ａ	内外面摩滅
	79		ＳＴ12		壺	—	—	(35)	細	普	赤褐色		ミガキ		ハケメ		
	80		ＳＴ12		器台	—	—	(42)	細	堅	褐色		ミガキ		ヘラナデ	Ｂ	円窓（２）[5]
	81		ＳＴ12		鉢	(76)	—	(20)	細	普	褐色	ヨコナデ・ミガキ		ヘラナデ→ミガキ			
	82	24	ＳＴ12	206	鉢	68	31	30	細	堅	褐色	ヨコナデ	ケズリ	ヨコナデ→ヘラナデ	ヘラナデ	Ｍ３	
	83	33	ＳＴ12		壺	(184)	—	(27)	粗	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ		ヘラナデ		Ｃ２ｂ	口縁内面水口圧痕
	84		ＳＴ12		壺	—	—	(45)	細	普	褐色	ミガキ		ハケメ			
19	85		ＳＴ12	78	鉢	(131)	—	(25)	細	普	褐色					Ｉ	
	86		ＳＴ12	79	甕	—	—	(26)	粗	普	褐褐色	ヨコナデ		ヨコナデ			
	87		ＳＴ12	79	甕	(156)	(32)	(157)	粗	普	褐褐色	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ヘラナデ・ハケメ		
	88	37	ＳＴ12	179	甕	192	63	206	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ハケメ	Ｃ３ｃ	輪台技法　外面煤付着
	89		ＳＴ12	77	甕	(148)	—	(68)	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ヘラナデ		外面煤付着
	90		ＳＴ12		甕	—	(60)	(91)	粗	普	褐色		ハケメ		ハケメ		
20	91	23	ＳＴ14	219	鉢	128	37	67	細	脆弱	白褐色		ハケメ		ヘラナデ	Ｇ２ｂ	内外面摩滅
21	92		ＳＴ15		高坏	—	(82)	(17)	細	普	赤褐色	ヨコナデ			ヨコナデ・ハケメ		内面赤彩痕 外面摩滅
	93		ＳＴ15		高坏	—	—	(32)	細	普	褐色						
	94		ＳＴ15		壺	—	—	(30)	粗	普	褐色	ミガキ				Ａ２ｂ	内面摩滅
	95		ＳＴ15		甕	—	41	(15)	粗	普	褐色		ハケメ				
	96		ＳＴ15		甕	(109)	—	(25)	細	普	白褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ			
	97		ＳＴ15		甕	(168)	—	(41)	粗	普	赤褐色	ヨコナデ					内面摩滅
	98		ＳＴ15		甕	(190)	—	(44)	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ				内面摩滅

表９　土師器観察表（３）

図版	写真図版	出土地点	登録番号	器種	計測値(cm) 口径	底径	器高	胎土	焼成	色調	調整技法 口縁部(可能・受部)外面	体部(脚部)外面	口縁部(可能・受部)内面	体部(脚部)内面	分類	備考
22	99		ＳＫ24	鉢	—	—	(37)	細	普	褐色			ヘラナデ	ヘラナデ	Ｌ５	
	100	41	ＳＫ24	26	小型土器 21	31	30	細	堅	褐色	ナデ	ヘラナデ	ナデ	ナデ		手捏成形
	101		ＳＫ24	壺	(117)	—	(48)	細	普	赤褐色	ミガキ→ヨコナデ	ハケメ		ハケメ		
	102		ＳＫ24	甕	(182)	—	(43)	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ		
23	103		ＳＫ26	143	甕	(120)		(29)	細	普	ヨコナデ		ヨコナデ			
	104		ＳＫ26	143	鉢	(109)	—	(45)	細	普	褐色		ミガキ			外面摩滅
	105		ＳＫ27	144	鉢	—	64	(36)	粗	普	白褐色	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	Ｍ１
	106		ＳＫ26	143	壺	—	(74)	(303)	粗	普	赤褐色		ハケメ		ヘラナデ	内外面摩滅
24	107	26	ＳＫ28		器台	—	(110)	(64)	細	普	赤褐色		ミガキ		ナデ	Ｅ	円盤（２）「ｳ」 内面摩滅
26	108	25	ＳＫ31	127	器台	90	(120)	97	細	堅	褐色	ミガキ	ミガキ		ヨコナデ・ナデ	Ｂ１ｂ	円盤３
	109		ＳＫ31		器台	—	—	(52)	粗	堅	褐色		ミガキ		ハケメ	Ｂ
	110		ＳＫ31		高坏	—	111	(64)	細	堅	白褐色		ミガキ		ハケメ→ヨコナデ	Ｂ２
	111		ＳＫ31		器台	—	—	(40)	粗	堅	褐色		ミガキ			Ｂ１
	112	22	ＳＫ31		鉢	163	—	98	細	堅	白褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	Ｂ１
	113		ＳＫ31		鉢	(117)	—	(75)	粗	堅	褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	Ｆ２
	114	24	ＳＫ31	112	鉢	95	24	65	粗	堅	褐色	ミガキ	ミガキ	ヘラナデ	ハケメ・ヘラナデ	Ｌ３
	115	34	ＳＫ31		壺	(124)	—	(106)	粗	堅	褐色	ヨコナデ・ハケメ→ミガキ	ハケメ→ミガキ	ヨコナデ・ミガキ	ヘラナデ	Ｄ２ａ	
	116	29	ＳＫ31		壺	156	—	(60)	粗	堅	褐色	ミガキ		ミガキ		Ａ１ｂ	口縁下端に粘土
	117	39	ＳＫ31		甕	(283)	—	(283)	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ→ミガキ	ヨコナデ・ミガキ	ヘラナデ・ハケメ→ミガキ	Ａ１ｂ	
	118		ＳＫ31		甕	(140)	—	(55)	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ハケメ		
	119		ＳＫ31		甕	(186)	—	(52)	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ		
27	120		ＳＫ31		甕	(186)	—	(36)	細	普	褐色	ヨコナデ		ハケメ→ヨコナデ		
	121		ＳＫ31		甕	180	—	40	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ		ハケメ	ハケメ	
	122		ＳＫ31		甕	(204)	—	(73)	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ヘラナデ		外面煤付着
	123		ＳＫ31		甕	(192)	—	(41)	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ		
	124	39	ＳＫ31		甕	136	58	132	粗	普	暗褐色	ナデ・ハケメ	ハケメ	ハケメ	ヘラナデ	Ｆ１ｂ	
	125	37	ＳＫ31		甕	152	—	(147)	粗	普	暗褐色	ヨコナデ	ハケメ・ケズリ	ヘラナデ	ヘラナデ	Ｃ３ａ	
	126		ＳＫ31		甕	(168)	—	(94)	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ヘラナデ・ハケメ		
	127	39	ＳＫ31		甕	179	(31)	169	粗	堅	暗褐色	ヨコナデ	ハケメ→ヘラナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	Ｃ３ｃ	外面煤付着
	128	37	ＳＫ31		甕	(197)	—	249	粗	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	Ｃ３ａ	
28	129		ＳＫ31		甕	166	—	(145)	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ヘラナデ	Ｃ３ｃ	
	130		ＳＫ31		甕	196	—	(91)	細	普	褐色	ヨコナデ→ヘラナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ヘラナデ		
	131		ＳＫ31		甕	(186)	—	(216)	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ヘラナデ	Ｃ２ｂ	
	132	26	ＳＫ31		甕	178	28	174	粗	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ・ケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	Ｃ２ｃ	
30	133		ＳＫ32		鉢	—	—	(33)	粗	堅	褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ナデ	Ｌ	
	134		ＳＫ32		鉢	(158)	—	(54)	粗	堅	褐色	ハケメ→ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	Ｅ	
	135		ＳＫ32		鉢	(168)	—	(30)	粗	堅	白褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	Ｅ	
	136		ＳＫ32		壺	(223)	—	(33)	粗	堅	暗褐色	ヨコナデ→ミガキ		ミガキ		Ａ２ａ	
	137		ＳＫ32		壺	(135)	—	(35)	細	普	褐色	ヨコナデ		ヨコナデ		Ａ２ｃ	
	138		ＳＫ32		壺	(160)	—	(62)	細	普	赤褐色			ハケメ	ハケメ		内外面摩滅
	139		ＳＫ32		甕	—	64	(31)	細	普	白褐色		ハケメ				台付鉢か
	140	35	ＳＫ32		甕	207	34	259	粗	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ヘラナデ	Ｃ２ａ	外面煤付着 内面下半炭化物付着
	141		ＳＫ32		甕	(152)	—	(40)	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	Ｃ１	
	142		ＳＫ32		甕	(150)	—	(65)	細	堅	褐色	ヨコナデ	ハケメ→ヘラナデ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	Ｆ３	外面煤付着
	143	36	ＳＫ32	5	甕	200	(40)	270	細	普	白褐色	ヨコナデ→ハケメ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ヘラナデ・ハケメ	Ｃ２ｃ	
33	144		ＳＧ114	7	器台	85	—	(42)	粗	普	赤褐色					Ｂ１ａ	円盤（２）「ｳ」 内外面摩滅
	145		ＳＧ114		高坏	—	—	(24)	粗	堅	褐色		ミガキ		ミガキ		円盤（２）「ｳ」

表10　土師器観察表（4）

図版	写真図版	出土地点	登録番号	器種	計測値(cm) 口径	底径	器高	胎土	焼成	色調	調整技法 口縁部(可部・受部)外面	体部(胴部)外面	口縁部(可部・受部)内面	体部(胴部)内面	分類	備考
33	146		SG114	高坏	—	—	(105)	級	堅	褐色		ミガキ		ヘラナデ	E 2	
	147		SG114	3	鉢	(120)	—	(60)	細	普	褐色	ハケメ	ハケメ	ヘラナデ	ヘラナデ	C	
	148	24	SG114	1	鉢	(120)	32	88	粗	堅	赤褐色	ハケメ→ヨコナデ	ナデ・ハケメ		ヘラナデ	I 5	底部穿孔
	149		SG114	16	壺	188	—	(46)	細	普	褐色	ヨコナデ		ヘラナデ		A 2 b	
	150		SG114	15	壺	(176)	—	(81)	細	普	赤褐色					A 2 b	内外面摩滅
	151		SG114	10	壺	—	(30)	(116)	細	堅	暗褐色		ヨコナデ・ミガキ		ナデ・ヘラナデ・ハケメ		
	152		SG114	17	甕	—	55	(110)	細	普	褐色		ハケメ・ミガキ		ハケメ・ミガキ		
	153		SG114	12	甕	(166)	23	183	粗	普	褐色	ヨコナデ	ヘラナデ・ハケメ	ヨコナデ・ヘラナデ	ヘラナデ	C 3 a	
	154		SG114	11	甕	228	—	(76)	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ・ミガキ	ハケメ	B	
34	155		SG114	9	甕	(184)	—	(51)	細	普	白褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ヘラナデ		
	156		SG114	3	甕	216	—	(166)	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ→ミガキ	ハケメ	ヘラナデ・ハケメ	C 4 c	
	157	140	SG114	3	甕	173	40	135	粗	普	白褐色	ヨコナデ	ハケメ・ケズリ	ヘラナデ	ヘラナデ	F 2	
37	158		ST201	高坏	—	(120)	(25)	級	堅	褐色		ミガキ			ヨコナデ・ヘラナデ		
	159		ST201	鉢	(70)	—	(27)	細	普	赤褐色	ヨコナデ	ナデ・ヘラナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	L 1		
	160		ST201	1425	鉢	(98)	—	56	級	堅	暗褐色	ハケメ	ハケメ→ミガキ	ハケメ	ミガキ	L 4	
	161		ST201	1415	高坏	—	—	(28)	級	普	白褐色						内外面摩滅
	162		ST201		高坏	(187)	—	(65)	級	普	赤褐色			ミガキ			外面摩滅
	163		ST201	1426	高坏	—	—	(120)	級	普	褐色		ミガキ		ヘラナデ	E 1	
	164		ST201		高坏	—	(110)	(37)	級	普	褐色				ハケメ	E	内外面摩滅
	165		ST201		鉢	—	—	(38)	級	普	褐色			ヨコナデ	ミガキ	E	外面摩滅
	166		ST201		小型土器	—	(23)	(26)	級	普	暗褐色						手捏成形
	167		ST201	1424	鉢	—	42	(39)	粗	普	白褐色		ヘラナデ		ヘラナデ	B 1	
	168		ST201		壺	—	—	(34)	細	堅	褐色	ヨコナデ		ハケメ→ミガキ			
	169		ST201		甕	(158)	—	(50)	細	堅	暗褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ・ハケメ			
	170		ST201	727	甕	(186)	—	(35)	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	C 2	
	171		ST201		甕	—	—	(33)	細	普	褐色	ヨコナデ		ヨコナデ			
	172		ST201	756	甕	—	—	(34)	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヘラナデ・ハケメ			
	173		ST201		壺	(154)	—	(32)	細	普	褐色	ヨコナデ		ヨコナデ・ヘラナデ		A 2 c	
	174		ST201		甕	(148)	—	(33)	細	普	赤褐色		ハケメ	ヨコナデ	ヘラナデ	C 2	
	175		ST201	759	甕	(138)	—	(36)	細	普	赤褐色	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	C 2	
	176		ST201		甕	—	(76)	(25)	粗	堅	暗褐色						
	177		ST201	728	壺	—	(33)	(23)	細	普	赤褐色		ヘラナデ				
40	178	25	ST202	2288	器台	73	127	77	細	堅	褐色	ヨコナデ	ミガキ		ヘラナデ	B 3 b	円窓 3
	179	26	ST202	1813	器台	(94)	118	94	級	堅	褐色	ミガキ	ミガキ		ヘラナデ	B 4	円窓 3
	180	26	ST202	1865	器台	87	133	91	粗	堅	褐色	ミガキ	ミガキ		ヘラナデ	B 4	円窓 3
	181		ST202	1807	器台	88	—	(21)	細	普	白褐色	ハケメ	ハケメ			B 1 b	内外面摩滅
	182		ST202	1444	器台	—	—	(55)	級	普	褐色						円窓（3）?2 内外面摩滅
	183		ST202	1476	高坏	—	108	(85)	級	堅	白褐色		ミガキ		ヘラナデ→ヨコナデ	E 3 a	外面摩滅
	184		ST202	1820	高坏	166	—	(62)	級	普	赤褐色		ミガキ	ヨコナデ	ミガキ		内外面摩滅
	185		ST202	1859	器台	—	(170)	(17)	級	堅	白褐色		ミガキ→ヨコナデ		ミガキ→ヨコナデ		内外面赤彩
	186	24	ST202	1812	鉢	87	16	60	粗	堅	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ヘラナデ・ケズリ	ヘラナデ→ヨコナデ	ヘラナデ	L 1	
	187		ST202	1806	鉢	(96)	26	(76)	級	堅	褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ヘラナデ	L 2	
	188		ST202	1451	鉢	(103)	—	(64)	細	普	白褐色	ハケメ		ナデ・ヘラナデ	ナデ	L	
	189		ST202	1851	鉢	(128)	—	(49)	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ		ヘラナデ		K 2	
	190	24	ST202	1801	鉢	131	38	74	細	堅	赤褐色	ヨコナデ→ハケメ	ヘラナデ・ハケメ	ヨコナデ	ヨコナデ	G 2 b	
	191	23	ST202	1726	鉢	(144)	—	(57)	級	普	褐色					G 2 b	内外面摩滅
	192		ST202	1727	鉢	(115)	—	(58)	細	普	白褐色	ハケメ→ミガキ	ハケメ→ミガキ		ヘラナデ	L 4	内面摩滅
	193		ST202	2292	鉢	(158)	—	(66)	級	堅	褐色	ヨコナデ・ミガキ	ハケメ→ミガキ	ミガキ	ミガキ	F 1	

表11　土師器観察表（５）

図版	写真図版	出土地点	登録番号	器種	計測値(cm) 口径	底径	器高	胎土	焼成	色調	調整技法 口縁部(可部・受部)外面	体部(胴部)外面	口縁部(可部・受部)内面	体部(胴部)内面	分類	備考
41	194	34	ST202	1814	鉢	126	49	115	細	普	赤褐色	ヨコナデ→ミガキ	ミガキ・ケズリ	ミガキ	ヘラナデ	E２
	195	34	ST202	1473	壺	121	—	(127)	粗	普	赤褐色	ヨコナデ・ミガキ		ヨコナデ・ミガキ		D２b　内外面摩滅
	196		ST202	1765	壺	—	—	(19)	細	普	赤褐色		ハケメ		ヘラナデ	
	197		ST202	2269	壺	—	40	(55)	細	普	褐色		ハケメ		ナデ・ヘラナデ	異質の胎土
	198		ST202		壺	—	—	(73)	粗	堅	白褐色		ミガキ		ミガキ	
	199		ST202	2297	壺	(124)	—	(80)	粗	堅	白褐色	ハケメ→ミガキ		ハケメ→ミガキ		D２a
	200	34	ST202	1809	壺	(152)	—	(85)	粗	堅	褐色	ハケメ→ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	D２a　１次調整のハケメ残る
	201	32	ST202	1805	壺	141	—	(96)	細	堅	褐色	ヨコナデ・ハケメ→ミガキ	ミガキ	ヨコナデ・ミガキ	ヘラナデ	C１a　内面接合痕跡著　指圧痕
	202	23	ST202	1800	鉢	113	30	68	細	普	白褐色	ヨコナデ	ミガキ	ヨコナデ	ヘラナデ	I２　内面指圧痕
	203	34	ST202	1803	甕	110	—	123	粗	普	赤褐色	ヨコナデ	ハケメ・ミガキ・ケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ・ハケメ	E１
	204	32	ST202	1821	壺	148	78	297	粗	堅	白褐色	ヨコナデ	ハケメ→ミガキ	ヨコナデ	ヘラナデ	C１a
42	205	29	ST202	1815	壺	189	—	(103)	粗	堅	褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	A１a　194の置き台として出土
	206		ST202	1811	甕	(167)	—	(42)	粗	普	暗褐色	ヘラナデ・ハケメ		ヘラナデ・ハケメ		
	207		ST202	1858	器台	(149)	—	(66)	粗	脆弱	褐色	ヨコナデ		ハケメ		器台の脚部か
	208		ST202	1766	壺	—	—	(248)	細	普	赤褐色		ハケメ・ミガキ		ヘラナデ・ハケメ	
	209	31	ST202	1817	甕	233	85	315	粗	普	赤褐色	ヘラナデ・ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	B２b　輪台技法
	210		ST202		壺	(170)	—	(60)	粗	普	赤褐色	ハケメ				B２a　内外面摩滅
	211		ST202	1852	鉢	124	—	(27)	細	堅	褐色	ヨコナデ・ミガキ	ミガキ	ミガキ		I
43	212	31	ST202	1861	壺	139	68	285	細	堅	褐色	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ミガキ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	B２a
	213	40	ST202	1808	甕	148	(60)	129	細	堅	褐色	ハケメ	ハケメ→ヘラナデ	ハケメ	ハケメ	F１a
	214	35	ST202	1804	甕	139	52	145	細	普	赤褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ヘラナデ	C２c
	215	40	ST202	2083	甕	158	—	136	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ・ケズリ	ヘラナデ	ヘラナデ	F２
	216		ST202	1477	甕	(155)	—	(32)	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	
	217		ST202	1476	甕	(153)	—	(20)	細	普	暗褐色	ヨコナデ		ヨコナデ		
	218		ST202	1863	甕	—	68	(270)	細	普	赤褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ハケメ	外面剥落
44	219	38	ST202	1818	甕	196	60	252	細	普	赤褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ヘラナデ	C４b　内面摩滅
	220	38	ST202	1816	甕	(158)	54	214	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ヘラナデ	C４c　底部外面指圧痕
	221	35	ST202	1765	甕	(189)	45	261	細	普	赤褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ヘラナデ	C１b
	222	35	ST202	1819	甕	180	41	265	粗	堅	暗褐色	ヨコナデ→ハケメ	ハケメ・ケズリ	ハケメ→ヨコナデ	ヘラナデ	C１a
45	223		ST202	2267	甕	224	—	(53)	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	C４
47	226	34	ST204	1122	壺	117	38	136	粗	堅	褐色	ハケメ→ヘラナデ	ヘラナデ	ハケメ→ヘラナデ	ヘラナデ	D２b
	227	38	ST204	1118	甕	(121)	(50)	123	細	普	白褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ヘラナデ	ヘラナデ	C４a　内外面摩滅
	228		ST204	2174	鉢	(122)	—	(68)	細	普	赤褐色	ヨコナデ	ヘラナデ		ヘラナデ	
	229		ST204	1124	甕	(156)	—	(47)	細	普	褐色	ヨコナデ・ハケメ		ヘラナデ		
	230	27	ST204	1120	高坏	190	—	(74)	細	普	赤褐色					A４　内外面摩滅
	231	36	ST204	1119	甕	174	33	227	粗	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ナデ・ヘラナデ	C２b　外面煤付着　内面下半炭化物付着
	232		ST204	1121	甕	—	62	(197)	粗	普	暗褐色		ハケメ		ハケメ	
	233		ST204	1122	甕	168	—	209	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ・ケズリ	ヘラナデ	ヘラナデ	C２b　外面煤付着
49	234	26	ST205	1211	器台	76	115	77	細	堅	褐色	ミガキ	ミガキ	ヨコナデ	ヨコナデ	B４　内外面赤彩
	235	27	ST205	1236	高坏	160	—	(65)	粗	堅	赤褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	A５
	236	27	ST205	1841	高坏	187	118	139	細	普	赤褐色	ヨコナデ	ミガキ		ナデ・ヨコナデ・ハケメ	B１　円盤３　坏部内面摩滅
	237	33	ST205	1854	壺	(157)	—	(156)	細	普	白褐色	ミガキ→ヨコナデ	ミガキ	ミガキ		D１　内外面摩滅
	238		ST205	1957	壺	(110)	—	(134)	細	普	褐色	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ハケメ	D２b
	239		ST205	988	鉢	113	—	(59)	細	普	白褐色			ハケメ		L５か　外面摩滅
	240		ST205	1827	壺	—	50	(30)	細	普	褐色		ハケメ		ヘラナデ	
	241	22	ST205	1823	鉢	(340)	—	(150)	細	堅	褐色	ハケメ→ヨコナデ・ヘラナデ	ハケメ→ヘラナデ	ハケメ→ヘラナデ	ハケメ	A２a
	242		ST205	1838	鉢	203	22	133	細	普	褐色		ハケメ	ハケメ	ヘラナデ・ハケメ	B１
	243	24	ST205	977	鉢	(246)	—	(101)	細	堅	赤褐色	ヨコナデ・ハケメ→ミガキ		ミガキ	ミガキ	K２　体部内外面摩滅

表12　土師器観察表（6）

図版	写真図版	出土地点	登録番号	器種	計測値(cm) 口径	底径	器高	胎土	焼成	色調	調整技法 口縁部(可能・交互)外面	体部(横位)外面	口縁部(可能・交互)内面	体部(横位)内面	分類	備考
50	244		ST35	1842	鉢	(164)	—	(33)	細	普	赤褐色	ハケメ		ミガキ		C	
	245		ST35	1218	壺	188	—	(53)	粗	堅	白褐色	ヨコナデ・ハケメ		ヘラナデ		C5b	
	246		ST35	1832	壺	—	75	(185)	粗	堅	褐色		ミガキ		ミガキ		
	247	32	ST35	1210	壺	166	71	343	粗	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ→ミガキ	ヘラナデ	ハケメ	C1a	
51	248	31	ST35	1831	壺	122	69	232	細	普	白褐色	ヨコナデ	ハケメ→ミガキ	ヘラナデ	ヘラナデ	C1a	内外面摩滅
	249		ST35	1830	壺	(150)	(65)	(255)	細	普	褐色	ハケメ	ハケメ	ヘラナデ	ヘラナデ	C1b	
	250		ST35	1950	壺	(127)	72	(257)	粗	普	白褐色	ハケメ→ヘラナデ	ミガキ	ハケメ	ハケメ	C1b	
52	251	24	ST35	995	鉢	121	34	104	細	普	赤褐色		ヘラナデ		ヘラナデ・ハケメ	L3	内外面摩滅
	252		ST35	1950	壺	—	—	(22)	細	普	白褐色	ハケメ→ヨコナデ				D	
	253		ST35	1832	壺	(148)	42	(143)	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ハケメ		
	254		ST35	1824	壺	(187)	—	(62)	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ハケメ		
	255		ST35	1840	壺	161	—	(131)	細	普	褐色	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	C4	
	256		ST35	1824	壺	(180)	—	(165)	細	普	赤褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ハケメ	C4	
	257	37	ST35	1828	壺	187	57	243	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	B3a	外面煤付着
	258	38	ST35	1829	壺	164	60	203	細	普	褐色	ヨコナデ→ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	C4c	
54	259		ST36	847	鉢	—	28	(28)	細	普	白褐色		ミガキ			L	
	260		ST36	837	鉢	(144)	—	(40)	細	普	褐色	ミガキ		ミガキ			内外面摩滅
	261		ST36	1183	壺	—	—	(35)	細	普	褐色	ミガキ					
	262		ST36	1098	壺	(180)	—	(25)	粗	鈍黄	褐色	ヘラナデ		ヘラナデ		B2a	
	263		ST36	834	壺	(193)	—	(52)	粗	普	褐色	ハケメ→ヘラナデ		ハケメ		B2a	
	264		ST36	1099	壺	196	—	(62)	粗	鈍黄	暗褐色	ヘラナデ		ミガキ		B2a	264・265は同一個体
	265		ST36	1700	壺	—	80	(47)	粗	鈍黄	暗褐色						
	266		ST36		壺	—	(30)	(19)	細	普	赤褐色						
	267		ST36	1822	壺	—	90	(24)	粗	普	暗褐色						内外面摩滅
	268		ST36	1516	壺	—	77	(318)	粗	鈍黄	暗褐色		ハケメ		ハケメ		外面摩滅
56	269	26	ST38	1521	器台	(88)	(136)	93	細	普	褐色	ナデ	ヨコナデ・ハケメ→ミガキ	ヨコナデ	ヨコナデ・ハケナデ・ハケメ	B5	円盤なし
	270		ST38	715	器台	—	101	(54)	細	堅	褐色		ミガキ→ヨコナデ		ヘラナデ	E	円盤なし
	271		ST38	1440	鉢	—	33	(22)	細	普	白褐色		ハケメ→ミガキ		ミガキ	L	
	272	24	ST38	1439	鉢	63	15	44	細	普	褐色	ヨコナデ	ナデ・ミガキ	ヘラナデ	ヘラナデ	M3	
	273		ST38	1437	高坏	(150)	—	(30)	粗	堅	暗褐色	ミガキ→ヨコナデ		ミガキ			
	274		ST38	1524	壺	(200)	—	(75)	細	堅	暗褐色	ハケメ→ヨコナデ→ミガキ		ヘラナデ→ヨコナデ・ミガキ		A2b	
	275		ST38		壺	(192)	—	(56)	細	普	白褐色	ヨコナデ・ミガキ		ミガキ			
58	276		ST39	2195	壺	(124)	—	(55)	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ		ハケメ			
	277		ST39	2193	壺	(116)	—	(43)	粗	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ		ハケメ			
	278		ST39	2197	壺	(126)	—	(44)	粗	堅	暗褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ハケメ		
	279		ST39	2199	壺	—	62	(25)	細	普	暗褐色		ハケメ		ハケメ		底部本葉痕
	280		ST39	2192	壺	(160)	—	(140)	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ヘラナデ	C4c	
	281		ST39		壺	(206)	—	(38)	粗	普	褐色			ハケメ			
	282	32	ST39	2191	壺	114	72	291	細	普	白褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ→ヘラナデ	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ	C1b	
60	283	23	ST10	1879	鉢	(152)	—	(85)	細	普	白褐色	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ヘラナデ→ミガキ	I3	
	284	34	ST10	1881	壺	98	46	132	細	普	赤褐色		ミガキ		ヘラナデ	E2	口縁部内外面摩滅
	285		ST10	1883	鉢	—	—	(34)	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ		ヘラナデ			
	286		ST10	1873	壺	(188)	—	(52)	粗	普	白褐色	ハケメ→ヨコナデ		ハケメ→ヘラナデ		B2a	
	287		ST10	1162	壺	(171)	—	(45)	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ		ヘラナデ			
	288		ST10	1872	壺	—	60	(24)	細	普	白褐色		ヘラナデ				内面炭化物付着
	289		ST10	1162	壺	—	(76)	(25)	細	普	赤褐色		ヘラナデ				
	290		ST10	1882	壺	—	(80)	(22)	細	普	褐色		ヘラナデ				
	291	30	ST10	1871	壺	184	75	30	細	堅	褐色	ハケメ・ミガキ	ハケメ→ミガキ	ハケメ→ミガキ	ヘラナデ	B1	頂部突出(未口縁付) 棒状浮文(2本1組全4ヵ所)

表13　土師器観察表（７）

図版	写真図版	出土地点	登録番号	器種	計測値(cm) 口径	底径	器高	胎土	焼成	色調	調整技法 口縁部(可能・受部)外面	体部(脚部)外面	口縁部(可能・受部)内面	体部(脚部)内面	分類	備考
63	292	25	S T211	1898	器台	171	—	(144)	級	堅	白褐色	ヨコナデ	ハケメ→ミガキ	ヨコナデ	脚部ナデ・ハケメ→ヨコナデ	A	装飾器台
	293	26	S T211	1893	器台	—	(94)	(65)	級	堅	褐色		ミガキ		上位ヨコナデ・ハケメ	G	
	294	27	S T211	1897	高坏	163	115	167	級	堅	赤褐色	ヨコナデ	ミガキ→ヨコナデ	ヨコナデ	ハケメ→ヨコナデ	C	
	295		S T211		高坏	(195)	—	(38)	級	普	赤褐色	ハケメ		ハケメ・ヨコナデ		
	296		S T211		高坏	(184)	—	(56)	級	普	赤褐色	ヨコナデ	ハケメ→ミガキ	ヨコナデ	ミガキ	
	297		S T211	1780	高坏	—	(120)	(114)	級	普	白褐色		ミガキ		ヨコナデ	E	
	298		S T211	1779	高坏	—	(134)	(105)	級	普	白褐色		ミガキ			E	内外面摩滅
	299		S T211	1907	鉢	—	34	(27)	粗	普	褐色		ヘラナデ			L	内面摩滅
	300		S T211	1415	鉢	—	17	(41)	細	普	褐色	ケズリ	ナデ・ケズリ	ハケメ	ヘラナデ	L	
	301	24	S T211	1778	鉢	117	25	70	細	堅	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ヨコナデ→ミガキ	ハケメ→ヨコナデ	ヘラナデ	J	
	302	24	S T211	1896	鉢	116	50	51	級	堅	褐色	ヘラナデ	ハケメ	ヨコナデ	ヘラナデ	J	
	303	20	S T211	1781	壺	196	—	(240)	粗	堅	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ→ミガキ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	A 2 b	
64	304		S T211	1783	甕	—	—	(150)	細	堅	褐色		ハケメ		ヘラナデ・ハケメ		
	305		S T211	1891	壺	—	—	(282)	細	堅	褐色		ハケメ→ミガキ		ヘラナデ・ハケメ		
65	306		S T211	1891	壺	—	36	(147)	細	普	褐色		ハケメ・ヘラナデ・ミガキ		ハケメ		
	307		S T211	1900	甕	—	46	51	細	堅	褐色		ヘラナデ・ハケメ		ヘラナデ		
	308		S T211	1899	壺	—	70	(309)	細	堅	褐色	ヨコナデ	ハケメ→ミガキ・ケズリ	ヨコナデ・ヘラナデ	ヘラナデ・ハケメ		
	309	37	S T211	1908	甕	179	—	(175)	粗	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ヘラナデ	C 3 b	
	310		S T211	1908	甕	186	—	(130)	粗	普	褐色	ヨコナデ	ヘラナデ	ヨコナデ	ハケメ	C 3	
66	311	40	S T211	1914	甕	(112)	39	146	細	普	暗褐色	ナデ	ナデ・ヘラナデ	ナデ	ナデ・ヘラナデ・ハケメ	F 5	
	312		S T211	1784	甕	152	—	(141)	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ・ヘラナデ	ヘラナデ	C 3	外面煤付着
68	314		S T212		器台	—	—	(27)	細	普	褐色					B	内外面摩滅
	315		S T212		器台	—	—	(34)	細	普	褐色		ミガキ		ヘラナデ	B	円盤3
	316		S T212		鉢	(96)	—	(40)	細	堅	褐色	ミガキ		ミガキ			
	317		S T212		鉢	—	—	(38)	細	普	褐色					L 1	
	318		S T212	1391	壺	143	—	(199)	細	普	白褐色	ハケメ→ヨコナデ→ミガキ	ハケメ→ミガキ	ヘラナデ	ヘラナデ	C 1 b	体部内面摩滅
	319		S T212	1507	壺	—	—	(35)	細	普	白褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ→ミガキ		ヘラナデ		
	320		S T212	1402	壺	(282)	—	(58)	粗	普	赤褐色	ハケメ→ミガキ		ヨコナデ		A 2 a	
	321		S T212		鉢	(130)	—	(58)	細	普	褐色	ヘラナデ・指頭オサエ	ハケメ	指頭オサエ	ヘラナデ	C	体部内面弧状の沈線
	322		S T212	1498	壺	—	(80)	(99)	細	普	赤褐色		ヘラナデ・ハケメ→ミガキ		ヘラナデ		
	323		S T212		甕	—	(42)	(222)	粗	普	褐色						
	324		S T212	1500	甕	—	(58)	(24)	細	普	褐色						
	325		S T212		甕	—	(30)	(14)	粗	普	白褐色		ハケメ				底部内面指頭による強ナ
	326		S T212		甕	—	(26)	(30)	粗	普	白褐色		ハケメ				
	327		S T212		壺	—	51	(157)	級	普	赤褐色						
	328		S T212		甕	—	34	(15)	細	堅	褐色		ハケメ				
	329		S T212	1502	甕	—	(58)	(35)	粗	普	褐色		ハケメ				
	330		S T212	1509	壺	—	30	(29)	級	堅	白褐色		ミガキ		ミガキ		
69	331		S T212	1366	甕	141	—	(37)	細	普	赤褐色	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ			
	332		S T212	1504	甕	(152)	—	(69)	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ヘラナデ		
	333		S T212	1508	甕	(188)	70	(253)	細	堅	暗褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ・ハケメ	ヘラナデ	C 3 a	底部外面ワラ状圧痕
72	336		S K253	2305	壺	—	36	(84)	細	普	赤褐色		ミガキ		ヘラナデ		底部内面調整
	337	25	S K258	1759	器台	82	—	(22)	級	堅	褐色	ヨコナデ	ミガキ	ヨコナデ	ミガキ	B 1 a	
	338		S K258	984	器台	86	—	(62)	級	堅	褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ヘラナデ	B 3 a	円盤3 赤彩(受部内外面・脚部外面)
	339		S K258	1731	壺	(189)	—	(40)	細	堅	赤褐色	ミガキ		ミガキ			
	340		S K258	1757	高坏	—	110	(76)	級	堅	暗褐色		ミガキ		ハケメ→ヨコナデ	B	
	341		S K258	1742	鉢	—	—	(32)	粗	堅	暗褐色		ヘラナデ・ミガキ		ナデ・ミガキ	L 4	
	342		S K258	1760	鉢	(128)	—	(37)	細	普	褐色					I	内外面摩滅

表14　土師器観察表（８）

図版	写真図版	出土地点	登録番号	器種	計測値(cm) 口径	底径	器高	胎土	焼成	色調	調整技法 口縁部(可能・受部)外面	体部(脚部)外面	口縁部(可能・受部)内面	体部(脚部)内面	分類	備考
72	343		S K 258	1761	壺	—	68	(21)	粗	普	褐色					
	344		S K 258	1792	壺	(146)	—	(44)	粗	堅	白褐色	ハケメ・ヨコナデ	ハケメ	ハケメ・ヨコナデ	ハケメ	
	345		S K 258	1735	壺	157	39	(104)	粗	普	暗褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ハケメ	C 2 a　底部外面剥離
	346		S K 258	981	壺	(179)	—	(75)	粗	普	褐色	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ	
	347		S K 258	1748	壺	(168)	—	(41)	細	普	褐色	ヨコナデ		ハケメ	ハケメ	
	348		S K 258	1748	壺	(183)	—	(26)	細	普	赤褐色	ヨコナデ・ハケメ		ハケメ	ハケメ	
	349		S K 258	1752	壺	(168)	—	(46)	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ	
	350		S K 258	1791	壺	(195)	—	(44)	粗	普	白褐色	ハケメ→ヨコナデ		ハケメ・ヨコナデ	ハケメ	外面煤付着
	351		S K 258	1750	壺	(221)	—	(46)	粗	堅	褐色	ハケメ→ヨコナデ		ヘラナデ	ヘラナデ	
	352		S K 258	983	壺	(190)	—	(52)	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ	
74	353	26	S K 278	709	器台	96	122	73	細	堅	暗褐色	ヨコナデ→ミガキ	ハケメ→ミガキ	ミガキ	ハケメ	B 6　円窓（1）「^{1}」
	354	26	S K 278	1583	器台	(101)	(133)	76	細	堅	褐色	ミガキ	ヨコナデ→ミガキ	ミガキ	ナデ・ハケメ→ヨコナデ	B 6　円窓（2）「^{2}」
	355		S K 278	1584	器台	(95)	—	(21)	細	堅	褐色	ミガキ		ミガキ		B 2　内外面赤彩
	356		S K 278	1534	器台	—	—	(35)	細	普	白褐色		ミガキ		ヘラナデ	B　円窓３
	357		S K 278	1489	器台	—	(105)	(61)	細	普	赤褐色		ミガキ		ハケメ	E　円窓３　内外面摩滅
	358		S K 278		鉢	(134)	—	(40)	細	普	赤褐色	ミガキ		ミガキ		E
	359		S K 278		器台	—	—	(16)	細	堅	褐色	ミガキ		ミガキ		
	360		S K 278	1586	壺	(92)	—	(46)	細	普	褐色	ヨコナデ・ハケメ・ミガキ		ヨコナデ・ハケメ・ミガキ		
	361		S K 278	1488	鉢	—	19	(34)	細	普	赤褐色		ミガキ		ヘラナデ	L
	362	29	S K 278	1513	壺	(302)	—	(56)	粗	堅	褐色	ハケメ→ヨコナデ→ミガキ		ヨコナデ・ミガキ		梅区浮文（水江周囲）円形浮文貼付痕跡
	363		S K 278	1490	壺	(298)	—	(73)	粗	堅	白褐色	ハケメ→ミガキ		ヘラナデ		
	364	30	S K 278		壺	(252)	—	(60)	粗	堅	褐色	ハケメ→ヨコナデ・ミガキ		ヨコナデ・ミガキ		
	365		S K 278	1535	壺	175	—	(127)	粗	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ・ヘラナデ	ヘラナデ・ハケメ	C 3
	366		S K 278	1532	壺	170	—	(36)	粗	普	褐色					内外面摩滅
	367		S K 278	1531	壺	(156)	—	(71)	細	普	褐色	ヨコナデ→ハケメ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ		
	368		S K 278	1494	壺	(185)	—	(35)	細	普	白褐色	ヨコナデ・ハケメ		ヨコナデ・ハケメ		C 1
	369		S K 278	1533	壺	(218)	—	(56)	細	堅	暗褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ	C 1
	370		S K 278	1537	壺	(22)	—	(47)	粗	堅	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	
75	373	34	S K 304	2293	壺	(105)	35	133	細	普	白褐色	ヨコナデ・ミガキ	ミガキ	ミガキ→ヘラナデ	ヘラナデ	
	374		S K 337	2301	器台	(166)	—	(45)	細	普	赤褐色		ミガキ		ミガキ	B 5
	375		S K 337	2301	器台	—	—	(55)	粗	普	褐色		ミガキ		ハケメ→ヘラナデ・ヨコナデ	B 5　円窓（3）「^{3}」
76	376	23	S K 340	1933	鉢	155	28	61	細	堅	褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	E
	377		S K 340	2190	壺	—	28	(21)	細	普	暗褐色		ハケメ		ハケメ	
	378		S K 340	1431	壺	—	54	(24)	細	堅	白褐色		ミガキ		ミガキ	
	379		S K 340	1942	壺	—	(76)	(21)	細	堅	暗褐色		ミガキ		ヘラナデ	
	380		S K 340	2184	壺	230	—	(42)	細	普	褐色					C 1
	381		S K 340	2183	壺	—	—	(220)	細	普	褐色		ハケメ		ハケメ→ヘラナデ	
77	382	36	S K 348	2181	壺	195	61	257	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ・ヘラナデ	ヘラナデ→ヨコナデ	ヘラナデ	B 2 c
80	383	26	S D 260	2296	器台	103	—	(85)	細	普	赤褐色		ミガキ		ヨコナデ・ヘラナデ	B 1 a　円窓４　外面摩滅
	384	25	S D 260	993	器台	88	—	(28)	細	堅	赤褐色	ミガキ		ミガキ		B 2
	385		S D 260	2240	器台	82	—	(45)	細	堅	褐色	ミガキ	ミガキ		ミガキ	B 1 a　円窓３　内面摩滅
	386		S D 260	2247	器台	—	—	(25)	細	普	褐色					内外面摩滅
	387	25	S D 260	799	器台	76	112	74	細	普	白褐色		ミガキ→ヨコナデ		ハケメ→ヨコナデ	B 4　円窓３ 赤彩(受部内外面・脚部内面)
	388		S D 260	1866	器台	—	—	(51)	細	普	白褐色		ミガキ		ヘラナデ	円窓３
	389		S D 260	2272	器台	—	—	(29)	細	堅	白褐色		ミガキ		ハケメ	円窓３　内外面赤彩
	390		S D 260	1166	器台	—	—	(48)	細	普	赤褐色		ミガキ		ハケメ	
	391	26	S D 260	1282	器台	83	115	83	細	堅	褐色	ミガキ	ヨコナデ・ミガキ	ミガキ	ハケメ→ヨコナデ	B 1 b　円窓２　内外面赤彩
	392		S D 260	2286	器台	—	113	(76)	細	堅	褐色		ミガキ		ヨコナデ・ハケメ	円窓２

表15　土師器観察表（９）

図版	写真図版	出土地点	登録番号	器種	計測値(cm) 口径	底径	器高	胎土	焼成	色調	調整技法 口縁部(可部・受部)外面	体部(脚部)外面	口縁部(可部・受部)内面	体部(脚部)内面	分類	備考
80	393		S D80	894	高坏	—	—	(44)	細	普	赤褐色		ミガキ			
	394		S D80	2257	高坏	—	—	(55)	細	堅	白褐色		ミガキ		ヘラナデ	E３	外面赤彩
	395		S D80	2229	高坏	—	—	(70)	粗	堅	褐色		ミガキ			E
	396		S D80	880	高坏	—	—	(95)	粗	堅	白褐色		ミガキ		ハケメ	E２
	397		S D80		高坏	—	—	(50)	粗	堅	褐色		ミガキ		ヘラナデ	E
	398	26	S D80	2287	器台	111	(112)	76	粗	普	褐色	ミガキ	ヘラナデ		ヨコナデ・ヘラナデ	C	坏部内面摩滅
	399		S D80	2288	鉢	—	33	(37)	粗	堅	褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	K
	400	23	S D80		鉢	(157)	—	70	粗	堅	褐色	ヨコナデ・ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	Ｇ１ｂ
	401	40	S D80	2258	壷	(159)	61	98	粗	普	褐色	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ	ハケメ	ヘラナデ	Ｆ１ａ	内外煤付着
	402		S D80	2217	鉢	(206)	—	(106)	細	普	赤褐色	ヨコナデ・ハケメ			ヘラナデ	Ａ２ｂ	外面煤付着
	403		S D80	889	鉢	—	28	(32)	粗	堅	暗褐色		ミガキ		ヘラナデ	Ｌ５
	404		S D80	890	鉢	(90)	—	48	細	普	赤褐色	ヘラナデ	ミガキ	ヨコナデ	ミガキ	
	405		S D80	703	鉢	—	32	(17)	細	普	赤褐色		ヘラナデ			Ｂ１
81	406		S D80	797	壺	(106)	—	(41)	粗	普	白褐色	ミガキ		ミガキ		Ａ２ｂ	内外面赤彩
	407		S D80	2231	壺	(152)	—	(51)	粗	普	褐色	ミガキ		ミガキ		
	408	33	S D80	2213	壺	125	—	(75)	粗	脆弱	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヘラナデ	ハケメ	Ｃ４	内外面摩滅
	409	30	S D80	2169	壺	160	—	(262)	粗	堅	褐色	ヨコナデ・ハラナデ・ハケメ	ヘラナデ・ハケメ	ハケメ	ヘラナデ	Ａ２ｃ
	410		S D80	2233	壺	(102)	—	(46)	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ		ヨコナデ	ヘラナデ	Ｃ４
	411		S D80	2245	壺	(236)	80	(372)	粗	堅	褐色	ヨコナデ	ハケメ・ヘラ　ハケメ・ヘラナデ	ハケメ・ヨコナデ・ミガキ	ヘラナデ・ハケメ	Ａ２ａ
82	412		S D80	2245	壺	(243)	—	(110)	細	堅	褐色	ヨコナデ・ハラナデ・ミガキ	ミガキ	ヨコナデ・ヘラナデ・ハケメ	ヘラナデ・ハケメ	Ａ２ａ
	413		S D80	2294	壺	—	—	(63)	細	普	褐色	ヨコナデ			ハケメ	Ａ２ａ
	414		S D80	2237	壺	(256)	—	(65)	細	堅	褐色	ヨコナデ・ハケメ		ミガキ		Ｃ２ａ	内外煤付着
	415		S D80	2219	壺	(129)	—	(51)	粗	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ミガキ	ハケメ		Ｇ１ｂ
	416		S D80	2285	壺	(168)	—	(52)	粗	普	白褐色	ハケメ→ヨコナデ		ハケメ		Ａ２ｃ	内面摩滅
	417		S D80	2253	壷	—	(60)	(39)	細	普	褐色		ハケメ		ヘラナデ	
	418		S D80		壺	—	44	(16)	細	普	白褐色					
	419		S D80	2244	壷	—	62	(31)	細	堅	褐色		ハケメ		ヘラナデ	
	420		S D80		壺	—	80	(31)	粗	普	暗褐色		ミガキ		ミガキ		底部外面木葉痕
	421		S D80	2203	壷	—	79	(39)	粗	普	赤褐色				ヘラナデ	
	422		S D80	2229	壺	—	88	(40)	細	普	褐色		ミガキ		ハケメ→ミガキ	
	423		S D80	2246	壷	—	27	(29)	細	普	褐色	ハケメ		ハケメ→ヘラナデ		
	424		S D80	2171	壺	—	38	(44)	細	普	赤褐色		ハケメ		ヘラナデ	
	425		S D80	1793	壷	—	(62)	(47)	粗	普	褐色		ハケメ				内外面摩滅
	426		S D80		壷	(166)	—	(55)	粗	普	白褐色	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	
83	427		S D80	2254	壷	186	—	(106)	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ハケメ	Ｃ１
	428		S D80	2250	壷	(180)	—	(42)	細	普	褐色	ヨコナデ・ハケメ		ヨコナデ		Ｃ１
	429		S D80	2224	壷	(215)	—	(56)	粗	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	Ｃ１	外面煤付着
	430		S D80	873	壷	180	—	(75)	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	
	431		S D80	2172	壷	(143)	—	(60)	細	普	褐色	ヘラナデ	ハケメ		ヘラナデ		内面摩滅
	432		S D80	2212	壷	(176)	—	(199)	細	普	褐色	ハケメ・ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ヘラナデ	Ｃ３ｃ	外面煤付着
85	434		S D81	2099	器台	89	—	(40)	粗	普	褐色	ナデ・ヘラナデ	ナデ・ヘラナデ	ナデ・ヘラナデ	ナデ・ヘラナデ	Ｂ１ａ	調整粗い
	435		S D81	2014	器台	—	—	(25)	細	普	白褐色				ハケメ		内外面摩滅
	436		S D81	2085	高坏	—	—	(52)	細	普	白褐色				ハケメ	
	437	28	S D81	1203	高坏	175	113	150	細	堅	褐色	ヨコナデ・ミガキ	ミガキ	ヨコナデ	ハケメ	Ｅ２
	438		S D81	2012	高坏	—	—	(142)	細	普	赤褐色		ミガキ		ヘラナデ	Ｅ
	439		S D81	1128	壺	—	—	(54)	細	普	白褐色	ミガキ		ミガキ		Ｄ１	内外面赤彩
	440		S D81		壺	—	47	(47)	細	普	赤褐色		ミガキ				内面摩滅
	441		S D81	2022	壷	(184)	—	(39)	細	普	白褐色	ハケメ→ヨコナデ		ヘラナデ・ヨコナデ	ハケメ	Ｃ１	
	442		S D81	1995	壷	(178)	—	(38)	粗	普	白褐色	ハケメ→ヨコナデ		ハケメ→ヨコナデ		Ｃ１	外面煤付着

表16　土師器観察表（10）

図版	写真図版	出土地点	登録番号	器種	計測値(cm) 口径	底径	器高	胎土	焼成	色調	調整技法 口縁部(可能・受部)外面	体部(胴部)外面	口縁部(可能・受部)内面	体部(胴部)内面	分類	備考
85	443	SD81	集		(183)	—	(66)	細	普	赤褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ		C1	内面摩滅
	444	SD81	2906	集	(209)	—	(46)	細	普	褐色	ヘラナデ	ハケメ	ハケメ	ハケメ		外面煤付着
	445	SD81	2913	集	(166)	—	(38)	細	堅	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヘラナデ→ヨコナデ	ヘラナデ		
	446	SD81	2901	集	(154)	—	(46)	細	普	赤褐色		ハケメ	ハケメ	ハケメ		内外面摩滅
	447	SD81	1343	集	—	86	(32)	粗	普	暗褐色		ハケメ		ハケメ		
	448	SD81		集	—	(25)	(23)	細	堅	褐色		ハケメ		ハケメ		
	449	SD81		市	—	(64)	(18)	粗	堅	褐色				ヘラナデ		内外面赤彩
	450	SD81	2910	市	—	(44)	(34)	細	普	赤褐色		ハケメ				内面摩滅
	451	SD81		集	—	(54)	(25)	細	堅	褐色		ハケメ				
	452	SD81	2904	集	—	65	(37)	粗	堅	褐色		ヘラナデ		ヘラナデ		
	453	SD81	864	集	—	(38)	(178)	細	普	褐色		ハケメ		ハケメ		外面煤付着
87	454	25	SD82	1620	器台	76	111	64	粗	堅	白褐色	ミガキ	ミガキ		ヘラナデ→ヨコナデ	B1a	円窓4　内外面赤彩
	455	25	SD82	1616	器台	81	109	57	細	堅	白褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ヨコナデ・ヘラナデ	B1a	円窓（2）「$^{\backsim}$」 内外面赤彩
	456	25	SD82	1613	器台	79	120	68	細	堅	白褐色	ミガキ	ヨコナデ・ミガキ	ミガキ	ヨコナデ・ヘラナデ	B1a	円窓5　内外面赤彩
	457		SD82	1767	器台	—(110)	(65)	細	堅	赤褐色		ヨコナデ・ミガキ		ハケメ		D　円窓（2）「$^{\backsim}$」
	458		SD82	1541	器台	—(100)	(56)	細	普	白褐色		ハケメ→ミガキ		ハケメ		E　円窓3
	459		SD82	1669	高坏	—	—	(43)	細	普	赤褐色			ハケメ		円窓（2）「$^{\backsim}$」 外面赤彩　外面摩滅
	460		SD82	1590	器台	—	—	(47)	細	普	赤褐色		ハケメ			円窓3　内外面摩滅
	461	28	SD82	1615	高坏	158	102	129	粗	堅	白褐色	ヨコナデ	ミガキ→ヨコナデ	ヨコナデ・ミガキ	ハケメ→ヨコナデ	E3a　内外面赤彩
	462		SD82	1645	高坏	—	—	(66)	細	普	赤褐色		ミガキ		ハケメ	D　外面赤彩
	463		SD82	768	鉢	190	—	(92)	細	普	白褐色	ヨコナデ	ハケメ→ナデ・ミガキ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ→ミガキ	
	464	22	SD82	1635	鉢	177	19	95	細	普	褐色	ヨコナデ	ヘラナデ・ミガキ	ヨコナデ	ハケメ→ヘラナデ	B1
	465		SD82	1796	壺	—	—	(81)	粗	堅	褐色		ハケメ→ミガキ		ナデ・ヘラナデ	
	466		SD82	1658	壺	—	20	(101)	粗	堅	褐色		ハケメ		ヘラナデ	内外面摩滅
	467		SD82		鉢	(100)	—	(49)	細	普	褐色	ハケメ	ヘラナデ・ハケメ	ヨコナデ		L1
	468	22	SD82	1798	鉢	128	—	(97)	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ヘラナデ→ヨコナデ	ヘラナデ	D2
	469	22	SD82	1567	鉢	(148)	63	75	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ→ミガキ	ミガキ	ミガキ	C1　丸み を持つ平底
	470	22	SD82	1633	鉢	(141)	63	71	粗	普	暗褐色	ヨコナデ	ヘラナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	C1
	471		SD82	1553	鉢	(200)	—	(58)	粗	堅	褐色	ハケメ→ミガキ		ミガキ	ヘラナデ・ミガキ	A2b
	472		SD82	1681	小型土器	—	23	(40)	細	堅	褐色		ナデ		ナデ	手捏成形
88	473	29	SD82	1602	壺	240	96	431	粗	堅	白褐色	ヨコナデ→ミガキ	ハケメ→ミガキ	ミガキ	ハケメ	A2a　底部ワラ状圧痕
	474		SD82	1694	壺	(134)	—	(48)	細	堅	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	C2c
	475		SD82	1719	壺	(131)	—	(45)	細	普	白褐色	ハケメ→ミガキ		ハケメ	ハケメ	C2c
	476	33	SD82	1314	壺	172	—	(123)	粗	堅	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ→ミガキ	ヨコナデ・ハケメ・ハケメ	ハケメ	C5b
	477	22	SD82	1769	鉢	—	—	(89)	細	堅	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ミガキ	ハケメ	A1
89	478		SD82	1545	壺	(228)	—	(67)	細	脆弱	褐色	ハケメ	ハケメ		ハケメ	B　外面煤付着　内外面摩滅
	479		SD82	1715	壺	(215)	—	(38)	粗	堅	褐色	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ		外面煤付着
	480		SD82	1600	壺	209	—	(169)	粗	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ハケメ	C1c　外面煤付着
	481		SD82	1660	壺	223	—	(162)	粗	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ハケメ	C2a
	482		SD82	1571	壺	—	76	(65)	粗	普	白褐色		ハケメ→ミガキ		ヘラナデ	
	483		SD82	1741	集	—	69	(26)	細	堅	暗褐色				ハケメ	
	484		SD82		集	—	(78)	(32)	粗	普	褐色		ミガキ			内面調整
	485		SD82	1674	集	—	82	(35)	粗	堅	暗褐色	ハケメ→ヘラナデ			ハケメ	
	486		SD82	1647	集	—	32	(17)	粗	普	褐色		ハケメ		ハケメ	
	487		SD82	1704	集	—	30	(112)	粗	普	暗褐色		ハケメ		ハケメ	底部内面調整痕凡例写真
90	488		SD82	1708	集	(180)	—	(103)	粗	堅	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ハケメ	
	489		SD82	1691	集	(201)	—	(126)	粗	普	白褐色	ヘラナデ	ハケメ	ヘラナデ	ハケメ	C3　外面煤付着

表17　土師器観察表（11）

図版	写真図版	出土地点	登録番号	器種	計測値(cm) 口径	底径	器高	胎土	焼成	色調	調整技法 口縁部(可能・交部)外面	体部(胴部)外面	口縁部(可能・交部)内面	体部(胴部)内面	分類	備考
96	490		S D82	1594	重	200	—	(80)	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ヘラナデ・ナデ	C 3	
	491		S D82	1550	重	(253)	—	(63)	粗	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ・ヘラナデ・ミガキ	ハケメ		外面煤付着
	492		S D82	1632	重	(180)	—	(78)	粗	普	白褐色	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ	ヘラナデ	ハケメ		
	493		S D82	1704	重	(150)	—	(31)	細	堅	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヘラナデ	ハケメ		
	494		S D82	1551	重	(153)	—	(39)	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ		
	495		S D82	1544	重	(168)	—	(50)	細	普	赤褐色	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ			内面摩滅
	496		S D82	1569	重	(181)	—	(51)	細	堅	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ		
	497		S D82	1552	重	(180)	—	(47)	細	普	白褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ハケメ		
92	498		S D84	2263	壺	—	26	(63)	粗	普	白褐色		ミガキ		ヘラナデ		
	499	24	S D84	2259	鉢	168	21	113	粗	堅	赤褐色	ミガキ				K 1	内外面摩滅
	500	25	S D84	2260	重	(208)	—	(187)	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ハケメ	C 1 c	
94	501		S X77	1433	壺	(304)	—	(880)	粗	堅	白褐色	ハケメ→ミガキ　ヨコナデ→ミガキ		ハケメ→ミガキ			
	502		S X77	1431	壺	220	98	(400)	粗	普	褐色	ヨコナデ・ハケメ→ミガキ	ハケメ→ミガキ	ハケメ→ミガキ	ハケメ		
97	503	25	S G52	1985	器台	89	114	84	細	堅	褐色	ヨコナデ	ミガキ	ミガキ	ヘラナデ・ハケメ→ヨコナデ	B 1 a	円窓3
	504	25	S G52	2131	器台	88	120	77	細	堅	赤褐色	ミガキ	ミガキ→ヨコナデ	ミガキ	ヘラナデ・ハケメ・ミガキ	B 1 a	円窓3・小孔1
	505	25	S G52	2040	器台	(86)	(130)	89	細	堅	褐色	ヨコナデ	ミガキ	ミガキ→ヨコナデ	ヘラナデ→ヨコナデ	B 1 a	円窓（2）$\bigcirc_2$
	506	25	S G52	2037	器台	85	100	70	細	堅	褐色	ヨコナデ	ミガキ	ヨコナデ	ハケメ→ヨコナデ	B 1 a	円窓3
	507	25	S G52	2047	器台	(98)	(140)	90	細	堅	褐色	ヨコナデ	ナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラナデ	ハケメ→ヘラナデ	B 5	円窓3　調整粗い
	508		S G52	2148	器台	—	(140)	(67)	細	堅	褐色		ミガキ→ヨコナデ		ヘラナデ・ヨコナデ		円窓3
	509		S G52	2126	器台	(79)	—	(42)	細	堅	褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ヘラナデ・ハケメ	B 1 a	円窓3確認　赤彩（受部内外面　脚部外面）
	510	27	S G52	2029	高坏	—	100	(57)	細	堅	褐色		ミガキ→ヨコナデ	ミガキ	ハケメ→ヨコナデ	A 2	円窓3
	511		S G52	867	器台	—	—	(54)	細	堅	褐色		ミガキ		ハケメ	D	
	512		S G52	2034	高坏	—	101	(36)	細	堅	褐色		ミガキ		ナデ・ミガキ		
	513	27	S G52	2082	高坏	158	89	94	細	堅	暗褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ハケメ→ヨコナデ	A 1	
	514		S G52	1983	高坏	—	—	(83)	細	堅	白褐色		ミガキ			E 3	外面赤彩
	515	28	S G52	2042	高坏	167	130	194	細	堅	褐色	ヨコナデ	ミガキ	ミガキ	ヘラナデ・ハケメ・ヨコナデ	E 1	脚部に1次調整のハケメ残る
	516		S G52	1976	高坏	—	(111)	(76)	細	堅	暗褐色		ミガキ	ミガキ	ハケメ→ヨコナデ	A 1	
	517		S G52	2024	高坏	—	111	(83)	細	堅	暗褐色		ハケメ→ヨコナデ・ミガキ		ハケメ→ヨコナデ	E	
98	518	28	S G52	2044	高坏	152	112	123	細	普	褐色	ナデ	ミガキ	ミガキ	ヘラナデ・ナデ・ハケメ	E 3 b	外面赤彩
	519		S G52	2153	高坏	—	108	(90)	細	堅	褐色		ミガキ→ヨコナデ	ミガキ	ヘラナデ・ハケメ→ヨコナデ	A 1	
	520	27	S G52	2028	高坏	—	(120)	(110)	細	堅	褐色	ミガキ	ミガキ→ヨコナデ	ミガキ	ハケメ→ヨコナデ	B 2	
	521		S G52	2102	高坏	—	128	(67)	細	堅	暗褐色		ミガキ→ヨコナデ		ヘラナデ・ミガキ	E	
	522		S G52		高坏	183	—	(71)	細	堅	褐色	ミガキ		ミガキ		E	
	523	28	S G52	1058	高坏	—	142	(90)	細	普	褐色		ヨコナデ・ミガキ		ヨコナデ・ヘラナデ・ハケメ	F	外面に赤彩わずかに残る
	524	24	S G52	2032	鉢	92	15	72	細	堅	褐色	ヨコナデ・ミガキ	ミガキ	ヨコナデ	ナデ	L 5	
	525		S G52	2028	鉢	104	20	72	細	堅	褐色		ミガキ→ヨコナデ		ハケメ→ヨコナデ	L 5	
	526		S G52	2332	鉢	—	25	(35)	細	堅	褐色	ミガキ				L 5	
	527		S G52	1059	鉢	—	(38)	(52)	細	普	褐色		ハケメ・ヘラナデ			L	調整粗い
	528		S G52	1286	鉢	—	17	(40)	細	堅	褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ヘラナデ	L	
	529		S G52	2035	鉢	—	44	(26)	細	堅	褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	L 4	底部内面調整
	530	24	S G52	2041	鉢	(100)	14	70	細	堅	白褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	L 4	
	531	24	S G52	2030	鉢	(92)	20	66	細	堅	褐色	ミガキ→ヨコナデ	ミガキ・ケズリ	ヘラナデ	ヘラナデ	L 4	
	532	24	S G52	1989	鉢	88	28	56	細	堅	褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ・ヘラナデ	J	
	533		S G52		鉢	(107)	—	(55)	細	普	褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ヘラナデ	L 1	
	534	23	S G52		鉢	(129)	—	67	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ヘラナデ・ケズリ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ		
	535		S G52	2068	鉢	122	—	58	細	堅	暗褐色	ヨコナデ→ミガキ	ミガキ	ヨコナデ	ヨコナデ	ミガキ	
	536		S G52	2118	鉢	140	58	48	細	堅	暗褐色	ヨコナデ	ハケメ→ヘラナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	C 1	

表18　土師器観察表（12）

図版	写真図版	出土地点	登録番号	器種	計測値(cm) 口径	底径	器高	胎土	焼成	色調	調整技法 口縁部(可能・受部)外面	体部(脚部)外面	口縁部(可能・受部)内面	体部(脚部)内面	分類	備考
99	537		SG252	鉢	(139)	—	(47)	細	普	赤褐色	ハケメ→ミガキ	ミガキ	ミガキ	ハケメ→ミガキ		
	538		SG252	鉢	(143)	—	(53)	細	堅	褐色	ヨコナデ	ヘラナデ		ナデ・ヘラナデ	G1b	
	539		SG252	鉢	(140)	—	(47)	細	堅	暗褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	G1c	
	540		SG252	鉢	(188)	—	(33)	細	普	赤褐色	ハケメ→ヨコナデ		ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	E	
	541		SG252	2074	鉢	(162)	—	(64)	細	堅	褐色	ヨコナデ	ミガキ	ヨコナデ	ミガキ	G1a
	542		SG252		鉢	(190)	—	(65)	細	堅	褐色	ヨコナデ→ハケメ		ヨコナデ	ヘラナデ	C
	543		SG252		鉢	(260)	—	(88)	細	堅	褐色	ヨコナデ	ハケメ→ミガキ	ナデ・ヘラナデ・ハケメ	ハケメ→ミガキ	A2b 外面煤付着
	544	22	SG252	2099	鉢	(320)	—	(141)	粗	堅	褐色	ヨコナデ→ハケメ	ハケメ	ハケメ	ヘラナデ	A2b
	545		SG252		鉢	(163)	46	80	細	堅	褐色	ヨコナデ→ハケメ	ハケメ	ヨコナデ	ハケメ	C1
	546	22	SG252	2158	鉢	192	33	100	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ハケメ	B1
	547		SG252	2109	鉢	133	27	87	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ヘラナデ	B1
100	548	22	SG252	1987	鉢	(120)	82	148	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ→ナデ	ハケメ・ヨコナデ	ヘラナデ	D1 片口台付鉢
	549	40	SG252	2085	甕	158	27	112	粗	堅	褐色	指頭オサエ	ナデ・ハケメ	指頭オサエ	ハケメ・ヘラナデ	F3
	550	33	SG252	2030	壺	146	30	188	細	普	赤褐色	ミガキ→ヨコナデ	ミガキ	ミガキ→ヨコナデ	ヘラナデ	D1
	551	34	SG252	2274	壺	115	—	(99)	細	堅	褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ヘラナデ・ハケメ	E2
	552		SG252	2059	壺	—	26	(104)	細	堅	褐色		ミガキ		ヘラナデ	
	553	33	SG252	2110	壺	150	—	(79)	粗	堅	褐色	ミガキ		ミガキ	ハケメ	C5a
	554		SG252	1994	鉢	—	20	(92)	細	堅	褐色		ミガキ		ヘラナデ・ハケメ	
	555	32	SG252		壺	(200)	—	(88)	細	普	白褐色	ハケメ→ミガキ		ハケメ→ミガキ		D1
	556	33	SG252	2114	壺	149	61	240	細	普	赤褐色	ヨコナデ	ハケメ→ミガキ	ハケメ・ヨコナデ	ヘラナデ	C2c 内面摩滅
101	557	23	SG252	2027	鉢	(110)	35	112	粗	堅	赤褐色	ヘラナデ	ハケメ→ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	I4
	558		SG252		壺	(113)	—	(53)	細	普	褐色		ミガキ		ヘラナデ	E2 内外面摩滅
	559		SG252	2018	壺	—	—	(90)	細	堅	暗褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ヘラナデ	
	560		SG252	2146	壺	(150)	—	(136)	細	堅	褐色	ヨコナデ	ハケメ→ミガキ	ヘラナデ		G1b
	561		SG252	2138	壺	(114)	—	(132)	細	堅	褐色	ハケメ→ヨコナデ→ミガキ	ハケメ→ミガキ	ハケメ→ミガキ	ナデ・ヘラナデ	G1b
	562		SG252	2111	壺	182	78	334	細	堅	褐色	ハケメ→ミガキ→ヨコナデ	ミガキ	ヨコナデ→ミガキ	ヘラナデ	A2b
102	563	39	SG252	2800	甕	314	—	(121)	細	堅	褐色	ヨコナデ・ハケメ→ミガキ	ハケメ→ミガキ	ミガキ	ヘラナデ→ミガキ	A2b 外面煤付着
	564		SG252	1976	壺	—	109	(501)	粗	堅	褐色		ハケメ→ヘラナデ		ハケメ・ヘラナデ	
103	565		SG252	2026	壺	(149)	—	(98)	細	堅	褐色	ハケメ→ミガキ	ミガキ	ミガキ	ヘラナデ	B2a
	566		SG252	2066	壺	216	—	(130)	細	堅	褐色	ハケメ→ヨコナデ→ミガキ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	A2b
	567		SG252	1976	壺	256	90	482	粗	普	白褐色	ヨコナデ・ミガキ	ハケメ・ミガキ	ヨコナデ・ミガキ	ヘラナデ・ハケメ	A2a
104	568		SG252	2144	壺	—	55	(220)	細	堅	褐色	ハケメ	ハケメ→ミガキ	ヘラナデ	ヘラナデ	
	569		SG252	2147	甕	(184)	—	(160)	細	堅	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヘラナデ	ヘラナデ	C2a
	570		SG252	2051	甕	188	—	(167)	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ→ヘラナデ	ハケメ	ハケメ→ヘラナデ	C4
	571		SG252	2084	甕	173	25	173	細	堅	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	C2c 外面煤付着
	572	36	SG252	2039	甕	170	41	231	細	普	暗褐色	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ヘラナデ	C2a 外面煤付着
	573	40	SG252	2145	甕	143	38	134	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ→ケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	F1a 外面煤付着 内面炭化物付着
105	574	38	SG252	2124	甕	(177)	61	210	細	普	暗褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ→ケズリ	ハケメ→ヨコナデ	ヘラナデ	C4a 外面煤付着 内面炭化物付着
	575	37	SG252	2036	甕	(172)	46	200	細	普	暗褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ヘラナデ	C3b
	576	34	SG252	2168	壺	—	34	(83)	細	堅	褐色		ミガキ		ケズリ	F
	577	24	SG252	2149	鉢	72	40	36	粗	普	褐色	ヘラナデ	ナデ・ヘラナデ	ハケメ	ハケメ	M2
	578		SG252	小型土器	—	33	(24)	細	堅	褐色			ナデ		ナデ	手捏成形
	579	41	SG252	小型土器	34	—	(32)	細	普	褐色	ナデ		ナデ	ナデ	ナデ	手捏成形
	580	41	SG252	2064	小型土器	57	23	38	細	堅	褐色	ナデ	ナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	手捏成形
	581	41	SG252	2063	小型土器	54	13	30	細	堅	褐色	ナデ	ナデ	ナデ	ヘラナデ→ナデ	手捏成形
111	627	26	包含層	968	器台	(83)	(122)	86	細	堅	褐色	ミガキ	ヨコナデ・ミガキ	ヨコナデ	ヘラナデ→ヨコナデ	B4 円盤（1）「」

表19　土師器観察表（13）

図版	写真図版	出土地点	登録番号	器種	計測値(cm) 口径	底径	器高	胎土	焼成	色調	調整技法 口縁部(可能・受部)外面	体部(脚部)外面	口縁部(可能・受部)内面	体部(脚部)内面	分類	備考
111	628		弘含朝	885	器台	89	—	(44)	粗	堅	褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ		B1a	円筒3
	629		弘含朝	501	器台	80	—	(62)	緻	普	赤褐色			ミガキ			内外面摩滅
	630		弘含朝	547	器台	(88)	—	(49)	細	普	褐色	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	B1a	円筒3　調整粗い
	631		弘含朝		器台	—	(94)	(46)	細	堅	褐色		ミガキ		ハケメ→ヨコナデ	E	
	632		弘含朝	1060	器台	—	108	(66)	粗	堅	褐色		ミガキ		ヘラナデ	B	円筒（3）「5」
	633	26	弘含朝	1320	器台	—	(120)	(56)	細	堅	褐色		ミガキ		ハケメ	D	
	634		弘含朝	87	器台	—	—	(44)	緻	堅	暗褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ			円筒3
	635		弘含朝	1966	器台	—	—	(44)	緻	堅	褐色		ミガキ		ハケメ		円筒（2）「5」
	636		弘含朝	1392	器台	—	—	(36)	細	普	白褐色		ミガキ		ハケメ	D	円筒3
	637		弘含朝	803	器台	—	—	(48)	緻	堅	褐色		ミガキ		ハケメ		円筒3
	638		弘含朝	718	器台	—	—	(59)	細	普	白褐色		ミガキ		ハケメ		円筒3
	639		弘含朝	1257	器台	—	—	(42)	細	普	褐色		ハケメ		ミガキ		円筒（1）「7」
	640		弘含朝	690	高坏	—	—	(40)	細	普	暗褐色						円筒（2）「5」 内外面摩滅
	641		弘含朝	559	器台	—	—	(49)	細	普	白褐色						円筒3　内外面摩滅 赤彩(受部の内外面・脚部の外面)
	642		弘含朝	502	器台	—	—	(46)	細	普	赤褐色						内外面摩滅
	643		弘含朝	689	器台	—	—	(43)	細	堅	褐色		ミガキ		ヘラナデ		
	644		弘含朝	1385	高坏	—	—	(32)	緻	普	白褐色		ミガキ		ヘラナデ		内外面摩滅
	645		弘含朝	802	器台	—	—	(56)	細	普	白褐色		ミガキ		ヘラナデ		円筒（2）「9」
	646		弘含朝		高坏	—	—	(28)	細	普	白褐色		ミガキ		ハケメ		円筒（1）「7」
	647		弘含朝		高坏	—	—	(41)	細	堅	赤褐色		ミガキ		ハケメ		
	648		弘含朝		高坏	—	—	(48)	細	普	赤褐色						内外面摩滅
	649		弘含朝	503	高坏	—	—	(74)	細	普	褐色		ミガキ		ハケメ		内外面摩滅
	650	28	弘含朝	1013	甕	—	—	(46)	粗	普	褐色		ハケメ		ハケメ	E	台付甕か
112	651	28	弘含朝	965	高坏	(177)	130	164	緻	堅	褐色	ミガキ	ハケメ→ミガキ		ヨコナデ	E2	内面摩滅
	652	28	弘含朝	380	高坏	(169)	(89)	144	緻	堅	褐色	ミガキ→ヘラナデ	ミガキ→ヨコナデ		ハケメ→ヨコナデ	E3a	
	653		弘含朝	625	高坏	—	(126)	(152)	緻	普	赤褐色		ミガキ→ヨコナデ		ハケメ	E1	
	654		弘含朝	624	高坏	—	(124)	(102)	細	普	赤褐色					E	内外面摩滅
	655		弘含朝	1238	高坏	150	—	(55)	緻	普	赤褐色	ミガキ		ミガキ		E	
	656		弘含朝	561	高坏	—	—	(64)	細	堅	白褐色		ミガキ			E3	内面摩滅
	657		弘含朝	1297	高坏	—	—	(60)	緻	普	白褐色		ミガキ				外面摩滅
	658		弘含朝	1361	高坏	—	—	(60)	細	堅	褐色		ミガキ		ハケメ		
	659		弘含朝	1032	高坏	(172)	—	(92)	緻	普	白褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ハケメ	A3	円筒3
	660		弘含朝	824	高坏	(153)	—	(97)	緻	堅	褐色	ヨコナデ	ミガキ→ヨコナデ	ヨコナデ・ミガキ	ハケメ→ヘラナデ→ヨコナデ	A1	
	661		弘含朝	1967	高坏	—	—	(72)	緻	普	赤褐色		ミガキ			D	
	662		弘含朝	512	高坏	—	—	(94)	細	普	白褐色		ミガキ			D	
	663		弘含朝	957	高坏	—	—	(105)	細	普	赤褐色		ミガキ			C	
113	664		弘含朝	1324	鉢	(78)	—	(38)	緻	普	白褐色	ミガキ	ミガキ	ヨコナデ	ヘラナデ		
	665		弘含朝	763	鉢	—	21	(33)	緻	普	白褐色		ミガキ			L	内外面摩滅
	666	24	弘含朝	75	鉢	88	34	52	細	堅	褐色	ハケメ→ミガキ	ミガキ	ミガキ	ヘラナデ	L4	
	667		弘含朝		鉢	(156)	—	(91)	細	堅	褐色	ヘラナデ	ハケメ→ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ		
	668	24	弘含朝	19	鉢	112	—	71	細	堅	褐色	ヨコナデ	ミガキ	ヨコナデ→ミガキ	ヘラナデ	L1	
	669	23	弘含朝	218	鉢	(151)	—	(47)	緻	堅	褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	E	
	670		弘含朝	1161	鉢	(150)	—	(85)	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ヘラナデ	I1	
	671		弘含朝		鉢	(88)	—	(48)	細	普	褐色	ヨコナデ	ヘラナデ	ヨコナデ	ヘラナデ→ミガキ	L1	
	672		弘含朝	1391	鉢	(138)	—	(44)	細	普	赤褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	E	外面摩滅
	673	23	弘含朝	1239	鉢	153	—	73	細	普	赤褐色		ハケメ→ミガキ		ヘラナデ	G1a	内外面摩滅
	674	23	弘含朝	1971	鉢	102	20	53	緻	堅	褐色	ヨコナデ	ミガキ	ヨコナデ	ヘラナデ	G1a	
	675		弘含朝	1010	鉢	182	—	(72)	細	脆弱	赤褐色					G1a	内外面摩滅

表20　土師器観察表（14）

図版	写真図版	出土地点	登録番号	器種	計測値(cm) 口径	底径	器高	胎土	焼成	色調	調整技法 口縁部(可能・完存)外面	体部(胴部)外面	口縁部(可能・完存)内面	体部(胴部)内面	分類	備考
113	676	23	弦巻塚	1057	鉢	123	34	43	細	普	白褐色	ヨコナデ	ミガキ・ケズリ	ヨコナデ	ミガキ	H	
	677	22	弦巻塚	1241	鉢	148	76	134	粗	脆弱	赤褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ナデ	D 2	台付鉢　内外面摩滅
	678		弦巻塚		鉢	140	32	65	緻	脆弱	赤褐色					G 2 b	内外面摩滅
	679	23	弦巻塚	688	鉢	139	44	43	細	普	白褐色	ヨコナデ	ヘラナデ			H	内外面赤彩痕残る　内面摩滅
	680	24	弦巻塚		鉢	96	40	43	細	堅	褐色	ヨコナデ	ミガキ・ケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	M 3	
	681		弦巻塚		鉢	61	35	29	細	普	白褐色			ヘラナデ		M 3	外面摩滅
114	682		弦巻塚	681	鉢	(106)	—	90	細	普	白褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	B 1	
	683		弦巻塚		鉢	—	(35)	(15)	粗	普	褐色		ハケメ			B 1	内外面摩滅
	684		弦巻塚	975	鉢	—	47	(16)	細	普	褐色					B 1	内外面摩滅
	685		弦巻塚	628	甕	—	(48)	(19)	細	普	赤褐色						底部外面剥落
	686	22	弦巻塚	1010	鉢	171	45	106	粗	普	褐色	ヨコナデ	ナデ・ケズリ・ハケメ・ミガキ	ヘラナデ	ヘラナデ	B 2	鉢形瓶　多孔(6孔)
	687	33	弦巻塚		壺	194	—	(138)	緻	普	赤褐色	ミガキ				D 1	
	688		弦巻塚	1097	壺	—	—	(71)	細	普	白褐色		ミガキ				
	689		弦巻塚	1354	壺	—	—	(46)	細	普	白褐色				ナデ		内外面摩滅
	690		弦巻塚	1465	壺	—	22	(106)	緻	普	赤褐色	ミガキ					
	691	33	弦巻塚		壺	(123)	—	(57)	緻	普	白褐色	ミガキ				C 3	頸部突帯
	692		弦巻塚	507	壺	—	—	(63)	細	普	褐色			ミガキ			内外面赤彩
	693		弦巻塚	817	壺	—	—	(46)	緻	普	白褐色	ミガキ		ミガキ		A 2 b	内外面赤彩
	694		弦巻塚	1176	壺	(215)	—	(49)	細	普	白褐色	ヘラナデ		ミガキ		A 2 b	内外面摩滅
115	695		弦巻塚	93	壺	—	—	(175)	細	普	赤褐色						
	696		弦巻塚	646	壺	(95)	64	192	粗	脆弱	褐色				ヘラナデ	C 1 a	内外面摩滅
	697		弦巻塚	1776	壺	—	84	(225)	粗	普	赤褐色		ハケメ		ハケメ		
116	698		弦巻塚	71	壺	—	52	(147)	細	普	褐色		ミガキ		ヘラナデ		
	699		弦巻塚	217	壺	—	—	(89)	粗	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ハケメ		
	700	40	弦巻塚	1018	甕	135	—	112	細	普	褐色	ナデ	ハケメ	ナデ	ヘラナデ	F 4	成形指頭圧痕多用
	701		弦巻塚	924	甕	(183)	—	(27)	細	脆弱	赤褐色	ハケメ→ヨコナデ					内外面摩滅
	702		弦巻塚	1038	甕	(157)	—	(30)	粗	普	褐色	ヨコナデ		ハケメ			
	703		弦巻塚		甕	(140)	—	(33)	細	普	赤褐色	ヨコナデ		ヘラナデ			
	704		弦巻塚		甕	(138)	—	(47)	細	普	赤褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ				内面摩滅
	705	39	弦巻塚		甕	(122)	—	(39)	粗	普	暗褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ	D	
	706		弦巻塚	1363	甕	216	—	(170)	粗	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ハケメ・ヘラナデ	C 4 c	
	707		弦巻塚	1117	甕	(200)	—	(173)	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ヘラナデ	C 4	
117	708	35	弦巻塚	557	甕	146	—	171	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ・ヘラナデ	C 2 b	外面煤付着
	709		弦巻塚	557	甕	135	25	142	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	C 3 a	
	710		弦巻塚	1075	小型土器	—	46	(31)	粗	普	白褐色		ヘラナデ		ヘラナデ		手捏成形
	711	41	弦巻塚	1301	小型土器	42	—	23	緻	普	白褐色	ナデ	ヘラナデ・ナデ	ナデ	ヘラナデ・ナデ		手捏成形
	712	41	弦巻塚	509	小型土器	35	—	26	細	普	白褐色	ヘラナデ・ナデ	ヘラナデ・ナデ	ナデ	ヘラナデ・ナデ		手捏成形

※　備考中、高坏・器台の円窓についての記述は次のとおりである。
円窓3・円窓なし…完形品での確認
円窓(3)…破片部で確認できた数
円窓の記載なし…小片のため確認不能

「△」は円窓に接かる部分の復原面の形式図である。
実線は遺存している部分の外形線を表し、確認できた円窓の位置を記した。

表21　土製品計測表

図版		写真図版	名称	出土地	径（mm）	孔径（mm）	厚さ（mm）	重量（g）	調整
12	47	41	土玉	ＳＴ７	27	6	28	16.3	ナデ
	48	41	土玉	ＳＴ７	27	5	27	16.2	ナデ
45	224		土玉	ＳＴ202	長径27 短径24	7	33	18.3	ナデ
69	334	41	紡錘車	ＳＴ212	49	9	15	38.2	縄文（ＲＬ）

表22　管玉及び同未成品計測表

図版		写真図版	名称	出土地	長さ（mm）	径（最大・最少）		孔径（最大・最少）		重量（g）	研磨面	石質	備考
						上径	下径	上径	下径				
9	29	41	管玉未成品	ＳＴ４	22.2	8.55 8.35	9.25 8.20	－	－	3.6		玻璃質流紋岩	
66	313	41	剥片	ＳＴ211	44.9	－	－	－	－	50.93		玻璃質流紋岩	
69	335	41	管玉	ＳＴ212	26.5	4.95 4.90	4.95 4.90	2.15 1.65	2.15 1.60	0.9	－	玻璃質流紋岩	
74	371	41	管玉	ＳＫ278	22.5	5.35 5.30	5.55 5.45	2.15 2.10	2.05 1.95	1.18	－	泥岩	
	372	41	管玉	ＳＫ278	20.9	6.00 5.90	6.10 6.10	3.15 2.80	3.00 2.50	1.02	－	玻璃質流紋岩	
83	433	41	剥片	ＳＤ260	38.5	－	－	－	－	38.31	－	玻璃質流紋岩	
117	713		管玉未成品	包含層	15.4	4.70 4.20	5.45 4.65	－	1.65 1.60	0.56	7	玻璃質流紋岩	
	714	41	管玉未成品	包含層	23.9	9.65 9.35	8.50 0.25	－	－	2.37	－	玻璃質流紋岩	研磨途中
	715	41	管玉未成品	包含層	31.4	11.90 11.70	10.00 9.00	－	－	8.01	－	玻璃質流紋岩	
	716	41	管玉未成品	包含層	29.1	8.60 6.80	10.60 7.65	－	－	4.33	－	玻璃質流紋岩	
	717	41	管玉未成品	包含層	31.8	9.60 8.90	8.00 5.60	－	－	4.51	－	玻璃質流紋岩	
	718	41	管玉未成品	包含層	24.5	10.50 9.30	9.30 8.35	－	－	4.9	－	玻璃質流紋岩	

表23　石製品計測表

図版		写真図版	名称	出土地	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重量（g）	石質	備考
14	70	41	砥石	ＳＴ８	184	184	51	3,152	石英安山岩	管玉用
16	76	41	砥石	ＳＴ10	110	87	52	678	石英安山岩	
45	225	41	砥石	ＳＴ202	125	97	55	644	緑色凝灰岩	
117	719		石鏃	包含層	27.6	14	3.4	1	頁岩	

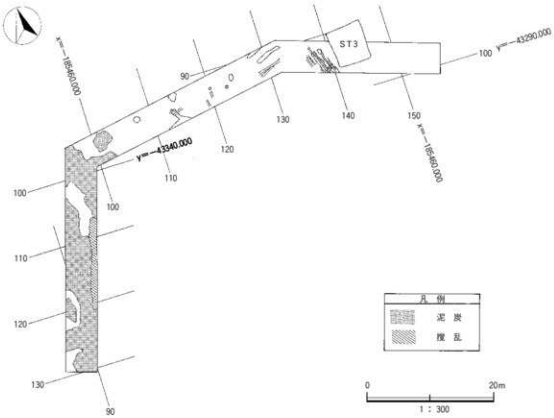
表24　弥生土器観察表（1）

図版		写真図版	器種	出土地点	特徴（外面）	特徴（内面）
118	720	42	壷	200－390	平行沈線による波状文，端部平行沈線文	ナデ調整
	721	42	壺	195－360	ナデ調整，朱彩，口縁端部指頭圧痕文	ナデ調整
	722	42	壺	205－360	口縁部撚糸文	ナデ調整
	723	42	壺	200－380	平行沈線による波状文	ナデ調整
	724		壺	200－380	平行沈線による波状文	ナデ調整，口縁端部に平行沈線による波状文
	725	42	壺	195－365	頸部に2条の凸帯，沈線文	ナデ調整
	726		壺	205－380	平行沈線による波状文	ナデ調整
	727		壺	180－360	縄文＋沈線文	ナデ調整
	728	42	壺	200－380	ナデ調整により稜を形成	ナデ調整
	729	42	壺	205－385	体部平行沈線文による山形文	ナデ調整
	730	42	壺	205－380	体部上半に平行沈線による渦巻文	器面剥離
	731	42	壺	205－380	頸部無文帯，体部上半に平行沈線文，体部無文帯	ナデ調整
	732	42	台付壺？	200－300	体部と台部の境に凸帯，台部に平行沈線による山形文	ナデ調整
	733	42	壺	200－300	体部上半平行沈線による山形文，体部下半無文	ナデ調整
	734	42	壺	200－370	頸部に横位の連続した平行沈線文，体部縄文	ナデ調整
	735	42	高坏	205－360	脚部下半に平行沈線による連弧文，付部下端に連弧文	ナデ調整
119	736		甕	190－365	口縁部縄文，頸部縦位連続刺突文，体部縄文	ナデ調整
	737	42	甕	195－360	口縁部刺突文風指頭圧痕文	ナデ調整
	738	42	甕	200－375	口縁上部縄文＋沈線文，刺突文，口縁下部無文帯，頸部沈線文	ナデ調整
	739	42	甕	180－370	二重口縁，口縁部縄文，頸部縦位連続刺突文	ナデ調整
	740		甕	200－370	口縁端部縄文，口縁上部沈線文＋縦位の刺突文，口縁下部無文帯，頸部沈線文	ナデ調整
	741		甕	195－360	口縁部交互刺突文	口縁部撚糸文
	742		壺	175－365	体部縄文＋交互刺突文	ナデ調整
	743	42	甕	205－380	口縁部交互刺突文，口縁端部縄文	ナデ調整
	744	42	甕	195－380	口縁端部押圧縄文，口縁部沈線文，交互状刺突文，頸部沈線文	ナデ調整
	745	42	甕	205－380	口縁端部押圧縄文，刺突文，口縁部山形文，口縁下部縦位の刺突文，体部縄文	ナデ調整
	746	42	甕	200－375	工字状および楕円状の磨消縄文	ナデ調整
	747	42	甕	205－380	口縁端部縄文，二山突起，口縁上部交互刺突文，体部工字状磨消縄文	ナデ調整
	748		壺	205－390	体部楕円状の磨消縄文	ナデ調整
	749		甕	200－395	体部撚糸文	ナデ調整
	750		壺	200－370	体部縄文	ナデ調整
120	751		甕	205－390	口縁部無文帯，頸部沈線文に挟まれた凸帯に刺突列点文	ナデ調整
	752		甕	175－380	口縁部縄文＋綾縄文	ナデ調整
	753		鉢	205－380	口縁端部押圧縄文，口縁部沈線文＋刺突文，体部縄文	ナデ調整
	754		鉢？	200－375	口縁端部刻目2，口縁部円形刺突文	ナデ調整
	755		甕	200－375	口縁部上半撚糸文，口縁部下半撚糸文＋円形刺突文	ナデ調整
	756		甕	185－375	口縁部沈線＋刺突列点文	ナデ調整
	757	42	壺	185－375	口縁部縄文，口縁部下端円形刺突文，頸部無文帯	ナデ調整
	758		甕	195－380	頸部～口縁部平行沈線文，口縁部縄文＋綾縄文	ナデ調整
	759	42	甕	205－385	網状の撚糸文	ナデ調整
	760	42	甕	180－375	口縁部撚糸文，頸部無文帯	ナデ調整
	761		甕	180－365	体部縄文，籾痕あり	ナデ調整
	762		甕	195－385	口縁部撚糸文	ナデ調整
	763		甕	180－365	体部縄文，籾痕あり	ナデ調整
	764		甕	190－375	体部撚糸文	ナデ調整
	765		甕	200－390	体部ナデ→ハケ目調整，底部布目状圧痕	剥離が多く不明

表25　弥生土器観察表（２）

図版		写真図版	器種	出土地点	特徴（外面）	特徴（内面）
120	766		壺	205－385	体部撚糸文	ナデ調整
	767		甕	205－385	体部下端縄文，底部ナデ調整	ナデ調整
	768		壺	190－375	体部撚糸文	ナデ調整
	769		壺	205－385	体部縄文	ナデ調整
	770		甕	200－390	体部ナデ調整，底部布目状圧痕	ナデ調整
	771		壺？	205－390	体部撚糸文，底部ミガキ	ナデ調整
121	772	42	壺	205－385	口縁部～体部撚糸文，補修孔２	口縁部撚糸文，体部ナデ調整
	773	42	甕	205－385	口縁部横ナデ，頸部横位撚糸文＋斜位撚糸文，体部撚糸文	ナデ調整
	774	42	甕	205－390	口縁部無文，体部縄文，補修孔	口縁部平行沈線による波状文，体部ナデ調整
	775		甕	195－360	口縁端部縄文，口縁部平行沈線文＋波状沈線文	ナデ調整
	776	42	甕	200－375	口縁端部縄文，口縁部横ナデ，頸部被縄文，体部縄文	ナデ調整
	777	42	甕	205－380	口縁部縄文，頸部無文帯，肩部平行沈線文，体部縄文	ナデ調整
	778	42	壺	205－390	頸部撚糸文，頸部下端無文帯，頸部下端に棱，体部撚糸文	ナデ調整
	779	42	甕	205－385	平行沈線による波状文	ナデ調整
	780		甕	205－385	平行沈線による波状文	ナデ調整
	781		甕	205－380	体部撚糸文，口縁部横ナデ	口縁部横ナデ，体部ナデ調整
	782	42	甕	205－380	体部撚糸文，頸部無文帯	ナデ調整

Ⅳ　菖蒲江１遺跡



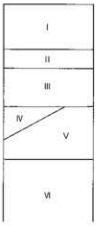
第133図　菖蒲江１遺跡遺構配置図

1　遺構と遺物

竪穴住居跡１棟、土坑、畝状遺構などを検出した。

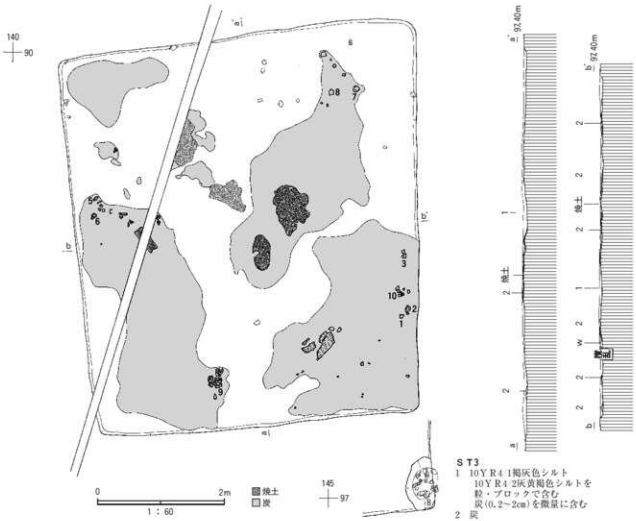
遺構は東西に延びる微高地上に立地している。調査区の南部は僅かに低くなっていて、当時もところどころ泥炭が露頭した湿地帯となっていたものと考えられる。

遺跡の基本層序は次のようになる。Ⅰ層は水田の耕作土で、Ⅱ層は水田の基盤土である。Ⅲ層は遺物包含層で、褐灰色粘質シルトに酸化土の褐色シルトが筋状に混じる。この層中に遺構の掘り込み面が想定されるが、現実的には認識不可能である。Ⅳ層は黒褐色シルト、いわゆる泥炭である。分布は全面的ではなく、Ⅲ層の直下が次に述べるⅤ層となるところもある。Ⅴ層は黄灰色砂質シルトに酸化土の褐色シルトが筋状に混じるもので、調査に際しては、この層を地山と称した。Ⅵ層は灰色微砂で、遺構検出面のさらに下層に位置する。洪水に伴う河川堆積物と思われるが、拡がりは確認していない。



第134図　基本層序

以下に種別毎に遺構と遺物を概述する。



第135図　ＳＴ３竪穴住居跡

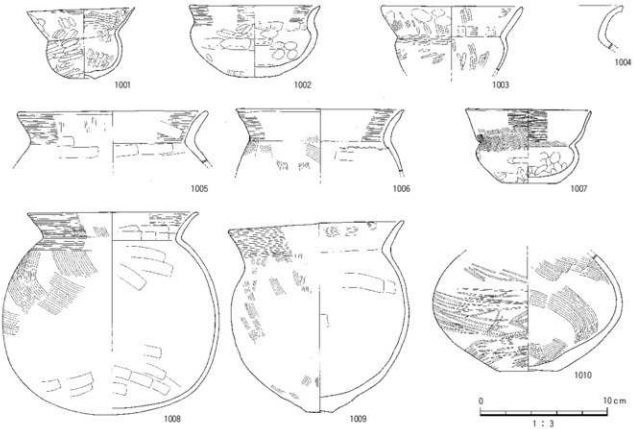
竪穴住居跡

ＳＴ３竪穴住居跡（第135図）

Ａ区東端、140－90区に所在する。平面形は南北に長い長方形を呈し、東西辺が北側でやや開き、北東隅部がつまみ出されたように張り出す。

規模は南北軸が6.1m、東西軸は5.4mを測る。大形の住居で約10坪ある。

主軸方向はＮ－３°30′－Ｗを測り、覆土は１層である。床面のほぼ全域に、炭や燃え残りの建築部材と思われる炭化材が遺存しており、焼失家屋と考えられる。検出面からの深さは最大で約３cmを測る。周溝、柱穴は共に見られず、南東隅に165×100cmの北に長い楕円形の貯蔵穴を持つ。貯蔵穴の東壁は住居の東壁の外まで潜り込んでおり、オーバーハングした形となっている。使用中に何らかの必要性があって作り替えたものであろうか。貯蔵穴の中から鉢（第136図1001）と小形甕（第136図1008）が破片の状態で出土している。貯蔵穴の深さは床面から約12cmを測る。竪穴住居跡ほぼ中央に地床炉と思われる被熱痕跡が見られる。遺物は土師器鉢・壺・甕などが出土している。（第136図）



第136図　ＳＴ３竪穴住居跡出土遺物

畝状遺構

畝状遺構は、ほとんど竪穴住居跡の廃絶後に行われたものと考えられ、方向にいくつかの違いが見られる。方向の差が時期差を表すものと思われるが、出土遺物がなく、詳細は不明である。形状は高擂南遺跡第１次調査で検出した畝状遺構とほぼ同様なので紙幅の関係上、挿図を割愛した。

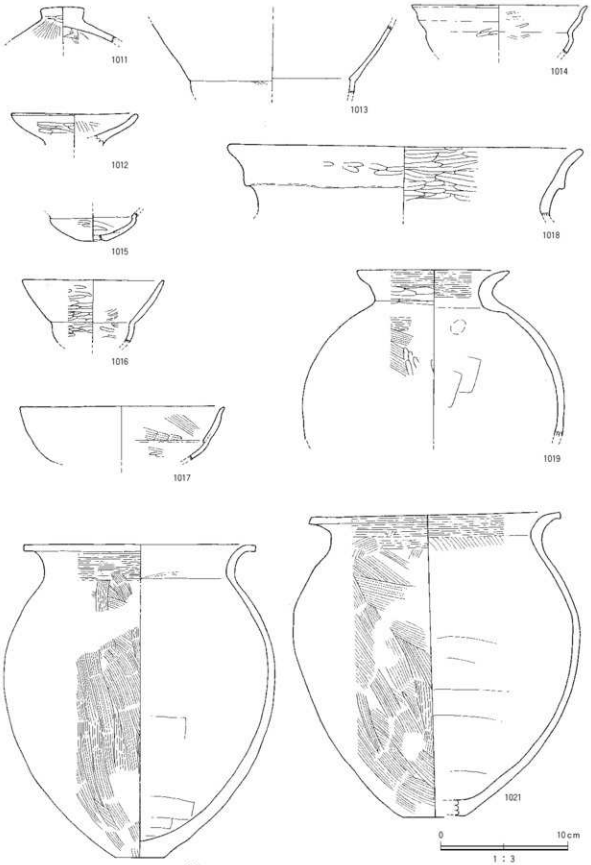
その他の遺物

遺構外のものとして包含層の遺物がある。位置的に遺構に伴うものもあり得るが、ここでは遺構と切り離し、包含層の遺物として一括した。

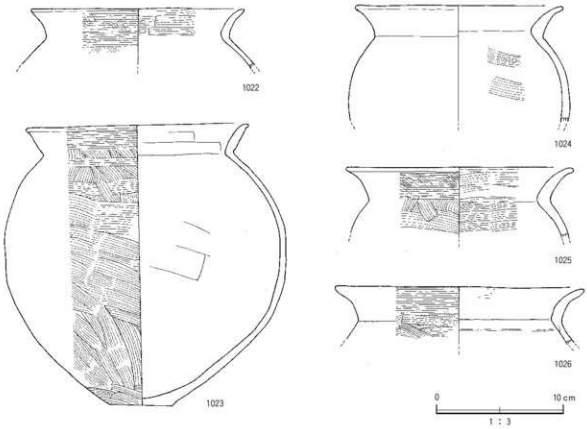
2　調査のまとめ

山形県総合交通安全センター（仮称）建設予定地北西隅部の北辺と西辺の調査を行ったが、北辺部で古墳時代前期の竪穴住居跡１棟と数条の畝状遺構を検出した。西辺については、泥炭が露頭する地域で、当時は生活の場所としては不適な低湿地であることが判明した。

山形県総合交通安全センター（仮称）に隣接する、主要地方道天童寒河江線の改良工事に係る発掘調査と並行して調査を実施したが、本遺跡の調査結果を概観すると、泥炭が乾燥して分



第137図　包含層出土遺物（1）



第138図　包含層出土遺物（２）

解し、土壌化の進んだ東西に延びる微高地が居住区域として用いられ、その南北は、居住域より一段低い泥炭の露頭となっていたことがうかがわれる。また重複する住居跡がないことからここでの居住期間がそれほど長いものではないであろうことが推量される。

表26　菖蒲江１遺跡出土土師器観察表

図版		写真図版	出土地	器種	計測値（cm）			胎土	焼成	色調	調整技法				備考
					口径	底径	器高				口縁部(坏部・受部)外面	体部(脚部)外面	口縁部(坏部・受部)内面	体部(脚部)内面	
136	1001	43	ＳＴ３	鉢	85	15	56	細	普	白褐色	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	ヘラナデ	外面赤彩
	1002	43	ＳＴ３	鉢	104	40	57	細	堅	赤褐色	ヨコナデ	ヘラナデ・ミガキ	ヨコナデ	ナデ・ヘラナデ	外面煤付着
	1003		ＳＴ３	鉢	112	－	(51)	細	普	褐色	ナデ・ミガキ	ハケメ→ミガキ	ハケメ・ミガキ	ミガキ	
	1004		ＳＴ３	甕	－	－	(33)	細	普	白褐色	ヘラナデ		ヘラナデ		
	1005		ＳＴ３	甕	132		(40)	粗	堅		ハケメ→ヨコナデ ヘラナデ		ヨコナデ・ヘラナデ	ヘラナデ	
	1006		ＳＴ３	甕	132		(47)	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ヘラナデ	
	1007	43	ＳＴ３	鉢	99	41	58	細	普	褐色	ヨコナデ→ハケメ	ヘラナデ・ミガキ	ヨコナデ→ハケメ	ナデ	
	1008	43	ＳＴ３	甕	136	30	159	細	普	暗褐色	ハケメ→ヨコナデ	ヘラナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ	ヘラナデ	外面煤付着
	1009	43	ＳＴ３	甕	138	21	150	粗	脆弱	褐色	ハケメ→ヘラナデ	ハケメ・ヘラナデ	ハケメ	ヘラナデ	
	1010	43	ＳＴ３	壺	－	44	(89)	細	堅	赤褐色		ミガキ・ヘラナデ		ヘラナデ・ハケメ	外面赤彩・細いミガキ
137	1011	43	弘含層	蓋	－	－	(29)	粗	堅	褐色		ミガキ		ヘラナデ	
	1012		弘含層	器台	－	－	(24)	細	普	赤褐色	ミガキ		ミガキ		
	1013		弘含層	鉢	－	－	(52)	細	普	赤褐色		ミガキ			内外面摩滅
	1014		弘含層	鉢	(138)	－	(35)	粗	普	褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	
	1015		弘含層	鉢	－	(20)	(22)	細	堅	褐色		ミガキ		ヘラナデ	
	1016		弘含層	鉢	(112)	－	(49)	細	堅	褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	
	1017		弘含層	鉢	(161)	－	(43)	細	普	赤褐色			ハケメ		外面摩滅
	1018		弘含層	壺	(280)	－	(53)	細	普	赤褐色	ミガキ		ミガキ		
	1019		弘含層	壺	119	－	(135)	細	普	褐色	ヨコナデ・ミガキ	ハケメ・ミガキ		ヘラナデ	
	1020	43	弘含層	甕	(183)	38	247	細	普	赤褐色	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ	ハケメ	ヘラナデ	内面摩滅
	1021	43	弘含層	甕	196	(50)	238	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ヘラナデ	
138	1022		弘含層	甕	(166)	－	(46)	細	堅	褐色	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ	ハケメ	ヘラナデ	
	1023	43	弘含層	甕	(174)	48	220	細	普	褐色	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ	ヘラナデ	ヘラナデ	
	1024		弘含層	甕	(162)	－	(92)	細	普	褐色				ハケメ	外面摩滅
	1025		弘含層	甕	(178)	－	(55)	細	普	褐色	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ	ヘラナデ	ハケメ	
	1026	43	弘含層	甕	(194)	－	－43	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ		内面摩滅

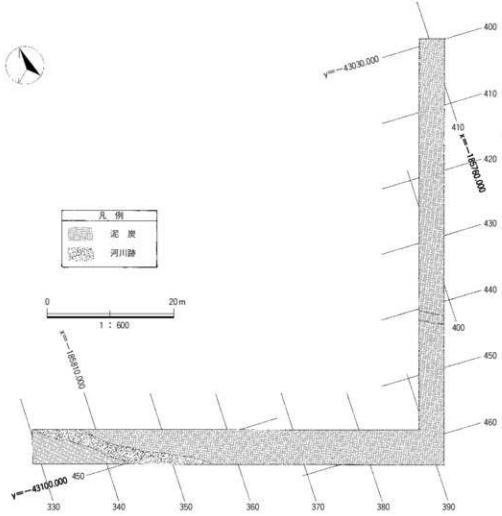
Ⅴ　菖蒲江２遺跡

１　調査の概要

総合交通安全センター（仮称）建設予定地の南東隅を中心に東辺南部と南辺東部を調査区とした。東辺は田植え直後の水田に隣接しており、地下からの漏水により壁面の崩落が懸念されたため、当初より狭めた調査区を設定した。

調査した範囲では、溝跡が１条、河川跡が１本検出されたのみで、遺構はほとんど認められず、ほぼ全域を泥炭が覆っている状況であった。河川跡は、泥炭の上層部で検出されたものであり、断面形は緩い丸底を呈する。覆土は砂のみの単一層であり、通常の河川跡というより、洪水の際の鉄砲水によって運ばれてきた砂が堆積したものと考えられる。

基本層序は確認し得た範囲で９層を数える。Ⅰ層は水田基盤を含む耕作土である。Ⅱ層は黒褐色シルトで、南では削平されたためか消滅する。Ⅲ層は灰黄褐色シルトと礫が互層する。間



第139図　菖蒲江２遺跡調査区全図

層として黒褐色シルトと灰色粘質シルトの互層が認められる。Ⅳ層は灰黄褐色粘質シルトで、未分解の植物遺体を含み、南にいくにつれて薄くなる。Ⅴ層は灰色微砂で、後述するⅥ層の上面に散発的にあらわれる。Ⅵ層は黒褐色シルトで、未分解の植物遺体を多く含む。植物包含層である。出土遺物のほとんどはⅥ層と次述のⅦ層に含まれる。Ⅶ層は灰色を呈するグライ化した砂質シルトで、Ⅷ層を挟むようにレンズ状を呈し、散発的にあらわれる。おそらくは上部をⅥ層に削られたものと考えられる。Ⅷ層は灰色微砂で、県教育委員会の分布調査において遺構確認面とされた層位である。Ⅸ層は砂利や礫で構成され、河川由来のものと考えられる。

溝　　跡

ＳＤ１溝跡（第141図）

395・440区に所在する。ほぼ東西に走る溝跡である。幅約1.3m、深さ約60cmを測り、断面形状は概ね逆台形を呈し、覆土は３層である。第１層と第３層に植物遺体を含む。遺物の出土は認められない。調査範囲が狭いこと、出土遺物が認められないことなどから、性格、時期ともに不明である。

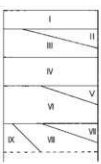
2　遺構と遺物

出土遺物の概要

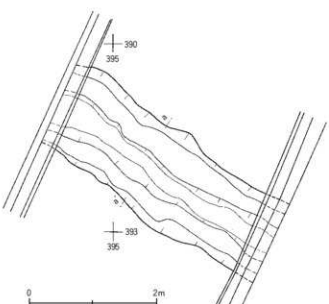
泥炭層中に遺物の包含が認められ、縄文時代後期、古墳時代の土器片などが出土した。基本層序で述べたように、主に第Ⅵ層と第Ⅶからの出土である。量的には縄文土器が主体を占めている。

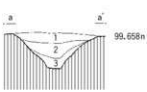
泥炭層中の遺物の分布（第142図）

泥炭は、調査区ほぼ全域に分布し、395・440区辺りを北限、372・453区辺りを西限とする調査区南東部に土器片が多量に分布する。



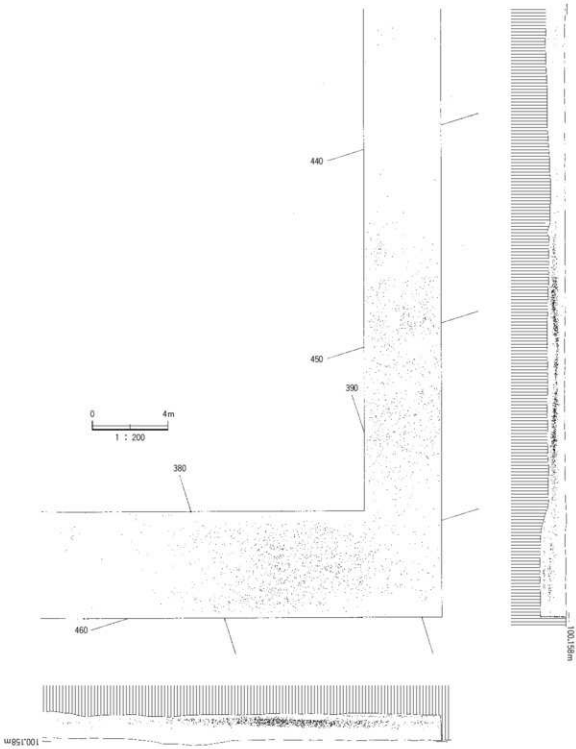
第140図　基本層序



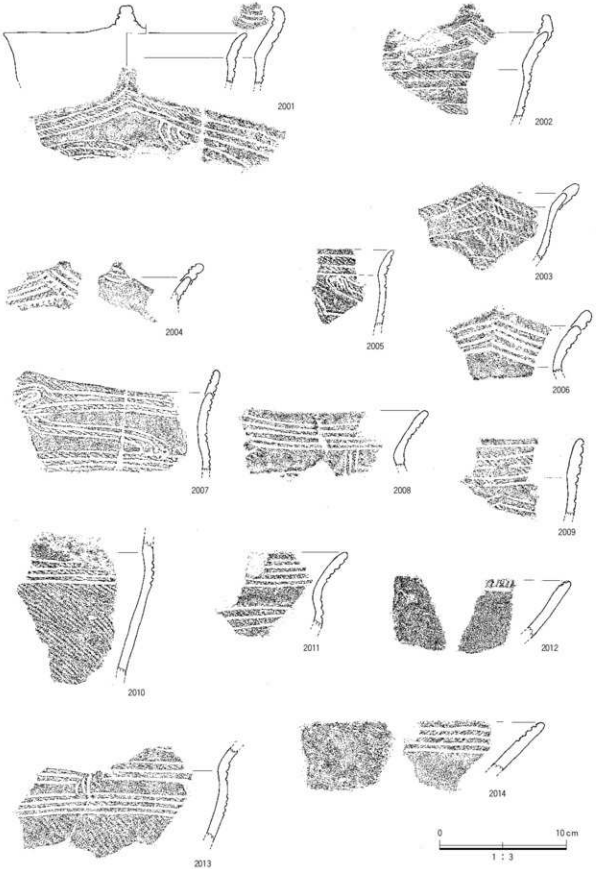


ＳＤ１溝跡
1　10Ｙ Ｒ３ 1黒褐色シルト
　未分解植物遺体を含む
　粗砂、礫（φ2cm）を含む
2　2.5Ｙ３ 1黒褐色微砂
　φ0.5～1cmの小石を含む
3　5Ｙ３ 1オリーブ黒粗砂
　φ0.5～1cmの小石を含む
　植物遺体を含む

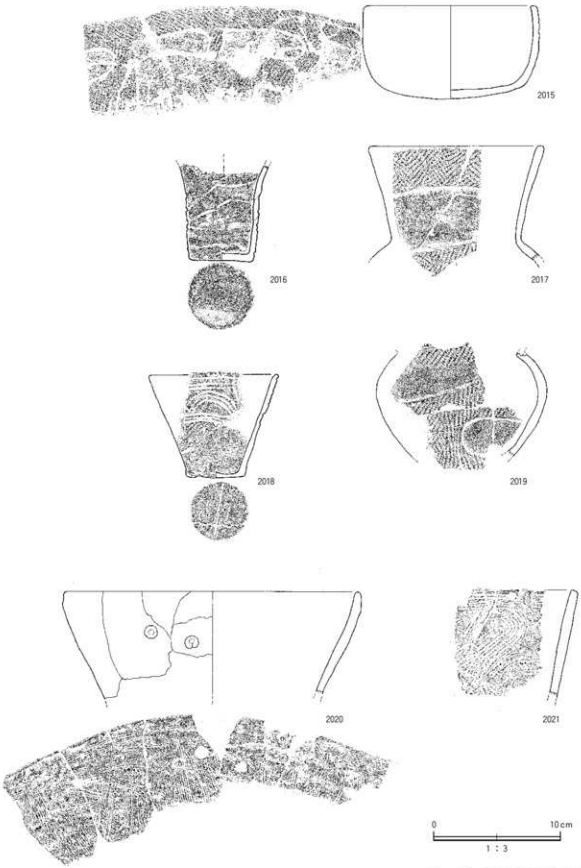
第141図　ＳＤ１溝跡



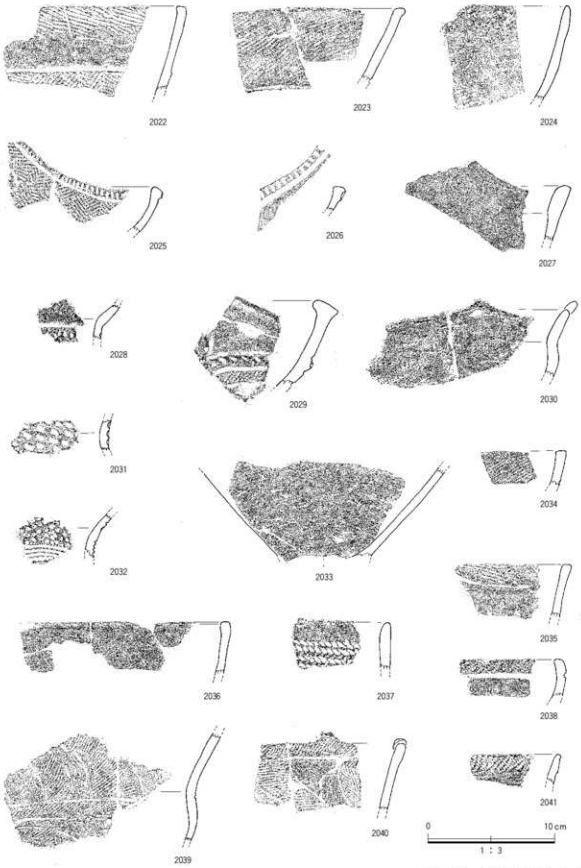
第142図　泥炭層中の遺物分布



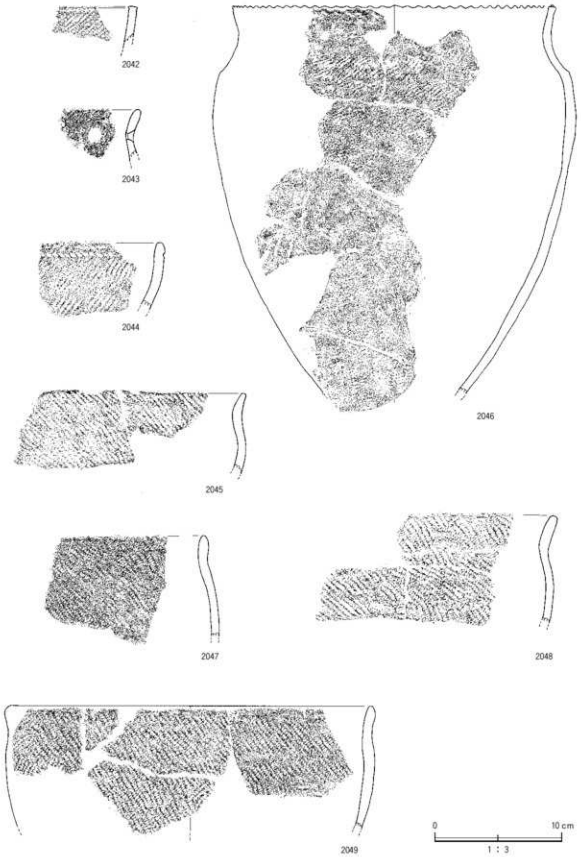
第143図　泥炭層出土遺物（１）



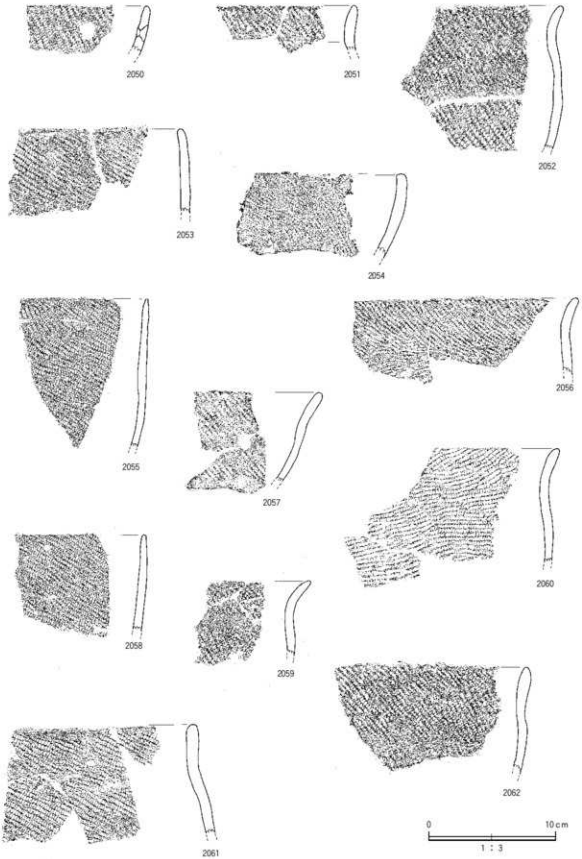
第144図　泥炭層出土遺物（２）



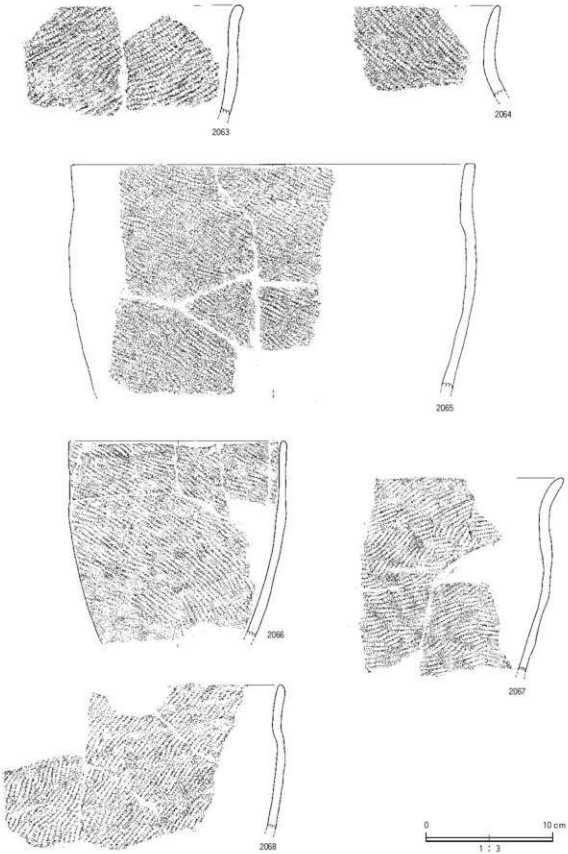
第145図　泥炭層出土遺物（３）



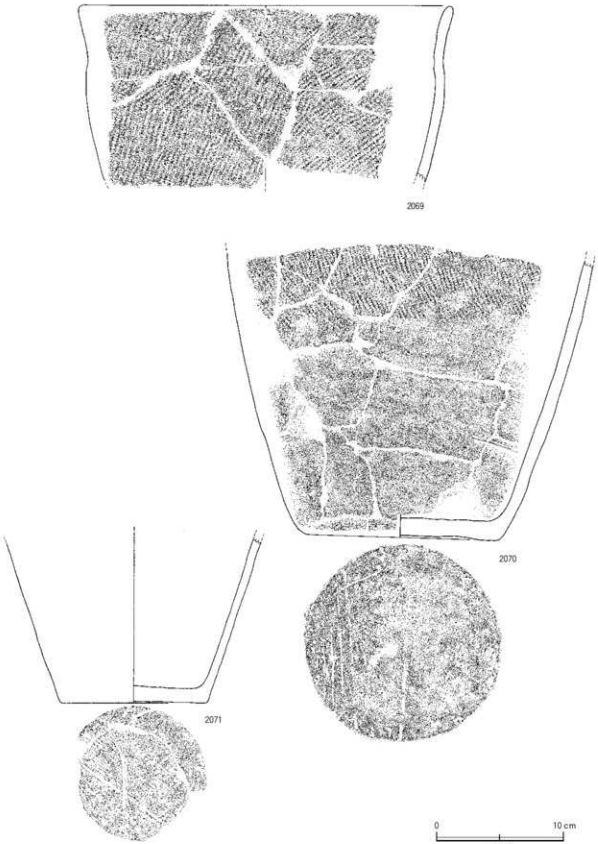
第146図　泥炭層出土遺物（４）



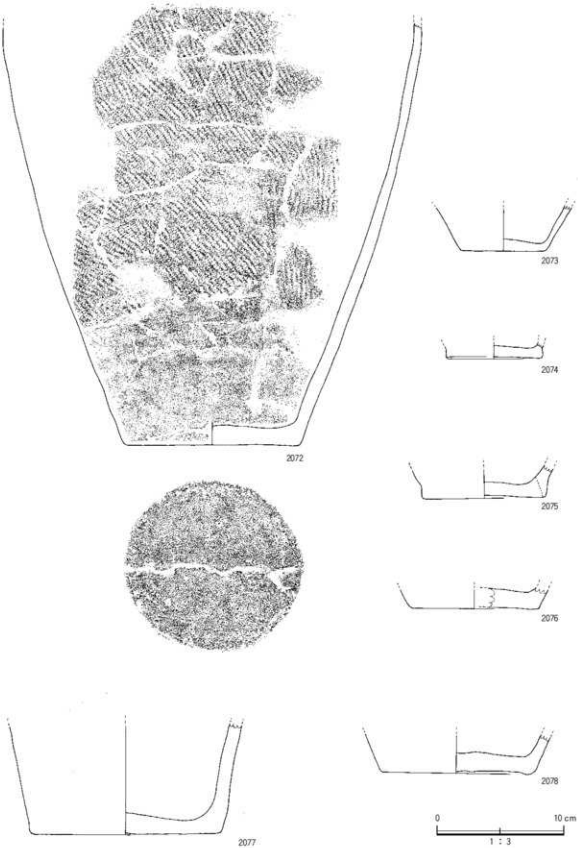
第147図　泥炭層出土遺物（５）



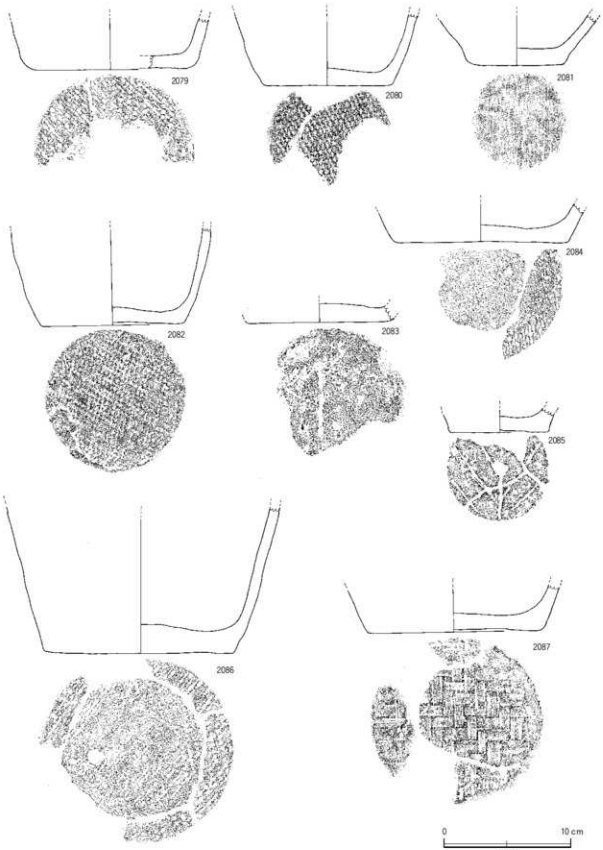
第148図　泥炭層出土遺物（６）



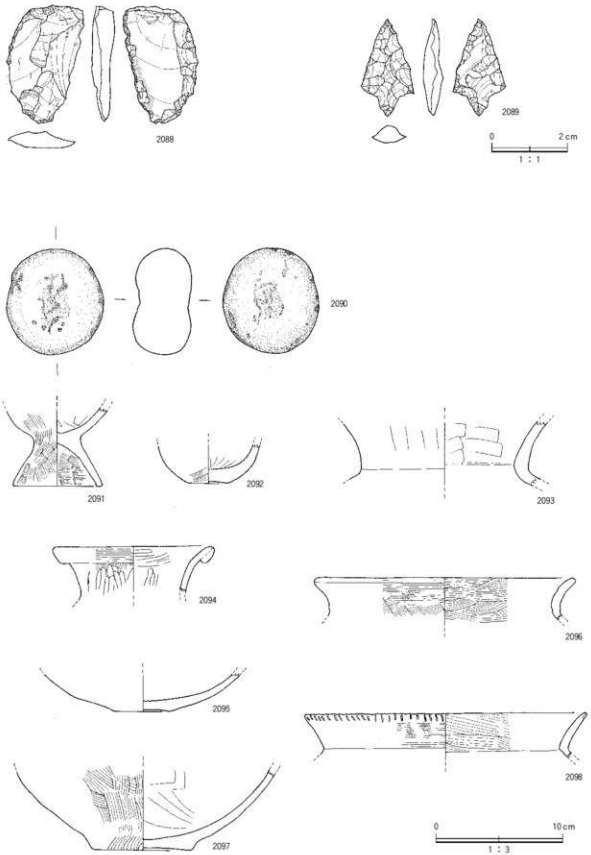
第149図　泥炭層出土遺物（７）



第150図　泥炭層出土遺物（８）



第151図　泥炭層出土遺物（９）



第152図　泥炭層出土遺物（10）

表27　菖蒲江２遺跡出土縄文土器観察表（１）

図版		器種	出土地点	特徴（外面）	特徴（内面）	備考	写真図版
143	2001	深鉢	380－450	縄文＋沈線文	突起部に沈線文		44
	2002	深鉢	380－460	撚糸文＋沈線文	ナデ調整，山形突起に横位沈線文	補修孔２（内１は未貫通）	44
	2003	深鉢	370－460	縄文＋沈線文	ナデ調整		44
	2004	深鉢	380－460	縄文＋沈線文＋刺突文	ナデ調整，突起部に横位沈線文		44
	2005	深鉢	380－460	体部磨消縄文＋平行沈線文	ナデ調整		44
	2006	深鉢	390－450	磨消縄文＋沈線文	ナデ調整		44
	2007	深鉢	380－460	磨消縄文＋沈線文	ナデ調整，突起部に横位沈線文		44
	2008	深鉢	390－450	口縁部沈線文，頸部ナデ調整	ナデ調整		44
	2009	深鉢	390－450	磨消縄文＋沈線文	ナデ調整		44
	2010	深鉢	380－460	体部縄文＋横位沈線文	ナデ調整		44
	2011	深鉢	390－450	口縁部縄文＋沈線文，頸部無文帯，体部縄文＋沈線文	ナデ調整		44
	2012	深鉢	390－450	ナデ調整	口縁端部斜位刻目文＋沈線文，体部ナデ調整		44
	2013	深鉢	390－450	体部上半～頸部磨消縄文＋沈線文，体部下半縄文	ナデ調整		44
	2014	深鉢	390－440	ナデ調整	口縁部縄文＋平行沈線文，体部ナデ調整		44
144	2015	浅鉢	390－450	磨消縄文（「Ｐ」字状，６単位），口縁端部を平坦に作り出す	ナデ調整		44
	2016	筒状小形鉢	380－450	朱彩，縄文＋沈線文（幾何学模様）	ナデ調整		44
	2017	壺	380－460	口縁部上半縄文，口縁部下半ミガキ，肩部縄文	ミガキ		44
	2018	鉢	380－460	体部上半平行沈線文，三重弧線文（上閉じ），体部下半縄文，底部狭葉脹状	ナデ調整		44
	2019	壺	380－460	体部磨消縄文	ミガキ		44
	2020	鉢	380－450	体部条痕文	ナデ調整	補修孔一対	44
	2021	深鉢	390－450	体部条痕文	ナデ調整		44
145	2022	深鉢	380－450	口縁部撚糸文，口縁下部無文帯，体部縄文	ナデ調整		45
	2023	深鉢	380－460	口縁部縄文＋沈線文，頸部無文帯，体部縄文＋沈線文	ナデ調整		45
	2024	深鉢	370－450	口縁部・体部撚糸文	ナデ調整，炭化物付着		45
	2025	深鉢	380－450	口縁部縄位刻目文，体部綾杉文	ナデ調整		45
	2026	深鉢	390－450	口縁部縄位刻目文＋沈線文	ナデ調整		45
	2027	深鉢	390－440	ナデ調整	ナデ調整		
	2028	深鉢	380－450	口縁部ナデ調整，頸部刺突文	ナデ調整		
	2029	深鉢	390－440	口縁部ナデ調整，隆帯に斜位刻目文，体部磨消縄文	ナデ調整		45
	2030	深鉢	380－460	ナデ調整	ナデ調整		45
	2031	深鉢	380－460	頸部横位刺突文	ナデ調整		
	2032	壺	380－450	刺突文＋沈線文	ナデ調整		45
	2033	深鉢	390－440	体部下半ナデ，ケズリ	ナデ調整		
	2034	深鉢	390－440	体部縄文＋沈線文	ナデ調整		
	2035	深鉢	390－440	口縁部押圧縄文，体部ナデ調整	ナデ調整		45
	2036	深鉢	390－440	ナデ調整	ナデ調整		
	2037	深鉢	380－450	口縁端部ナデ調整，口縁部押圧縄文	ナデ調整		45
	2038	鉢	390－440	口縁部縄文＋横位沈線文，体部無文帯	ナデ調整		
	2039	深鉢	380－450	磨消縄文，頸部沈線文	ナデ調整		45
	2040	深鉢	380－460	磨消縄文	ナデ調整		45
	2041	鉢	380－460	口縁部縄文，頸部無文帯	ナデ調整		

表28　菖蒲江２遺跡出土縄文土器観察表（２）

図版		器種	出土地点	特徴（外面）	特徴（内面）	備考	写真図版
146	2042	深鉢	390－440	口縁部縄文	ナデ調整		
	2043	深鉢	390－450	口縁部ナデ調整，頸部撚糸文	ナデ調整	補修孔	
	2044	深鉢	380－450	口縁部縄文＋横位押圧縄文	ナデ調整		
	2045	深鉢	390－440	体部縄文	ナデ調整		
	2046	深鉢	380－460	口縁部ナデ調整，頸部縄文，体部縄文→ナデ調整	ナデ調整		45
	2047	深鉢	380－460	体部縄文	ナデ調整		
	2048	深鉢	380－460	体部縄文	ナデ調整		
	2049	深鉢	380－460	体部縄文	ナデ調整		
147	2050	深鉢	380－450	口縁部縄文	ナデ調整	補修孔	45
	2051	深鉢	390－440	口縁部縄文	ナデ調整		
	2052	深鉢	380－460	体部縄文	ナデ調整		
	2053	深鉢	380－460	体部縄文	ナデ調整		
	2054	鉢？	380－450	体部縄文	ナデ調整		
	2055	深鉢	380－460	口縁端部ナデ調整，体部縄文	ナデ調整		
	2056	深鉢	380－460	体部縄文	ナデ調整		
	2057	深鉢	380－450	体部縄文	ナデ調整	補修孔	
	2058	深鉢	380－460	体部縄文	ナデ調整		
	2059	深鉢	380－460	体部縄文	ナデ調整		
	2060	深鉢	380－460	体部縄文	ナデ調整		
	2061	深鉢	380－450	体部縄文	ナデ調整		
	2062	深鉢	390－450	体部縄文	ナデ調整		
148	2063	深鉢	390－440	体部縄文	ナデ調整		
	2064	深鉢	380－450	口縁部縄文			
	2065	深鉢	380－450	口縁端部ナデ調整，体部縄文	ナデ調整		
	2066	深鉢	380－460	体部縄文	ナデ調整		45
	2067	深鉢	380－460	体部縄文	ナデ調整		
	2068	深鉢	380－450	体部縄文	ナデ調整		
149	2069	深鉢	380－460	体部縄文	ナデ調整		
	2070	深鉢	380－460	体部縄文，体部下半無文帯	ナデ調整		
	2071	深鉢	390－450	体部下半無文帯，底部笹葉脈痕	ナデ調整		45
150	2072	深鉢	380－460	体部上半縄文，体部下半無文帯			46
	2073	深鉢	380－460	体部ナデ調整，底部ナデ調整	ナデ調整		
	2074	深鉢	390－440	体部ナデ調整	ナデ調整		
	2075	深鉢	380－460	体部ナデ調整	ナデ調整		
	2076	深鉢	380－460	体部ナデ調整，底部ナデ調整	ナデ調整		
	2077	深鉢	380－460	体部ナデ調整	ナデ調整		
	2078	深鉢	390－450	体部ナデ調整	ナデ調整		
151	2079	深鉢	390－440	体部ナデ調整，底部網代痕	ナデ調整		
	2080	深鉢	390－440	体部ナデ調整，底部網代痕	ナデ調整		45
	2081	深鉢	390－460	体部ナデ調整，底部笹葉脈痕	ナデ調整		45
	2082	深鉢	390－440	体部ナデ調整，底部網代痕	ナデ調整		
	2083	深鉢	380－450	底部木葉痕	ナデ調整		
	2084	深鉢	380－466	底部木葉痕	ナデ調整		
	2085	深鉢	380－460	底部木葉痕	ナデ調整		
	2086	深鉢	380－460	体部縄文，体部下端無文，底部網代痕	ナデ調整		
	2087	深鉢	380－460	底部網代痕	ナデ調整		45

表29　菖蒲江２遺跡出土土師器観察表

図版		写真図版	器種	出土地	計測値（mm） 口径	底径	器高	胎土	焼成	色調	調整技法 口縁部(坏部・受部)外面	体部(脚部)外面	口縁部(坏部・受部)内面	体部(脚部)内面	備考
152	2091	46	鉢	包含層	－	70	(62)	細	堅	褐色		ハケメ		ヘラナデ、ハケメ	
	2092		壺	包含層	－	32	(30)	細	普	白褐色		ハケメ			外面赤彩
	2093		壺	包含層	－	－	(49)	細	普	褐色	ヘラナデ		ヘラナデ		
	2094	46	壺	包含層	(127)	－	(40)	細	普	褐色	ヨコナデ、ヘラナデ、ミガキ		ミガキ		
	2095		壺	包含層	－	45	(30)	細	普	赤褐色					内外面摩滅
	2096		甕	包含層	(206)	－	(34)	細	堅	褐色	ヨコナデ、ハケメ		ハケメ		
	2097	46	甕	包含層	－	79	(63)	細	普	暗褐色	ハケメ			ヘラナデ	
	2098		甕	包含層	(222)	－	(36)	細	普	暗褐色	ハケメ		ハケメ		口縁端部外面箆目

表30　菖蒲江２遺跡出土石製品観察表

図版		写真図版	名称	出土地	長さ（m／m）	幅（m／m）	厚さ（m／m）	重量（g）	石質
152	2088	46	削器	包含層	62.2	40	11.8	25.8	頁岩
	2089	46	石鏃	包含層	38.2	20.7	7.9	3.9	頁岩
	2090	46	凹石	包含層	83	7.6	46	419.4	安山岩

泥炭層中の遺物は、下層に至るほど破片が大きく、上層では小片となる傾向が見られた。これは泥炭がゆっくりと移動したため、重量の大きな破片は重力の影響を受けて沈み込み、重量の小さな破片はあまり重力の影響を受けることなく上層に分布することとなったものと考えられる。これから、当該調査区の遺物は、さほど遠くない上流域から、泥炭とともに洪水などにより運ばれてきたものと考えられる。出土した遺物は、縄文時代後期の土器を主体に、同時期と思われる石製品と古墳時代の土師器が少量みられる。

3　調査のまとめ

菖蒲江２遺跡では、溝跡が１条、河川跡が１本検出された。溝跡は性格、時期ともに不明であり、河川跡は洪水時の鉄砲水に伴う砂の移動痕跡と考えられる。他に泥炭層中に縄文時代を主体とする多くの遺物を得たが、これは、より上流域から泥炭とともに移動してきたものと考えられる。

当初認識された「縄文時代（後期）の包蔵地及び古墳時代の集落跡」は、調査の結果「縄文時代（後期）及び古墳時代の包蔵地」であることがわかった。